田平町文化財調査報告書第３集

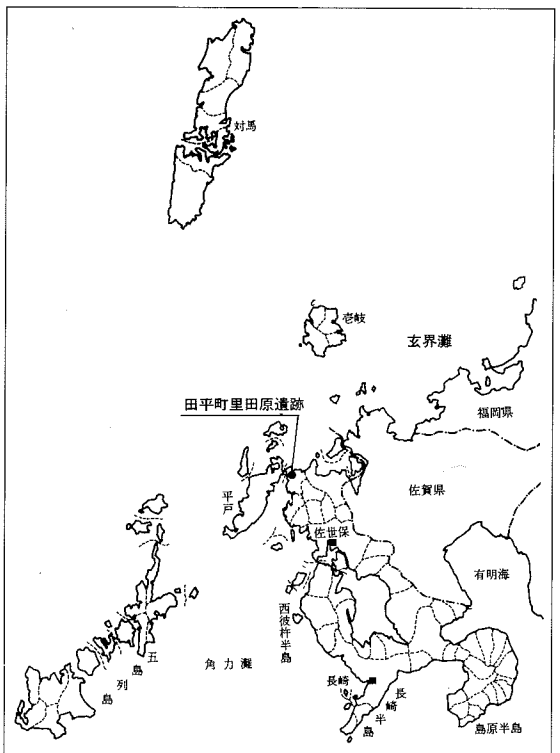
里田原

1988

長崎県田平町教育委員会

田平町文化財調査報告書第３集

里田原



田平町里田原遺跡位置図

1988

長崎県田平町教育委員会

▲里田原遺跡と支石墓

▼里川の旧河道と護岸遺構

▲漆　　器

▲漆　　器

発刊にあたって

里川の改修計画に伴い里田原遺跡の一部がその計画にかかることとなり，このたび，県の助成を受けて発掘調査をいたしました。

昭和60年～61年の調査の報告書を第２集（60年３月刊行）につづいて第３集として発刊する次第であります。

里田原遺跡は，縄文晩期から弥生時代中期に至る我が県農耕文化の貴重な資料を埋蔵している遺跡であります。

今回の発掘によって，河道に丸杭と矢板で固定された護岸施設や巨木による水制工施設（せき）及び当時の食糧にされたカシの実のタンニン除去施設をはじめ土器，石器，木器，自然遺物など多数の出土資料が検出され，これらのことから各地域との交流が古くからあったことを知ることができました。

また片刃磨製の各種石斧，収穫具としての石包丁，糸をつむぐ紡垂車等，その当時の人々の生活を知る大きな手がかりができたのであります。

さらに，水利土木の各種遺構は壮大かつ緻密で土木技術水準の高さを物語り，技術者集団と彼等を統括する首長がいたことを示す十分な資料もありこの地が約２千年前から我等の先祖の活発な生活の舞台であったことを証明してくれたのであります。

本報告書が今後地域の住民を始め多くの人々に埋蔵文化財に対する関心と理解を深め，さらに学術研究の基礎的資料になり歴史の空白を少しでも埋めてくれるならばまことに幸いに思います。

最後に今回の発掘調査にあたり御尽力いただきました長崎県教育庁文化課の諸先生方に衷心より感謝を申し上げますとともに，ご協力いただきました田平土木事務所並びに地元の皆様方に対し，深く感謝を申し上げまして調査報告書発刊のことばといたします。

昭和63年３月31日

田平町教育長　　松　田　正　幸

例　　言

1．本書は長崎県北松浦郡田平町里免他に所在する里田原遺跡に関する緊急発掘調査の報告書にある。

2．調査は，里川改修工事に先立ち，昭和60年11月～昭和61年6月の間，長崎県田平土木事務所の委託をうけて田平町教育委員が主管して実施したものであり，長崎県教育庁文化課主任指導主事正林護・同課文化財調査員村川逸朗が調査を担当した。

3．調査後の整理作業および報告書作成作業は長崎県文化課立山分室において前記両名が行い，次のとおり分担執筆した。

Ⅰ～Ⅲ，Ⅴ，Ⅵ－1・3・4，Ⅶ	正林　護
Ⅳ・Ⅵ－2	村川逸朗

4．現地調査において，北九州市立考古博物館長小田富士雄・九州大学助教授（当時）西谷正氏の指導助言を賜った。また，プラントオパール分析については宮崎大学助教授藤原宏志氏に分析結果について玉稿を賜った。

5．出土遺物は，昭和63年3月現在，長崎県文化課立山分室において保管しているが，向後田平町教育委員会において保管される予定である。なお木製品については，昭和64年度以降に保存処理される予定である。

6．本書の編集は，前記両名が行った。

7．里田原遺跡に関する調査回次は，今回23次に担当する。

8．表紙題字は田平町教育長 松田正幸氏による。

9．漆塗木器膜分析と顕微鏡撮影ならびに，樹種同定については，奈良国立文化財研究所に多大の御協力と御指導を賜った。記して厚く感謝申上げる。

本　文　目　次

頁

Ⅰ．調査実施に至った経過……1
Ⅱ．里田原遺跡の地理的・歴史的環境……2
Ⅲ．調　　査……9
Ⅳ．土　　層……10
Ⅴ．遺構――弥生時代里川の河道と遺構――……16
Ⅵ．遺　　物……22
　1．土　　器……23
　2．石　　器……51
　3．木　　器……71
Ⅶ．里田原遺跡におけるプラントオパール分析……125
Ⅷ．まとめにかえて……128

挿　図　目　次

第1図　里田原遺跡および周辺図……2
第2図　田平町および里田原遺跡位置図……4
第3図　里川周辺および調査区割図……7
第4図　第470区土層図（1/60）……11
第5図　第450区土層図（1/60）……11
第6図　第460区土層図（1/60）……12
第7図　第440区土層図（1/60）……13
第8図　第430区土層図（1/60）……13
第9図　第420区土層図（1/60）……14
第10図　第410区土層図（1/60）……14
第11図　第400区土層図（1/60）……15
第12図　第530区の堅果加工施設実測図（1/40）……17
第13図　第450区の堅果加工施設実測図（1/40）……20
第14図　第410区の堅果加工施設実測図（1/40）……21
第15図　第580区の土器……22
第16図　第530区の土器①……24
第17図　第530区の土器②……25

第18図　第470区の土器① ……26
第19図　第470区の土器② ……27
第20図　第470区の土器③ ……28
第21図　第460区の土器① ……29
第22図　第460区の土器② ……30
第23図　第460区の土器③ ……31
第24図　第450区の土器 ……31
第25図　第420区の土器 ……32
第26図　第410区の土器① ……34
第27図　第410区の土器② ……35
第28図　第410区の土器③ ……36
第29図　第410区の土器④ ……37
第30図　第400区の土器① ……38
第31図　第400区の土器② ……39
第32図　第390区の土器 ……39
第33図　第380区の土器 ……40
第34図　第370区の土器① ……41
第35図　第370区の土器② ……42
第36図　第370区の土器③ ……42
第37図　第360区の土器① ……43
第38図　第360区の土器② ……44
第39図　第360区の土器③ ……45
第40図　第360区の土器④ ……46
第41図　第360区の土器⑤ ……47
第42図　第350区の土器 ……48
第43図　第330区の土器 ……49
第44図　第320区の土器 ……50
第45図　第530区の石器 ……51
第46図　第510区の石器 ……52
第47図　第470区の石器① ……53
第48図　第470区の石器② ……54
第49図　第460区の石器 ……55
第50図　第450区の石器 ……56
第51図　第430区の石器 ……57

第52図　第420区の石器 ……58
第53図　第410区の石器 ……60
第54図　第400区の石器 ……61
第55図　第390区の石器 ……62
第56図　第380区の石器 ……63
第57図　第370区の石器 ……64
第58図　第360区の石器① ……66
第59図　第360区の石器② ……67
第60図　第350区の石器 ……68
第61図　第330区の石器 ……69
第62図　第320区の石器 ……70
第63図　第370区の骨角器 ……70
第64図　第580区の木器 ……71
第65図　第530区の木器① ……72
第66図　第530区の木器② ……73
第67図　第470区の木器① ……74
第68図　第470区の木器② ……77
第69図　第470区の木器③ ……78
第70図　第470区の木器④ ……79
第71図　第470区の木器⑤ ……80
第72図　第470区の木器⑥ ……81
第73図　第470区の木器⑦ ……82
第74図　第470区の木器⑧ ……83
第75図　第470・460間畦畔部の木器① ……84
第76図　第470・460間畦畔部の木器② ……85
第77図　第470・460間畦畔部の木器③ ……86
第78図　第460区の木器① ……87
第79図　第460区の木器② ……88
第80図　第460区の木器③ ……89
第81図　第460区の木器④ ……90
第82図　第460区の木器⑤ ……91
第83図　第460区の木器⑥ ……92
第84図　第460区の木器⑦ ……93
第85図　第460区の木器⑧ ……94

第86図　第460区の木器⑨ ……95
第87図　第460区の木器⑩ ……96
第88図　第460区の木器⑪ ……97
第89図　第460区の木器⑫ ……98
第90図　第450区の木器① ……99
第91図　第450区の木器② ……100
第92図　第450区の木器③ ……101
第93図　第450区の木器④ ……102
第94図　第450区の木器⑤ ……103
第95図　第430区の木器 ……104
第96図　第420区の木器 ……105
第97図　第420区の木器 ……106
第98図　第410区の木器 ……107
第99図　第400・410区間畦畔部の木器……108
第100図　第400区の木器 ……109
第101図　第380区の木器 ……110
第102図　第370区の木器① ……111
第103図　第370区の木器② ……112
第104図　第370区の木器③ ……113
第105図　第370区の木器④ ……114
第106図　第370区の木器⑤ ……115
第107図　第370区の木器⑥ ……116
第108図　第360区の木器① ……117
第109図　第360区の木器② ……118
第110図　第360区の木器③ ……119
第111図　第360区の木器④ ……120
第112図　第350区の木器① ……121
第113図　第350区の木器② ……122
第114図　第350区の木器③ ……123
第115図　第350区の木器④ ……124
第116図　第530区北壁採取資料の生産量グラフ ……127
第117図　第510区北壁採取資料の生産量グラフ ……127
第118図　第460区南壁採取資料の生産量グラフ ……127
第119図　第440区北壁採取資料の生産量グラフ ……127

第120図　第430区北壁採取資料の生産量グラフ ……128
第121図　長崎県下における堅果加工施設……130
第122図　橇状木製品復原想定図……131
第123図　手斧木桶の型式各部名称図……135
第124図　手斧II型の穿孔例①……136
第125図　手斧II型の穿孔例②……137
第126図　橇状木製品および未製品……138

図　版　目　次

図版1　遺 跡 1……142
図版2　遺 跡 2……143
図版3　遺跡と土層……144
図版4　旧里川の状況……145
図版5　旧里川の状況と遺構……146
図版6　遺　　構……147
図版7　遺　　構……148
図版8　遺物出土状況……149
図版9　第580・530・470区の土器 ……150
図版10　第470・460・450・430区の土器……151
図版11　第460・420・410区の土器 ……152
図版12　第410・400・390・380区の土器……153
図版13　第380・370区の土器……154
図版14　第360区の土器 ……155
図版15　第360・350・330・320区の土器……156
図版16　第530・510・470区の石器 ……157
図版17　第460・450区の石器……158
図版18　第430・420区の石器……159
図版19　第410・400区の石器……160
図版20　第390・380・370区の石器 ……161
図版21　第360区の石器 ……162
図版22　第360・350区の石器……163
図版23　第330・320区の石器……164

図版24　第580区の木器① ……165
図版25　第580区の木器② ……166
図版26　第530区の木器 ……167
図版27　第470区の木器① ……168
図版28　第470区の木器② ……169
図版29　第470区の木器③ ……170
図版30　第470区の木器④ ……171
図版31　第470区の木器⑤ ……172
図版32　第470区の木器⑥ ……173
図版33　第470・460区間畦畔部の木器① ……174
図版34　第470・460区間畦畔部の木器② ……175
図版35　第460区の木器① ……176
図版36　第460区の木器② ……177
図版37　第460区の木器③ ……178
図版38　第460区の木器④ ……179
図版39　第460区の木器⑤ ……180
図版40　第460区の木器⑥ ……181
図版41　第460区の木器⑦ ……182
図版42　第460区の木器⑧ ……183
図版43　第460区の木器⑨ ……184
図版44　第460区の木器⑩ ……185
図版45　第460区の木器⑪ ……186
図版46　第450区の木器① ……187
図版47　第450区の木器② ……188
図版48　第450区の木器③ ……189
図版49　第450区の木器④ ……190
図版50　第450区の木器⑤ ……191
図版51　第430・420区の木器① ……192
図版52　第430・420区の木器② ……193
図版53　第410区，第410・400区間畦畔部の木器 ……194
図版54　第400・380区の木器 ……195
図版55　第370区の木器① ……196
図版56　第370区の木器② ……197
図版57　第370区の木器③ ……198

図版58　第370区の木器④ ……199
図版59　第370区の木器⑤ ……200
図版60　第370・360区間畦畔部の木器①……201
図版61　第370・360区間畦畔部の木器②……202
図版62　第360区の木器① ……203
図版63　第360区の木器② ……204
図版64　第350区の木器① ……205
図版65　第350区の木器② ……206
図版66　第350区の木器③ ……207
図版67　第350区の木器④ ……208
図版68　里田原遺跡出土の編物類……209
図版69　里田原遺跡出土の自然遺物……210

表　目　次

表１　数値表１……125
表２　数値表２……126
表３　数値表３……126
表４　数値表４……126
表５　数値表５……126

Ⅰ．調査実施に至った経過

長崎県本土部北辺，北松浦郡田平町里免他の水田下にある里田原遺跡は，昭和47年度から断続的に発掘および範囲確認の調査が実施され，40ha程の範囲に遺跡が包蔵されていることが知られるに至った。その内の一部は公有化され長崎県史跡に昭和49年指定されていた。

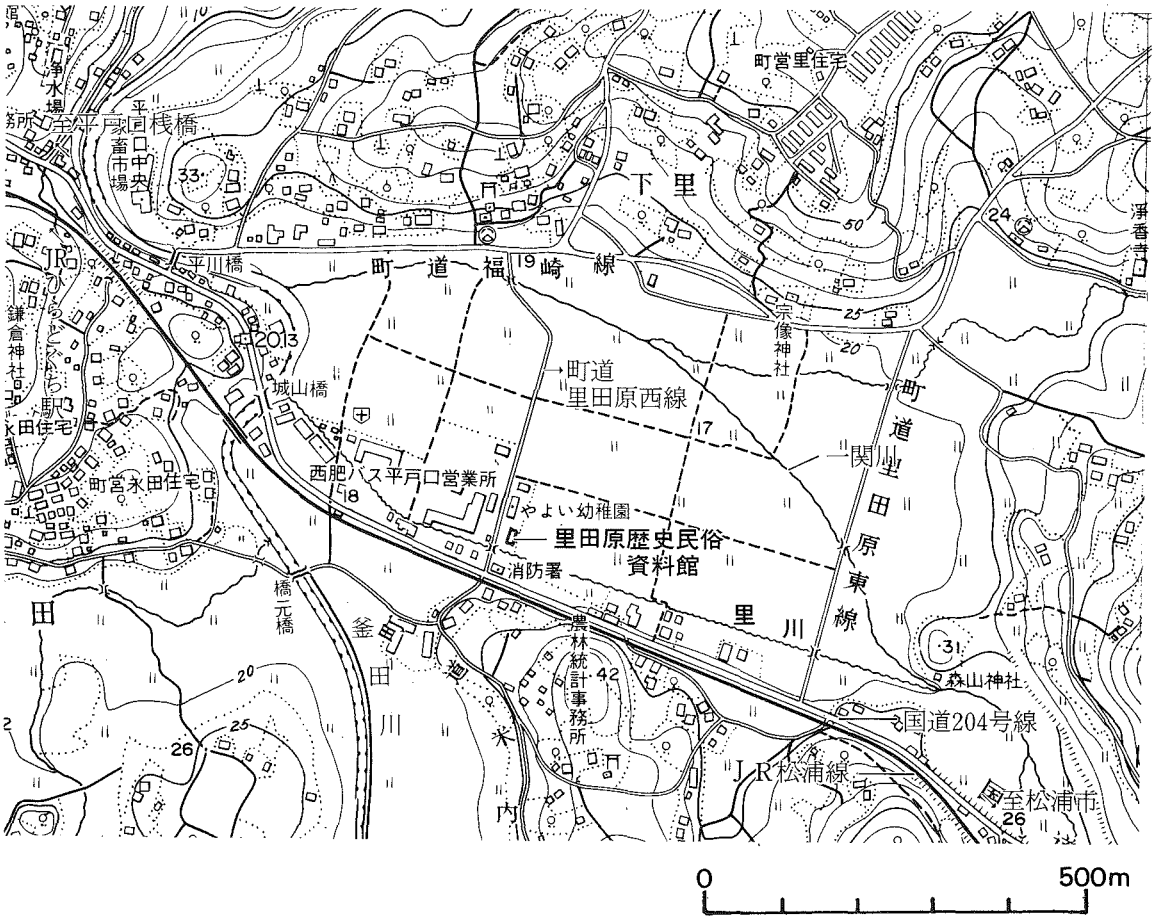
里田原遺跡は標高約17mの盆地地形であるが，北辺を一関川が東から西に流れ，里川が南辺を東から西に流れ，ともに里田原の両辺を流れる釜田川に注いでいる。一関川は普通河川，里川は二級河川であるが，ともに川幅が3m程度の小流で，梅雨時期には増水により，水田全面が冠水することもあった。

この冠水を回避するためには，河川の改修工事が必要であり，ときおり川床の清掃や部分的な護岸が行われたが効果に乏しく，河川の幅員をひろげる必要が言われていた。昭和60年の春，県の河川担当部局から，この改修計画に関する遺跡の取扱いについて協議があり，調整が計られることになったが，一方では，過去の川浚えによって，遺跡包含層は損われているかもしれない可能性も指摘されていた。しかしながら，河川は時によって流路を変えること，また工事自体が8m幅員に増幅予定であることを考えると，最低限でも幅員増部分については調査の実施が必要であり，また河川工事予定線のどの部分が正確に遺跡にかかるかについては試掘調査の資料によってもかならずしも明確なものでなかった。一方，工事計画では県史跡の一部が工事設計に含まれていた。

以上の状況をふまえて，県河川課，田平土木事務所，田平町・田平町教育委員は協議の結果，次の結論に達した。①河川改修計画にかかる遺跡の西限は町道里田原西線の西側40m程度までであるが，東限は，町道里田原東線あたりと考えられるが，かならずしも明確でないので，この間の試掘調査を実施する。②それによって発掘の必要な面積，経費等を算出する。③発掘調査は，昭和61年6月まで完了する。④整理作業と報告書の刊行は昭和62年度に行う。⑤以上の調査に必要な経費は河川部局において負担する。⑥調査主体は田平町教育委員会とし，調査担当者は県文化課が派遣する。⑥県史跡にかかる部分は設計を変更し，迂回する。⑦木製品の出土が予測されるが，その保存処理事業は別途，田平町が行う。以上の点を骨子とした協議結果が得られるに至った。

試掘調査，表土制離を兼ねて，昭和61年11月19日～同月27日までの9日間，正林と田平町教育委員会石井哲の両名が行い，2m×6mの試掘坑を，20mおきに30ヶ所設定して実施した。その結果，町道里田原西線以西40m，以東360mの範囲，幅8mについて発掘調査が必要であることが判明した。

試掘調査の結果をうけて，昭和61年6月まで発掘調査を完了するためには，同年12月に着手する必要があり，同年12月2日に着手し，翌昭和62年6月11日まで，年末年始と年度末年度当初を除いて調査を実施し，完了した。



第1図　里田原遺跡および周辺図

II．里田原遺跡の地理的・歴史的環境

里田原遺跡は，長崎県北松浦郡田平町里免その他にある。九州島の北西部に複雑な海岸線をもって張り出す肥前半島があり，近隣の海上には平戸島（市），生月島（町），大島（村），鷹島（町），福島（町），度島（平戸市）の有人常住の島々がある。いずれも北松浦郡ないし元北松浦郡に属している。また，平戸島の西方海上には，五島列島（7島）があり，最北部の宇久島（町）と小値賀島（町）は北松浦郡に属している。小値賀町の南，中通島以南の5島は福江市と南松浦郡であるが，いずれも元南松浦郡域に属する。県本土部の北部，佐世保市よりも北部はすべて元の北松浦郡に属している。このようにしてみると，通常「県北」と称する県北部と，対馬・壱岐を除いた離島の大半が「松浦」の名を冠する地域になる。

「マツウラ」の古称は，『魏志』倭人伝の「末盧国」，肥前『風土記』の「松浦郡」条に発するものであろう。また，同じ西北九州に当たる佐賀県唐津市や東松浦郡の地名にもあるところか

ら，西北九州沿岸と属島を含めた広い範囲を称したものであろう。田平町もこの「マツウラ」の西辺の地であったことは容易に首肯できる。

「里田原」は，地籍上の呼称ではなく，町の北部に広く展開する盆地全体に対する通称であるが，田平町の殻倉地帯に対する通称でもあるようである。九州島西北端にある田平町ＪＲひらどぐち駅は，日本西端の（国鉄）駅といわれ，平戸島との間にある平戸瀬戸の急潮を眼下に見下す位置にある。

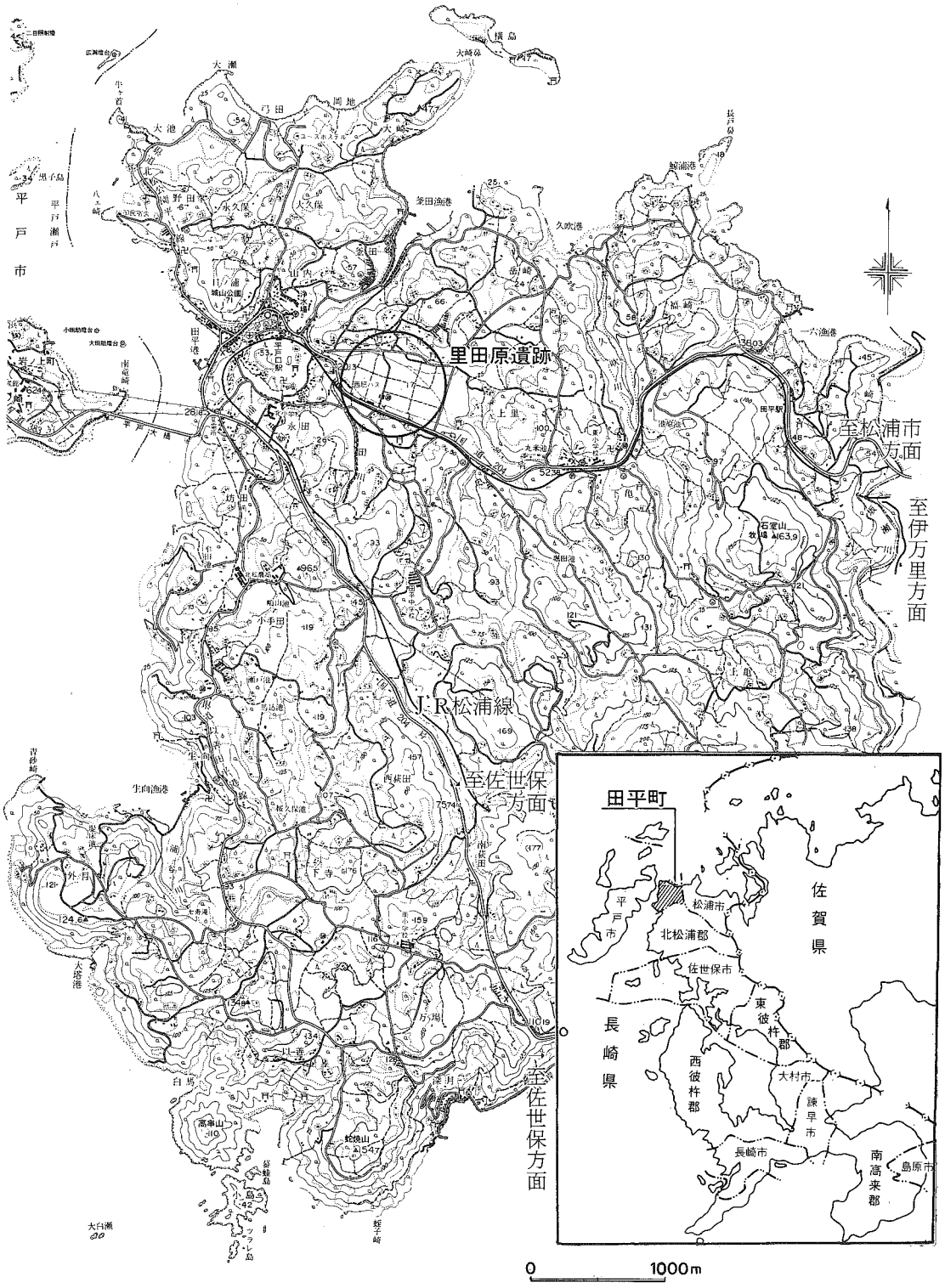
里田原遺跡のある田平町に至るには，ＪＲ松浦線とバス路線利用の方法がある。ＪＲ利用の場合，佐世保駅から北上して一時間強，先述のひらどぐち駅で下車する。博多・唐津方面からのＪＲ利用も，唐津駅から約90分でひらどぐち駅に到着できる。里田原遺跡に至るには，ひらどぐち駅から国道204号線を徒歩で約10分東行すればよい。路線バス利用も同じコースがあり，ＪＲ佐世保駅前から国道204号線を60分強北上，バス停「平戸口桟橋」で下車すればよい。また博多・唐津方面からも国道204号線を西行，「平戸口桟橋」のバス停で下車するとよい。この場合，いずれも，バス停「平戸口桟橋」から徒歩で国道204号線を20分東行すれば，広い水田地帯が国道沿線に展開するので，遺跡の位置はわかり易い。また，里田原のほぼ中央部に，町立の里田原歴史民俗資料館があり，主として同遺跡出土の木製品が収蔵展示してある。同館の所在地は，正しくは，郵便番号859-48北松浦郡田平町里免236―２（電話0950―57―0144）である。

田平町内には，昭和63年度末現在で，49箇所の遺跡が確認されている（長崎県遺跡地図1987）。同町の面積35㎢に比すれば，１㎢あたり1.4箇所の遺跡があり，県下全体の１㎢あたり0.8箇に比して，２倍近い密度になることがわかる。このことは，古来，この地域における人間の営みが頻繁であったことを意味していよう。

田平町を含む郡域における里田原遺跡の歴史的環境は，古く旧石器時代に始まっている。郡域は，広く北松（ほくしょう）玄武岩とよばれる玄武岩層を基盤としている。全体に低平な地域ではあるが，国見連山の西域に当たり，平地に乏しく，河川も短流小規模である。北松玄武岩層は豊かな地下水があり，往々にして地滑りの原因ともなるが，湧水は人文界に大きく係ってきている。

群域の南部，佐世保市と北辺の町域には砂岩の岩山が露出しているところが多く，河谷の侵蝕による岩陰や洞穴が多く見られる。これらの岩陰には，**泉福寺洞穴**[1]（佐世保市　国指定），**岩下洞穴**[2]（同　県指定），**福井洞穴**[3]（吉井町　国指定）等，著名な遺跡が多い。これらの遺跡は土器文化草創の問題に深く係るものが多く，学史的にも重要な位置を占めている。一方，開地遺跡についても**中山遺跡**[4]（平戸市），**日ノ岳遺跡**[5]（田平町），**城ヶ岳平子遺跡**[6]（宇久島）など旧石器時代の重要な遺跡があり，田平町内においても17箇所の旧石器時代遺物出土地が掲げられている。

郡域の岩陰遺跡においては，縄文草創期に続く縄文式土器が層位的に検出されている例があるが，開地遺跡の場合，時期的に連続する遺跡が少ない。縄文時代の開地遺跡の発掘例自体が



第２図　田平町および里田原遺跡位置図

郡域において稀少である。田平町海岸の**つぐめのはな遺跡**[7]は，大形の石銛と弥式系土器が供伴する遺跡で鯨類の採捕が考えられている遺跡で，田平町北岸**久吹浜遺跡**[8]においても弥式土器が発見されているが発掘調査を経ておらず細部は不明である。縄文中〜後期の明確な遺跡はむしろ小値賀町**殿崎遺跡**[9]など，郡域の離島部において見られる。

郡域は，支石墓遺跡の多いところで，6遺跡[10]があり未確認のものを含めると9箇所にのぼる。里田原遺跡においても3基が点在しており，あらためて「未盧国」の西辺地域の感を深くする。

弥生時代もしくはその前夜の旧南北松浦郡域は近年かなり実像を結んできた。**宇久松原遺跡**[11]・小値賀町**殿寺遺跡**・有川町（南松浦郡）の**浜郷遺跡**[12]・五島列島南端の福江市**白浜貝塚**[13]・岐宿町（南松浦郡）寄神貝塚[14]等，北九州の弥生文化と軌を一にしながら縄文的遺制を引継いだ姿がある。一方，北松浦郡本土部では，**栢の木遺跡**[15]（松浦市）がある。大形の前期石蓋単甕棺と石棺がある墓地で，石棺内に内行花文鏡片等を副葬し，円型石組の墓地は支石墓であった可能性がある。本遺跡の場合，水田と住居跡は未検出であるものの，大量の木製品の中には平鍬，狭鍬，手鋤等の農具と米等の殻類が出土していて，水田跡の検出も時間の問題であろう。本遺跡は，ある規模をもった弥生農村と分業組織と首長の存在を示す遺物の出土した遺跡として認識されており，その点で，縄文的遺制の残存する遺跡の多い県内ではむしろ異質の遺跡ともいえる。

古墳時代の遺跡は極度に数少ない地域であり，殊に県北の本土部においては遺跡は稀少な状態である。また五島列島においても上五島の小値賀島以外では明確な遺跡は乏しい。高塚古墳に至っては，前述の小値賀島（町）2，平戸（市）本島2，平戸北辺の度島5，度島西方の生月島（町）2，度島北方の大島（村）4，元冦で有名な鷹島（町）4，その東隣の福島（町）2．本土部の松浦市1，田平町2，計22が「マツウラ」地方に見られるのみである。このことは，「マウウラ」地方の離島19，同本土部3という，離島優位の分布を示している。分布のあり方も，五島列島の北辺，平戸島北部と北辺の離島，本土部においても北辺とその離島に限られることを示している。また，小値賀島神島神社所伝の狗剣[16]（環頭大刀）と同類のものが平戸島志々伎神社[17]，同島亀岡神社[18]にあり，それぞれ神功皇后の朝鮮半島出兵の所伝とまつわっている。このような古墳のあり方や神剣の所伝は，「マツウラ」地方の古墳の社葬者（おそらくは水人集団の長）が，対馬・壱岐を国防と交易の最前線とする大和政権の枠組みの中で，航海技術者集団として後方支援の役を負わされたことを暗示していよう。前方後円墳は，田平町の笠松神社古墳と同町北辺の釜田港を見下す岳崎古墳のみであるが，県北で有力な水田地帯である里田原の近辺にある笠松神社古墳と，『肥前風土記』にある釜田港を見下す岳崎古墳のあり方は未調査ながら前述の事情を象徴しているように思える。

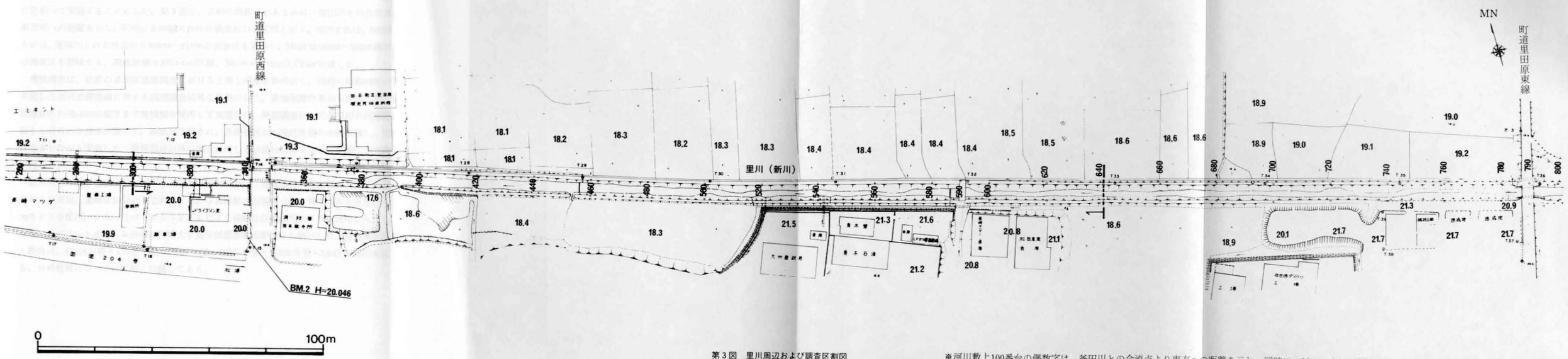
古代における「マツウラ」地方の実像は遺跡遺物の面からは結びにくいが，里田原の水田地

帯に短冊型の地割りが残り，条里制の遺構とされている。遺跡としては里田原北側の丘陵上に布目瓦の出土するところがあるが，当該地点に古寺等口伝はないものの，町内には田平町役場の国道向いに弥勒寺があったとするところがあり，関連が注目される。太宰管内誌には，松浦郡弥勒寺は田平にあると記し，類聚三代格天平17年（745）10月12日にある松浦郡弥勒寺と一致するかは別として，前述の布目瓦出土地と里田原の条里遺構は今後に問題を残しているといえよう。

また，玄界灘沿岸には太宰府から西に至る官道のことが延喜式に見えているが，太宰府から唐津を経て壱岐，対馬に至るルートと，佐嘉（賀）・磐氷（伊万里）・賀周（松浦市志佐）に至るルートがあって，後者のルートは庇羅（平戸），値賀（五島）に至るルートに連るもので田平の地は西の要津であった。水路の面から見ると日の浦・釜田浦は陸路と同じく，日本最西端の要港であった。

〔参考文献・註〕

1．麻生優（編著）『泉福寺洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会1984
2．麻生優『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会1968
3．鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』平凡社1967他
4．萩原博文『長崎県平戸市度島町湯牟田中山遺跡』平戸市教育委員会1977他
5．下川達彌・立平進『日ノ岳遺跡』長崎県立美術博物館1981他
6．下川達彌・立平進『城ヶ岳平子遺跡』第１次調査概報　長崎県立美術博物館1983
7．正林護・村川逸朗「つぐめのはな遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅸ　長崎県教育委員会1986
8．安楽勉・藤田和裕「久吹浜遺跡出土の遺物」『里田原遺跡』田平町教育委員会1985
9．高野晋司・福田一志・草野誠二『殿崎遺跡』長崎県教育委員会1986
10．田平町里田原遺跡・鹿町町大野台遺跡（国指定史跡）・江迎町小川内遺跡・佐佐町狸山支石墓群（県指定史跡）・平戸市田助遺跡・宇久松原遺跡（宇久町）のほか，未確認のものに，小値賀町神ノ崎遺跡・大島村大根坂遺跡・松浦市栢ノ木遺跡がある。
11．宮崎貴夫他「宇久松原遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅵ集　長崎県教育委員会1983
12．小田富士雄『五島列島の弥生文化』総説篇　長崎大学医学部解剖学第二教室人類学考古学研究報告第２号1970
13．安楽勉・正林護『白浜貝塚』福江市教育委員会1980
14．鏡山猛他『五島遺跡調査報告』長崎県教育委員会1964
15．正林護『栢ノ木遺跡』中間報告　松浦市教育委員会1974
16．地元の研究家近藤政英氏の実測による図面があり（大正８年９月13日），長さ３尺２寸７分弱（1.079cm）と記されているが，昭和20年米軍により接収され，以後の消息は不明。戦前は国宝に指定されていた。社伝によれば西方鎮護のため派遣された日本武尊の子一速王の佩刀とされる。
17．亀岡神社蔵で重要文化財に指定されており，環頭の直刀。全長93cm，水牛角の鍔をつけ，竹を馬皮で包んだ鞘をもつ。小乱れの刃紋を有し，錵がよく出来ている。亀岡神社社伝によれば，神功皇后の朝鮮半島出兵に従った七郎氏広の佩刀とされている。



第３図　里川周辺および調査区割図

※河川敷上100番台の偶数字は，釜田川との合流点より東方への距離を示し，同時に，10m×８mの調査区２区を示す。
⊢—⊣は発掘調査を実施した範囲を示す。

III. 調　　査

今次の里田原遺跡調査は，里川の改修計画に伴うものであり，河川拡幅計画路線に沿って計画する必要があった。拡幅は現状の３m程度を８mにする計画であり，幅８mの長大なトレンチ掘りの状態で発掘計画を立てた。一方，河川計画は，里川下流が釜田川との合流地点から20m毎の工事区が設定されていた。調査区の設定もこれに従い，南北幅８m，東西10mの調査区に区切って実施することにした。第**3**図に，３桁の偶数字があるのは，釜田川との合流点から東方向への距離を示し，同時に８m幅×10mの調査区の２区間を示す。例示すれば，400区とあるのは，釜田川との合流点から400m～410mの調査区を意味し，580区は580m～590m地点までの調査区を意味する。調査面積は300～640区間，340m×８mの2,720m²に達した。

発掘調査は，従前の里田原遺跡調査における土層と深度を参考にし，同時に昭和60年11月に実施した里川改修路線に対する試掘調査結果を依拠にして，表層剝離作業から開始した。表層剝離は0.7～0.8mの深さまで重機械を使用して実施した。発掘調査は，元来里川の河道部分を掘るところから湧水が激しく，難航が予測され，各調査区とも南北片側の小溝を残し，河水を変流させながら実施した。発掘部分自体の湧水に対しては連日排水ポンプを駆動しつつ調査を実施した。

直接周辺の地形実測は200分の１，等高線１mで実施し，遺構遺物の検出状況および土層は20分の１で実測，遺構は10分の１で実測した。写真撮影は白黒ブロニー判フィルムを用い６×６cmカメラを使用，カラーリバーサルフィルムによる撮影には35mm判カメラを使用した。

なお，プラントオパール分析を宮崎大学農学部藤原宏志教授にお願いした。分析資料採集区と断面は，420区Ｎ壁・430区Ｎ壁・440区Ｎ壁・460区Ｓ壁・510区Ｎ型・530区Ｎ壁の６区である。分析結果については本報に収録してある。

IV. 土　　層

今次調査の土層は，里川の川底の調査という事もあってやや複雑な様相を示すが，400区では比較的わかりやすく，今次調査の基本的土層を示しているので，以下にみてみたい。

400区北壁

1層……黒色粘質土層（表土）

2層……褐色土層

3層……黒灰色粘質土層

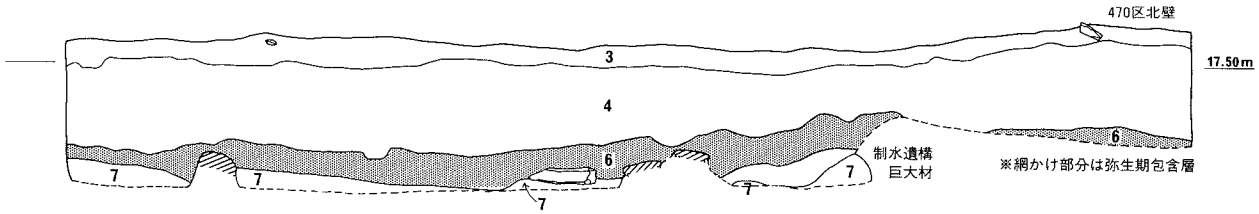
4層……灰黒色粘質土層

5層……灰褐色土層

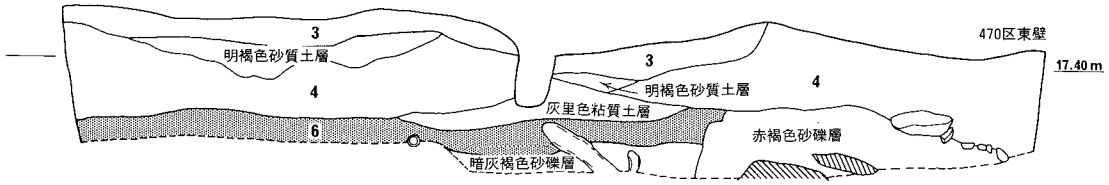
6層……青灰色粘質土層（良質の粘土である）

7層……黄灰色粘質土層（基盤層）

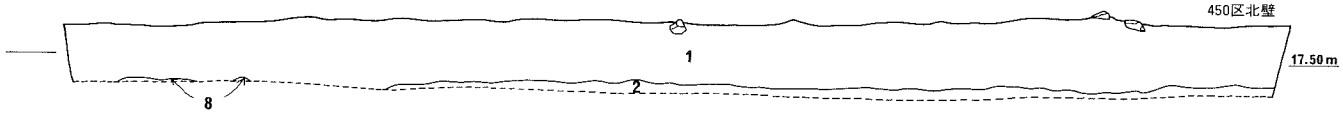
というようになるが，7層の黄灰色粘質土層は，通称ドンク盤といわれ，第三紀層の最上面の玄武岩風化土層であり，基盤層であると考えられる。次に，東壁の土層をみてみると，里川の流路によって6層の青灰色粘質土層がえぐられており（弥生期以前），そして，礫層（5f層），砂層（5d，5e層）の堆積があり，その上に弥生期の包含層である（5a～5c層）の灰・黒褐色砂質土層の堆積がある。これは，上流から下流の各地区にあてはまる基本土層である。ただしかし，それぞれの区で若干の層の有無や色調の違いはある。440，450区では，表土を剝ぐと2層の下に6層の青灰色粘質土層がある。これは440，450区の部分で流路が大きく南側へう回していて，青灰色粘土層をえぐっていない為である。ただ440区の東壁の土層図をみてもわかる様に南端は流路によってえぐられている。そして，410区の東壁土層をみてみると黄黒褐色貝層があり，410区内に小さな貝塚の堆積があった事がわかる。



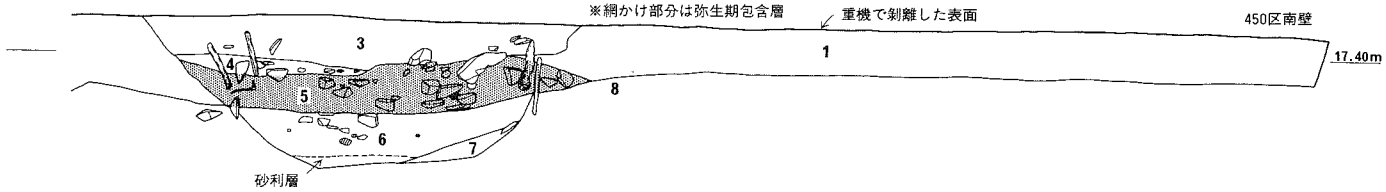
3……暗褐色粘質土層
4……灰褐色粘質土層
6……黒褐色砂質土層
7……黄褐色砂礫土層
※460区であった1，2，5層はない。



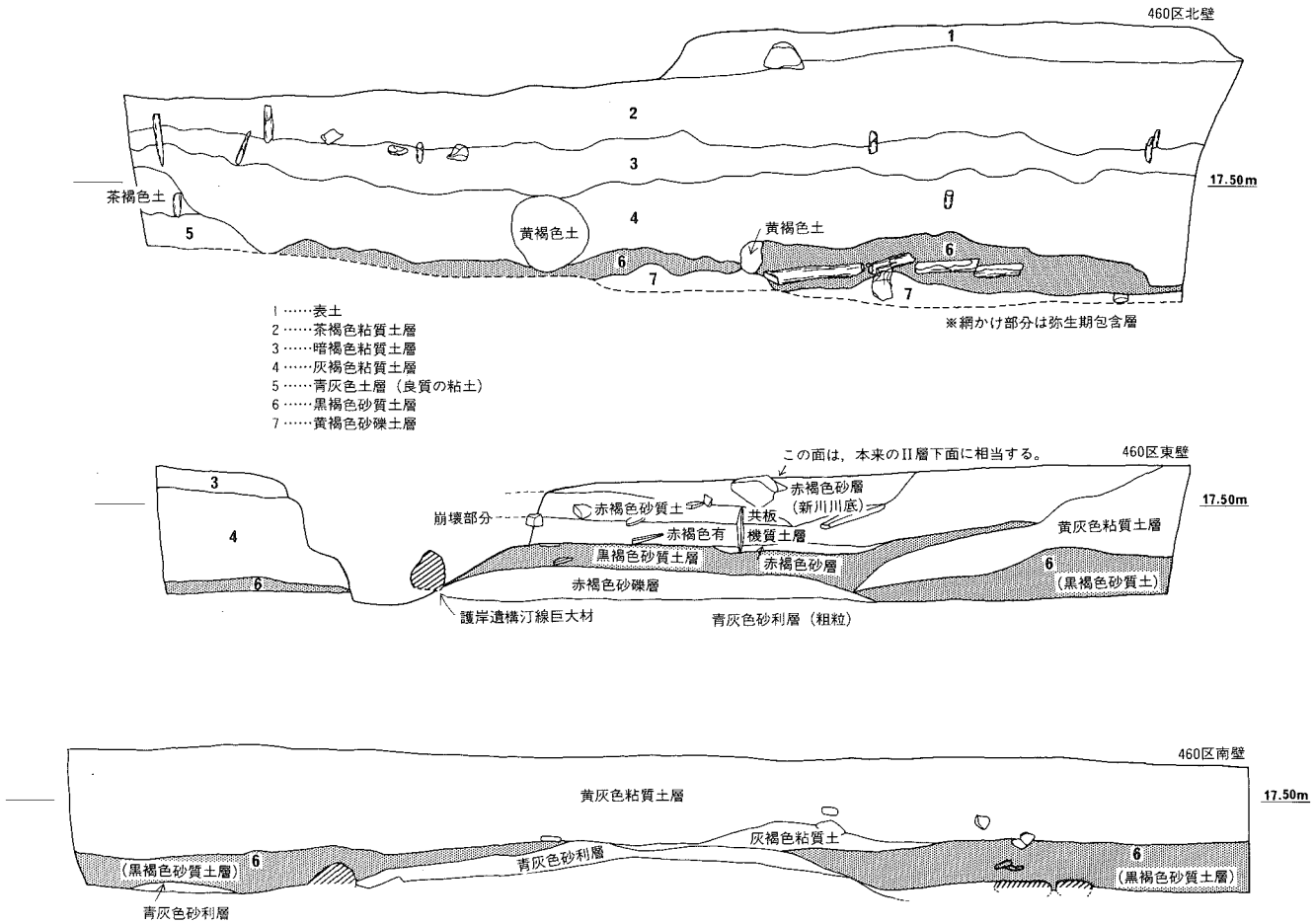
第4図　第470区土層図（1/60）



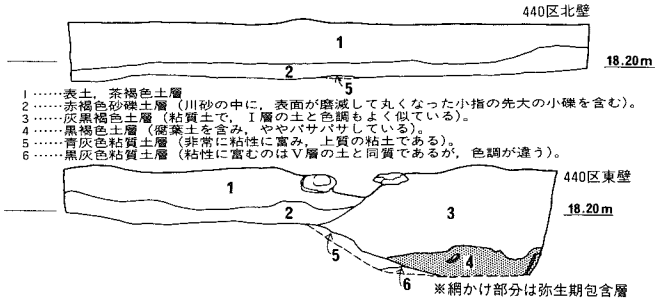
1……茶褐色粘質土層
2……茶褐色土層（粘性はあまりないが，よくしまっており硬い）。
3……赤褐色粘質土層（この層から上層は，弥生時代後の堆積と考えられる。無遺物）
4……茶褐色砂質層（　　〃　　〃　　）
5……黒褐色砂質土層
6……灰褐色砂質土層
7……黒褐色粘質土層
8……青灰色粘土層



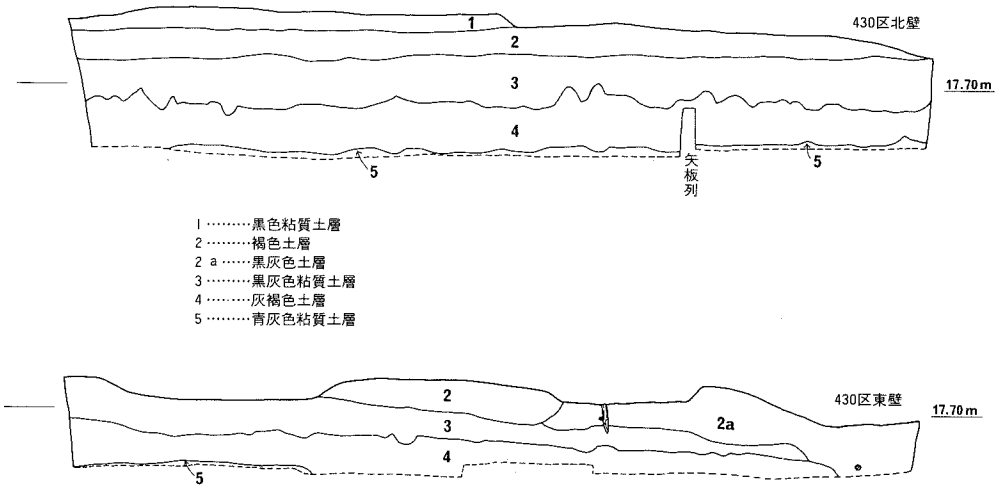
第5図　第450区土層図（1/60）



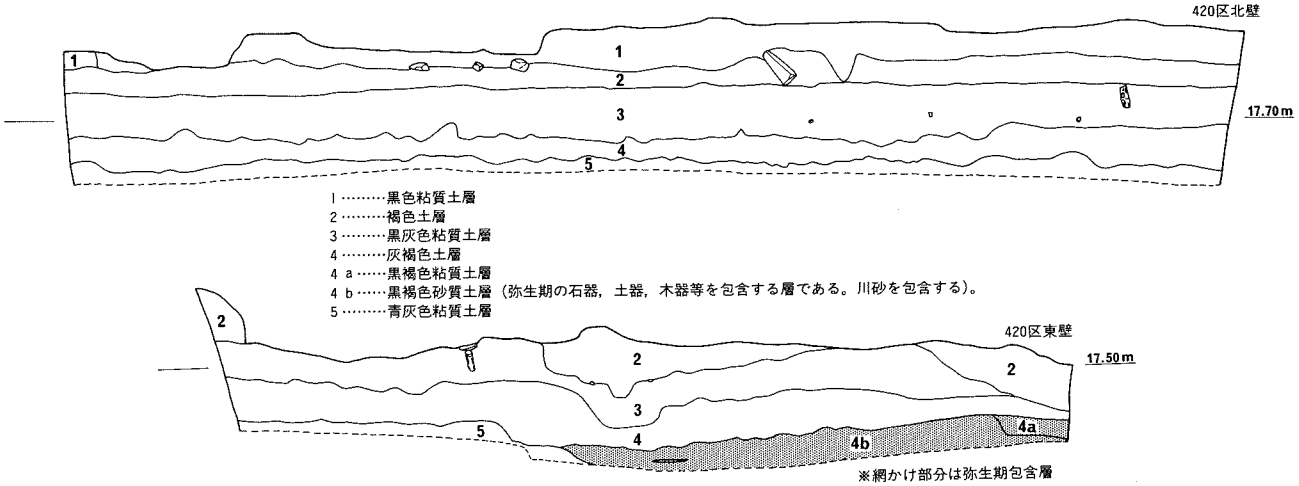
第６図　第460区土層図（1/60）



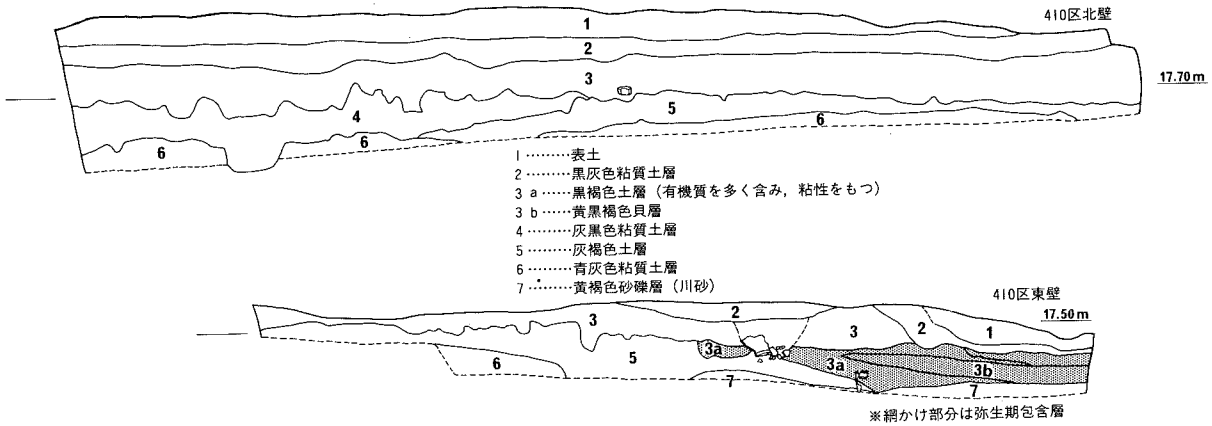
第７図　第440区土層図（1/60）



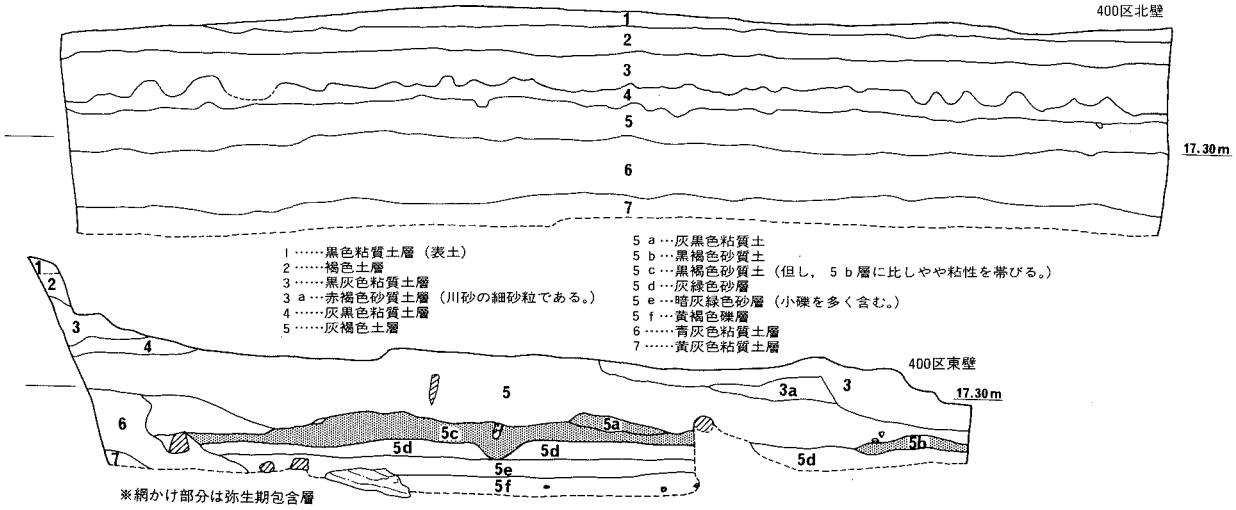
第８図　第430区土層図（1/60）



第９図　第420区土層図（1/60）



第10図　第410区土層図（1/60）



第11図　第400区土層図（1/60）

V．遺構――弥生時代里川の河道と遺構――

23次里田原遺跡発掘調査は，里田原の南辺を東から西に流れる現在の里川の拡幅改修に伴うものであり，南北幅８m，東西沿長340mにわたるものであった。工事区は，里川と釜田川の合流点から20mおきの工事区が設定されており，発掘調査はこの工事区番号にあわせて，８m×10mに区分して実施した。発掘調査実施の必要があるのは，西辺は300区から東辺の670区に至る区間であり，８m幅で，両河川の合流地点から300m地点から670m地点まで実施したことになる。本稿では670区（東側）から300区までに検出された主な遺構について記述することにする。遺構実測図は，堅果加工施設については本文中にあり，河川関連の遺構については長大なため別添図とした。

670～650区における里川の河道

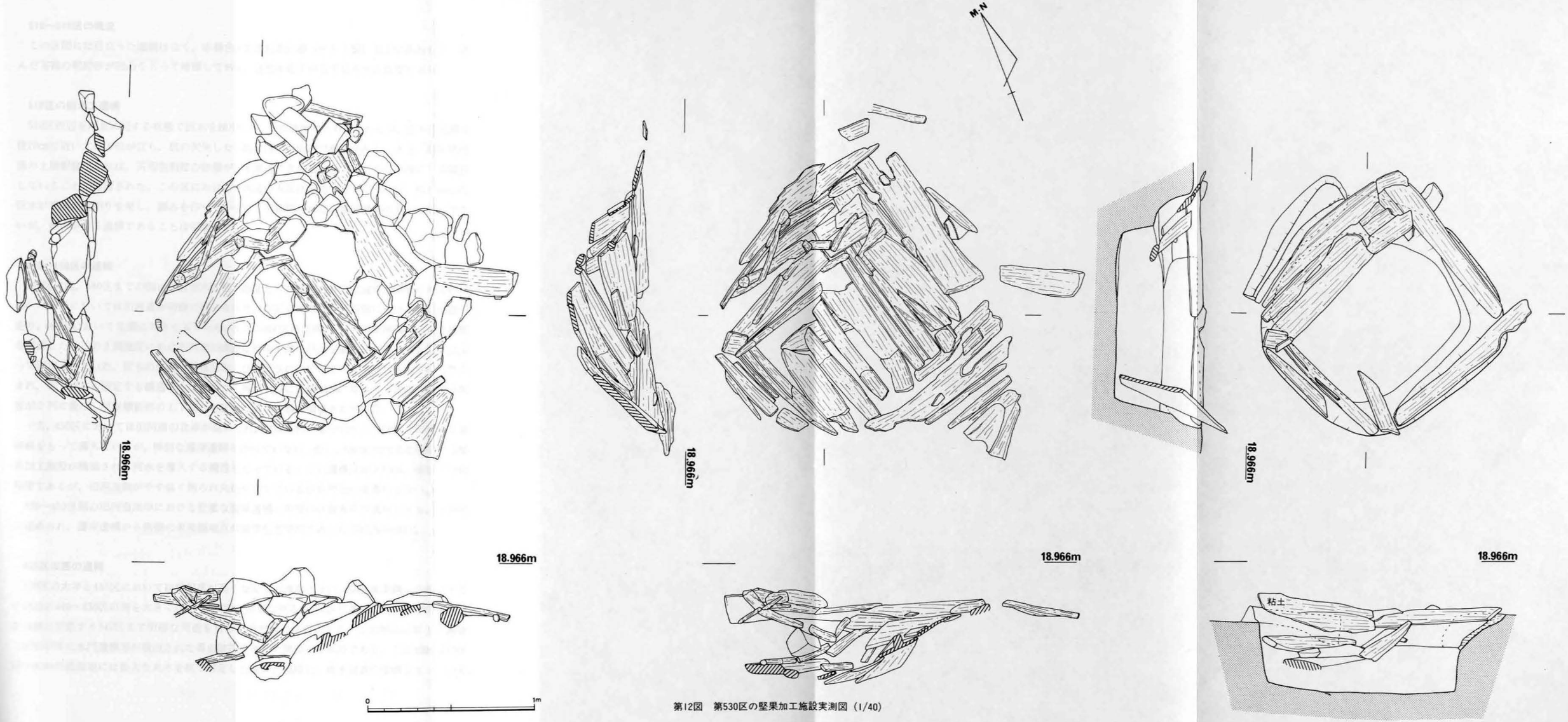
この調査区間における里川旧里川は第Ⅳ層目に当たる赤褐色軟質の玄武岩風化層（ドンク盤）の僅かに低い部分を流れ，河道とするより低凹地とするに相応しいものになっている。黒褐色の砂利層がわずかに堆積していて，自然木片等の有機質が混じている。670区においては，ほぼ東西方向に二又に流路が分かれ，660～650区間の旧里川は南東→北西方向に流路をかえている。

640～580区間の旧河道

明確な流路の状態ではなく，玄武岩風化層（ドンク盤）の微凹地に粗粒の砂利層の堆積した沼沢状態となっている。590区においては，北東→南西方向に走る杭列がわずかに認められ，赤褐色粗粒の砂利層がわずかに認められる。580区においては自然木片等が散乱状態で認められ，僅かに弥生前期後半の土器も認められるところからして，木製品は前期後半の資料と考えられる。また580区に至って木片等が集中的に散乱している点を考慮すれば，沼沢状態がややこの区から西辺に向けて澱みをなしていると考えられる。

580区における堅果加工施設（第12図，図版６）

１基を検出した。検出段階の状況は，人頭大の自然礫が径１m余の範囲に見られ，加工穴を覆う蓋板群の上に置かれていた。礫群の下は幅15cm，長さ１～1.2mの割截された板材がならべられている。板材の中には第64図に示した橇の未成品も含まれる。被覆板材の下部は方形に縁取りされた円形土壙があり，径1.1mを計る。土壙は旧河床に堆積した黒褐色粗粒砂層から赤褐色の玄武岩風化層に切りこまれている。やや西方に傾いた面に構築されているためか，土壙縁西側に粘土をはって高低を調整している。土壙の深さは約0.6mで壙底にカシの実が若干残留していた。



第12図　第530区の堅果加工施設実測図（1/40）

570～540区の概況

この区間には目立った遺構はなく，赤褐色の玄武岩風化層（ドンク盤）の上に鉄分を多く含んだ茶褐の粗粒砂が凹凸をもって堆積しており，自然木若干が若干見られる程度である。

510区の制水工遺構

510区西辺を南北に扼する状態で巨木を検出した。当初風倒木と考えられたが，巨木の両側に径20cmに近い大形の杭が立ち，杭の欠失した小坑が巨木の両側で検出された。また，同区南壁面の土層観察によれば，茶褐色粗粒の砂層が巨木東辺に充満し，巨木をこえて急激に下降傾斜していることが確認された。この区における旧河道の両岸は確認できなかったが，杭どめした巨木が堰堤の役割りを果し，澱みを作っていることが確認された。堰堤構築の意図は定かでないが，澱みを作る遺構であることは明瞭である。

470～450区の遺構

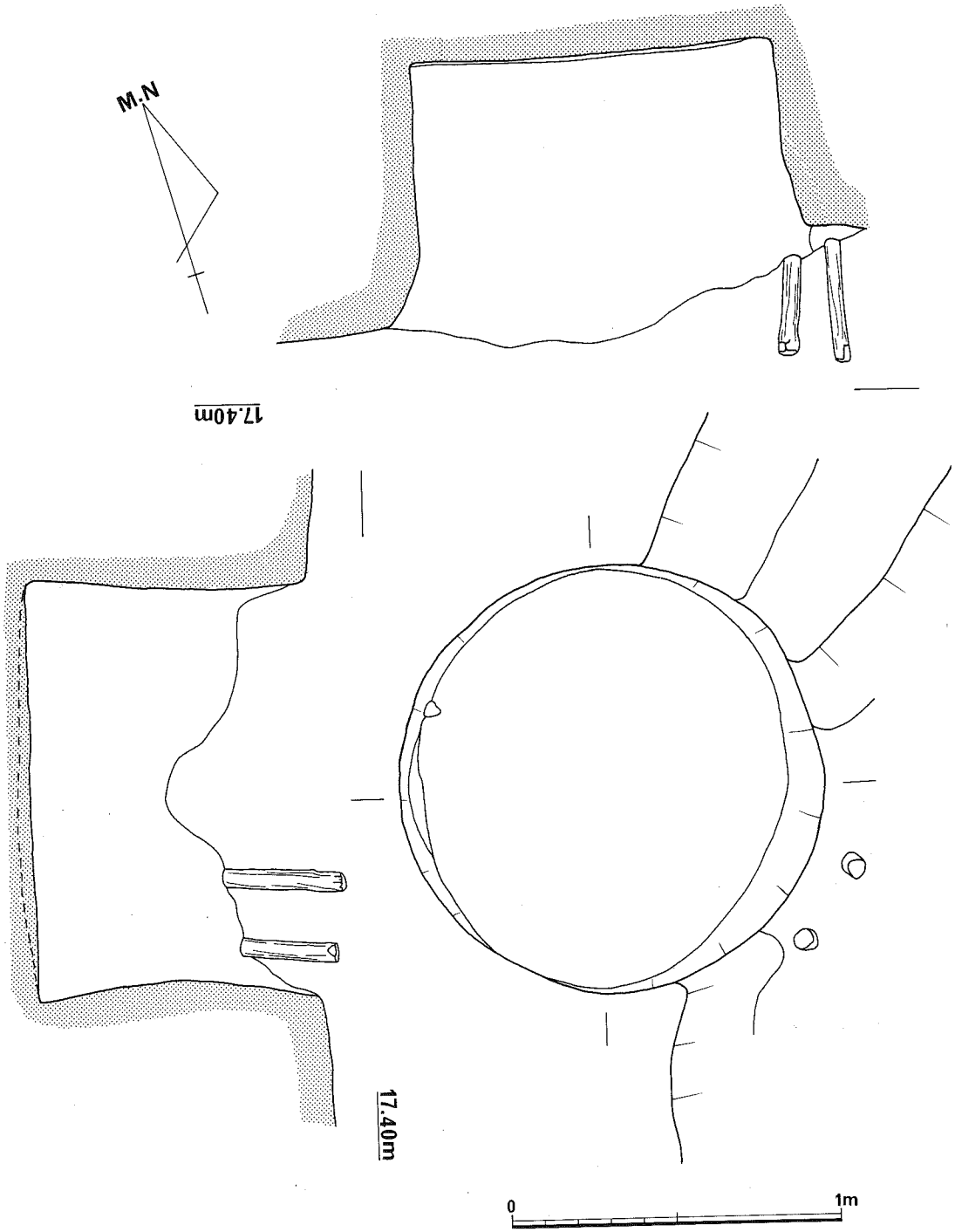
510区以西，480区までの間は，自然木が若干散乱した状態があり特に遺構も認められないが，470～450区においては旧河道が明瞭に認められた。470区東南隅から北西隅にかけて狭い河道が走り，460区において北側に大きくふくらみ，さらに460区南西隅から450区東南隅にぬける状態を確認した。この３調査区における河道の南岸は河岸下際に巨木を配し，大形の杭と矢板によって固定されていた。巨木の両側は別添図および図版５に示したごとく半径10cm程度に刳りこまれ，杭で巨木を固定する構造をもつ。また，河岸上際には幅25cm，厚み５cm程度の肉厚の矢板が２列に並び，河岸傾斜部の上下際とも罠重な護岸遺構が構築されている。

一方，450区においては旧河道の北岸が認められ，青灰色粘土層を切りこむ状態で旧河道に急傾斜をもって落ちているが，特別な護岸遺構を伴っていない。但し，450区旧河道北西岸には堅果加工施設が構築され，河水を導入する構造をもっている。この遺構は深さ80cm，径もほぼ同程度であるが，旧河道側がやや低く削られ丸杭を立てている以外特別の遺構材はない。

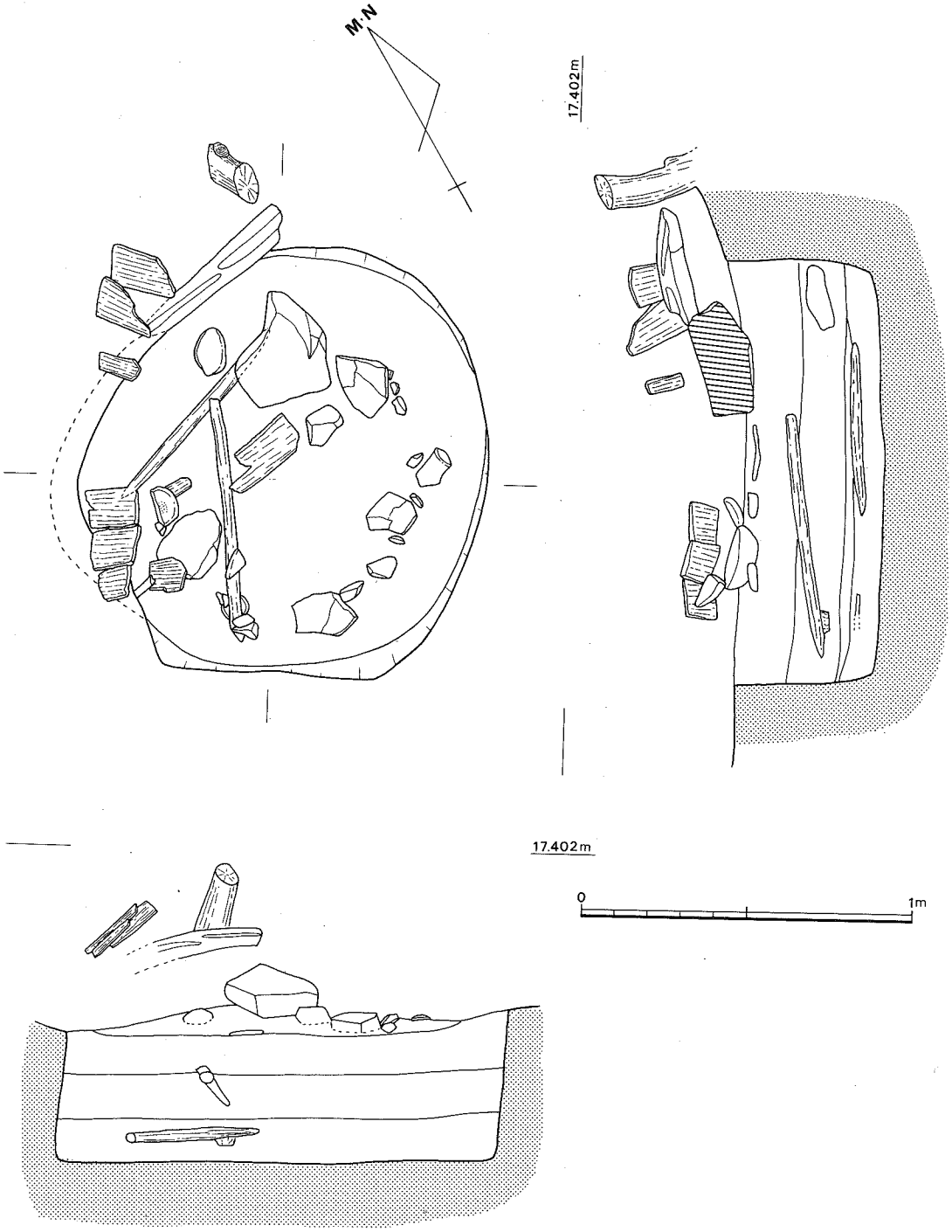
470～450区間の旧河道南岸における罠重な護岸遺構の南側には数多くの遺物とともに，建築材が認められ，護岸遺構から南側の未発掘地点が重要生活空間であった可能性が強い。

430区以西の遺構

450区の大半と440区においては地盤高が高くなんらの遺構はない。450区東南隅から蛇行する旧河道は440～430区の南を大きく迂回して430区西半に連る。430区以西は，現里川が町道里田原西線と交差する340区まで明確な河道を有した低湿地の状態である。この部分は第１次調査（昭和47年に水門遺構等が検出された県史跡指定地）に隣接する部分である。この430～340区間の90mの低湿地には長大な丸木を杭で固定した遺構が連続し，排水促進の遺構となっている。



第13図　第450区の堅果加工施設実測図（1/40）



第14図　第410区の堅果加工施設実測図（1/40）

410区の堅果加工施設

410区においても堅果加工施設１基が検出された。この地点は前述の県指定史跡に隣接する地点で，同地において検出された同種遺構群と一連のものと考えられる。上部構造である板蓋等は失われているものの，径約１m，深さ0.6mの土壙を基盤まで掘り下げられた遺構であり，内部にはカシを主とする堅果が充塡されていた。

340区以西

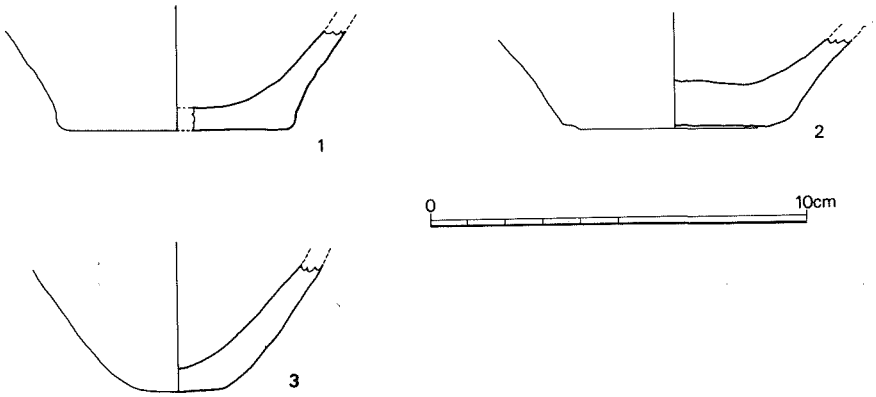
340区は，町立の里田原歴史民俗資料館の西側を南北に走る町道里田原西線と，現里川が直交する地点である。この地点以西においては基盤が高く，旧里川の河道はここで南西と北西方向に分流する。このことは，昭和49年に実施された第10次調査地点の状況および，昭和48年に実施された第５次調査地点（エミネントスラックス工場用地）の低湿地の状況と一致する。

VI. 遺　　物

第23次里田原遺跡の発掘調査において出土した遺物は，土器約15,200，石器約5,200，骨角器１，木製品1,072点，計約21,473点と自然遺物が出土した。

本書に掲載したのは，土器215点，石器112点，骨角器１点，木製品197点および編物類と自然遺物若干である。掲載すべき資料は掲載した量を上まわるが時間不足他諸種の制約があって叙上の数にとどまった。

説明については，各器種別に記述する方が簡単明瞭であるが，長大な調査区の中で検出した各遺構との関連を考慮したこと，旧河道周辺地点における将来の予察を考慮したこと，遺物の出土状態が河川敷という制約の中で層位的な細分が困難であったこと，以上の諸点を考えて，各調査区毎に遺物の説明をすることにした。



第15図　第580区の土器

1．土　　器

第23次里田原発掘調査における土器は，町道里田原西線以東の調査において数量の差はあるもののほぼ万遍なく出土した。特に470区以西の範囲において量的に多く見られた。里川の田河道が現河道とほぼ重複していたため，遺物は旧河道への流入状態で見られ，原位置からの「移動」があることは否定できない状態にあった。但し，いわゆる「攪乱」された状態とは異り，後世の遺物の混入ではなく，洪水等による直接近隣地点からの「移動」であったと考えられる。破砕された遺物の保存状態自体は良好であることが，このことを示していよう。

土器は掲載していないものでもあるが，縄文時代から古墳時代にわたっている。掲載しなかったものの中には，太型凹文を特長とする縄文中期阿高式土器胴部片１，同晩期黒色磨研浅鉢片１点があり，近隣に縄文時代遺跡のあることが考えられる。また第**19**図の**15**は１点のみであるが厚手茶褐色の刻目突帯を「く」の字型に折れる肩部に付した資料があり，横方向および斜方向に幅広の板状具で粗大な調整を施している。刻目はヘラ状具でつけている。

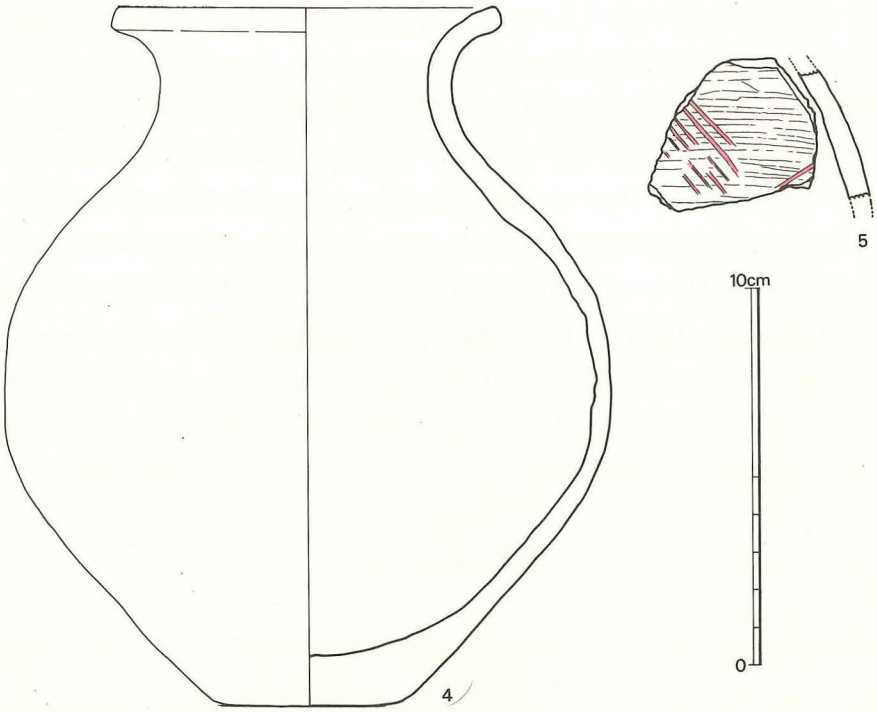
弥生式土器の器種　甕・壺・鉢があり，器種構成に片寄りがある。甕型土器が量的には最も多く，ついで壺，鉢は図示した１点（第**34**図124）にとどまるが，調査対象が長大な旧河川という点を考えれば絶対的な数量比とは言い難い。また，旧河道内という条件の中で時期差を層位的に確認できない憾みがある。以下に，調査区の東辺（里川の川上側）から順次概要を記述する。

第580区の土器

第**15**図および図版**9**に示した竪果加工施設遺構の周辺から出土した底部である。**1**は石英の微粒を多く含み，胎土・焼成ともに良好。外面に僅かに刷毛目調整の跡を残している。底面の復原径9.2cm。**2**は表面が荒れていて調整は不明であるが安定のよい壺底部である。石英粒を多く含み，黄灰色を呈する。底面積9.4cm。**3**は丸底気味の平底で底面の径は約4cm，外面は縦方向にヘラによる調整が見られる。灰橙色で焼成は良好，内部にススが沈着している。

第530区の土器

4は，くびれた頸部と平底を有する壺で，上下28cm，口縁径13.2cm，胴部最大径は中位にある。やや器表があれ，器面調整は分かりにくいが一部ヘラみがきの痕跡を残す。黒褐色を呈し，内外面ともススの付着がある。**5**は壺型土器の頸胴界の下際部分である。灰色の胎土は精良で焼成も良好である。内面に指などでの跡があり，外面は細いヘラみがきを横方向に施す。朱色の彩文が見られ，７条の細線で山型を描いている。**6**は完形に近い甕型土器，口縁部径38.6cm，上下41cm。底部は安定のよい平底である。口縁部は尖り気味で上方がややふくらみ，小さな刻



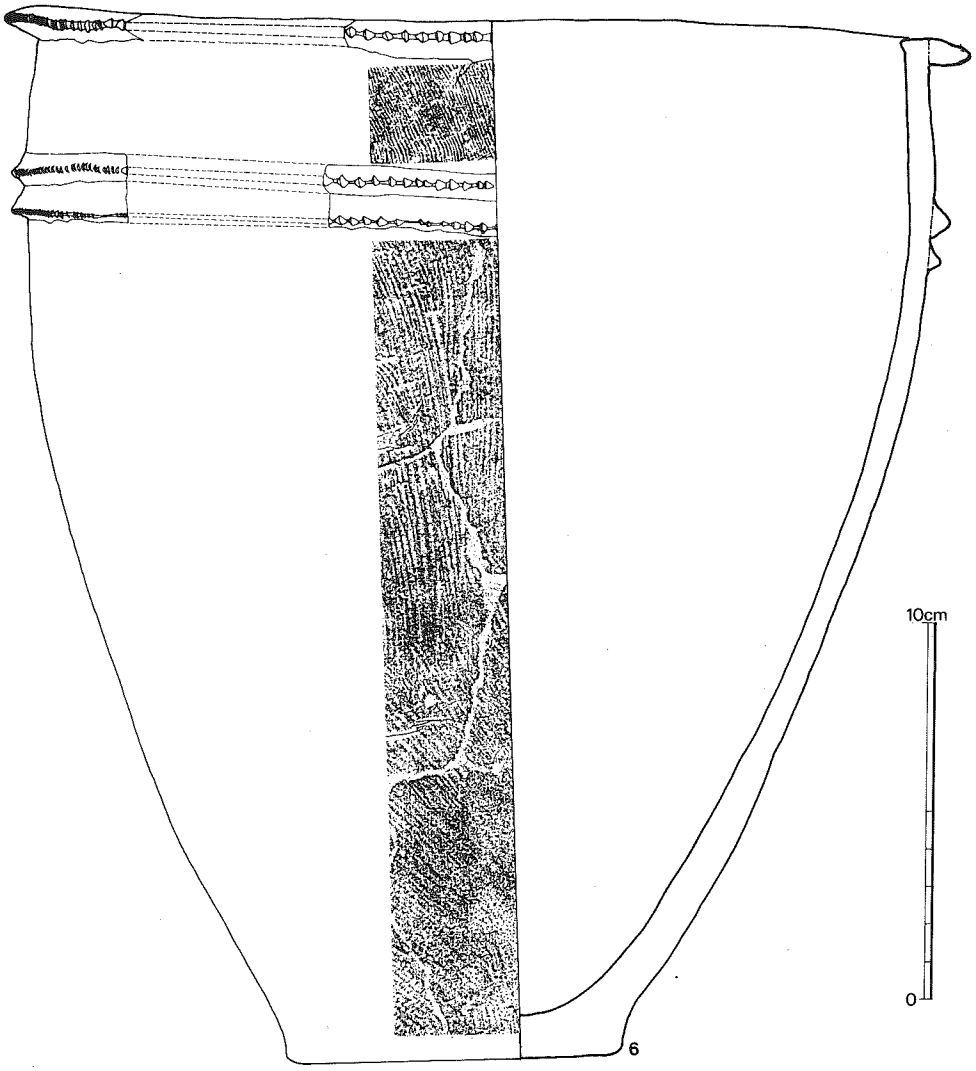
第16図　第530区の土器①

みを有する。口縁部下際にも２条の突帯をめぐらし，突帯上にはそれぞれ刻目を連続させるが部分的には微細な刻みになっている。外面はほとんど全面に刷毛目調整痕があり，一部ススの付着がある。全体に茶褐色を呈する。

第470区の土器

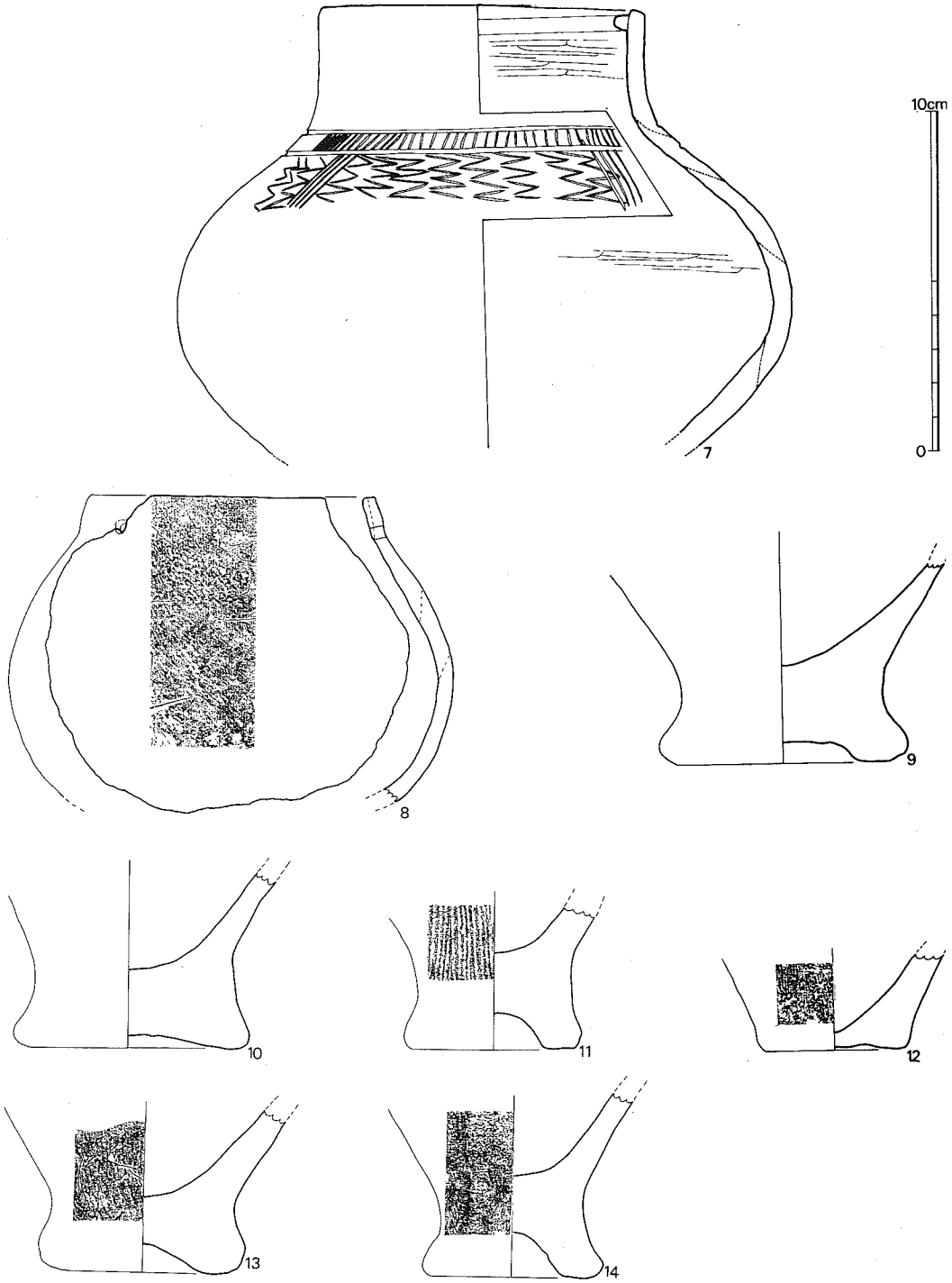
7は底部を欠く壺型土器，全体の５分の２程度が残る。扁球状の胴部を有し，頸胴界は画然とせず，直立に近い頸部に連る。頸部上辺内側には断面半円型の突帯が貼りつけられている。頸部上端は現状丸くおさめられているが成型規成型の状態ではなく，口縁部欠先後にまるく成型されたものであり，口縁部の旧状はゆるく外皮していたらしい。灰黒色の胎土は精良で焼成も頗るよい。内外面ともヘラみがきの調整が行きとどき黒褐色の光沢を有する。頸胴界とその下際に沈線をめぐらしその間に縦位の沈線をめぐらす。沈線の下際には縦位４条の沈線が一定間隔で配されているが，全周を４分する位置にある。この縦位４条の沈線の間には貝殻による羽状文が施されている。底部は安定のよい平底になると考えられる。胴部最大復原径27.2cm，頸部上縁径14.6cm。**8**は底部を欠損する壺型土器，全体の３分の１程度が残り，ほぼ原状を知り得る。球型の胴部に僅かに頸部が折れ気味に乗るが，いわゆる無頸壺である。口縁部内側を僅かに肥厚させており，口唇はほぼ平ら。口縁近くに一孔を有する。全体に茶灰色で焼成は良い。内面は指なでの痕が残り，外面は部分的に刷毛目を残す。**9**～**11**・**13**・**14**は上げ底を有し，

底部上際がくびれる。茶灰色を呈し，外面に刷毛目を有する（11・13・14）。胎土焼成ともに良好である。**12**は，ほとんど平底に近い内面にススが付着している。外面に細い刷毛目を有し，石英微粒を胎土に混じ，焼成よく堅くしまっている。**15**は肩部で「く」の字型に折れる甕型土器で，肩部に貼りつみられた突帯上に，鋭いヘラによる刻目をつける。茶褐色の胎土には微細な石英粒および輝石片を多く含む。幅広のヘラないし板状の調整具で大要横方向の器面調整が内外面とも見られる。焼成はよく，焼きしまっている。**16**・**17**はそれぞれの口径が25.8・21.2cmの甕型土器で口縁が折れ，外側が短く張り出す。石英の微細粒を含む胎土はよく焼きしまり茶褐色を呈する。内面指によるナデ，外面は刷毛目による調整痕がある。両者ともススが外面に付着し，特に口縁下側において著しい。**18**はいわゆる如意型口縁を有する甕型土器で口縁下



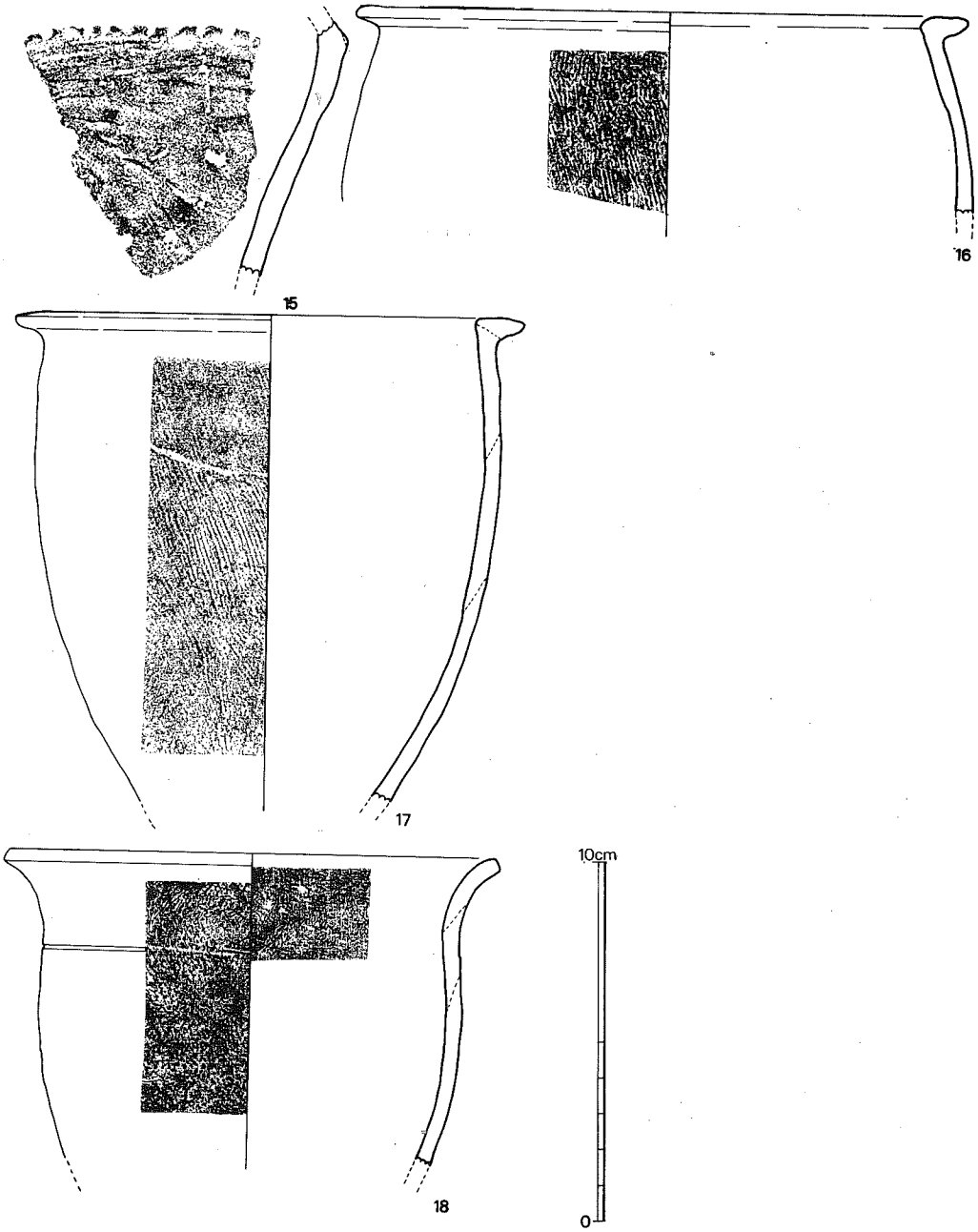
第17図　第530区の土器②

際に浅い沈線が１条横にめぐる。口縁外側は指による〝つまみ出し〟があり角張る。内外面とも黄灰色を呈し，胎土に石英の微細粒を含み，よく焼きしまっている。口縁部内側と外面には



第18図　第470区の土器①

刷毛目調整が見られる。口縁径20.9cm。**19**～**22**は，平底に近い甕型土器底部で，黄褐色を呈している。胎土に多量の石英の微細粒を含み，焼成良好である。ともに内面は指ナデ，外面は19・20が刷毛目，21・22がヘラによっている。底面径はそれぞれ8.2，7.6，5.2，7.8cmである。**23**・**24**は壺型土器底部で底面径が8.2，11.2cmである。石英の微細粒を含む胎土は精良，23は茶褐色を呈する。両者とも内面は指なで，外面はヘラみがきがある。



第19図　第470区の土器②

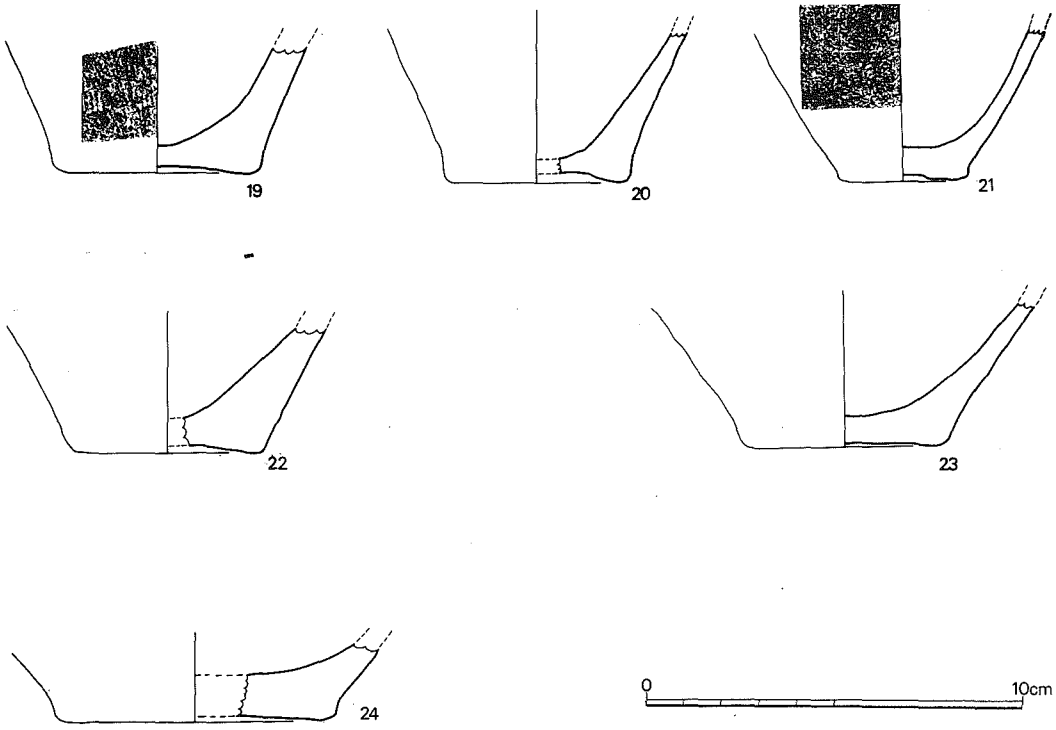
第460区の土器

460・450区は，里川が北方向に強く張り出して蛇行し，南岸の上下際に罠重な護岸遺構を構築した部分である。この区の土器は，この護岸遺構の南側（内側）において出土した。

25は器高34.6cm，口縁径15.2cm，胴部最大径は27.6cmで胴部のやや上際にある。頸胴界は明確な区画がないが，２条の沈線が回り，沈線間に斜格子文が沈線によって施されている。最大径は胴部上半にあり，頸部は強くくびれ口縁部も強くくびれている。内面は指なでによる調整が施され，外面はやや荒れているがヘラみがきの痕跡が残る。**26**も壺型土器で，25と規模，胎土等似ているが，施文有無等不明である。**27**も壺の胴部上半部であり，沈線１条がみえる。**28**は壺型土器の頸胴界で，３条の沈線間に羽状文を配している。**29**～**32**はいずれも如意型口縁を有する甕型土器で，口縁部径は24.0，21.8，32.6，25.0cmで，口縁下側に浅い沈線がめぐるが**30**の場合は浅い段差によって肥厚させている。**32**は口縁部に刻目をめぐらす。器面調整は口縁部内面と外面に刷毛目を施している。

第450区の土器

33は甕型土器胴部を用いた円盤（面子）で径10cmを計る。内外面とも黒褐色を呈し，胎土に石英粒を含み焼成も堅緻である。内面指なで，外面はヘラみがきによる調整が見られる。**34**は

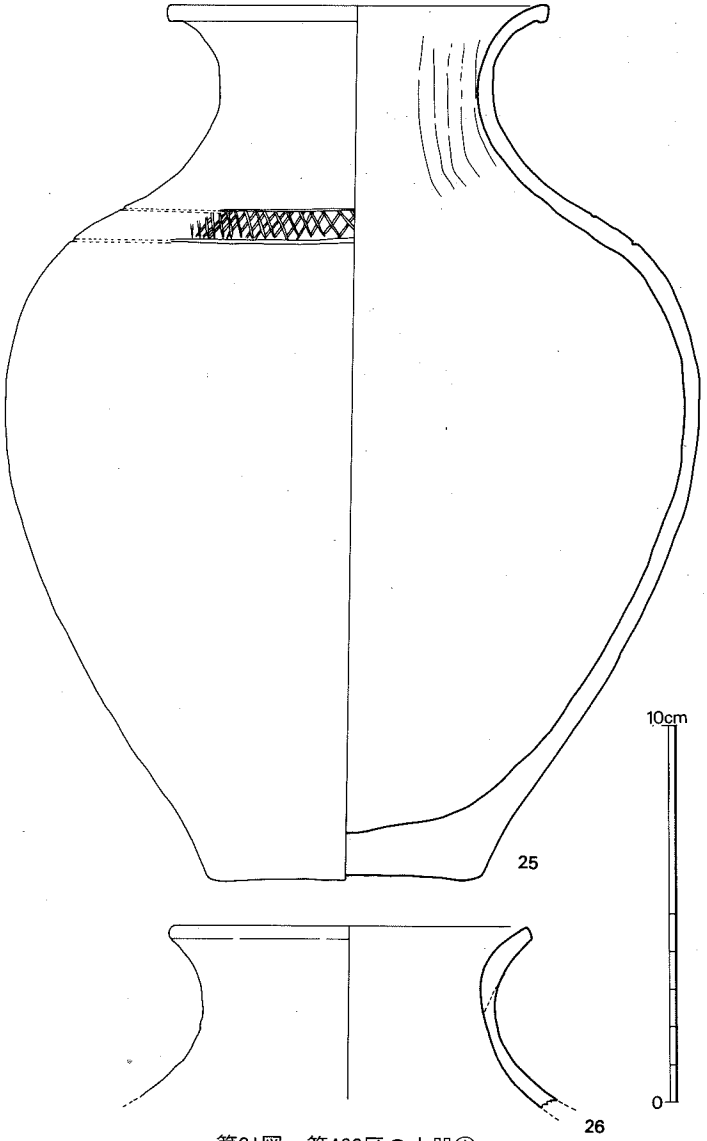


第20図　第470区の土器③

彩文壺の頸胴界から胴部上半部資料である。頸胴界に1条の沈線をめぐらし，上下際に朱彩文を施こす。沈線上際は斜線を，下際には6条の彩線をめぐらし，その下に6条単位の山形の彩文がある。胎土は微細な金色の雲母片を含み精良である。内面は指なでによる調整，外面はヘラ状具で入念に研磨され光沢を有する。

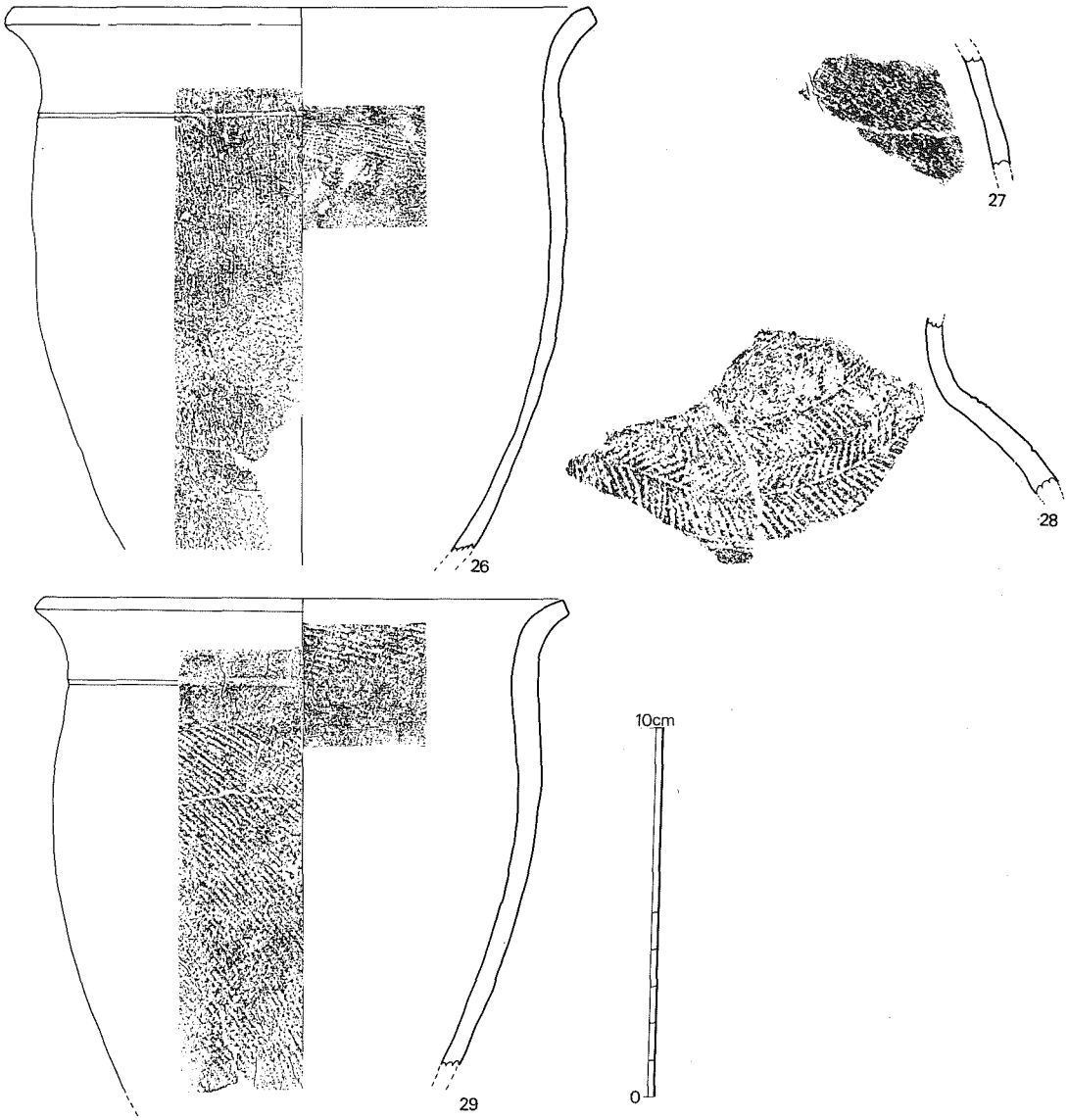
第430区の土器

35は口縁径26cmの壺型土器口縁部。口縁部は頸部上際で急激に外反し，外側と上辺は貼りつけて肥厚させている。このため口縁の内外面に「段」がつき，いわゆる有段口縁になっている。頸部はやや外反気味に立つ。黒褐色を呈し，胎土は雲母と石英の微粒を含み，緻密であり，固く焼きしまっている。内外面とも横方向の丁寧なヘラ磨きがありなめらかである。**36**は口径8.6cmの小型壺の口縁から頸部にかけての資料で，頸部下際に胴部との明確な界線が残っている。口縁部は貼りつけてわずかに肥厚させ，明確な口頸界がある。内面には丁寧な指なでの跡が残り外面は丁寧にみがいて，部分的に光沢があり，磨研土器の観がある。胎土は頗る緻密で，極微粒の雲母片が混る。40に示した円盤はりつけの底部と同一個体の可能性がある。**37**は口縁径27.6cmの如意形口縁



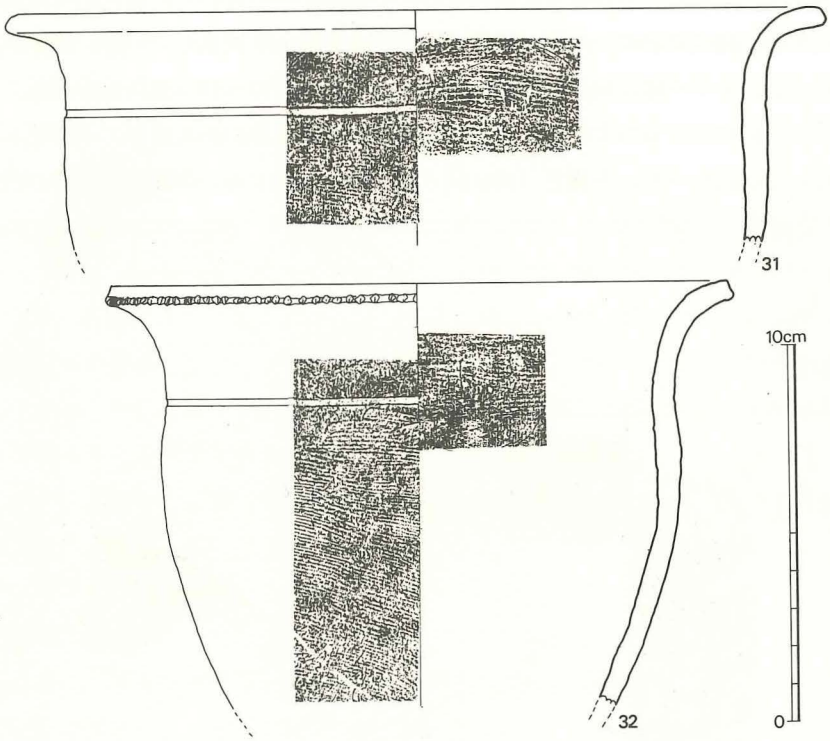
第21図　第460区の土器①

の甕型土器で底部を欠失している。石英粒を含む胎土はよく焼きしまっており，内外面とも刷毛目調整痕がある。**38・39**は橙褐色精製壺の頸胴部で石英粗粒を多く含み焼成良好である。内外面ともヘラ磨きが見られるが，38の沈線上際には精緻な刷毛目が見られる。38は鋭いヘラ状具による4条の細沈線が頸胴界をめぐり，以下に羽状文，更に2条の沈線がめぐる。39の羽状文は貝殻によっている。**40**は灰色の緻密な胎土に石英の微細粒を混じ，焼成もよい。やや表面が荒れているが丁寧なヘラみがきが施され，黒褐色の表面には一部光沢が残っている。うすい円盤底で，36と同一個体の可能性がある。**41**は底面径9.4の平底底部である。石英粒を混じ，焼

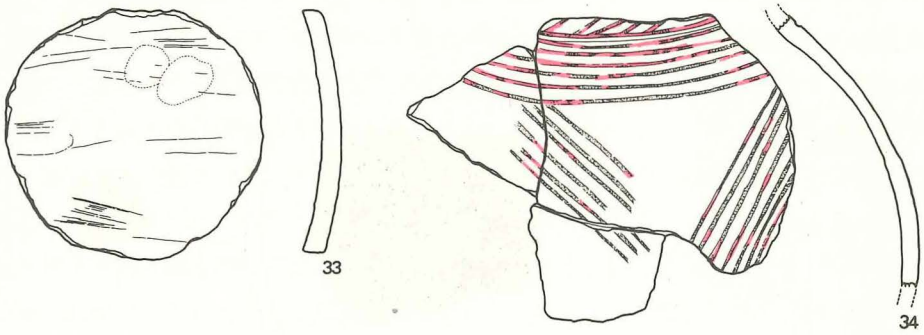


第22図　第460区の土器②

成良好である。ヘラみがきが見られ，甕型土器底部であろう。**42**は球形胴部片である。茶褐色を呈し，内面指なで，外面はヘラみがきによる調整が見られる。３条の沈線の下際に４条単位の孤文を連ねている。43も壺型土器胴部片に，４条の横位沈線がめぐる。胎土は精緻で，焼成も良好である。内面は指なで，外面はヘラ磨きで調整されている。**45**は手づくね土器であるが，蓋の可能性もある。



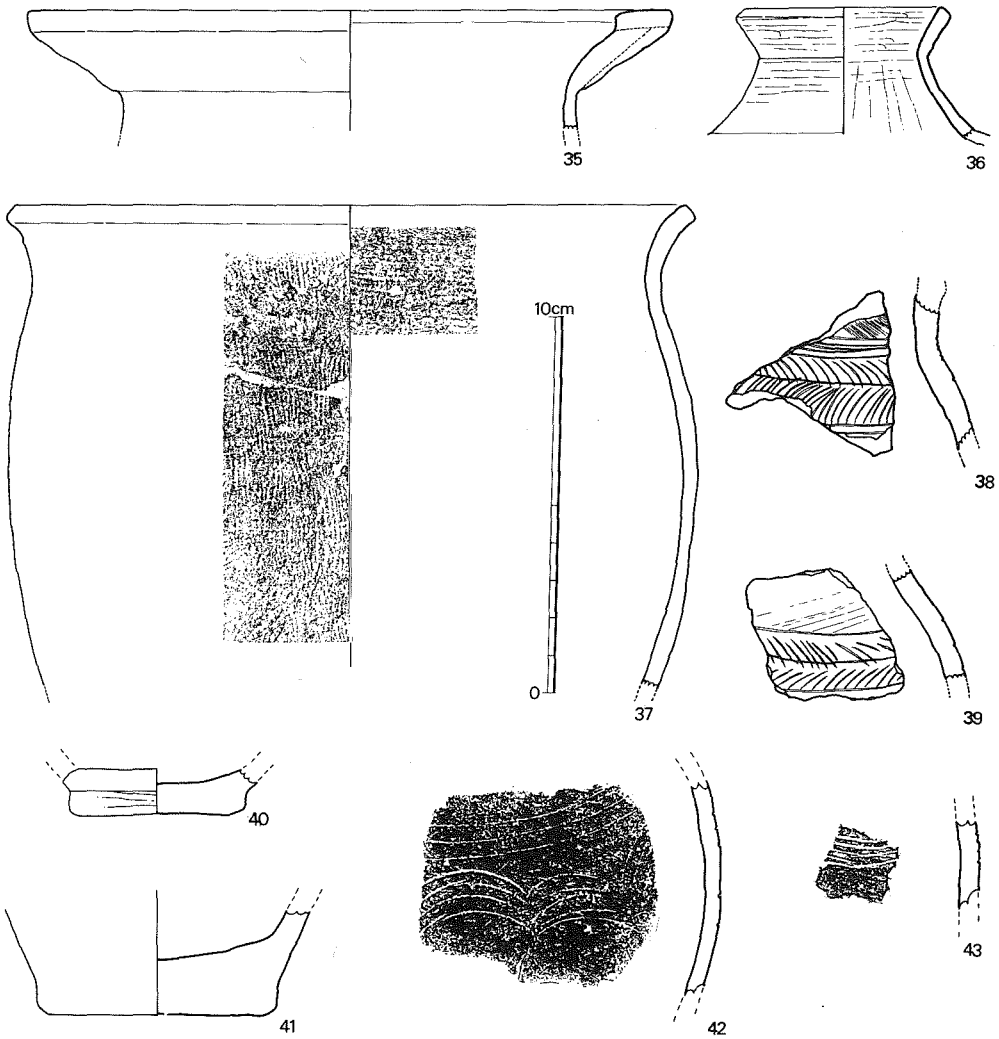
第23図　第460区の土器③



第24図　第450区の土器

第410区の土器

44は如意型口縁の甕型土器であり，口縁径25.6cm。茶褐色を呈し，胎土に石英の微粒を混入しており，焼成は良好である。口縁内側と外側は刷毛目による調整痕が残る。**45**は肉厚の底部で内外面ともヘラによる荒い調整がある。胎土は精良であるが焼成はやや軟い。**46**〜**56**・**58**〜**61**は甕型土器底部で平底に近い。いずれも胎土に石英粒を混入し，焼成もよい。内面は指なで，外面は刷毛目調整が見られる。**57**は壺型土器の頸部から胴部上半の資料で，黄灰色を呈し石英の微細粒を混入する。焼成良好で，外面は横方向のヘラ磨きにより調整している。頸胴界に3条の沈線をめぐらし，その下際に斜位の沈線をめぐらしている。**62**〜**69**は壺型土器底部で，いずれも平底ないし平底に近い資料である。石英粒を混入した安定感のある底部で茶褐色ないし灰褐色（65・67），灰白色（67），茶褐色（63・64・66・68）を呈する。内面は指なでの明瞭な

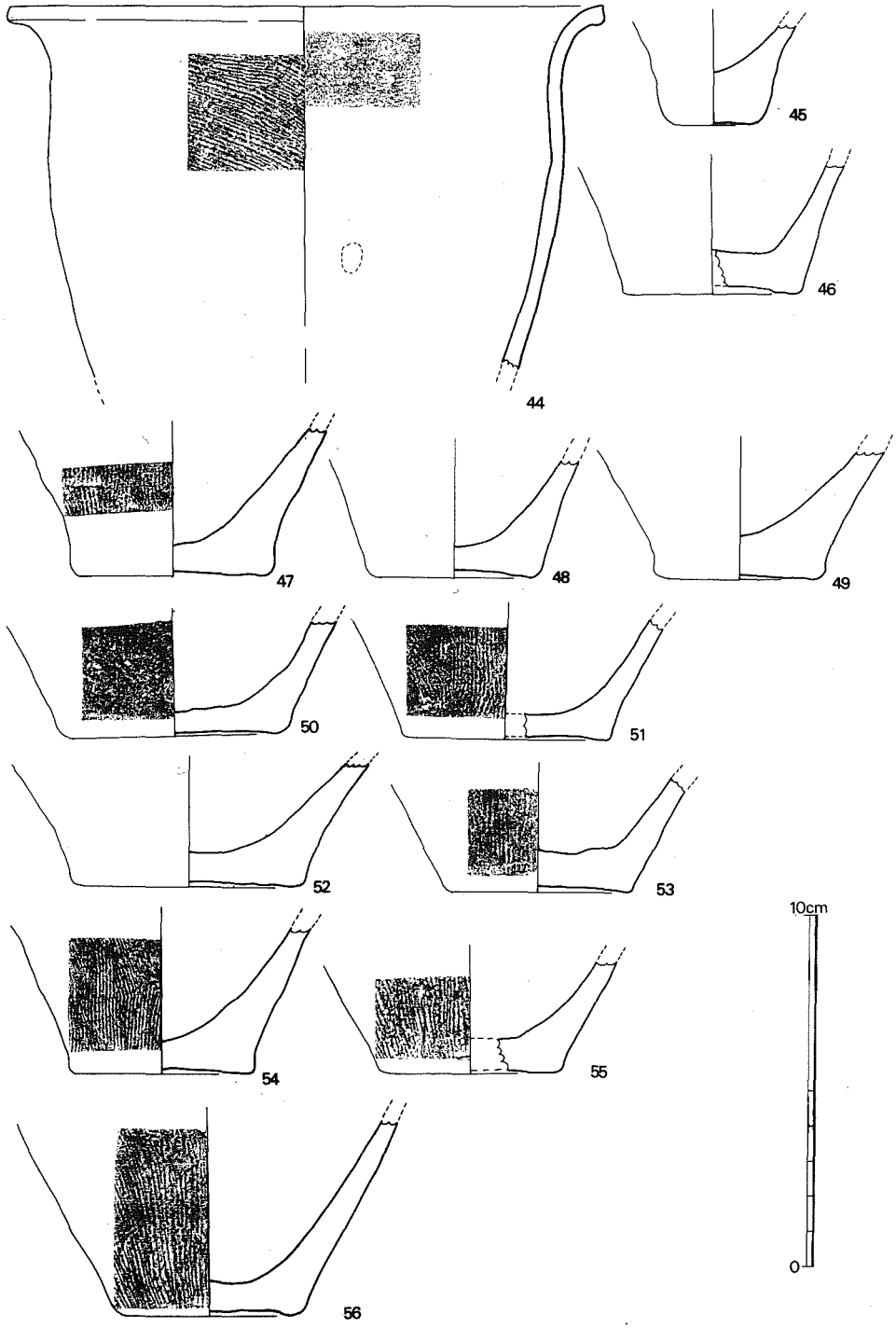


第25図　第420区の土器

もの（62・66～68）があり，外面は64（刷毛目）を除いてヘラ磨きによる調整が見られる。器形は66・69は浅い円盤状になり，前期的要素をもつ。**70**は如意型口縁甕型土器の口縁下際の部分であり，沈線部分が残っている。**71**は黄灰色壺型土器の頸胴界部分である。雲母片を含んだ胎土は精良で焼成良好である。頸胴界に沈線２条が断続する。**72**も頸胴界部分の小片である。灰白色精製で２条の沈線下に木葉文を２条単位の沈線で描く。**73**は茶褐色の壺型土器胴部上半部の資料で外面は丁寧なヘラみがきがあり，細い沈線１条の上際に斜線をつけている。**74**は茶橙色の壺型土器である。やや内傾気味の口縁部を肥厚させ，ややくびれた頸部があり，胴部はゆるく張り出すらしい。内面は指でおさえ，外面は丁寧なヘラ磨きが見える。施文は細い沈線で行われている。口縁直下に片羽文が断続し，以下に３条横位，断続する片羽，頸部に５条横位沈線，胴部上際に羽状文が施されている。口縁部に２孔がある。420区の38，330区の105もこの種壺型土器らしい。**75**は73と同一個体の可能性がある。76は黄灰色の胴部片であるが複数単位の山型沈線と４条の連弧文を貝殻文で描く。**77・79・80**は胴部上半部の壺であるが横位沈線をそれぞれ３条・４条・１条めぐらしている。**78**は沈線間に５条の一連の弧文を連続させる。**81**は頸胴界が画然としない壺型土器片，内面は指なで，外面は丁寧なヘラみがきによる調整を施している。やや乱れた２条横位沈線の下に斜線を連続して描いている。**82**は球型胴部。茶色の器面は内外とも指なでとヘラ磨きによる丁寧な調整が見られるが，４条一連の沈線による弧文はやや乱雑である。**83**は須恵器の小片で，内面はやや乱れた青海波，外面は縄席文のたたきが見られる。

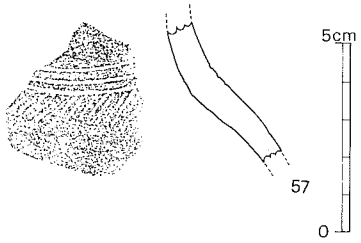
第400区の土器

この区は，里田原遺跡第１次調査地点（県指定史跡）に隣接した地点である。史跡部分は，水門等の遺構があり，時期は弥生中期初頭とされているが，400区の土器は前期的様相が濃く見られる。**84**は極微粒の雲母片を胎土に混じた灰色土器で，やや内傾する口縁部である。内外面とも幅広の板状具で横位の器面調整を施す。**85**は小型壺の口縁部で，胎土焼成とも良好である。ヘラ磨きが丁寧で光沢をおびている。**86**以下は壺型土器の頸部および胴部資料である。86は石英と雲母（もしくは結晶片岩）の極微粒を胎土に混入した異形突帯壺の頸胴界資料である。内外面ともヘラ磨きによる器面調整を施す。幅広の突帯上に２列の刺突点列がある。**88**は小型の壺の胴部であるが山型の沈線の下際に１条と２条の沈線をめぐらし，この間に斜の沈線を連続させる。外面のヘラ磨きは丁寧である。**87**は口縁径25cmの如意型口縁甕であるが沈線が胴部最大径部よりかなり下に下る異例の資料である。**89**は２条の沈線下に５条一連の山型，**90**は粗大な羽状沈線文，**91・93**も類似の沈線文である。**92**は連続する縦位鋸歯文を朱塗りした彩色壺である。**94・95**はやや乱れた弧文を沈線で描く。**96**は貝殻による鋸歯文を施す。**97**は91と同一個体かもしれない。**98**は91と，**99**は96と同一個体の可能性がある。**100**は甕型土器の胴部を利用した面子で5.1，4.5cmの楕円型になる。胎土に石英粒を混入し，内外面とも微細なヘラ磨き調整



第26図　第410区の土器①

が施されている。**101**は石英粒混入の底部で内面指なで，外面は刷毛調整が見られる。壺型土器の底部であろう。



第27図　第410区の土器②

390区の土器

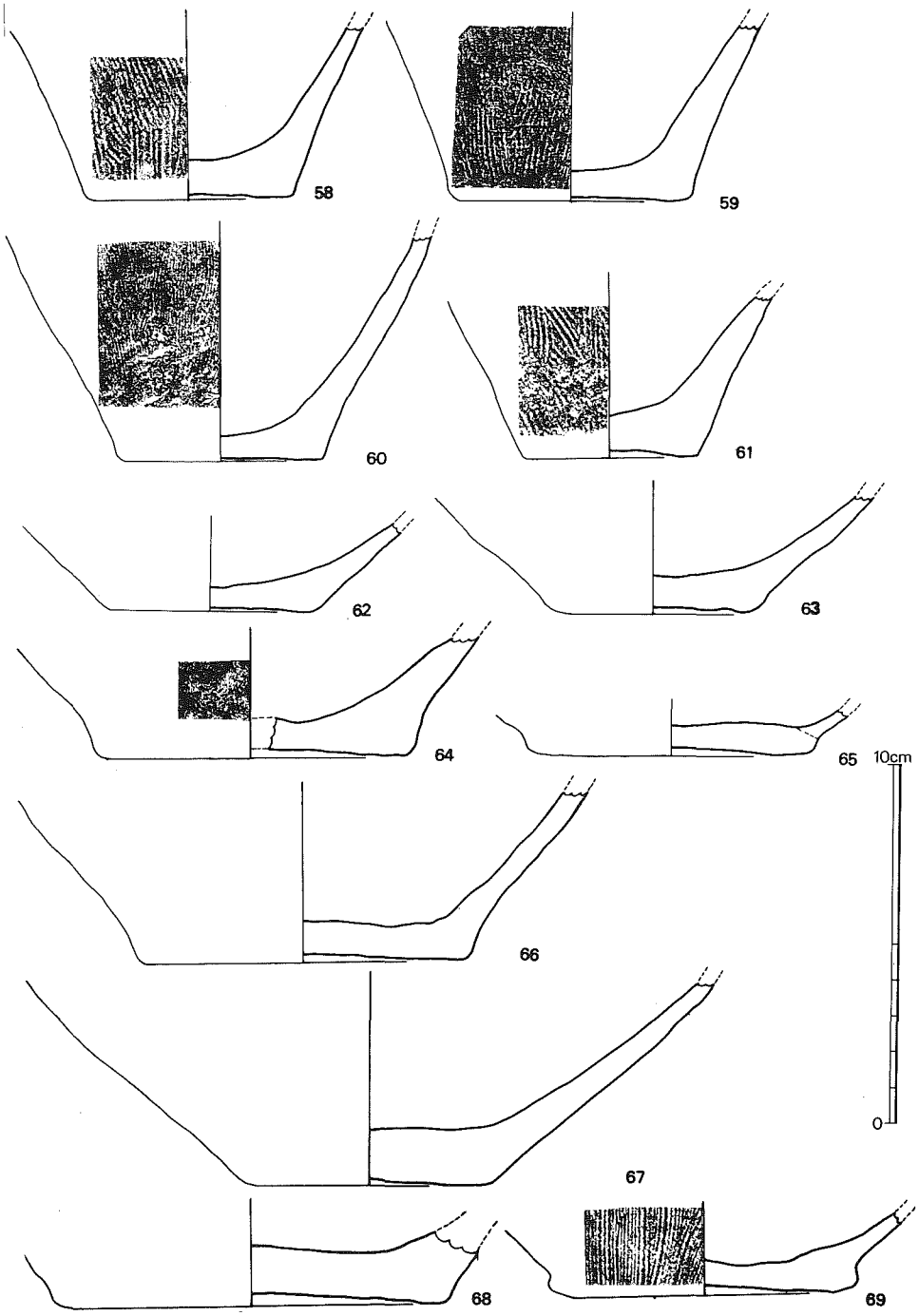
102は胎土に石英と輝石の極微粒を混入し，内外面とも幅広の板状具で器面調整を施した無文土器であるが，突帯文土器の可能性がある。**103**は沈線２条をめぐらす壺型土器。**104**は，如意型口縁をもつ甕で突帯上に刻目をもつ。**105**は410区74類似の資料である。

第380区の土器

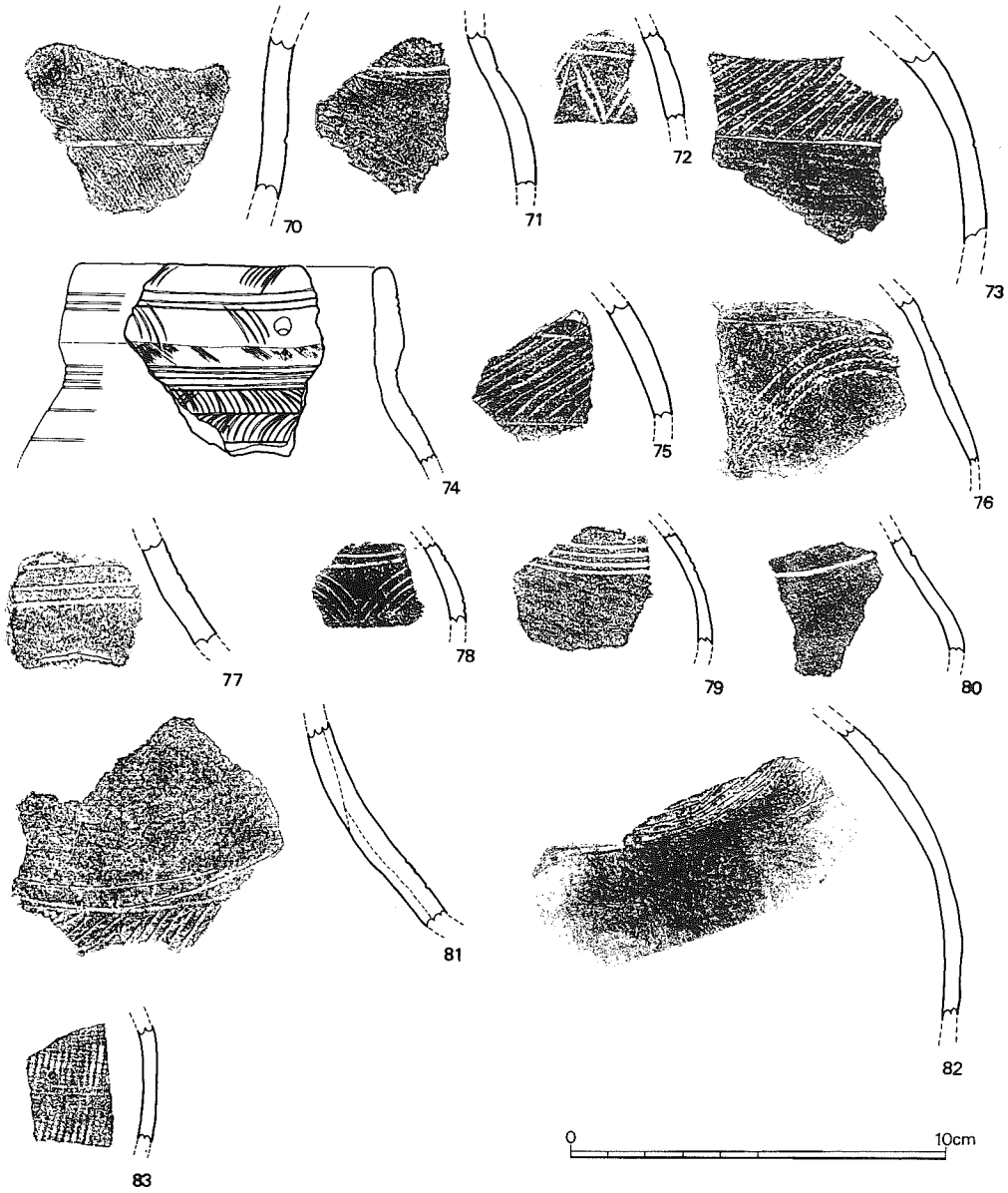
106は如意型口縁甕型土器で突帯上に刻目を有する。**107**～**114**は肉厚の揚げ底を特長とする一群で大方は刷毛目調整を施す。**115**～**119**は平底ないし平底に近い底部で刷毛目調整を施す。**117**～**119**は壺と考えられる。

第370区の土器

120は口縁径17.2cmの小型甕形土器で口縁部は短く折れ，三角型に尖る。内面は指なでと板片状の工具で調整され外面も同様であり，胴部の張りは少い。**121**は口縁が平らになりＬ字状になる甕型土器で口縁径21.4cm，外面口縁下際以下刷毛目が残っている。**122**は口縁下際に突帯を１条めぐらす甕で，口縁はＬ字型に近くなる。内外面ともヘラによる丁寧な調整がある。**123**は口縁径14.3cmの小型鉢で厚手に作られている。口縁部は僅かに外反し，端部は丸くおさめている。内面は指頭で調整し，外面はヘラによる調整痕が残る。胎土には石英と雲母片の混入がある。**124**～**127**は比較的大型の甕である。**124**は口縁部が折れ，上部は中高になり，胴部は比較的張り出している。口縁部に刻みをつけ，突帯は断面三角形を呈する。胎土に石英が混入され，調整は内外面とも幅広の板状具によっている。口縁径は35.8cmを計る。**127**は類似の資料であるが口縁部がやや平らになっている。**125**・**126**は口縁部がＬ字状に近くなるが，上面は丸い。126には沈線が２条めぐっている。**128**は精製壺の口縁部で精良な胎土に極微粒の石英が混る。内外面とも丁寧に研磨され，外面に極細の沈線群を全面に配している。**129**は強く外反する壺で，口縁部はわずかに肥厚し，尖り気味におさめている。胎土は良質で，内面は指なで，外面は幅広の板状具で調整されている。口縁径18.3cm。**130**は灰白色壺型土器の頸胴部である。胎土に金雲母片を混入し，固く焼きしまっている。内面は指頭で，外面はヘラにより丁寧に磨かれている。頸胴界に刻目のある突帯をめぐらし，胴部に２条・３条・２条の沈線をめぐらせ，この間に縦位鋸歯文をめぐらす。施文は貝殻によっている。**134**の壺は器表が荒れており器面調整は判然としないが，頸胴界に３条の浅い沈線をめぐらしている。**136**の壺は貝殻羽状文を有する。**131**・**133**・



第28図　第410区の土器③

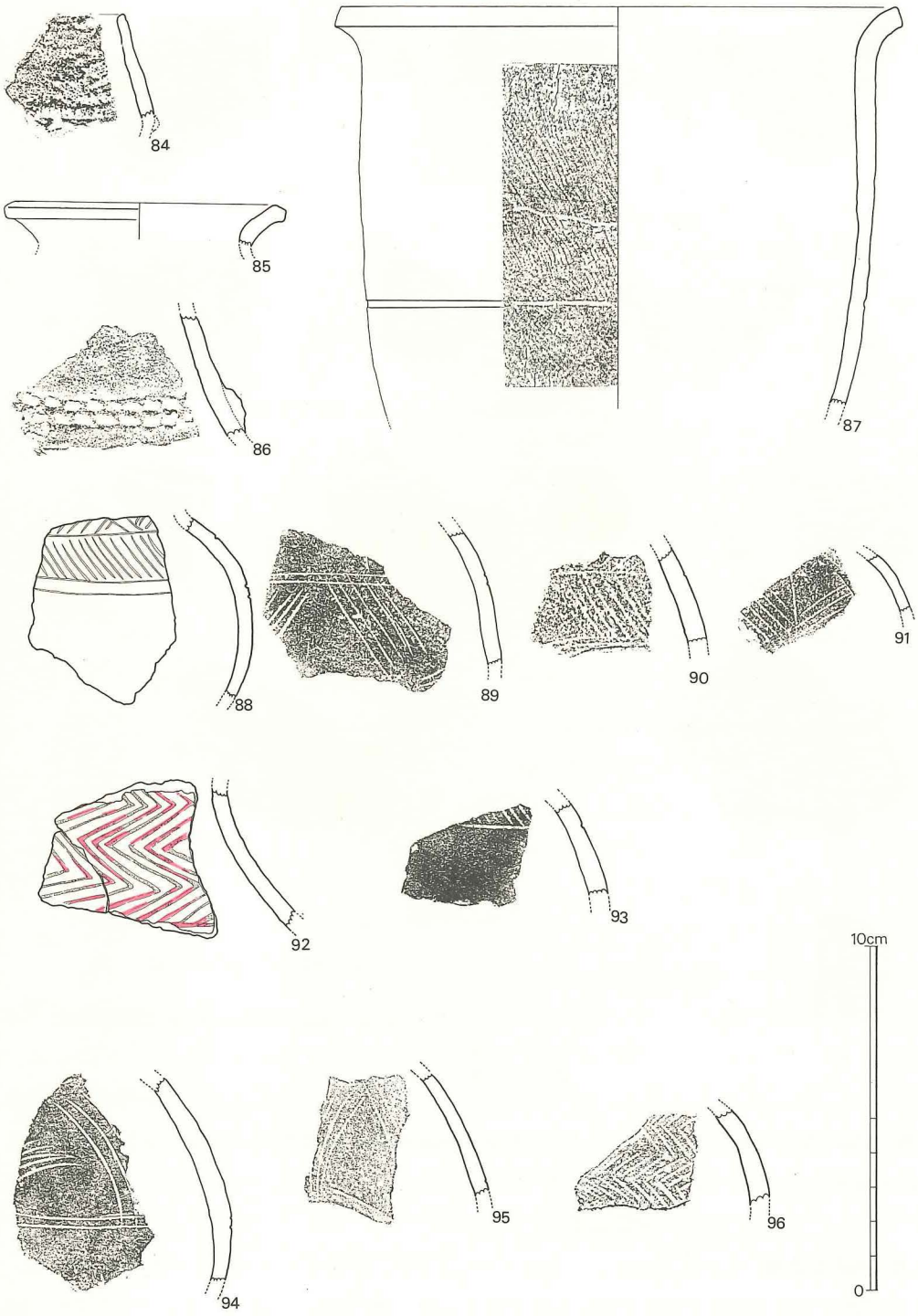


第29図　第410区の土器④

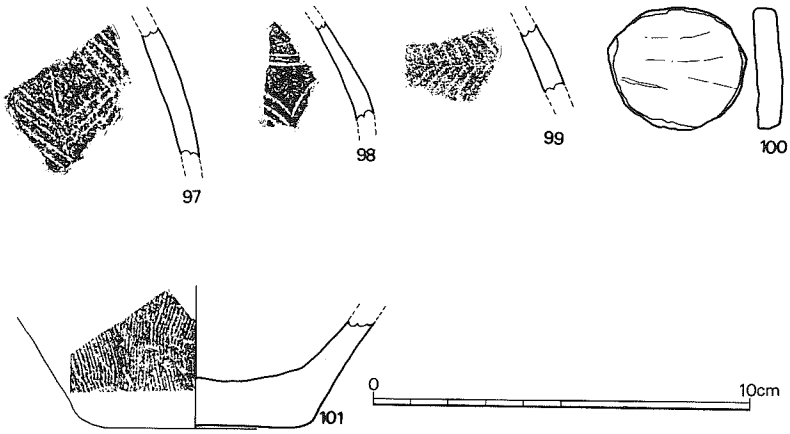
135・136は甕型土器である。134・135は如意型口縁の甕であろう。**137**～**141**は上げ底の底部，**142・143**は壺型土器であろう。

第360区の土器

この区出土の土器は比較的大型のものが多く，甕・壺（145）がある。なかでも147は口縁径が40cmを計る資料である。口縁部が強く外側に折れ，上方が平らになり，胴部の張りがやや強

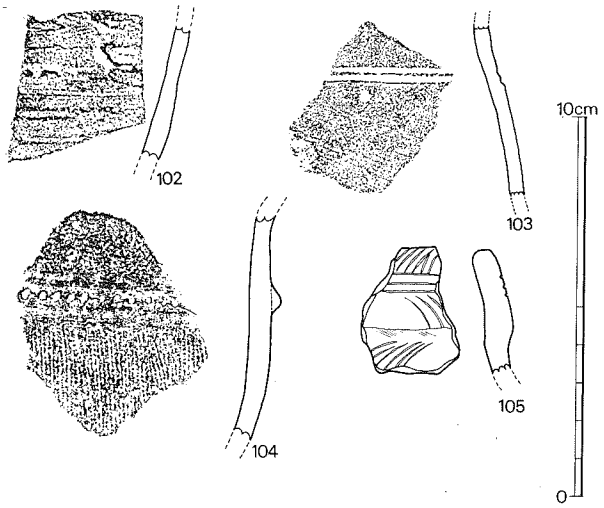


第30図　第400区の土器①

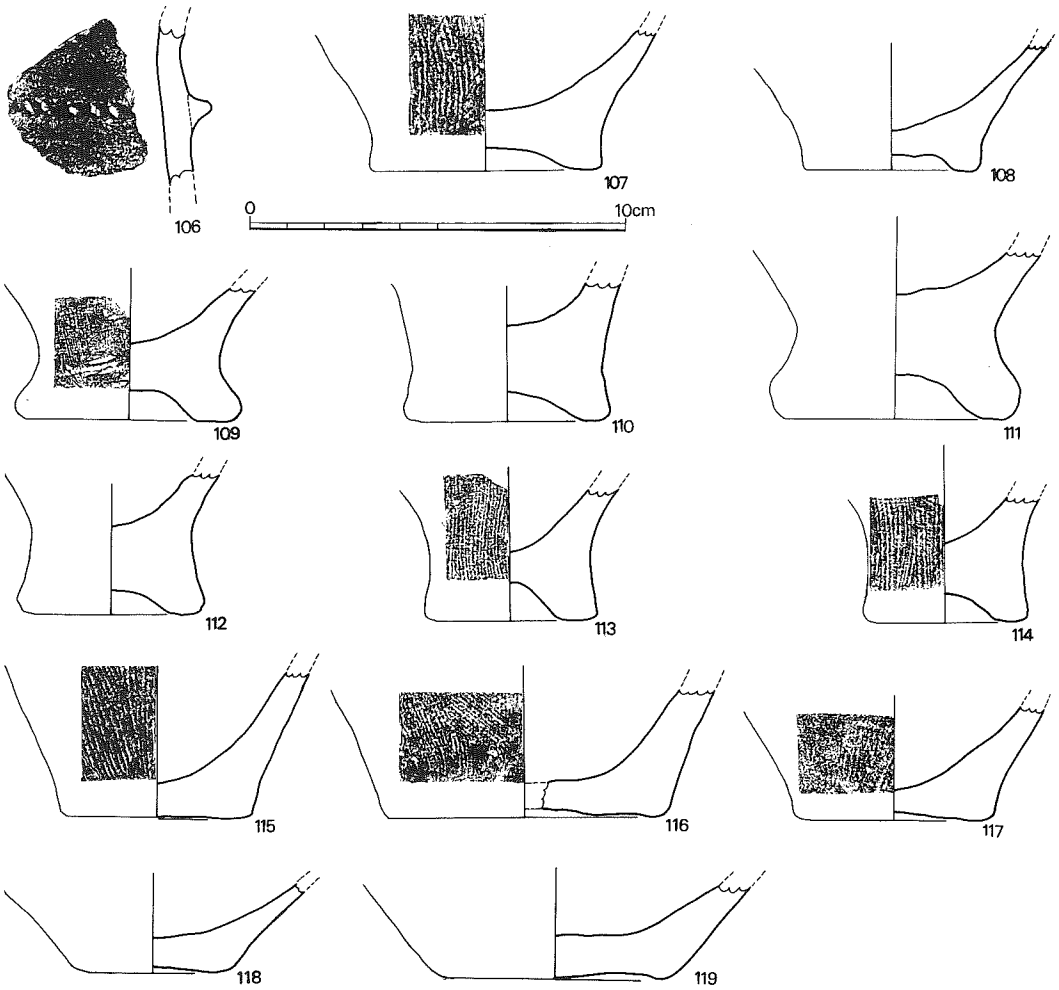


第31図　第400区の土器②

い。**144・146・148**は各1条，**147**は2条の突帯をぐらし，147は口縁と口縁下際の突帯に刻目を有する。これらは外面を刷毛目調整にしている。**145**は，有段口縁の壺で，如意型口縁の内側に粘土を貼り，内側に段を残している。外側の肥厚は消え，段も消えている。口縁下際に断面三角の突帯がある。内面に横位よる刷毛目調整痕がある。底部が多量に出土しているが，大きく上げ底になるものが多いが155～159は壺型土器であろう。上げ底の甕型土器底部は中期中葉あたりに時期が下ると考えられる。**180**は貝殻羽状文壺型土器胴部，**181**は頸胴界に4条の沈線をめぐらす壺型土器である。**182**～**184**は小型の甕型土器で底部は欠失している。182は口縁径21.0，183は16.0，184は23.6cmを計る。182・184は口縁部が強く折れ，183はゆるく折れる。182・184はヘラ，183は刷毛目により器面は調整されている。**186**は頸胴界に突帯を1条めぐらす厚手の甕型土器で，口縁は肥厚し，鋤先状になるが，口縁上面は丸みをおびている。口縁部には貝殻による押捺があり，頸部には縦方向の暗文がならぶ。胎土は精良で雲母片微細粒が混入され，内面は横位のヘラ磨きが見られる。**185・187・188**は2条の突帯に刻目をもつ甕型土器で外面はいずれも刷毛目調整が見られる。**189**～**191**は壺型土器で，複数の沈線をめぐらしている。



第32図　第390区の土器



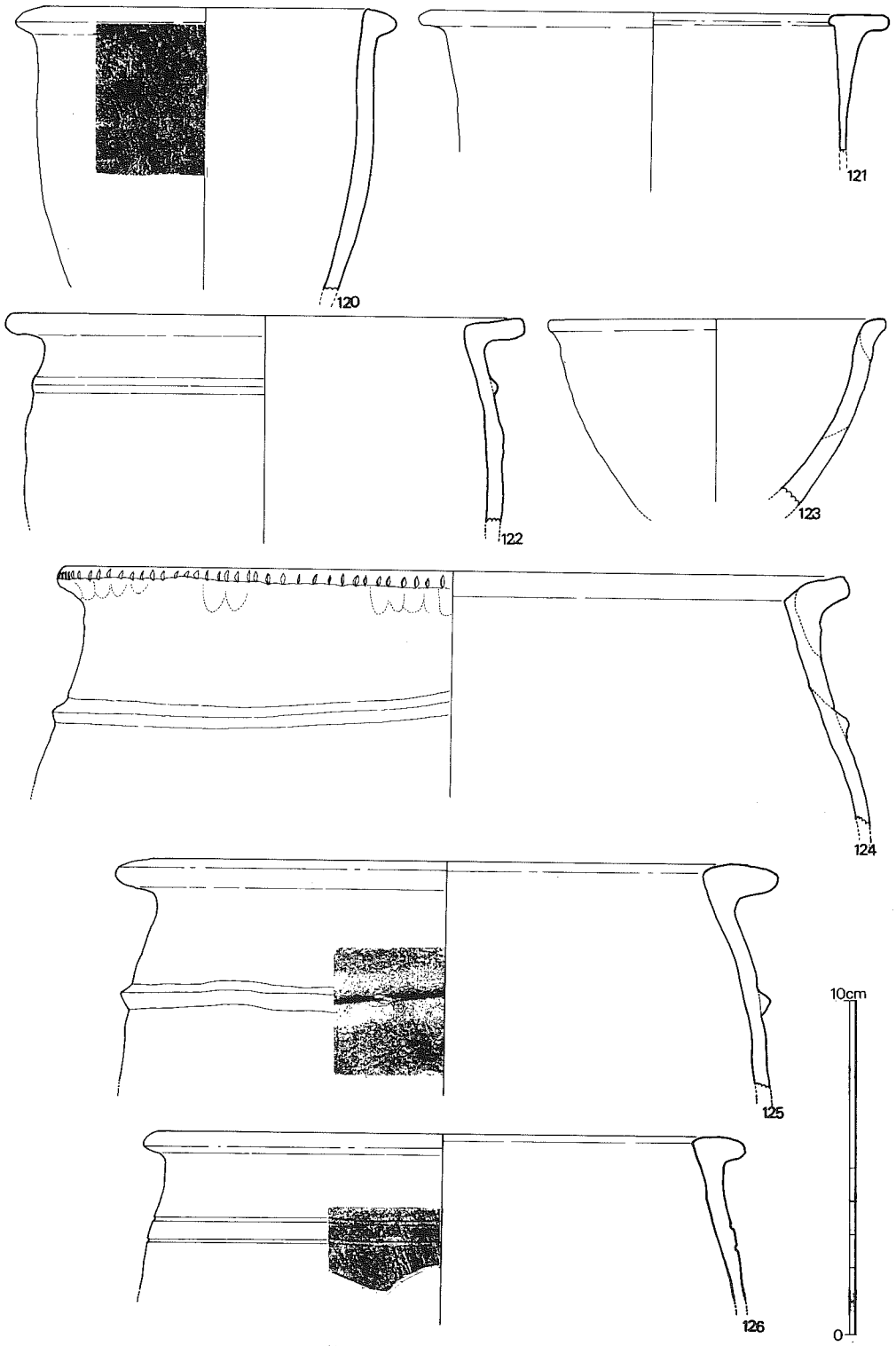
第33図　第380区の土器

第350区の土器

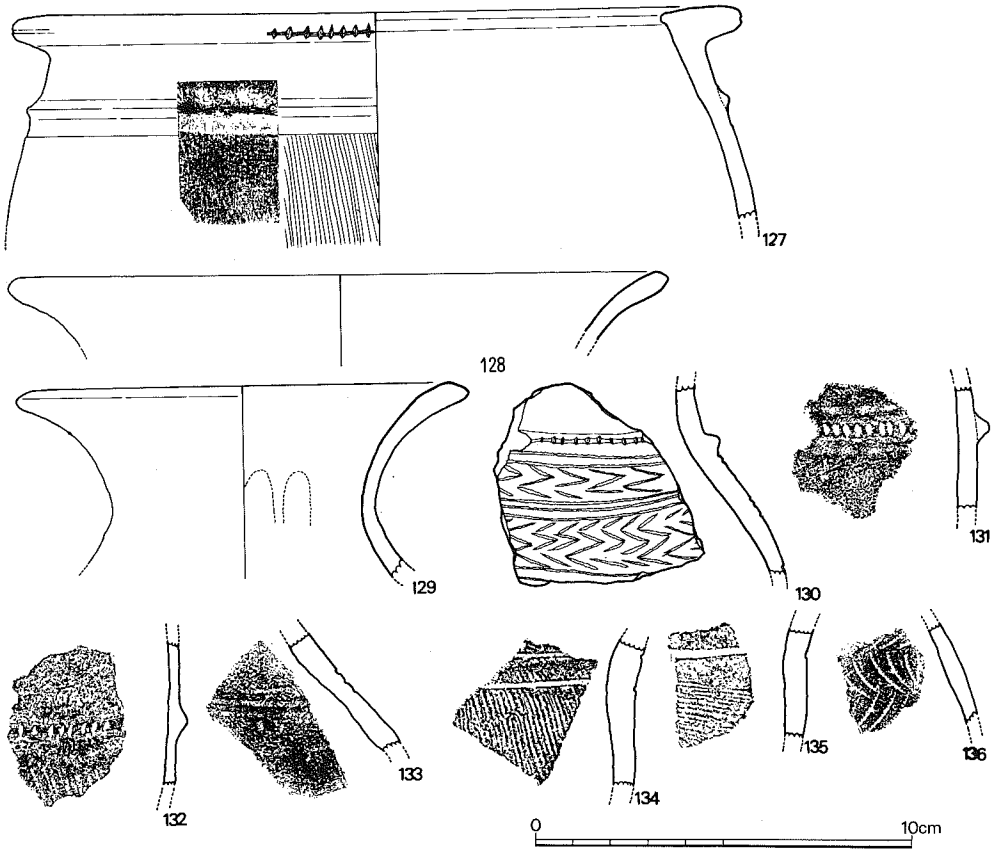
192は厚手の壺型土器で，口縁部は欠損している。内面は横方向のヘラ磨きがあり，頸部外面には縦方向の暗文が並ぶ。**193**は黄灰色壺型土器で，口縁部を欠いているが，外反するらしい。頸胴界に突帯がめぐり，胴部上際に貝殻羽状文がめぐる。内面は指なで，外面はヘラ磨きによる調整がある。**194・195**は如意型口縁の甕，**196**～**198**は壺型土器，196・197は２条の沈線，198は羽状文をもつ。**199**～**201**は上げ底の底部で厚く，刷毛目調整がある。**202**～**203**は平底に近い。**204**は口縁から頸部におよぶ須恵器である。

第330区の土器

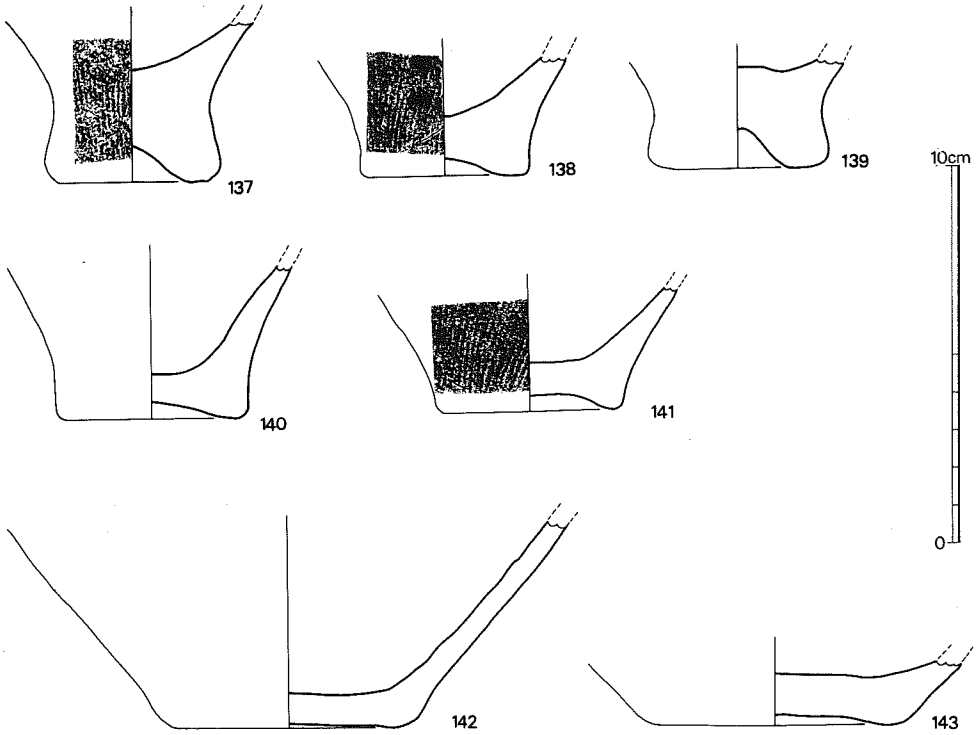
205は口縁部径28.7cm，**206**は18.3cmの甕型土器。口縁は外側におれ，上面は205が曲面とな



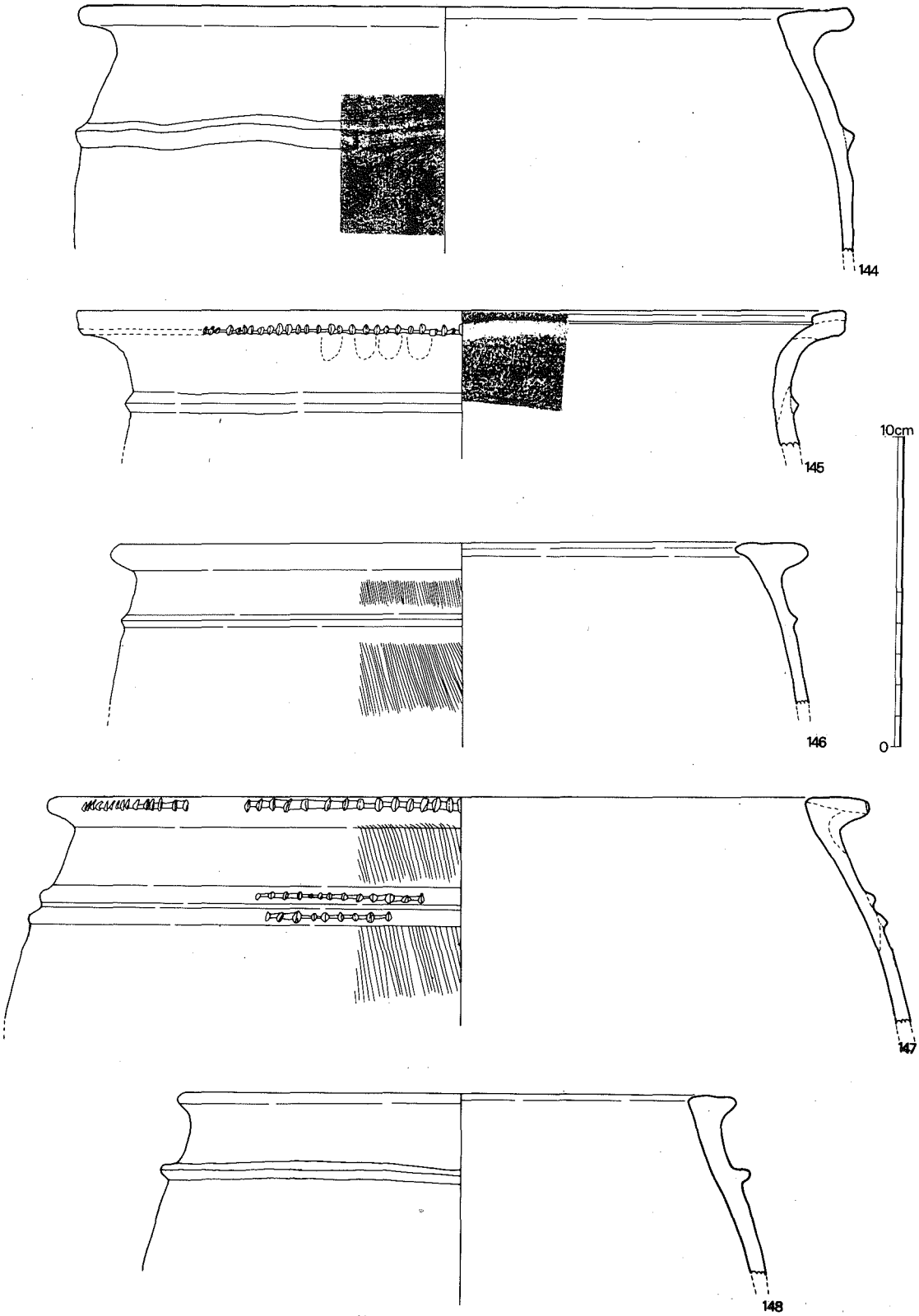
第34図　第370区の土器①



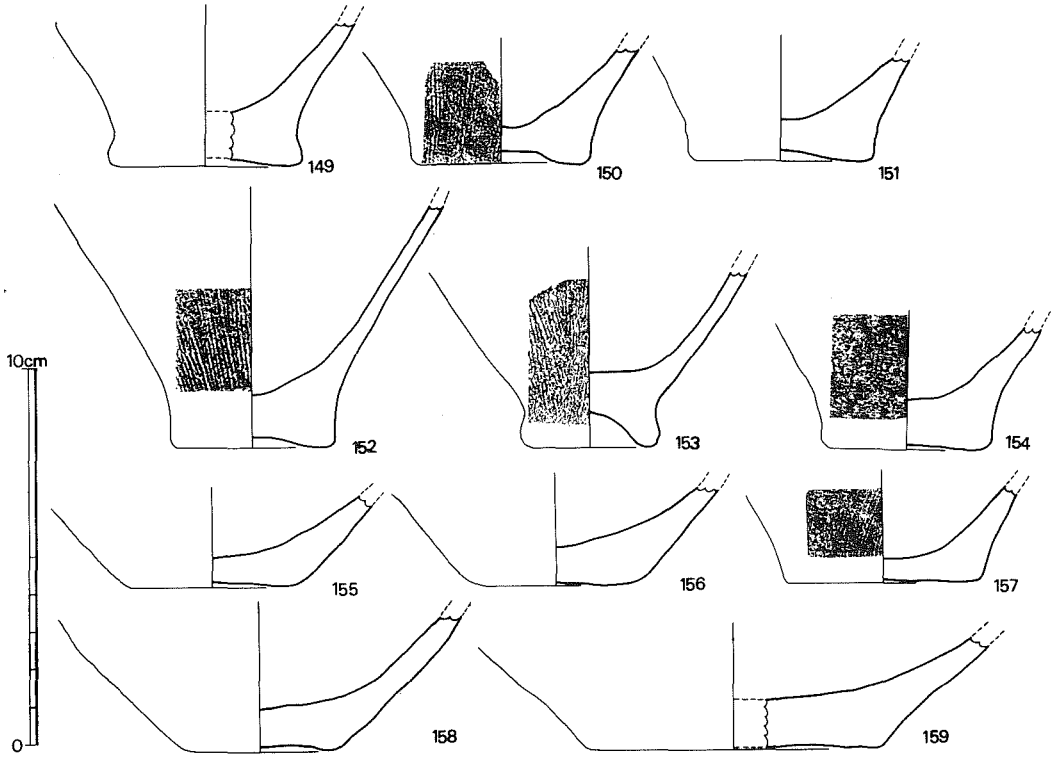
第35図　第370区の土器②



第36図　第370区の土器③



第37図　第360区の土器①



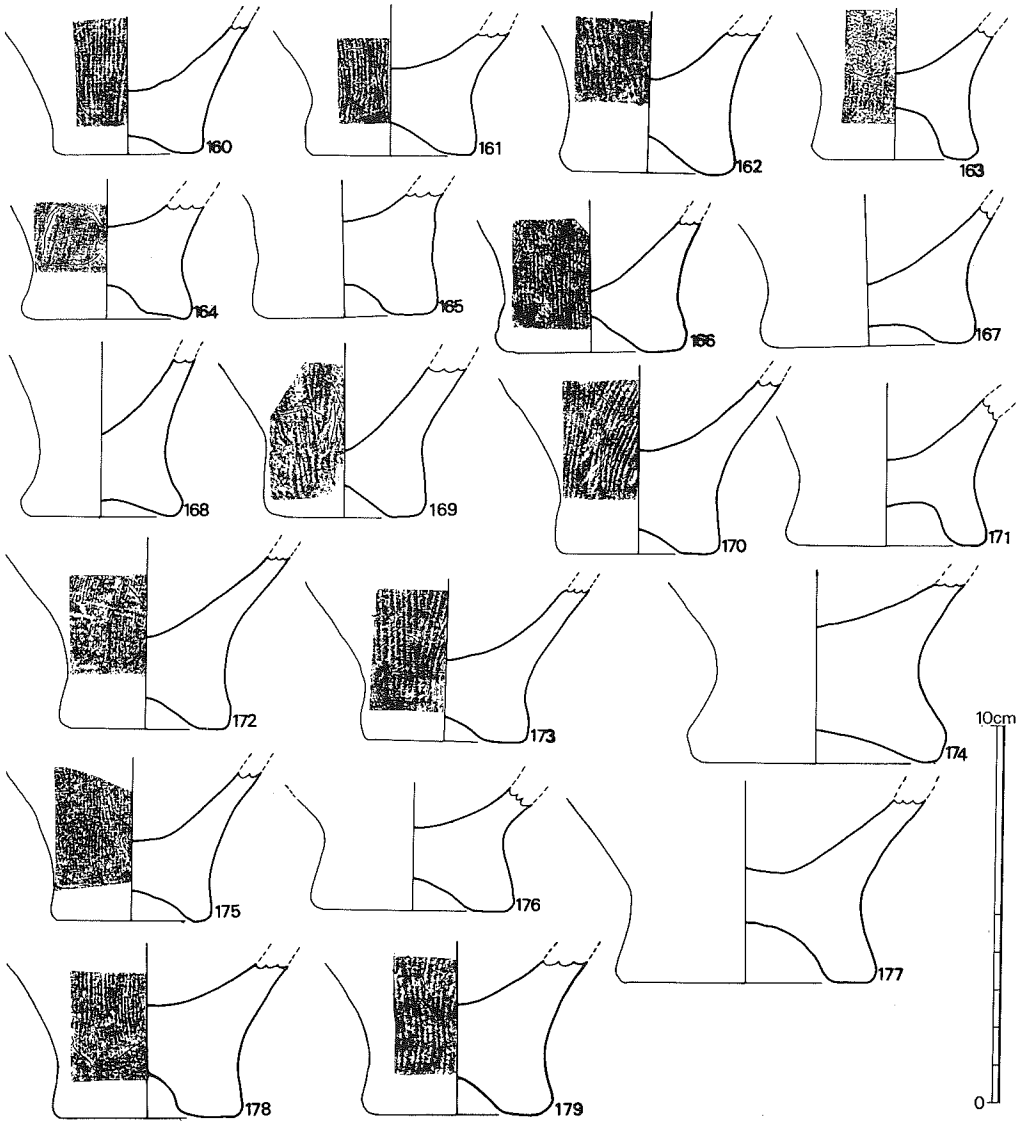
第38図　第360区の土器②

り，206はやや凹こむ。両者とも刷毛目調整がある。**207**は壺の胴部で，３条の沈線の上際に２条単位縦２列の沈線区画帯があり，両者の間に斜位の短い沈線がある。縦位沈線で区画される両側には貝殻羽状文がある。**208**は口縁内側がとがり，上面がややへこんだ壺型土器である。頸部はやや外反気味になる。頸胴界に１条の沈線がめぐり，胴部には強く折れて連る。内外面ともヘラ磨きで調整され，胎土は精良である。**209**～**210**は，やや上げ底気味の底部で刷毛調整がある。

第320区の土器

211・213・214は甕型土器で，口縁径は211が30.8cm，213は16.8cm，214は24.0cmを計る。211は口縁下際に丸みのある突帯が２条めぐり，213は沈線４条が如意形口縁下際にめぐっている。**212**は２条の沈線をめぐらす壺の小片，**215**は上げ底の底部である。

以上が各区出土の土器であるが，未掲載資料を含めれば１点ながら縄文中期の資料もあり，須恵器も稀少ながら出土している。しかしながら主体をなすのは弥生時代前～中期の資料であり，総数に近い量を占めており，別項の遺構遺物が弥生時代に属することを示している。これらの弥生式土器は前期から中期に及んでいる。調査地が，里川の旧河道であるため，層位的に

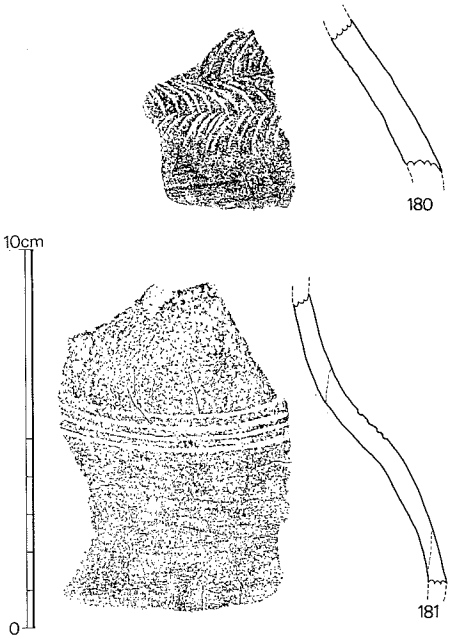


第39図　第360区の土器③

把握しにくい憾みはあるが，土器から旧里川の遺構を眺めてみたい。

器種として，甕・壺・鉢がある。

甕　前期に属するものが多く，如意形口縁のものや，断面三角の突帯を有するものなどがある。如意形口縁土器の口縁径は20～30cm程度で25cm前後のものが多い。福岡県春日市門田遺跡では，前期末甕型土器をA～Gの7タイプに分けている[註1]。Aタイプは如意形口縁をもつもので刻目を有するa類と有しないb類。Bタイプは如意形口縁の口縁部と口縁下に三角突帯を有するもので，口縁端部と突帯に刻目を有するa類，もたないb類。Cタイプは，口縁端部と下際の



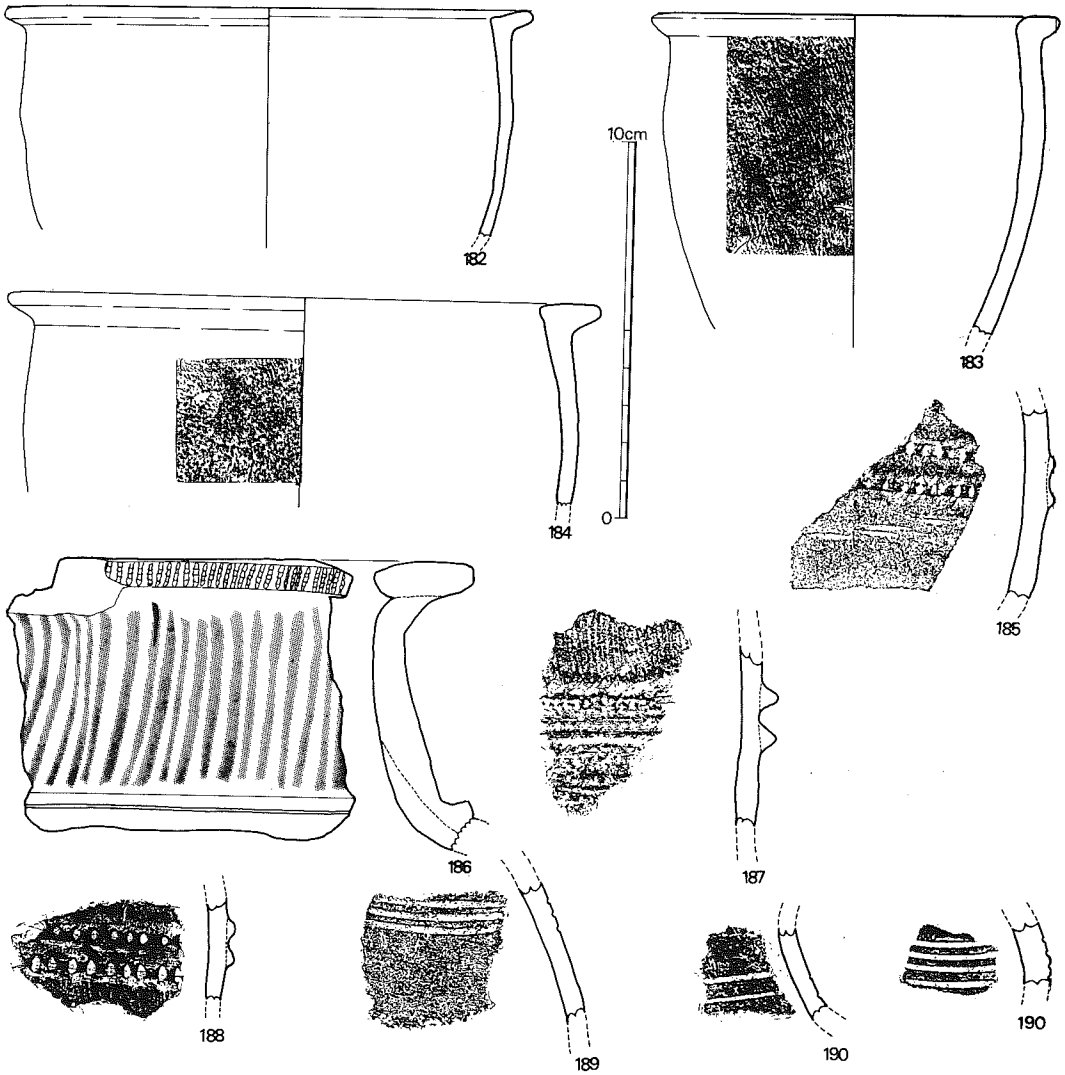
第40図　第360区の土器④

三角突帯を有し刻目を付すもの。Dタイプは口縁部と口縁下際に1条の沈線をもつもの。Eタイプは如意形口縁をもち，口縁下を肥厚させて段をつけるもの。Fタイプは直行口縁部を有するもの。Gタイプは直行口縁の下に把手を有するもの，として7タイプ9類に細分している。里田原23資料をこの分類に従って分ければ，**37・44**はＡａ類，**6**がＣ類に，**18・29**～**32・87**はＤ類に属しよう，但し，32は口縁に刻目を，87は口縁のはるか下際に沈線を有するので，門田分類と多少ずれがあり，佐賀県唐津市柏崎貝塚[註2]（貝層）資料の分類で「甕１」の資料群に類似資料がある。

柏崎では，貝層出土の甕を３分類して，１．如意形口縁をなすもの，２．断面三角形の貼付口縁をなすもの，３．Ｌ字形口縁をなすもの，としている。さらに如意形口縁を，（１）刻目と沈線からなるもの，（２）刻目だけのもの，（３）沈線だけのもの，（４）なにもないもの，としている。この分類でいえば，里田原例は**32**が１－（１）類，**18・29**～**31・87**が１－（３類），37・44が１－（４）類ということになろう。

一方，里田原本報土器の**6**は直口口縁甕の口縁と口縁下方にそれぞれ１条・２条の三角突帯を貼付けた資料であり，前述門田遺跡で甕Ｃ類に近い特長を備えている。同遺跡35号袋状竪穴，46袋状竪穴，12号住居跡において，口縁とその下方の三角突帯に刻みを有する例が見られるが，14号竪穴では如意形口縁下方に２条の三角突帯を有する例があり，里田原例はこれらに近いものであろう。里田原例で，やや胴部の張り出しが現れるものの中に，①三角口縁が断面三角形のままに短くなり，上面が平坦化するもの（**149**），やや角張るもの（**124**），短く丸味をおびるもの（**126**），口縁上面が長めになり丸味をおびるもの（**125**～**127・148・212**），口縁上部が平坦もしくは，やや中凹みになるもの（**122・145**）が見られるが，前期末～中期まで下降するものであろう。三角突帯を失い，口縁部上面が丸みをおびる**120・184**や，より平坦化のすすんだ**183・207**等があるが，中期前半まで下るものであろう。

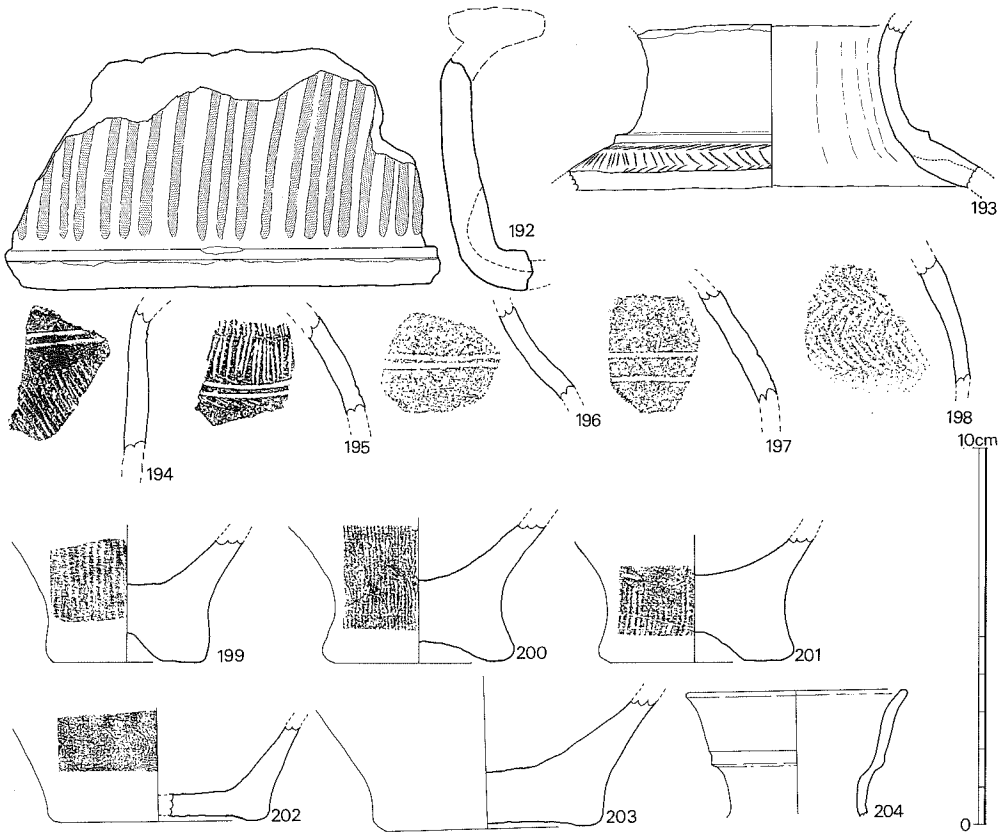
壺の種類　今次里田原遺跡出土の壺型土器は，器形・時期・文様等各種のものがあるが，大小の別が明確に測定ないし復原可能のものは少ない。従って，大小の別は一応おき，器形によって次のごとく分類しておく。Ａ類：口縁部が外反ないし屈折し，球形胴ないし扁球形のもの，Ｂ類：頸胴界に突帯を有するもの，Ｃ類いわゆる有段口縁のもの，Ｄ類：無頸壺，Ｅ類：無頸



第41図　第360区の土器⑤

壺にやや内湾しながら直立気味に口縁部が立上り，端部をまるくおさめるもの，F類：鋤先口縁壺。

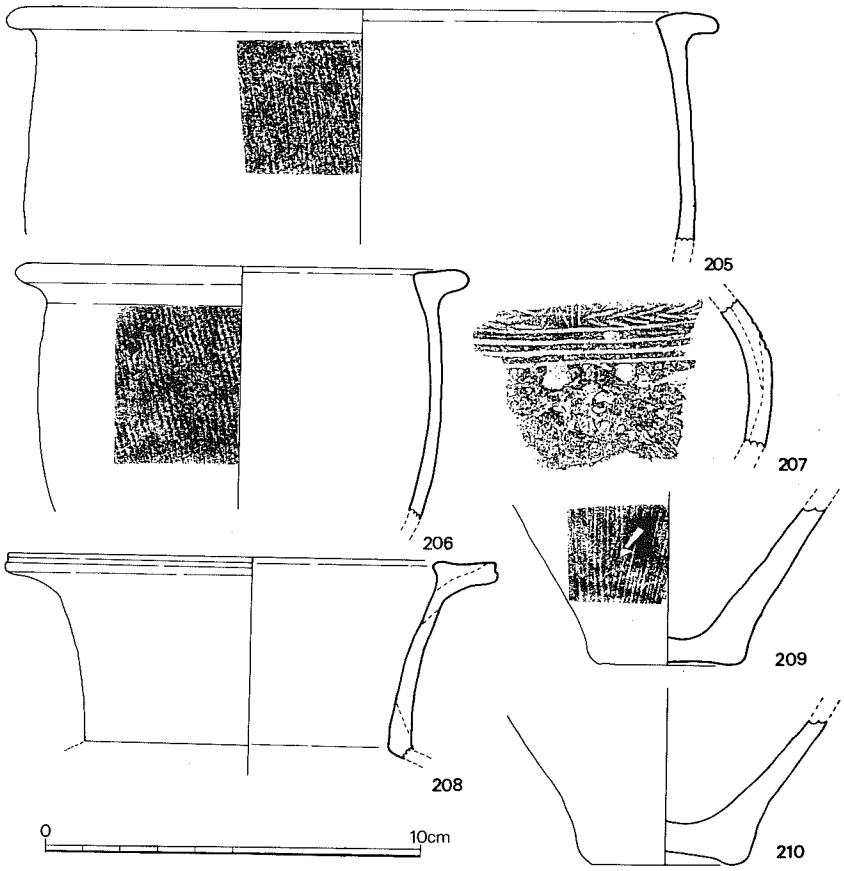
またA～E類は，次のとおり細分することができる。A類，**36**（おそらく**40**と同一個体）にみるごとく，口縁部が肥厚して折れ，頸胴界が明瞭なもの（a）。（b）頸胴界が明確でなく，胴部が腰高になるもの（**4**，**25**）。（c）胴部がやや低く，頸部が直立気味になるもの（**7**）。B類，（a）比較的小形で口縁部が外反するもの（**131**・**195**），（b）厚手で口縁部が鋤先状になるもの（**193**・**194**）。C類（a）如意形口縁を肥厚させ内外に段がつくもの（**35**），（b）段が内側のみ残り，口縁と口縁下に三角突帯がめぐるもの（**146**）。D類（**8**）。E類異形口縁壺（**74**）。F類（**209**）である。



第42図　第350区の土器

沈線文様土器の種類　頸胴界から胴部上半にかけて細い沈線の文様で飾るものが各種ある。器面はヘラ磨きによる精製土器で，貝殻による文様（**7・81・96・99・137・181・199**）と鋭いヘラによるものがあり，後者によるものが圧倒的に多い。器面をめぐる沈線との組み合せでバラエティーがあり，a沈線のみ（**82・182**），b斜線列文（**57・73・81・88・90・93**他），c斜格子文（**25**），d羽状文（**81・99・96・137・181・199**），e連弧文（**42・76・78・94・95・98**），f山形文（**89・97**），g鋸歯文（**7・25**）の他，異種復合例もある。これらは小片のため明確でないが，板付II式の時期を下ることはあるまい。

彩朱土器　頸胴界から胴部上半部にかけて，朱色の顔料塗布により施文されたものが少例ある。**5・34・92**がそれである。頸胴界の沈線の上に斜線を，以下に6条横走させ，更にその下際に7条単位の山形文を連続させている。このような彩朱施文は菜畑遺跡8層の「彩文壺」に見られるもので，弥生前期壺の朱彩に共通している[註3]。



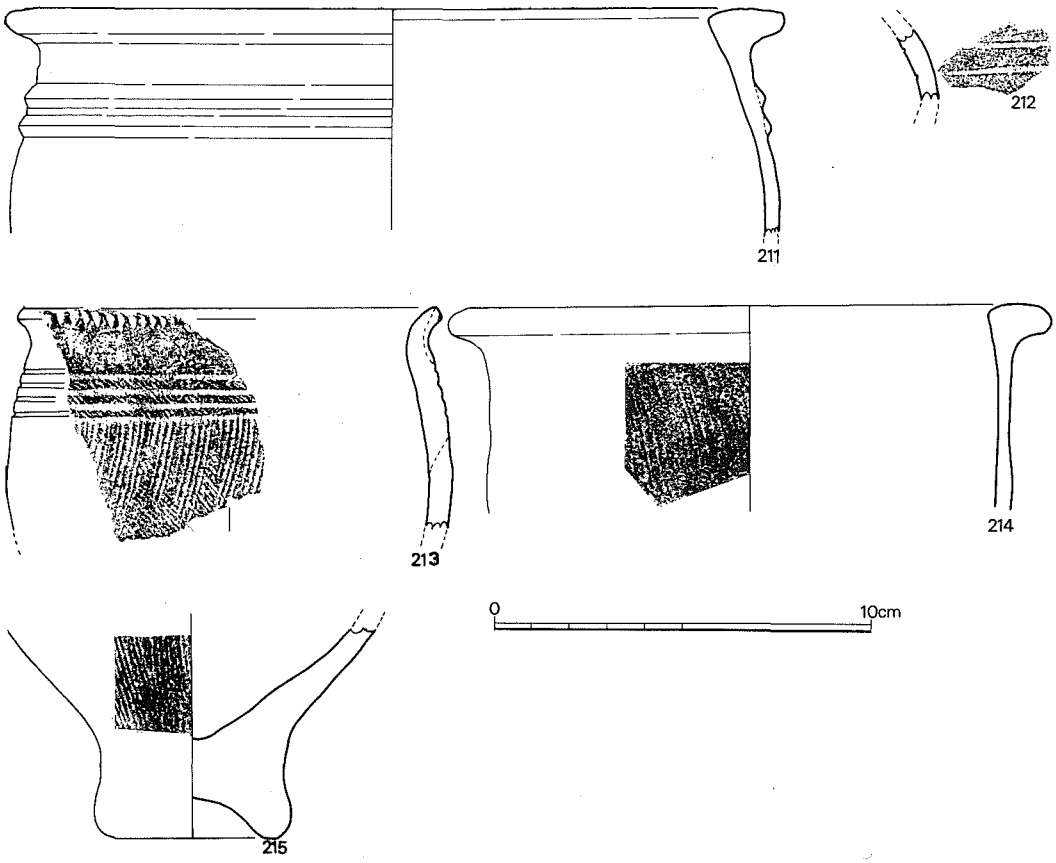
第43図　第330区の土器

鉢　123　1点のみであるが，口縁部が僅かに「く」の字に外反するもので，門田遺跡[註4] 1号・7号・14号袋状竪穴出土例に類似例がある。平底になるらしい。

無頸壺　126　1点のみで，口縁部が僅かな内傾を見せる小型品で，2孔を有する。福岡県筑紫野市剣塚遺跡[註5]第34号（羽状文）・同36号袋状竪穴，福岡県今川遺跡[註6] V字溝下・中層（連弧文）に類例があるが，数孔を穿つもので，用途が注目される。

異形口縁壺　38・39・74・105は元来は同一個体らしい。胴部以下の形状は不明であるが，器周をめぐる沈線群と羽状文の組合せで飾る技法は，遠賀流域や豊前北部・関門の土器に共通するもので，A類と同じく弥生前期後半に位置づけて大過ないと考えられる。

以上，里田原遺跡23次土器を概観してみると，玄界灘沿岸域の西辺における弥生時代前期後半から終末，さらに中期初頭にわたる資料が大半を占めることが知られる。弥生前期から中期における五島列島の様相は，列島最北の宇久島には板付I式期に，北から二番目の小値賀島，



第44図　第320区の土器

三番目の中通島には前期後半（板付II a 期）に，北松浦半島→五島列島北部のルートで文化が及んだことが知られ[註7]，その後の新たな資料によって，列島最南端の福江島にまでこの文化が及んでいることが知られるに至った[註8]。肥前西部と五島列島を含めた前期から中期中葉に至る壺型土器による土器棺と副葬土器の推移についても精細にたどれるようになった[註9]。これらの推移は，北松浦半島→五島列島という文化伝播の中に特にローカルな要素を認めることはできない。今次里田原遺跡出土土器の中には，板付Ｉ式小壺や有段口縁の壺，貝殻羽状文の多量出土は，関門から五島列島に至る玄界灘沿岸域の映像を補強するものである。

註１　井上裕弘他「弥生時代の遺構と遺物」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第７集上巻　福岡県教育委員会1978

註２　下条信行「柏崎貝塚（２）土器」『末盧国』上巻六興出版1982

註３　中島直幸「縄文時代晩期後半～弥生時代の遺物」『菜畑』唐津市1982

註４　註１に同じ

註５　中間研志「袋状竪穴群」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－ＸＸＩＶ－下巻福岡県教育委員会1978

註６　伊崎俊秋「弥生時代の遺構と遺物」『今川遺跡』津屋崎町教育委員会1981

註７　小田富士雄『五島列島の弥生文化総設篇』長崎大学医学部解剖学第二教室1970

註８　安楽勉・正林護『白浜貝塚』福江市教育委員会1980

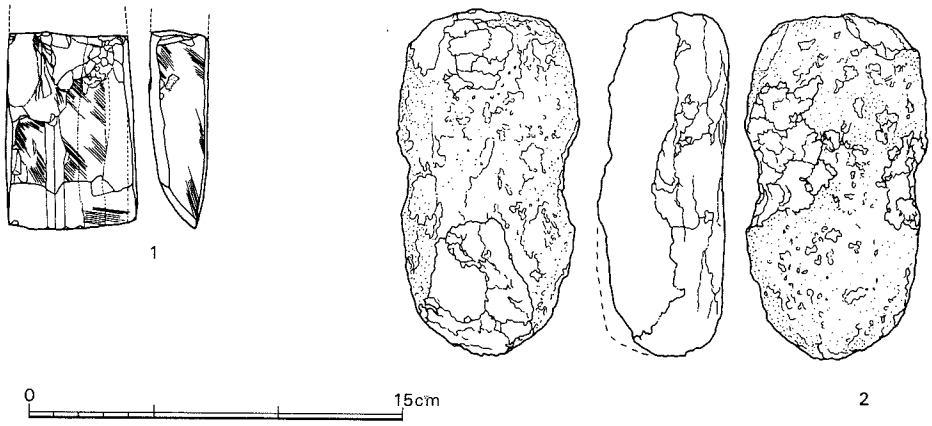
註９　宮崎貴夫他『宇久松原遺跡』長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ　長崎県教育委員会1983

２．石　　器

総数112点を挿図，図版に掲載した。磨製石斧，方柱状片刃石器類，石包丁，磨製石剣，磨製石鏃，精粗砥石，敲石，磨石，石錘，打製石鏃（黒曜石製），黒曜石剝片等がある。

片刃石斧類に使用された青白色ないし黒灰色の石材は摂理面を斜めに研磨すると，美麗な縞目が現れる硬質の砂岩および頁岩であり，対馬の上県郡上対馬や，下県郡厳原町等に原産する石材が使用されており，この材は縄文時代の石斧等に伝統的に使用されている。また対馬と九州の間にある長崎県壱岐島にもこの材は搬入されているところから，石材移動のルートはかなり古く確立されていたらしい。一方，打製石鏃等に使用される黒曜石は，東隣の佐賀県伊万里市腰岳の石材が搬入されている。砥石の中で仕上用と考えられる青灰色の緻密な硬質砂岩が利用されているが，壱岐島（郡）の北西辺勝本町で産する石材である可能性が強い。また磨製石斧にしばしば用いられる緑斑のある蛇文岩は，長崎県西彼杵郡（特に西彼杵半島西岸地区）産の石材が搬入されている。これらの石材の搬入と移動を考えると，北からと東からのルートを通る石材が，南方向（西彼杵半島）からの搬入量よりも量が多いことに気づく。

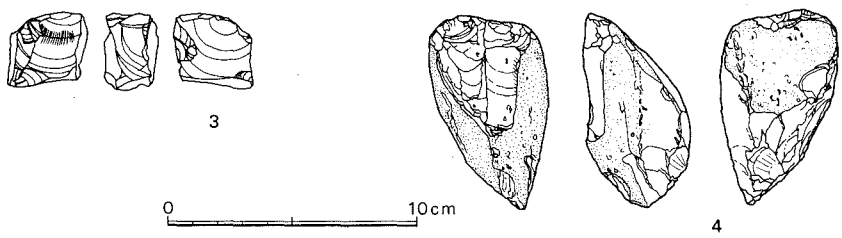
以下に各調査区毎に石器の現状を述べる。



第45図　第530区の石器

第530区出土の石器

1 は，淡青灰色砂岩製扁平磨製片刃石斧。図の上半部折損。表裏，両側辺とも丁寧に研磨され，縞目が美しい。使用による刃こぼれがある。現存上下長8.0m，最大幅5.3cm，最大厚2.5cm，**2** は石錘である。短軸に打欠による紐かけ部がある。そして，左図をみてもわかる様に，石錘自体の厚みをとる為のものか，上下両端に打ち欠きがある。上下長13.8cm，左右幅7.3cm，最大厚5.2cm。



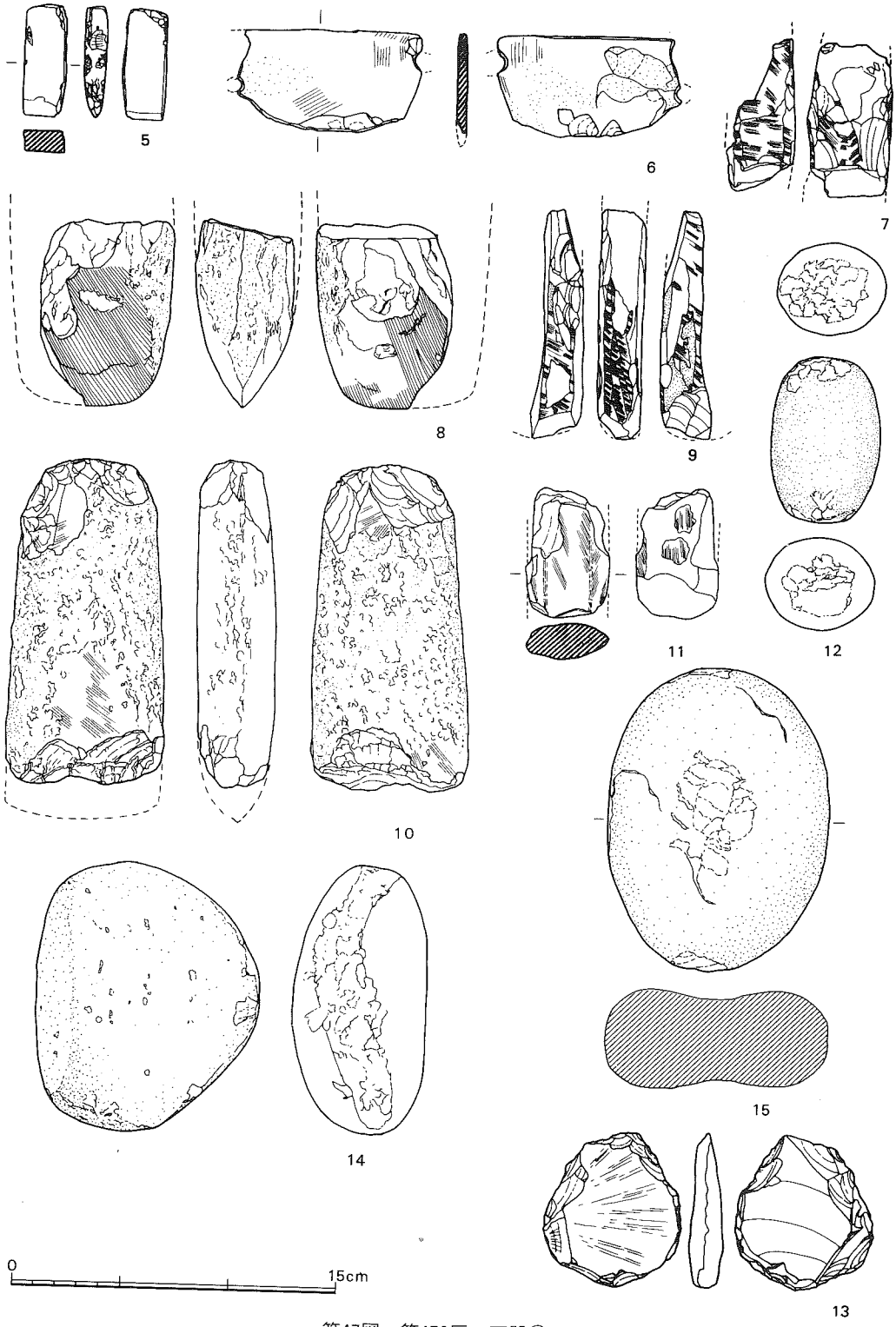
第46図　第510区の石器

510区出土の石器

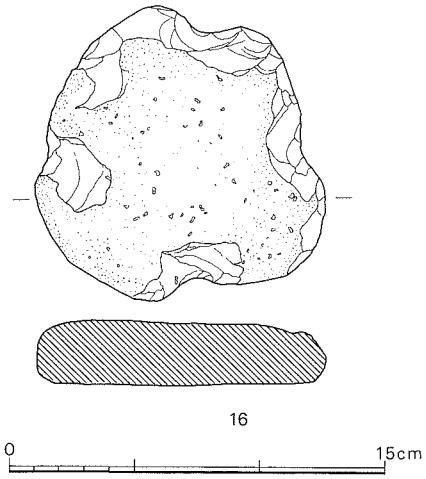
3 は，黒曜石製石核。黒色良質の黒曜石製。自然面の状況からして，伊万里腰岳産と思われる。立方形に近く，横広の剝片を剝いだらしい。上下長3.0cm，左右幅3.3cm，最大厚2.2cm。**4** は，安山岩製石核。縦長剝片を剝取した石核である。打面は自然面であるが，一部打面調整を施している。剝片剝離の打角は約40°である。上下長7.8cm，最大幅4.7cm，最大厚4.3cm。

470区出土の石器

5 は，小形の磨製片刃石斧である。しかし，一応片刃であるが，側面図をみてもわかる様に刃部の刃先が若干中央寄りになる。上下長5.1cm，最大幅2.0cm，最大厚1.0cm。**6** は，淡い小豆色の頁岩製石包丁。刃部は殆どが欠損しており，旧状は穴の位置からして大形のものであったらしい。現状で左右両辺に鋭利な刃がつけられているのは再利用を図ったものと見られる。現存左右幅8.6cm，上下長4.7cm，最大厚0.5cm。**7** は，淡青灰色の緻密な砂岩製方柱状抉入片刃石斧片。抉入部をはじめ丁寧な研磨痕がある。右図により最大幅のみ（3.9cm）は知り得る。**8** は，磨製石斧の刃部の破片である。**9** は，灰黒色頁岩製方柱磨製石斧片。いわゆる「若田石」を材料にしている。研磨稜がよく残り，加工は丁寧である。旧状は幅の狭い（2.1cm）木柄（II型）に装着されたものであろう。**10**も，磨製石斧である。刃部の破損がひどい。現存上下長15cm，最大幅7.4cm，最大厚3.7cm。**11**は，黄灰色頁岩製磨製石剣片？。断面は扁平な六角形で稜の立ち方は弱いが，両側は刃部が磨出されている。幅8.8cm。**12**は，叩き石である。上下両端に敲打痕が残っている。上下長7.6cm，最大幅5.0cm，最大厚4.3cm。**13**は，黒灰色安山岩製スクレーパー。劈解性強く，リング・フィッシャーともに明瞭に残る。幅広の剝片の半周に，表裏両



第47図　第470区の石器①



第48図　第470区の石器②

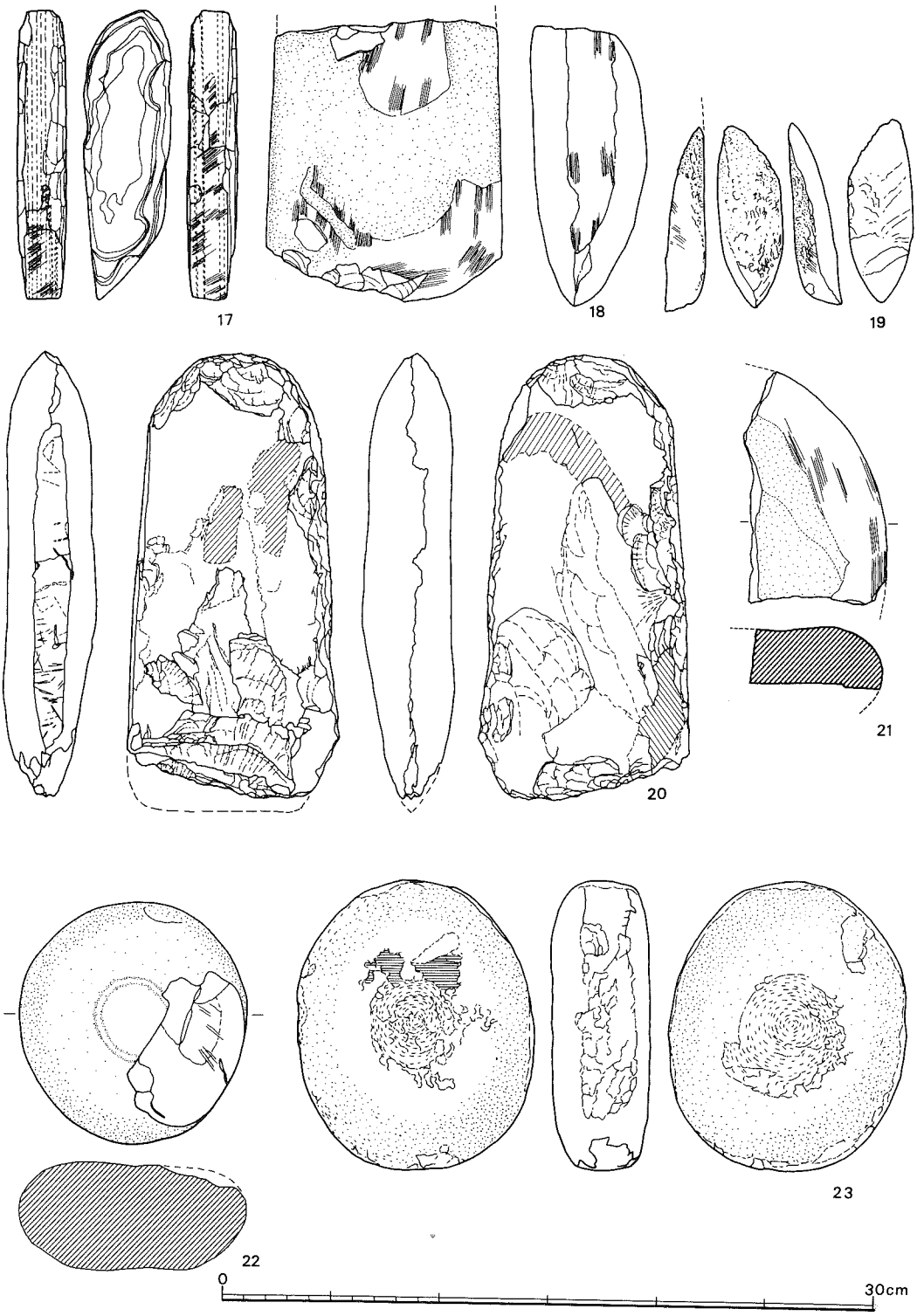
面から二次加工を施す。上下長6.7cm，最大幅6.4cm，最大厚1.6cm。**14**は，叩き石である。側縁部に敲打痕が残っているが，全周のほぼ¾に及ぶ。上下長12.5cm，最大幅10.4cm，最大厚6.3cm。**15**は，良質の安山岩製凹み石。両面とも中央部の磨耗著しく，側縁部の上下両端と左右両端に敲打痕がある。上下長14.0cm，左右幅10.4cm，最大厚4.6cm。**16**は，黄灰色砂岩製石錘。紐かけは4箇所作られ，表裏両面から加工されている。上下長11.8cm，最大幅11.6cm，最大厚2.7cm，重量498ｇ。

460区出土の石器

17は，淡青灰色頁岩製方柱状抉入石斧。完形資料，縞目が表裏両面に残り，美しい。両側面は摂理面が階段状に残っている。抉入加工部は粗い加撃によっており，一部研磨されている。また，刃部尖端は「刃つぶし」のような状態で残されており，完工直前の資料かもしれない。上下長13.4cm，最大幅2.2cm，最大厚4.0cm。**18**は，淡青灰色砂岩製石斧。砥石と同じ材が用いられている。刃部が石斧本体の最大幅になる。両側端は平らに磨かれている。現在長12.9cm，最大幅10.9cm，最大厚5.4cm。**19**は，磨製石斧の刃部の破片である。**20**は，磨製石斧である。基部の着柄部分と刃部側に擦痕が残っている。刃部の尖端部が欠損している。左端の図の側面図をみてもわかるように平らな面が残っている。上下長20.4cm，最大幅9.7cm，最大厚4.3cm。**21**は，粗目の砂石製石皿片？。側縁は研磨され，中央は剝離して不明。現存長10.6cm。**22**は，淡青灰色の緻密な砂岩製凹石。一部欠損している。両面とも中央部が丸く凹み，側縁に使用痕は一部に残っている。上下長11.2cm，左右幅10.5cm，最大厚5.0cm。**23**は，凹石兼叩き石である。表裏両面に凹み面があり，側縁のほぼ全周に叩き痕が残っている。

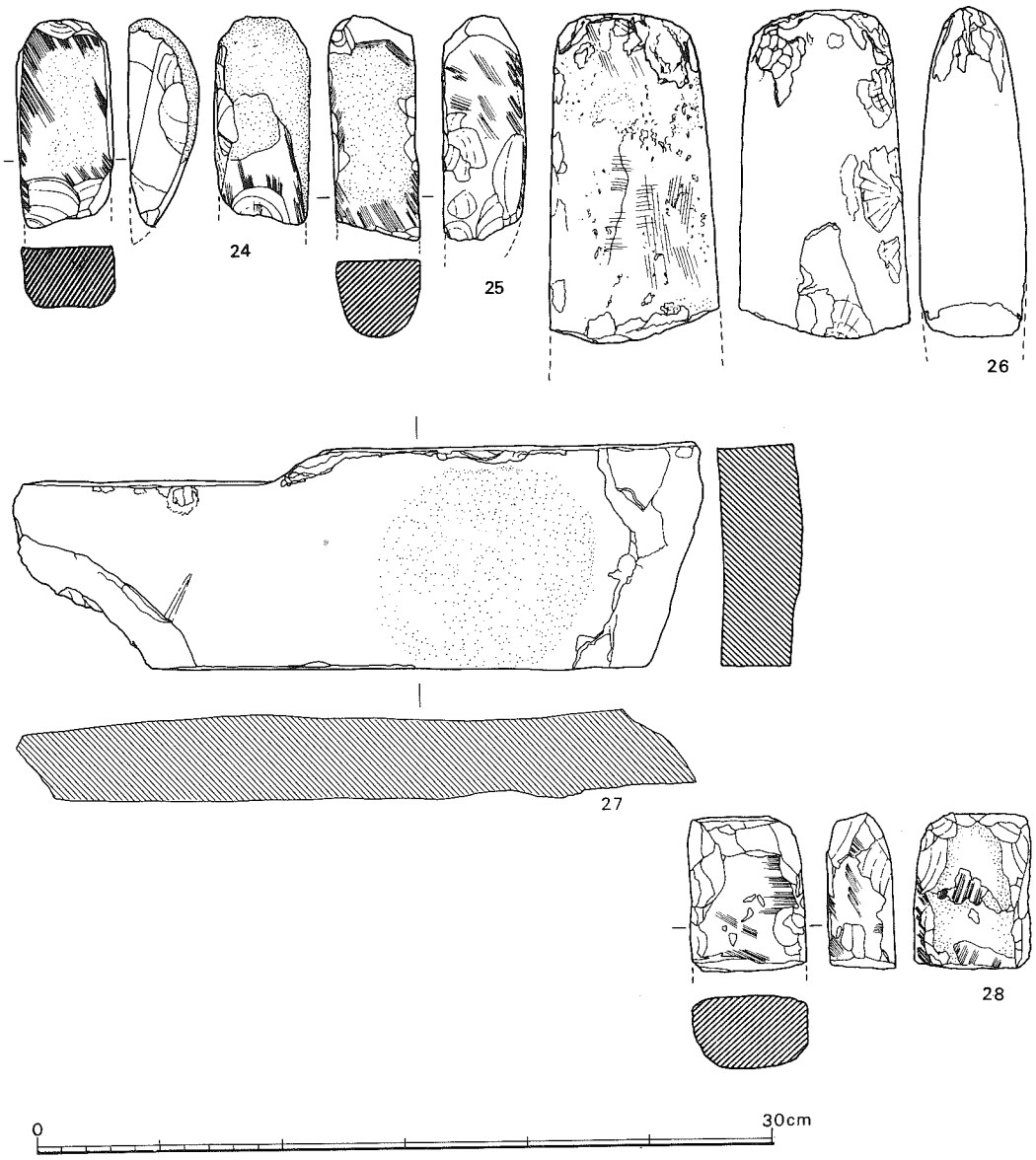
450区出土の石器

24は，淡青灰色硬質砂岩製，磨製片刃石斧未成品。左図の面と両側面は全く研磨に着手していない。右図の面は，かなり研磨がすすんでいる。現存長8.4cm，最大幅3.7cm，最大厚2.9cm。**25**は，淡青白色硬質砂岩製の柱状抉入片刃石斧の未成品。上面は研磨に着手し，両側辺の「抉入」加工が一部始められている。上端は粗割り段階である。**26**は，磨製石斧である。刃部側が欠損している。現存上下長13.3cm，最大幅6.9cm，最大厚4.4cm。**27**は，淡青灰色の砥石未成品？。砥石面の磨滅はないが，320区出土の**3**の砥石と同じ石材である事と，略四角形に面取りしたあるところから，その可能性がある。左右長28cm，上下長9.1cm，最大厚3.4cm。**28**は，淡青灰色の堅緻な砂岩製石斧片。下端が欠損していて全体の旧状は不明であるが，手斧用の抉入



第49図　第460区の石器

斧であろう。現存長6.3cm，最大幅4.7cm，最大厚2.7cm。



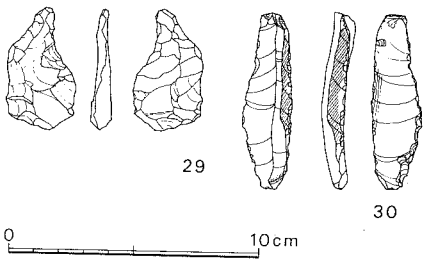
第50図　第450区の石器

430区出土の石器

29は，安山岩製石錐。表裏両面から二次加工を施して尖端部を作出している。上下長4.8cm。**30**は，黒色半透明，良質の黒曜石製で使用痕がある剝片。左右両側縁に使用痕が認められる。上下長6.5cm。

420区出土の石器

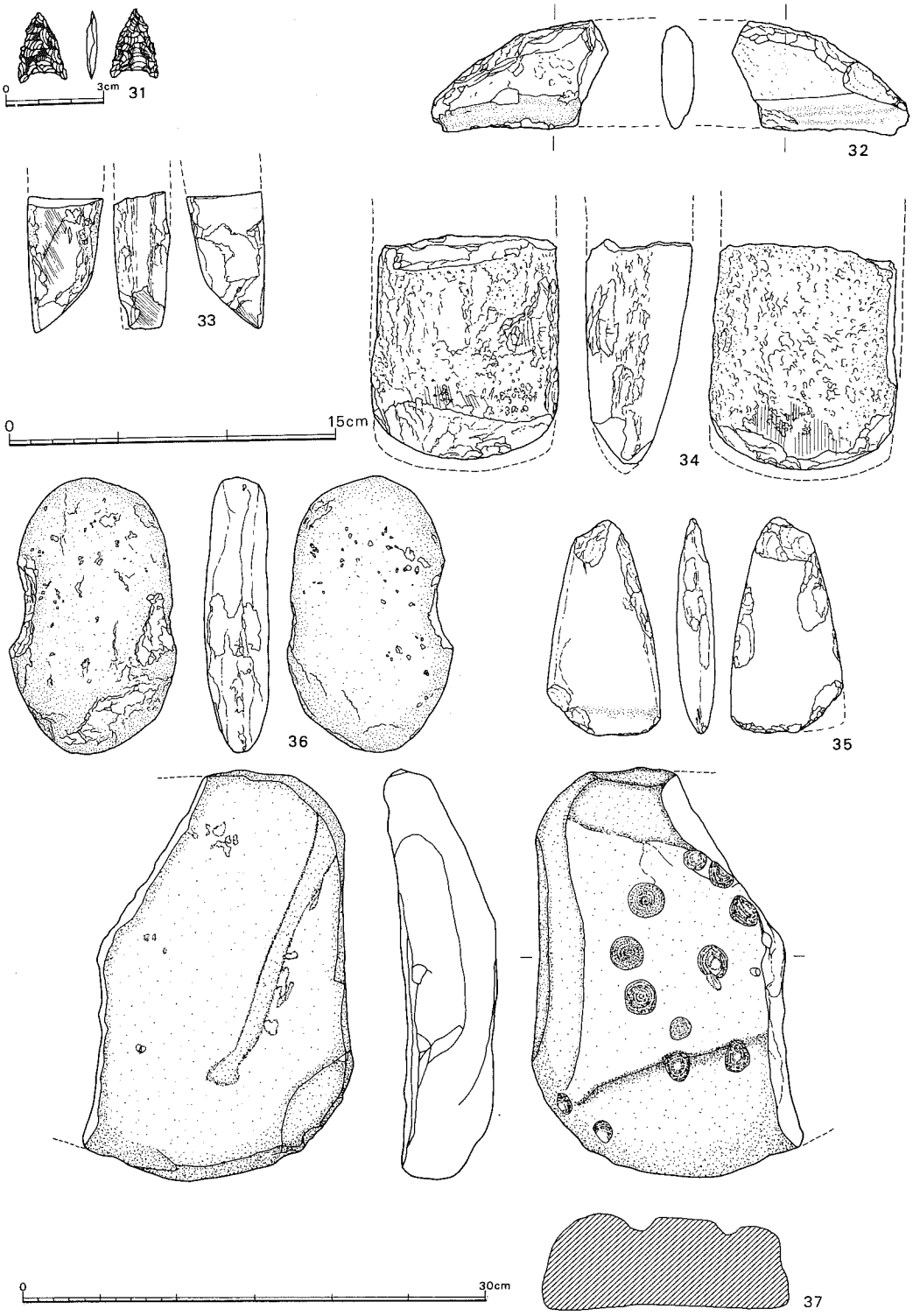
31は，黒色良質の黒曜石製石鏃。完形である。上下長2.1cm，最大幅1.5cm，**32**は，砂石製石鎌。打剝で全体の形を整えた後，刃部を磨いて砥ぎ出している。左右長8.1cm，上下長5.1cm，最大厚1.5cm。**33**は，頁岩製の磨製片刃石斧である。基部側が欠損している。現存長6.2cm，最大幅3.5cm，最大厚2.6cm。**34**は，大きめの磨製石斧である。半欠品である。刃部の刃先が潰れている。現存長10.3cm，最大厚1.7cmで薄い。**36**は，石錘である。短軸側に打欠により紐かけを作出してある。上下長12.6cm，最大幅7.7cm，最大厚3.0cm。**37**は，砂岩製砥石である。裏面に小穴が12個程ある。小穴については，側面にも方向の異なるものが3個程あるので雨だれとは考えられず，人為的なものだと思われる。人為的なものだとすればその性格が問題となるが，私見では3例程が考えられる。まず第1としては，木の実の皮をむくときにこの小穴に木の実を入れて上から叩いた[註1]。第2例目としては，石崎曲り田遺跡の火鑽臼状石製品[註2]。第3例目としては，楊州琴南里支石墓の支石から見つかった性穴[註3](cup-mark)等が考えられるが，本例の場合は，キメ手に乏しくいずれが妥当なものかはわからないし，全く別の機能を有するものかもしれない。上下長26.5cm，最大幅17.4cm，最大厚6.8cm。



第51図　第430区の石器

410区出土の石器

38は，黒曜石製細石刃核である。原礫であるところから牟田産の黒曜石であろう。卵形の原石を立てて，それを上から¼位の所で横からカットし，そのカットした面を打面として細石刃を剝取している。上下長3.3cm。**39**は，黒色で部分的に透明な良質の黒曜石製の縦長剝片。両側縁に微細な使用痕がある。上下長4.2cm。**40**は，黒色半透明の良質な黒曜石製石鏃。両脚欠損。全面打製で加工は丁寧である。現存長2.6cm。**41**は，黄白色砂岩製石包丁残欠。やや磨耗が進んでいる。刃部が比較的よく残っている。**42**は，石包丁である。全面を丁寧に研磨する。上端は波形を呈する。上下長4.9cm，左右幅11.1cm，最大厚0.6cm。**43**は，淡青灰色頁岩製の扁平磨製片刃石斧。左図の面に凹みがあり，全面に研磨は及んでいない。両側面は研磨が全面に及んでいる。上端も研磨痕がある。上下長8.1cm，左右幅2.8cm，最大厚0.9cm。**44**は，黒色の頁岩製抉入磨製方柱状抉入石斧。堅緻な材で，研磨した面は光沢があって美しい。抉入部も研磨されている。左図波線の部分下端で折れ，摂理面から左が割れている。いわゆる「若田石」の材が使用されている。残存上下長8.5cm，左右幅4.8cm。**45**は，磨製石斧である。基部と刃部に打撃による剝離痕がある。刃部の刃先は潰れている。上下長14.2cm，最大幅6.1cm，最大厚4.0cm。**46**も，磨製石斧である。基部側が欠損している。刃部は左右対称形にならずに，日本刀の刃先状



第52図　第420区の石器　31は½，32～36は⅓

になっている。現存長9.5cm，最大幅6.4cm，最大厚3.7cm。**47**も，磨製石斧片である。基部と刃部が折れている。**48**は，凹み石である。約⅓程が欠損している。側面に叩き痕もある。**49**は，黒灰色の緻密な頁岩製不明石器。両面とも全面に研磨痕が残り美しい。製作意図・用途ともに不明。

400区出土の石器

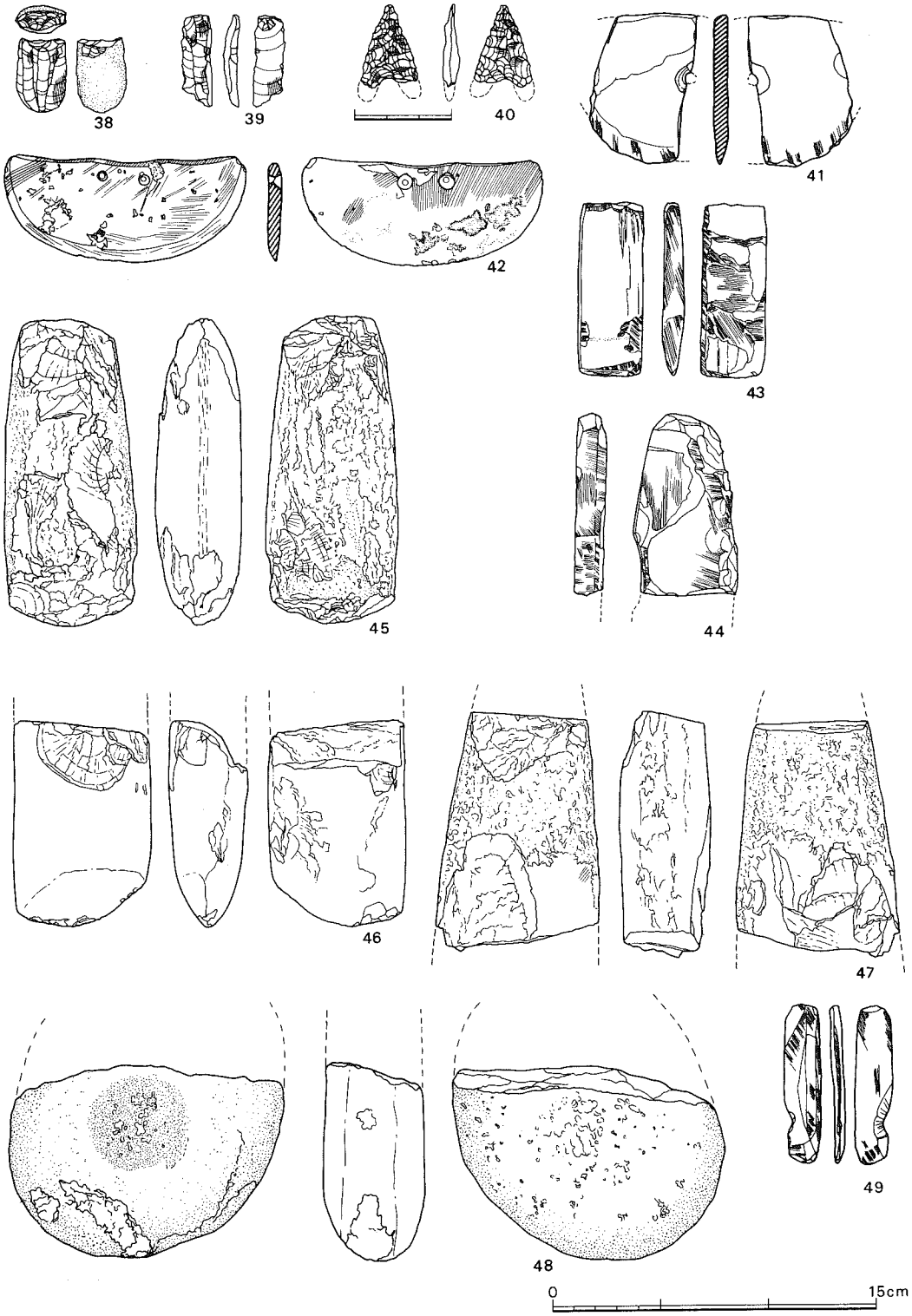
50は，黒色半透明の良質な黒曜石製石鏃。剥離は粗く，素材は縦長の剥片ではない。現存長1.6cm。**51**は，灰白色の頁岩製磨製片刃石斧。基部のみの残存である。現存長4.2cm。**52**は，方柱状ノミ形石器の未製品か？下端が，やや細くなっており，図の下端の方が刃部であろう。淡青灰色頁岩製。現存長6.0cm。**53**は，石包丁片。刃部側が僅かに残り，両側及び上辺欠損。刃部は鋭く砥ぎ出されている。紫灰色の堅緻な石材で，刃部砥ぎ出し部と断面部を見ると，対馬産頁岩と考えられる。紐カケ部分には朱が残っている。残存左右長7.8cm，最大厚0.8cm。**54**は，黄灰色砂岩製砥石。両面ともゆるくくぼみ，側面も使用痕がある。現存上下長8.5cm，最大幅6.7cm，最大厚4.1cm。**55**は，安山岩製のスクレーパーである。大きめの横広の剥片に表裏両面より二次調整を施してスクレーパーに仕上げている。上下長13.9cm，最大幅9.3cm，最大厚2.8cm。**56**は，青灰色の良質な安山岩製凹石。両面ともかなり激しい使用痕が残り，凹んでいる。側縁はほとんど使用痕はない。上下長13.1cm，最大幅10.7cm，最大厚4.8cm。

390区出土の石器

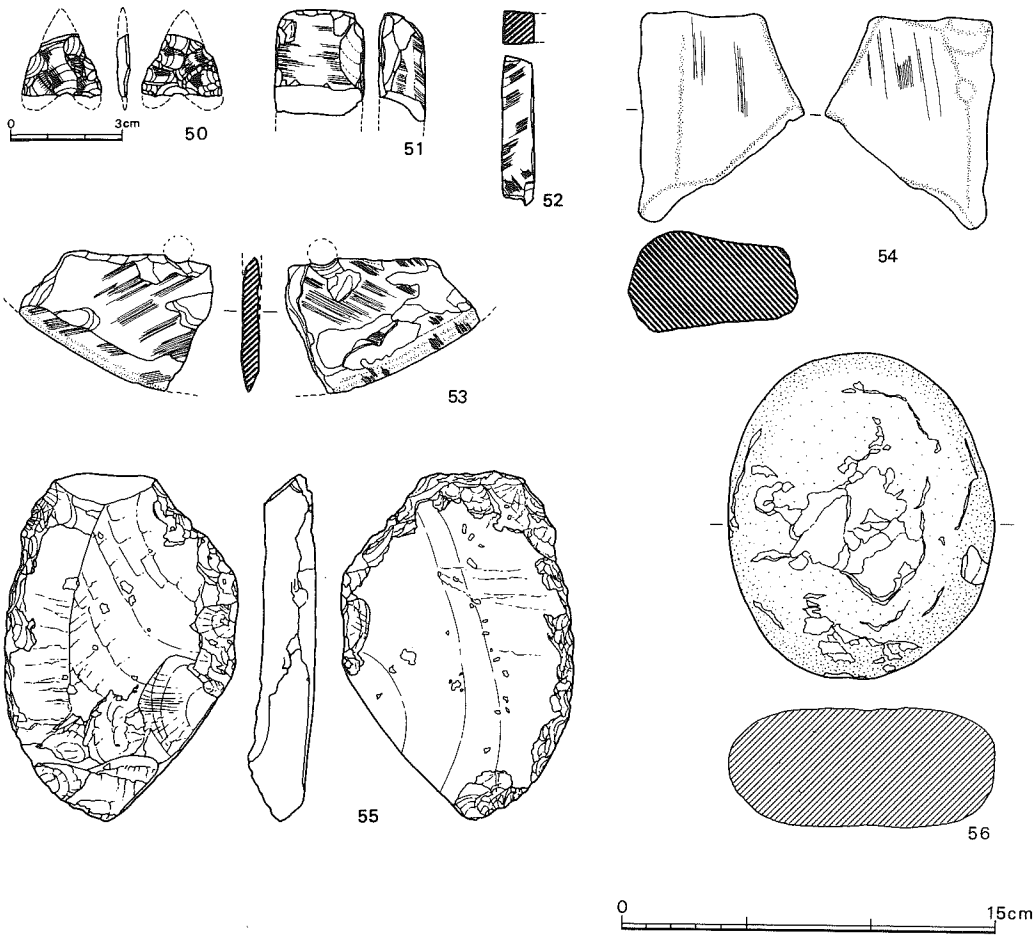
57は，黒色良質の黒曜石製の横広の剥片。左図の左側縁に微細な二次加工がある。上下長3.3cm。**58**は，黒色の緻密な黒曜石製スクレーパー。ほとんど片面のみの二次加工で，一見石鏃のようである。上下長3.3cm。

380区出土の石器

59は，磨製石剣である。上端と下端が欠損している。表面もややあれているが，部分的に磨研の跡が残っており，縞目のとぎ出しも観察できる。研磨痕のよく残った部分は，黒色の光沢を残し，対馬産石材（頁岩）の特長を残している。現存長17.9cm，最大幅4.5cm，最大厚1.3cm。**60**は，淡青灰色の頁岩製磨製片刃石斧。刃部側が⅓程度欠損している。両側辺と右図の面は丁寧な研磨が見られるが，左図の面の研磨はさほどゆきとどいていない。現存長7.7cm，最大幅3.5cm，最大厚2.1cm。**61**は，磨製石斧である。刃部の先端部が破損している。左図の面側に打撃による大きな剥離痕が残っている。上下長12.9cm，最大幅6.7cm，最大厚4.0cm。**62**は，黒灰色頁岩製抉入磨製方柱状石器。抉入部の半端から欠損，下端も同様である。図の上下いずれが刃部か明瞭でない。抉入部に至るまで研磨がゆきとどいている。現存長5.1cm，最大幅3.5cm，最大厚2.6cm。**63**は，磨製石斧片である。基部と刃部が破損している。**64**も，磨製石斧の刃部の破片



第53図　第410区の石器　40は½，他は⅓

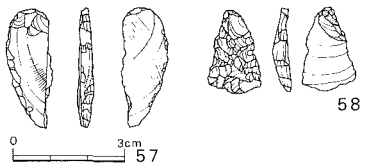


第54図　第400区の石器　50は½，他は⅓

である。黒灰色の緻密な頁岩製。おそらく対馬産だろう。片側が剝離，上端も欠損している。研磨は丁寧で刃部は鋭い。**65**は，安山岩製横形石匙。フィッシャーや上からみて，弱い反りのある翼状剝片が素材になっている。近くに久吹浜遺跡やつぐめの鼻遺跡もあり，縄文時代資料の流入したものであろう。左右7.3cm。**66**は，淡い黄灰色の緻密な砂石製砥石。表面が荒れているが，断面半円形の溝が砥ぎこまれている。背面には，平面円弧状の砥痕が残る。**67**と２点出土している。上下長14.4cm，最大幅9.5cm，最大厚1.7cm。**67**も，淡黄灰色の緻密な砂岩製砥石。左図の砥面は全体にややくぼみ，中央と右側辺に幅５mm程度の深い溝状砥痕がある。溝状砥痕がある。溝状砥痕底部は半円状で，たとえば石包丁背部を砥いだ形になっている。一方，右図右側辺には，円弧状の砥痕が残り，平面形が円形のものを砥いだらしい。上下長16.9cm，最大幅10.5cm，最大厚2.3cm。

370区出土の石器

68は，穿孔用石器である。灰白色の緻密な砂石製。円球部は，不規則な研磨によって角をつ



第55図　第390区の石器　½

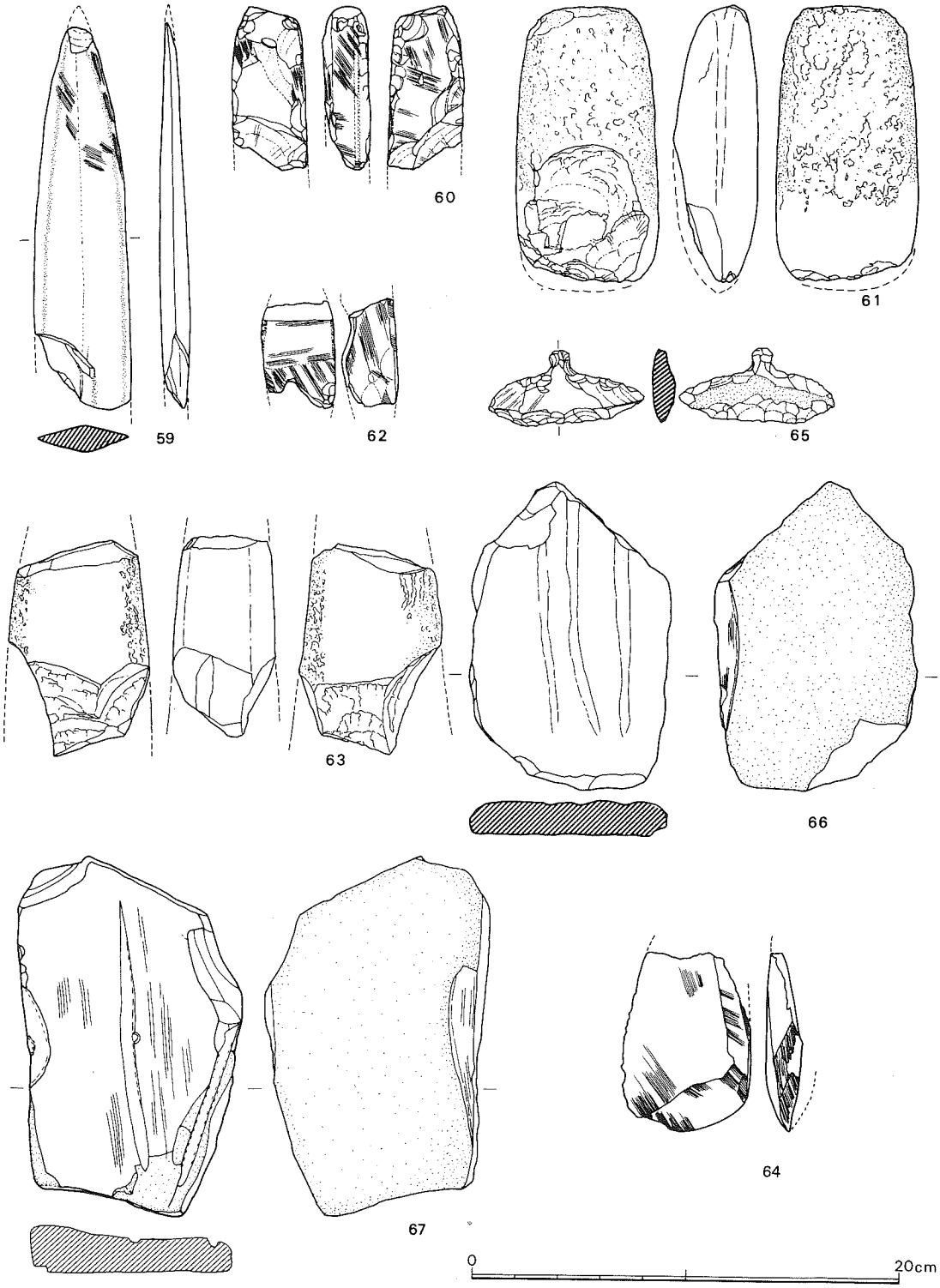
けている。円錐部は回転によってできた条痕が残り，円錐頂（下端）は，さらに段がついており，小孔の穿孔用乳頭部がある。上下長4.8cm，最大幅2.7cm，最大厚2.2cm。**69**は，淡青白砂岩製方柱石斧片。下端が欠損しているが，全面に研磨され，縞目が美しい。左図中央部に抉入加工？がある。

370区出土の骨角器

1は，鹿の落角第一分枝利用のV字型角器。角幹部を丁寧に切断し，枝角の一部に丁寧な切りこみ（↘）がある。これ以外の部分に装飾等はないが，角幹の切断部直下部分と，基部に，なんらかの緊縛の行なわれた痕跡がある。

360区出土の石器

75は，淡青灰色頁岩製方柱状片刃石器（石ノミ）。左図の面下端に片刃仕上げの加工が見られ，本資料が，小形の石ノミであることを知り得る。上・下面と上端，刃部の先端が欠損している。全体規模は不明であるが，従前の資料よりすれば，長さ6cm，幅2.1cm，厚さ1.3cm程であろう。**76**は，黄白色の粗い砂岩製穿孔具，本遺跡で粗砥に使用される石材と同じ素材が用いられている。370区の39の緻密な砂岩が仕上げ用とすれば，本資料は初期的作業用だろうか。穿孔部径1.3cm。**77**は，灰白色頁岩製扁平磨製片刃石斧。上辺の半端，側辺の一部が欠損しているが，概して旧状をよく留めている。縞状の部分は，自然の摂理による溝状の凹みになっていて研磨痕をとどめていない。他は，両面及び刃部，両側辺，上辺ともに研磨されている。上下長6.7cm，最大幅3.4cm，最大厚0.7cm。**78**は，淡青灰色の硬質砂岩製方柱状抉入石斧。四面とも研磨が丁寧に施してある。抉入加工は，角のところを僅かに打ち欠いた状態である。刃部(片刃)が図のどちらの端部になるか不明である。現存上下長10.7cm，厚み3.3×3.7cm。**79**も，淡青灰色の堅緻な砂岩製の方柱状抉入片刃石斧。左図の面にごく一部研磨痕があり，右図の面では抉入部を含めて，研磨がゆきとどいているが，両側は粗割り整形のみであり，製作過程での欠損かもしれない。里田原の資料で砂岩製は珍しいが，対馬産の砂岩と考えられる。現存長8.7cm，最大幅3.0cm，最大厚3.9cm。**80**は，灰色の堅緻な頁岩製石斧片。着柄部のみ残存。表裏両面にあらい剝離のあとが残っているが，左図の面には研磨の跡が残っている。81～84は，磨製石斧であるが，いずれも破損している。**81**は，刃部の破損である。現存長12.0cm，最大幅7.0cm，最大厚4.0cm。**82**は，着柄部のみ残存している。現存長8.3cm，現存幅7.0cm，現存厚4.5cm。**83**は，図上に波線で推定復原形を示したような大きさになると思われるが，片側辺と基部が欠損しており復雑な折れ方をしている。現存長12.8cm，現存幅5.3cm，最大厚3.4mm。**84**は，刃部の先端部が潰れている。現存長14.0cm，最大幅7.3cm，最大厚4.7cm。**85**は，安山岩製のスクレーパー

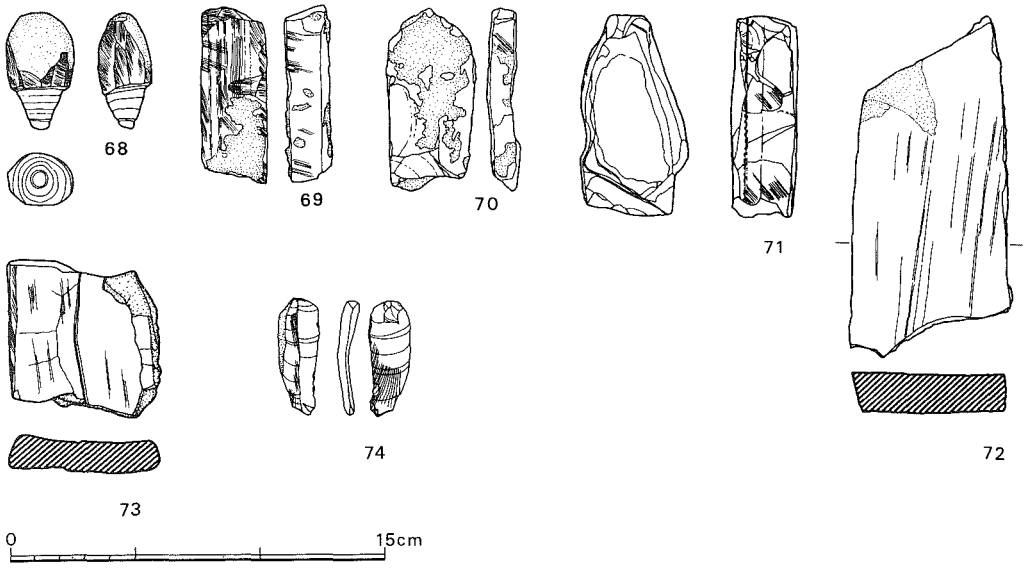


第56図　第380区の石器　1/3

である。石核より剝取した一次剝片をさらに薄くして，その辺縁に片側からのみ二次調整を施してスクレーパーに仕上げている。上下長6.2cm，最大幅8.3cm，最大厚1.9cm。**86**は，灰白色の粗質安山岩製石錘。粗粒の石英を含み，表面のザラつきが著しい。粗い打撃を加えて両面とも十字形に紐かけを作り出している。上下長9.9cm，左右8.1cm，最大厚3.8cm，重量398ｇ。**87**は，灰色の緻密な砂岩製磨製石斧。刃部が欠損している。研磨の跡はあまり明瞭でないが，よく整形されている。上下長14.7cm，最大幅8.2cm，最大厚3.9cm。**88**は，灰色の緻密な砂岩製砥石片。表面に一部火を受けていて炭化物が付着している。右図の円孔は自然の穿孔。表裏ともよく研磨されていて緩い段がついている。上下長7.5cm，最大幅11.1cm，最大厚2.8cm。**89**は，淡青灰色の緻密な砂岩製砥石。左端の砥痕は半月形の断面。右の砥痕は鋭い薬研状砥痕。更に全面を使用している。片面のみ利用した上砥である。上下長6.3cm，最大幅7.6cm，最大厚1.4cm。**90**は，黒色良質の黒曜石製石核。角礫で比較的平滑な自然面を有する不規則な剝離が行なわれている。伊万里腰岳産のものと思われる。上下長12.3cm，最大幅8.5cm，最大厚5.8cm。**91**は，表裏両面に凹面をもっていて且つ叩き面も，もつものである。凹石兼叩き石である。上下長11.2cm，最大幅13.9cm，最大厚5.2cm。**92**は，良質の黒曜石製縦長剝片。側縁に微細な使用痕あり。上下長5.4cm。**93**は，黒色良質の黒曜石製スクレーパー。右図の右側縁下半部に粗雑な二次加工があり，同図左側縁下半部に使用痕がある。一応縦長の剝片であるが、剝片としても粗雑である。

350区出土の石器

94は，磨製石鏃片。下端欠損，全体に磨耗しており，鋒部以下シノギ不明瞭である。灰白色，やや粗質の石材が使用されており，石材不明。現存長4.4cm，最大幅1.6cm，**95**は，黒色半透明



第57図　第370区の石器　1/3

の黒曜石製石鏃。下端欠，一部自然面が残り，作りはやや粗い。**96**は，淡青灰色頁岩製扁平磨製片刃石斧。下半部欠損，左図の面の下半部に凹みがあり未研磨である。右図の面の上半には欠損か加撃痕がある。上辺は全面研磨してある。現存長5.0cm，最大幅3.0cm，最大厚6.5cm。**97**は，灰白色の堅緻な頁岩製扁平磨製片刃石斧。下半部が欠損している。**98**も，頁岩製扁平磨製片刃石斧。完形である。全面を研磨して整形している。最大長6.6cm，最大幅3.1cm，最大厚1.3cm。**99**は，淡い紅色砂岩製砥石片。材質緻密，片面のみ使用されており，裏面に焼けた痕跡がある。**100**は，黄灰色硬質砂岩製石包丁未製品か？　半端が欠損しており，全体規模は明確でない。穿孔もなされていないし，上辺の研磨もないが，刃部のみは鋭く磨かれている。現存長9.5cm，最大幅5.9cm，最大厚0.5cm。**101**は，淡青灰色の硬質堅緻な砂岩製磨製片刃方柱状石斧片。左図の左半，中図の左半が欠損している。したがって，本資料は断面でいえば¼しか残っておらず，旧状がかなり大形であったと考えられる。**102**は，大形の磨製石斧である。着柄部の方が欠損している。刃部に使用痕があり，先端部が少し潰れている。

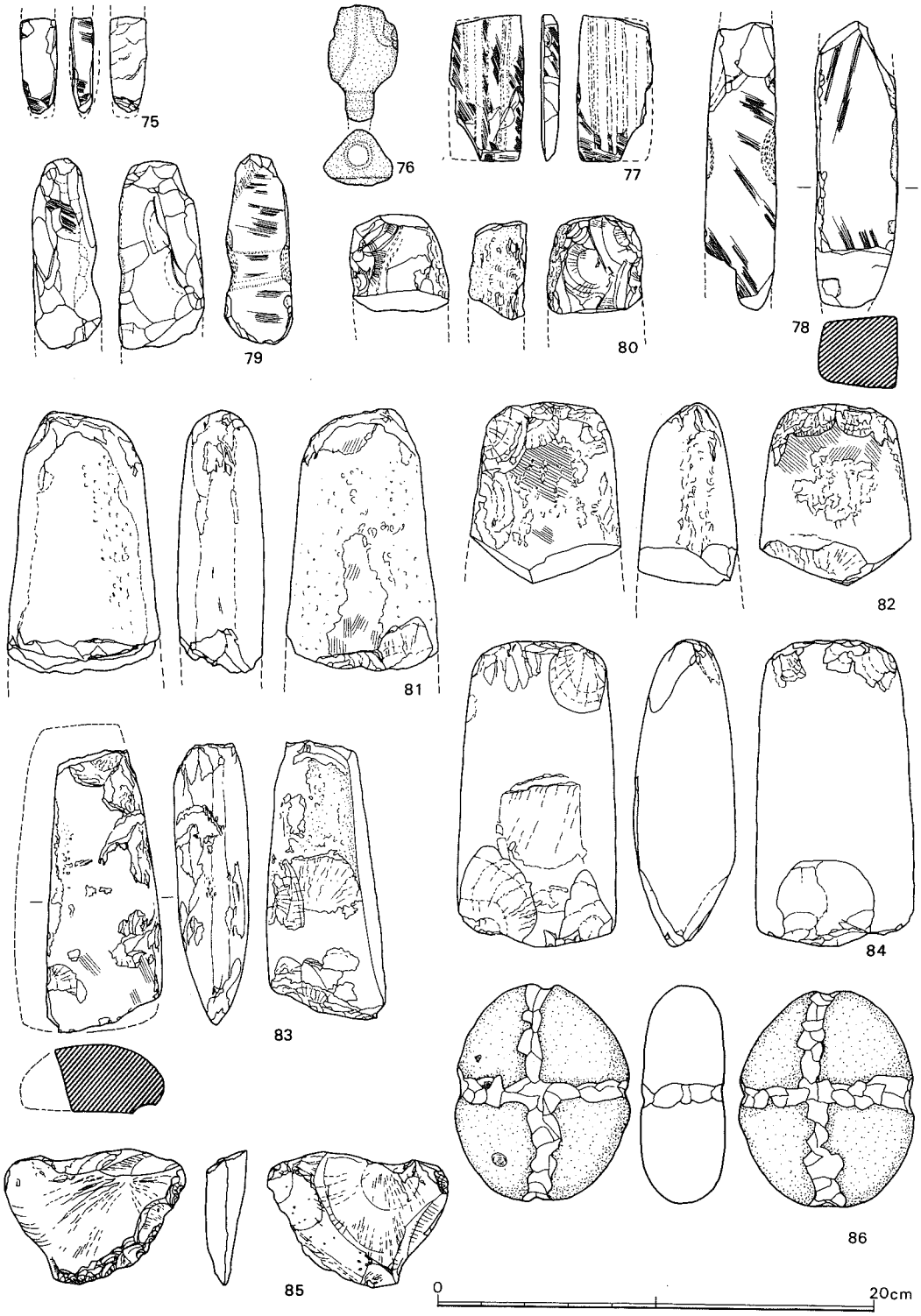
330区出土の石器

103は，磨製石斧である。石斧の刃部側が損失している。現存長12.3cm，最大幅5.6cm，最大厚3.7cm。**104**は，磨製片刃石斧である。刃部の刃先が潰れている。現存長8.8cm，最大幅8.85cm，最大厚1.6cm。**105**は，淡い青灰色の緻密な砂岩製砥石片である。**106**は，黄白色の中粗砂岩（天草石）製砥石。淡紅色の縞目が入り美麗である。平面部に一部砥磨痕がみられ側面にも砥磨痕がある。**107**は，磨製石斧片である。大きめの石斧で刃部の砥ぎ出しが鋭利である。石斧の折れ口をみると片側から力が加わったことがわかる。現存長8.5cm，最大幅7.6cm，最大厚4.4cm。**108**は，黄褐色荒砂岩製砥石片。石斧研磨用と考えられ，両面とも半円形の断面をなしている。**109**は，砂岩製の正体不明の石器である。棒状に全面を砥いでいる。中途で折れている。現存長10.1cm，最大幅5.3cm。

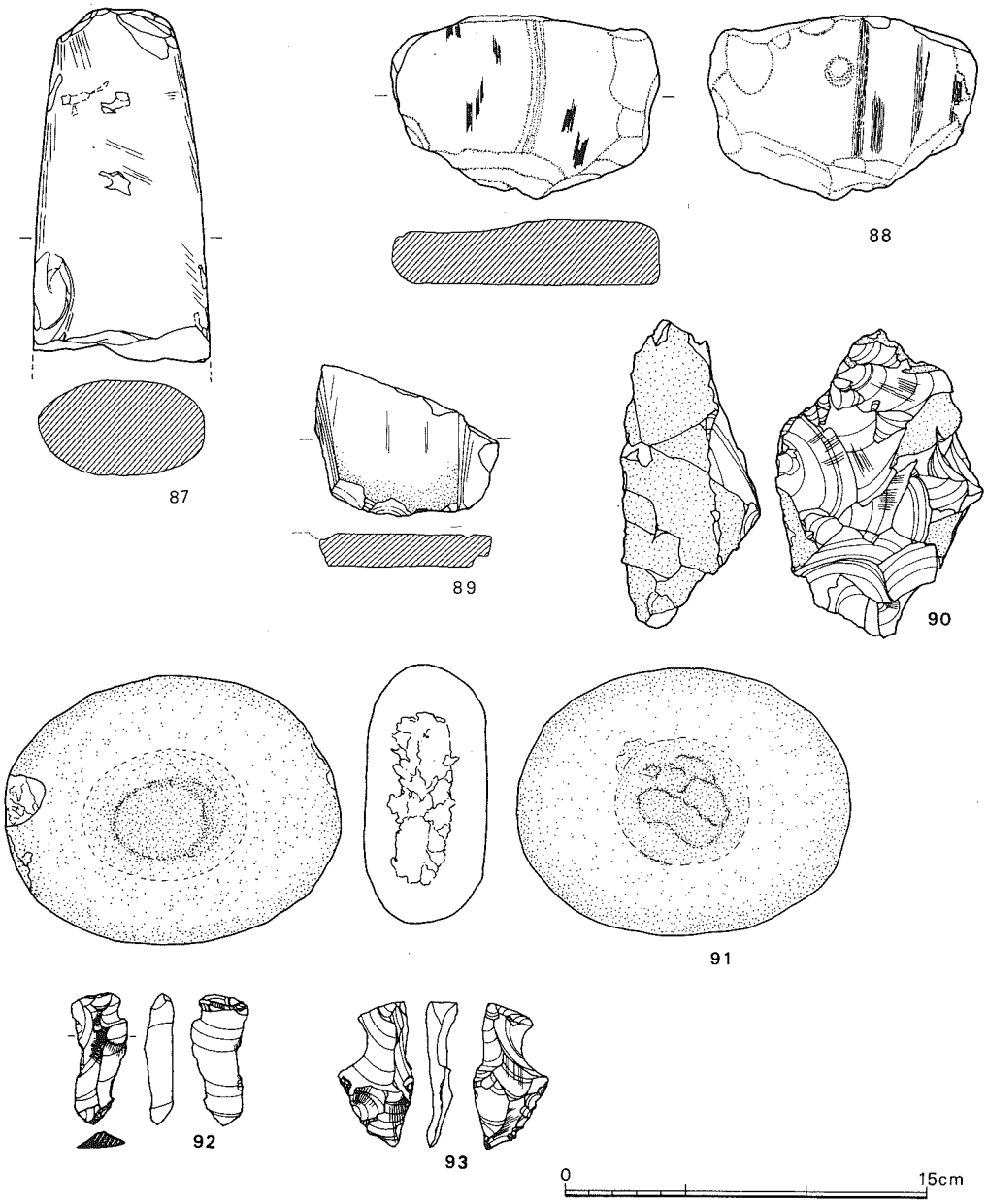
320区出土の石器

110は，磨製石剣片である。シノギも鋭利で研磨もゆきとどき，美しい縞目の研ぎ出しがある。基部に近い部分らしい。現存長5.0cm，最大幅4.1cm，厚み0.85cm。**111**は，凹み石である。表裏両面に凹み面があり，側面には敲打痕が残っている。最大長10.0cm，最大幅8.7cm，最大厚4.4cm。**112**は，淡青灰色の緻密な砂岩製の砥石である。砥石面の回りを四角く面取りしている。最大長32.2cm，最大幅12.9cm，最大厚6.5cm。

註1　民族例では，照葉樹林帯の中においで，まま見られるとの事である。国内の例では，東京都奥多摩町海沢，埼玉県秩父等でみられる。この関東地方西部の山村には，こうした風習が最近まで残っていた。『日本民俗文化大系・第13巻（上巻）・技術と民俗』昭和60年5月15日，p.p. 28・



第58図　第360区の石器①　1/3

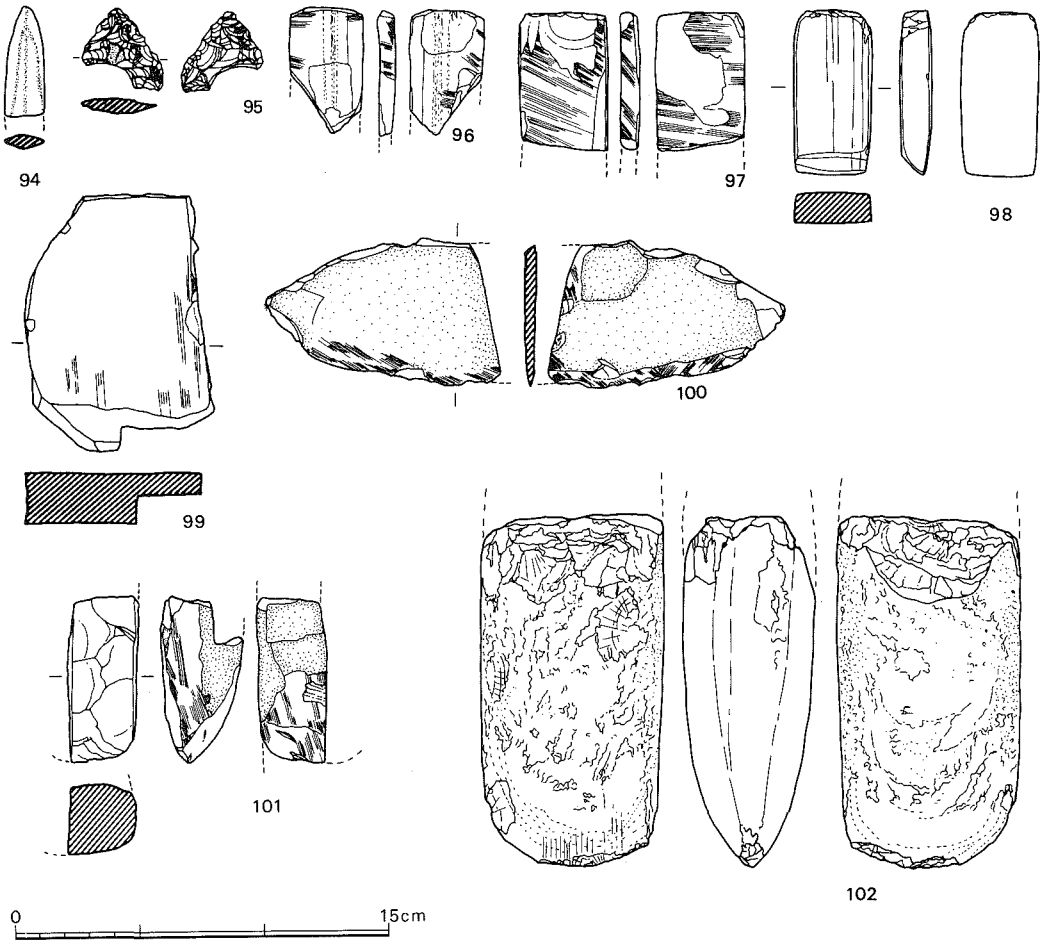


第59図　第360区の石器②　1/3

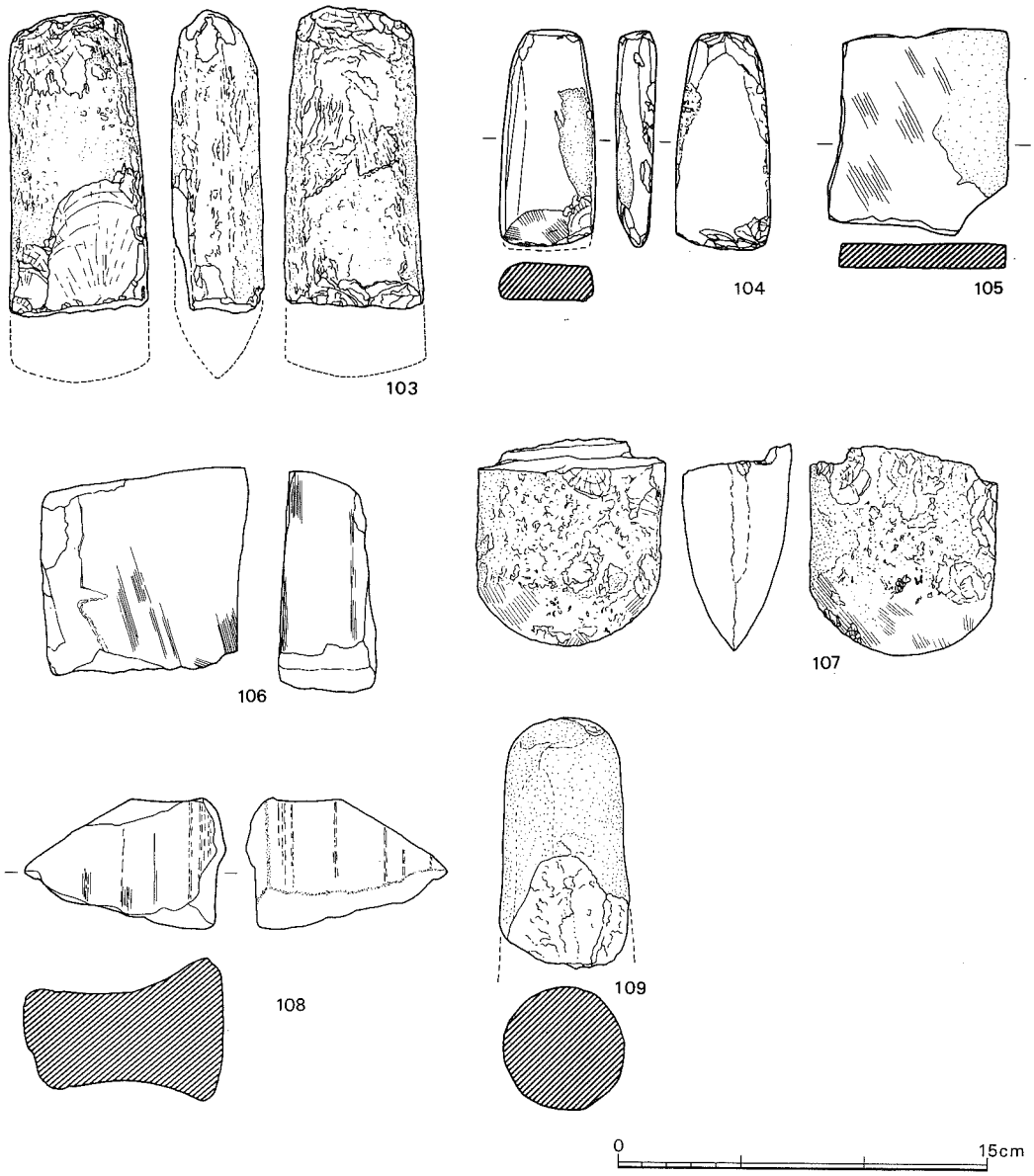
29　立平進氏御教示。

註2　中間研志『石崎曲り田遺跡－II－』中巻，今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告，第9集，1984，福岡県教育委員会，p.p. 373。ただ，石崎曲り田遺跡の場合には，火鑽臼状石製品とセットで使用したと想定されている石錐は上下両端に石錐部があるが，本遺跡例では，完形のものとしては片方にしかついていない。

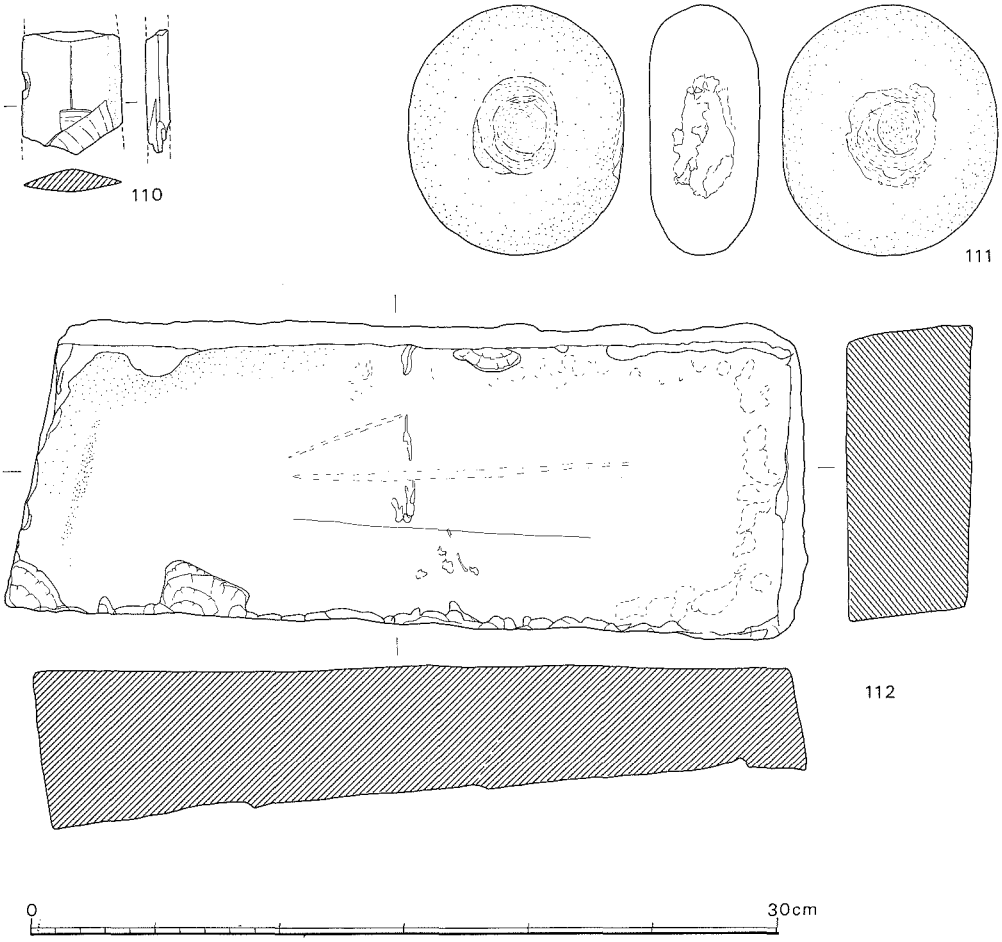
註3　黄龍渾，田中良之訳「楊州琴南里支石墓調査報告」『朝鮮考古学年報』Vol 3，1972年版，朝鮮考古学年報編集委員会，寧楽社。



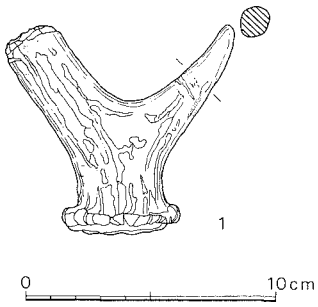
第60図　第350区の石器　1/3



第61図　第330区の石器　1/3



第62図　第320区の石器　1/3



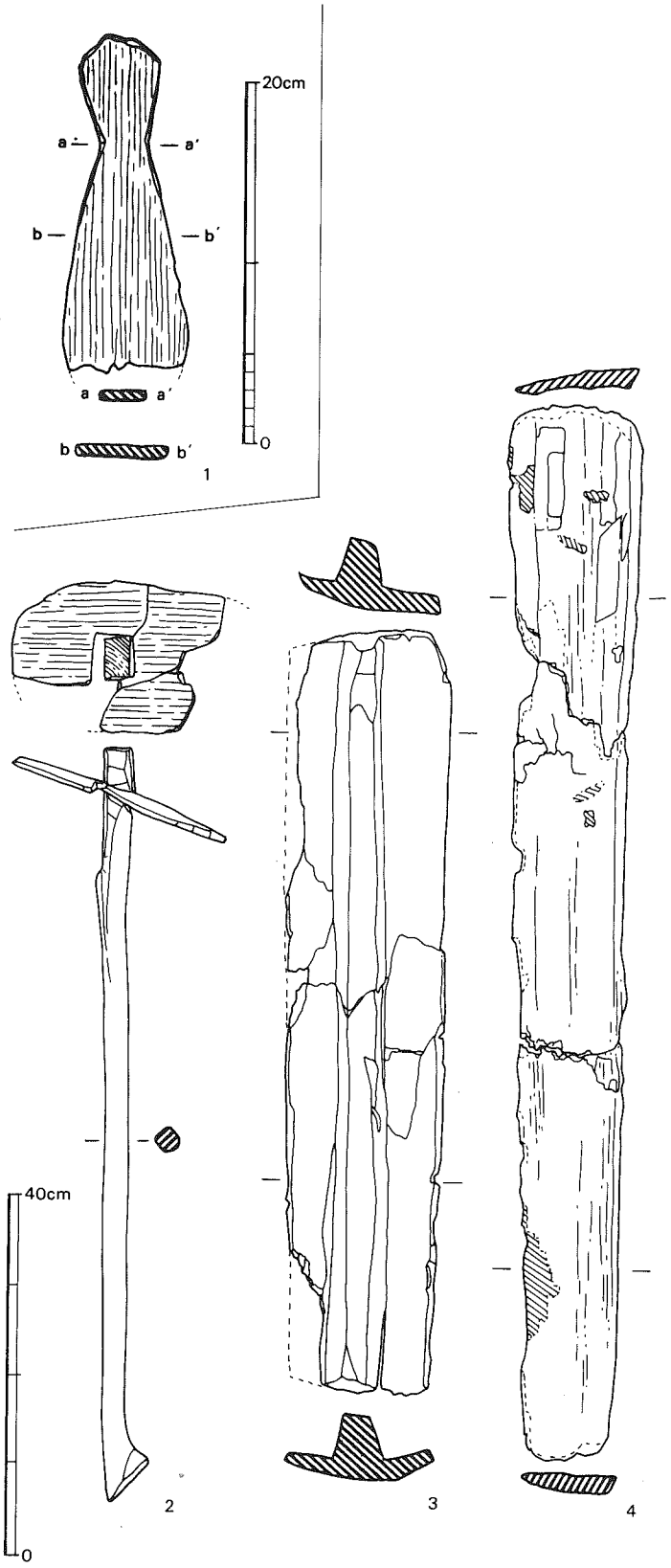
第63図　第370区の骨角器　1/3

3．木　　器

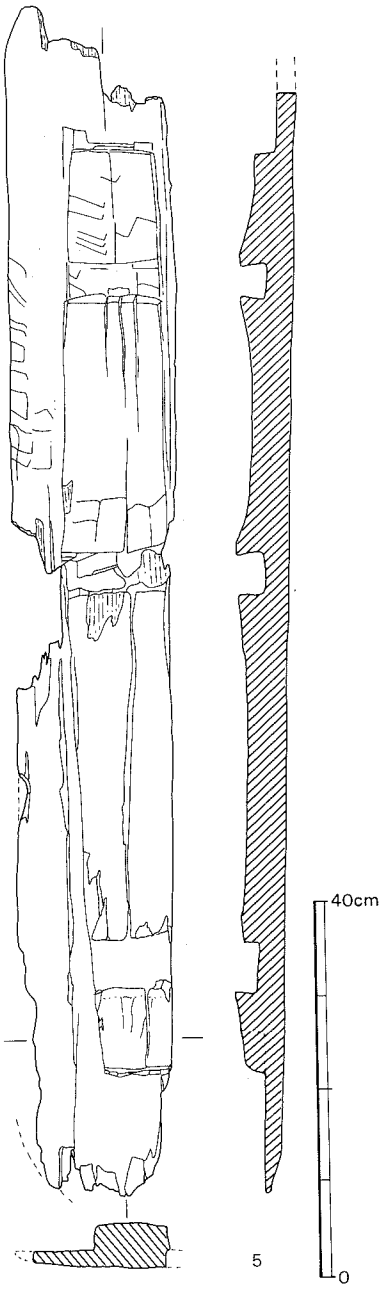
23次里田原遺跡調査で出土した木製品千余点には，矢板，杭等の遺構材を多く含んでいる。本稿においては，これらについては抽出的に掲載することとし，各種木器194点について各調査区毎に略述することとした。

今次の調査が旧河道という場所からして，包含層は明らかであるものの，包含層中の細い分層状態は望めない憾みがあった。但し，第440区以東地区におちては弥生前期後半～終末の土器が圧倒的に多く，以西地区においては中期初頭の資料が増大することは確実である。したがって，以東区と以西区の南北岸においては時期的に遺跡が分れる可能性が強く，木製品も時期的には，440区を境界にして時期的な区分が大要可能であろう。

木器の種類としては，**1 農具，2 土具，3 恭敬具，4 狩猟具，5 日用具，6 運搬具，7 建算材，8 遺構材**に大要分れる。



第64図　第580区の木器



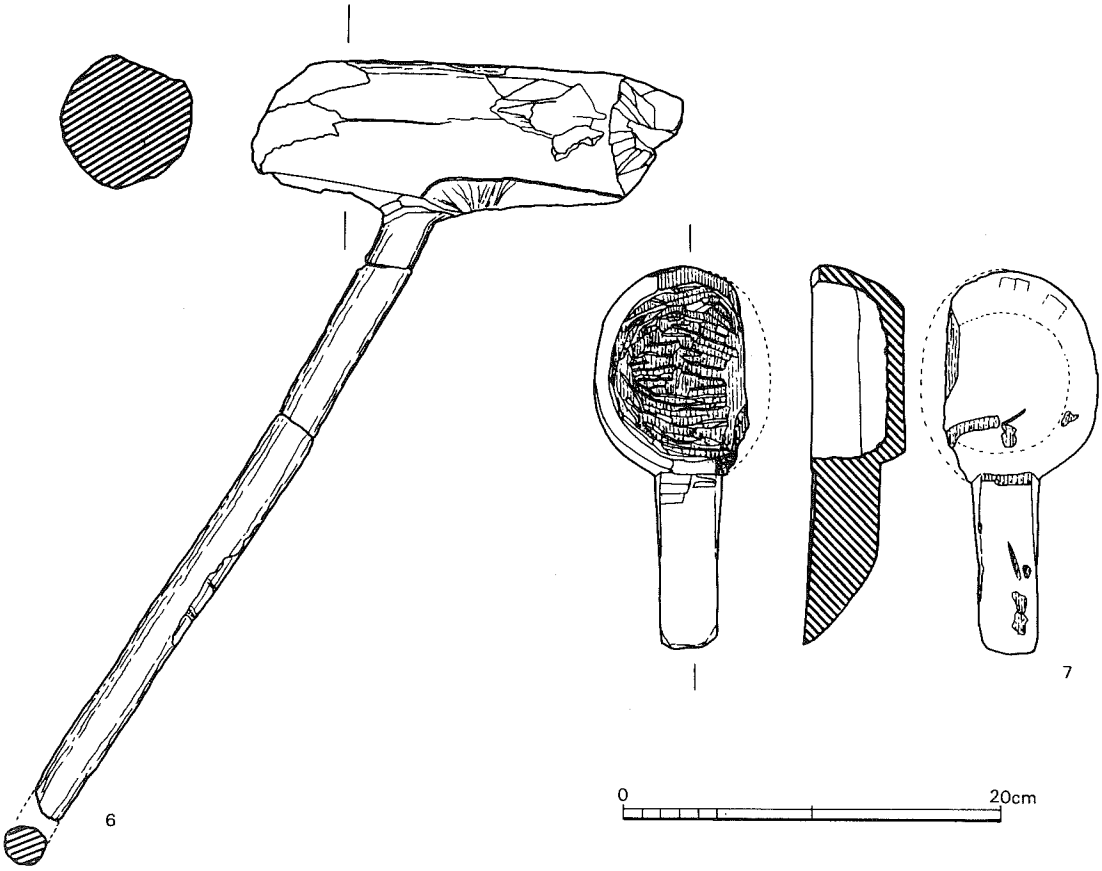
第65図　第530区の木器①

第580区の木器（第64図）

1 は扁平な板でできた人形形の木器で現存長18.6cmを計る。上下同形の形状であれば，糸巻き具の可能性がある。**2** は広鍬で，柄と鍬身が70°の角度をもって組合せられている。柄は手どまりが削り出され，下半部断面は丸く，鍬身装着部は方形の断面になる。上端から7cm下際に段がつけられ，鍬身固定用の三角形のクサビ（今でいう「コミ栓」）止めになっている。鍬身は長円形になるらしいが，柄の太さと，柄穴の間に「コミ栓」の分の余裕がある。鍬身の柄穴は斜にあけられている。従前の里田原遺跡で，鍬身が斜に着くこの種の広鍬は検出されていないが，同種のものが，福岡市那珂久平遺跡[註1]で出土している。但し，那珂久平例は鍬身着装の方途と鍬身の形状が異る。**3** は530区等で出土した橇状木製品の未成品と考えられ，扁平な逆T字形の断面を有する。板状部（滑走体部）から断面台形の隆起部が一木から削出され，滑走体部下面（T字の横棒部分）がすでに反りがつけられている。堅果加工施設の蓋材の一部に用いられていた。この種橇状木製品の未成品は，東大阪市の鬼虎川遺跡[註2]に出土例がある。**4** は堅果加工施設の蓋の一枚で上下端の整形が見られる。

第530区の木器（第65・66図）

5 は橇完成品である。図の平面図右辺が欠損しているが，復原幅約20cm，上下復原長134cmを計る。上下端はスキー状になり，幅広の隆起部が一木から削出され，両端は滑走体部と直角になる。隆起部に3個所の横木装着溝があけられ，その断面は台形となり，横木の固定をはかっている。また隆起部の横木装着溝間は中くぼみになっているが，その意図については不明であり，卓見を希望する。この種の橇は単体で用いるものでなく，「二双舟」の状態に2本を結合して用いる運搬具であり，東大阪市鬼虎川[註3]例では，横木の残った好資料

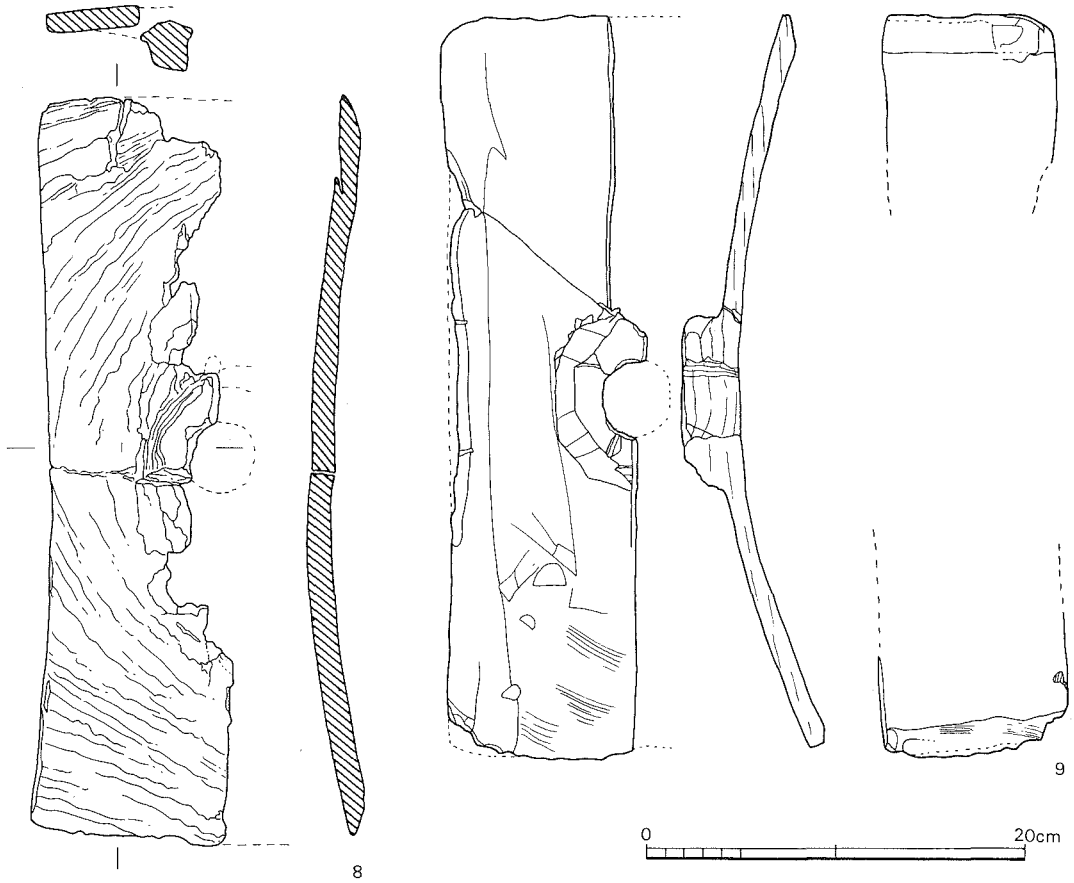


第66図　第530区の木器②

が出土している。本資料は鬼虎川分類に従えば長さの点でA類，隆起部の横木装着溝がある点でＢｂ類に属する。滑走体の底面は上下端に反りがあり，左右にも反りがある。Ｔ字形の状態からは左右が分らない。**6** はサカキの分枝部を加工した手斧の柄未成品である。65°の角度を有し，標準的な角度をもつ好資料である。手斧台部は丸木の状態で残されており，後述の分類でいう形式は分らないが，握柄部分の太さ，台部上半を半分程度削り落した状態を想定すれば，Ｉ型未成品であることはほぼ確実であろう。**7** は杓子である。掬取部の一部を欠損しているが，全体の形状は十分知り得る。掬取部の底は平に削られ安定を計っている。把手は下端を削って尖らせているが意味は不明である。掬取部内面には削り痕が残り木器の内刳りの困難さを示している。

第470区の木器（第67～74図）

8・**9** ともに，従前の里田原遺跡で最も多量に出土している広鍬の鍬身である。着柄孔は鍬



第67図　第470区の木器①

身と直角に開けられ，柄壺は楕円形をおびて突出しているが，柄壺上下端に緊縛用の突起をもつ。柄壺は，鍬身の中央に作られ，鍬身は反りがある。**8**の平面図左側が樹芯側，右側が樹皮側である。**9**の裏側両端に稜が見えるが，ほとんど使用痕は見られず，また柄壺部の削り出しも角張っているところからして，この資料は，完成直前のものと考えられ，本遺跡広鍬の標準的長さを示していると考えられ，38.8cmを計る。このことは96図128に示した未成品41.2cmに近く，完成段階の規模を知り得る好資料である。**10**〜**12**も広鍬である。10は柄壺突起のよく残った資料，11は柄壺が剝落した資料，12は使い減りがあるが柄壺の状態がよく判る資料である。**13**は広鍬の製作工程を示す未成資料である。**14**は狭鍬，**15**は組合せ鋤上半部の資料で緊縛孔の一部が残る。**16**はスコップ状の鋤で握柄が一部欠損している。**17**は竪杵で木下正史氏のいう[註4]B型，従前，夜臼期に属する出土資料（A型）が1例里田原から出土しているが，出土量よりすれば，B型が圧倒的に多い。第70図の**18**・**19**はイチイガシ，鍬の製作工程資料で，径50cm程度の丸太をミカン割8等分した広鍬第2工程資料で，**19**の方が若干進んだ工程である。**20**・**22**

はサカキの分枝部を利用した手斧II型の柄である。台部装着溝が残り，上面に反りがつけられている。台部の下際，握柄上半部に穿孔がある。21は小形の手斧未成品で台部上面が削りおとされている。第123図に示した手斧I型であるがa～cいずれかは判然としない。23はよきの木柄で全長を知り得る好資料である。24は用途不明であるが円筒状になる木器の一部で，図の上端はこまかく3段に作られ，幅広の帯状造り出しが3条ある。上と下の帯状造り出しには縦方向，中位の帯には縦横方向に穿孔がある。25も使途不明の高坏脚状木器で裾の開く下半部と，糸巻状の上半部が一体になっている。27は下駄足形の高脚容器（案）である。長円形の容器部の下に高脚がつくが，長方形の窓がつく。26・30・34は短い角柱状の木器である。35・36は削り出しのある棒状木器で用途不明。31・32は護岸遺構材である。

第470・460区間畦畔部の木器（第75～77図）

37は広鍬。38・39は小型手斧の未成品で，すでに台部上面が削り出されている。40はよきの柄であるが，握柄下端が太く削り出され，全長を知り得る。41はカヤ材半弓で弓弼が残り，全体に半丸に削られている。43は矢板，44は護岸遺構材である。45は円筒状組物の一部である。わずかに反りがあり，上下に小孔が連続する。46は鍬の柄らしく上下端とも丁寧に仕上げてある。

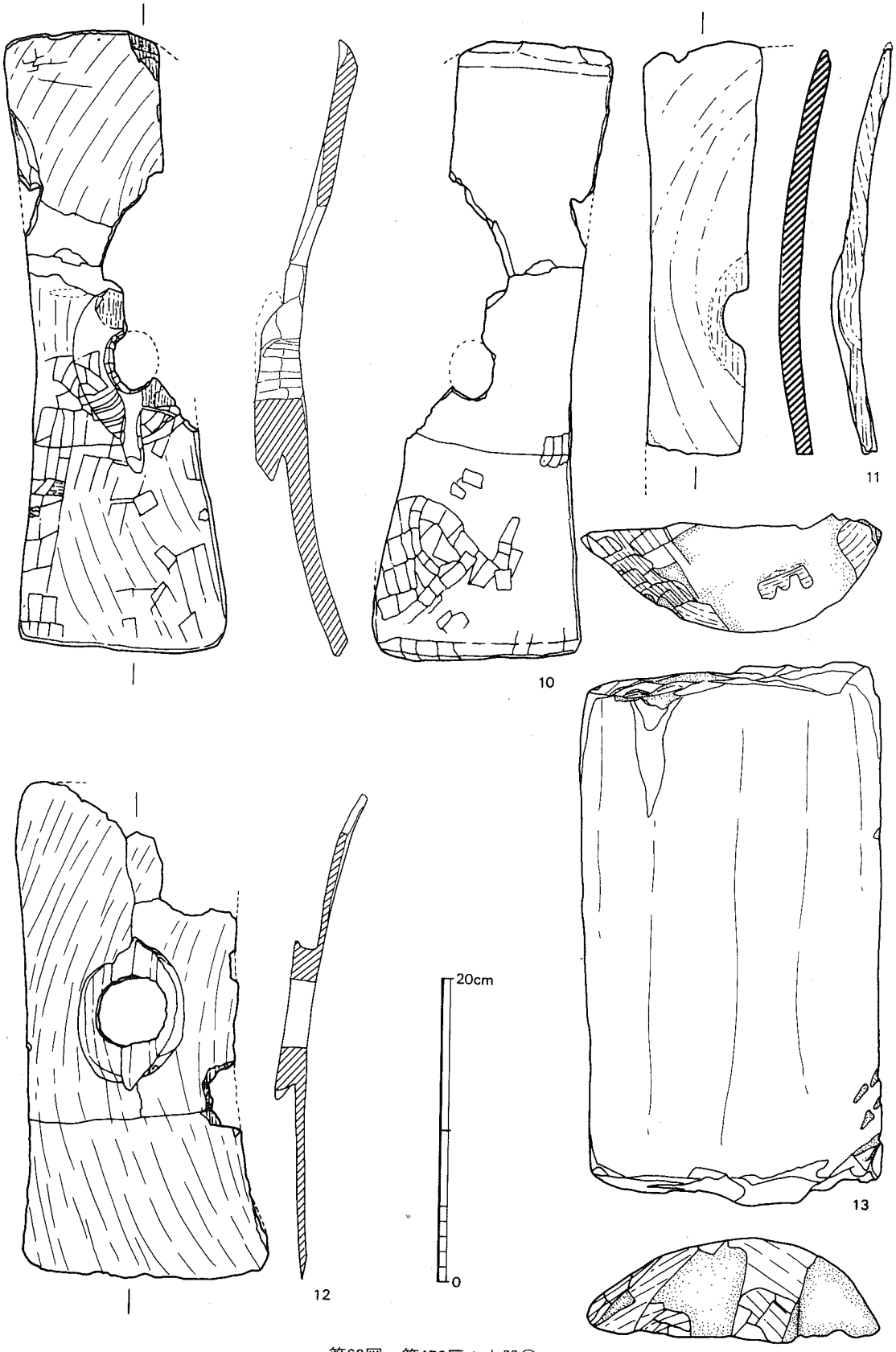
第460区の木器（第78～89図）

47～53の7点とも広鍬である。突起のある柄壺の状態がよく残った資料群で，49は使い減りが激しい。54・55は横槌，56は竪杵で下端の削りは丁寧である。57は現今のスコップ状鋤で掬取部が両側欠損しているが，一本を斜に削り落した例である。58も鋤であるが組合式になる。59はよきの上半部で削痕がよく残っている。60・62・65は手斧II型，60には握柄上半部に穿孔がある。61・63・64は手斧木柄の未成品，63は台部両側が削ってあり，64は台部上面がすでに反りがつけられており，共にII型の未成品であることがわかる。66・67は下半部が刳りこまれた高坏脚状の木器で糸巻状の中部と突起状の上部が一体になっている。66は削痕がよく残った好資料である。68・69は容器であるが68は無脚，69は窓のつく下駄足状の脚部に連る恭敬具である。70も無脚容器（槽）であり，口縁部に削りがある。71～72は漆塗り木器片で，わずかに湾曲している。内側に黒漆，外側には横帯と縦線を，黒漆地塗の上に赤漆で描く，74の上部に連る同一個体と考えられる。74は脚台を2ケ上下に連ねた形状で，欠損した上部は，容器状にひろがる。全体に赤漆を塗布した後，上半部には黒漆で文様を描いている。上半部の塗漆は複雑であり，13本の剣先蓮弁状文様を配し，蓮弁状文様の上際には広狭の赤帯を配し多数の朱線と朱点を描く。欠損した最上部は凹みがあり赤漆が塗布されている。上半部の文様は，一端赤漆塗布の後，文様部赤漆をかきおとしている。71・72と同一個体で，上端部が容器状に開く恭敬具であろう。73は如意形口縁をもつ，うす手の容器片で，下端に段がつけられ，脚台状のも

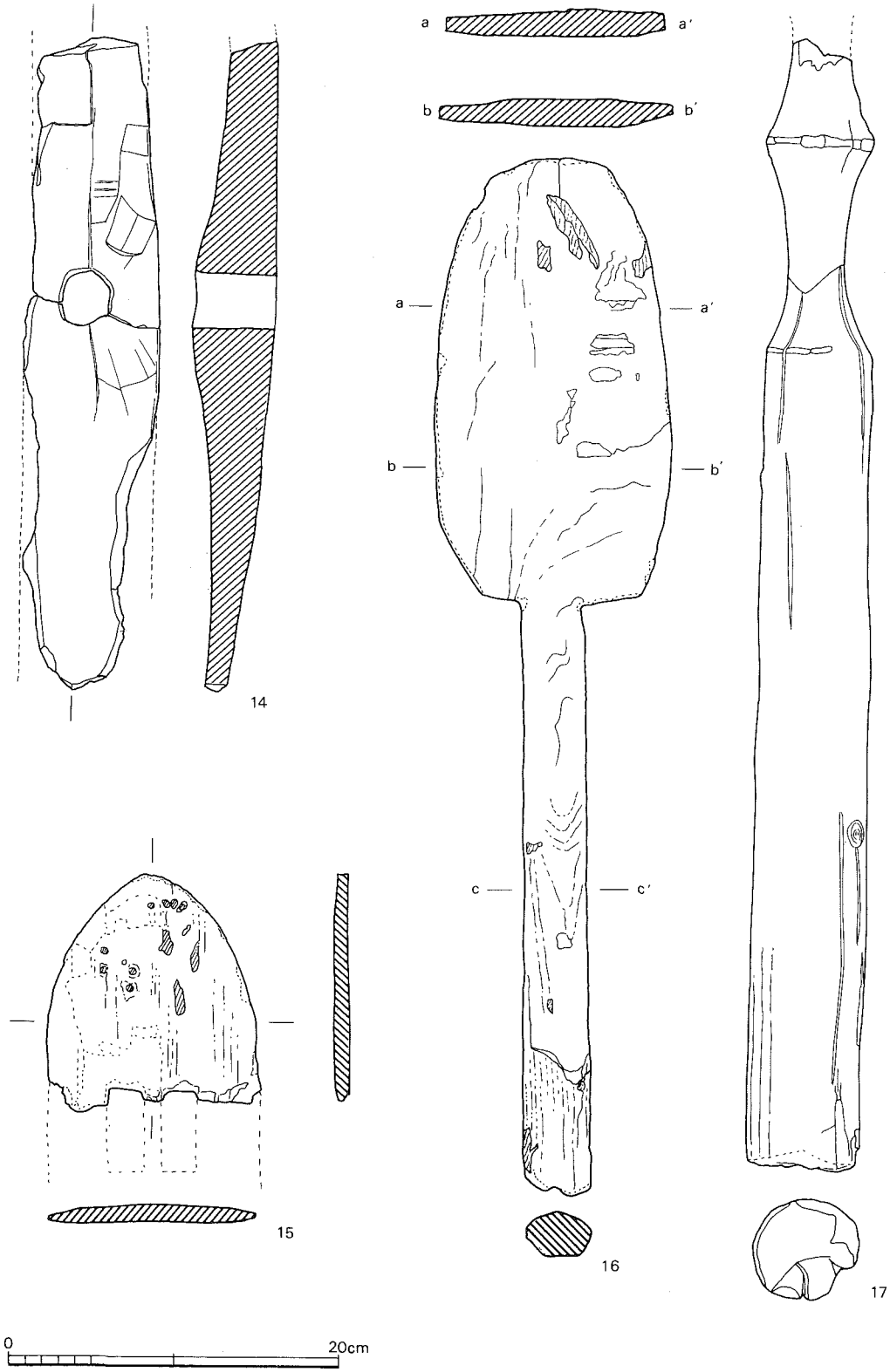
のとセットになるのかもしれない。内側は黒漆のみ，口縁部内側は赤漆，外側は黒漆地塗りの上に赤漆で文様を描く。広狭の横位の線群を6段配し，各線条群の間に，上から順に，縦位山型・斜格子・鋸歯文・斜格子・鋸歯文を描く。いわゆる如意形口縁の甕型土器の形状と文様を模した感がある。**75**は半分欠損した資料であるが，梯子状の造り出しがある。**76**は梯子であるが，下端らしく，丁寧な削りが下端に見られる。**77**は叉状の木器であるが用途不明。**78**は柱材の下端と考えられ，横木をはさむ造りになっている。**79・80**は半弓であり，ともにカヤ材が用いられている。**81**～**85**・**87**～**96**の15点は，護岸遺構材である。**86**は断面半円形に削られた木器で用途不明。**97**はうすく削られた，円筒状組物の一部である。上下端に小孔が連る。**99**は広鍬の柄と考えられ，丸く丁寧に削り出している。**100**は，きわめてうすく削られた容器片である。**101**～**105**は塗漆された組物で，わずかに反りがあり，長い二等辺三角形の平面観をもつ。2列の小孔が連り，紐で連結した痕跡が残っている。

第450区の木器（第90～94図）

106～**108**は広鍬である。107は使い減りが著しい。**109**は組合せ式の鋤で，こころもち中央が厚く作られ，上端に若干のくびれ，鋤身の中位に長円形の穿孔があり，柄を緊縛する構造になっている。**110**～**114**の4点は手斧II型木柄，**110**と**111**の握柄下端に懸吊用ないし懸吊用紐とおしの穴があり，全容を知り得る好資料である。いずれも台部上面が削られ，反りがつけられている。**111**は台部が緊縛溝が装着溝の外側にある。**110**～**112**の握柄上半部に穿孔があるが意図不明。**113**は小型手斧柄で，装着溝を緊縛溝がめぐるＩＣ型である。**115**は手斧木柄の未成品で，規模よりしてＩ型であろう。**116**は太い丸木材の下端にくびれがあり，男根状を呈する。**117**は低い下駄足状脚のある容器（槽）である。長円形の容器部はきわめて丁寧に削りこまれている。**118**はカギ状木器で，上方に紐懸のくびれが削りこまれ，下端は尖っている。天秤棒の両端に紐で吊す道具に似ている。**119**～**120**は建築材であろう。**119**は丸木の上端を方形に造り出し，下端は叉状になっている。**121**も掘立柱であると考えられ，下端は鋭く尖り，上端は折損している。**122**・**123**・**125**は矢板で護岸に使用されていた。**124**は図の右近から欠損しているが，本来は4孔をもつ田下駄であろう。**126**は半丸の断面に削り出され，両端の尖りも鋭い，張性が富むカヤ材が用いられ，突きオーコの類であるう。

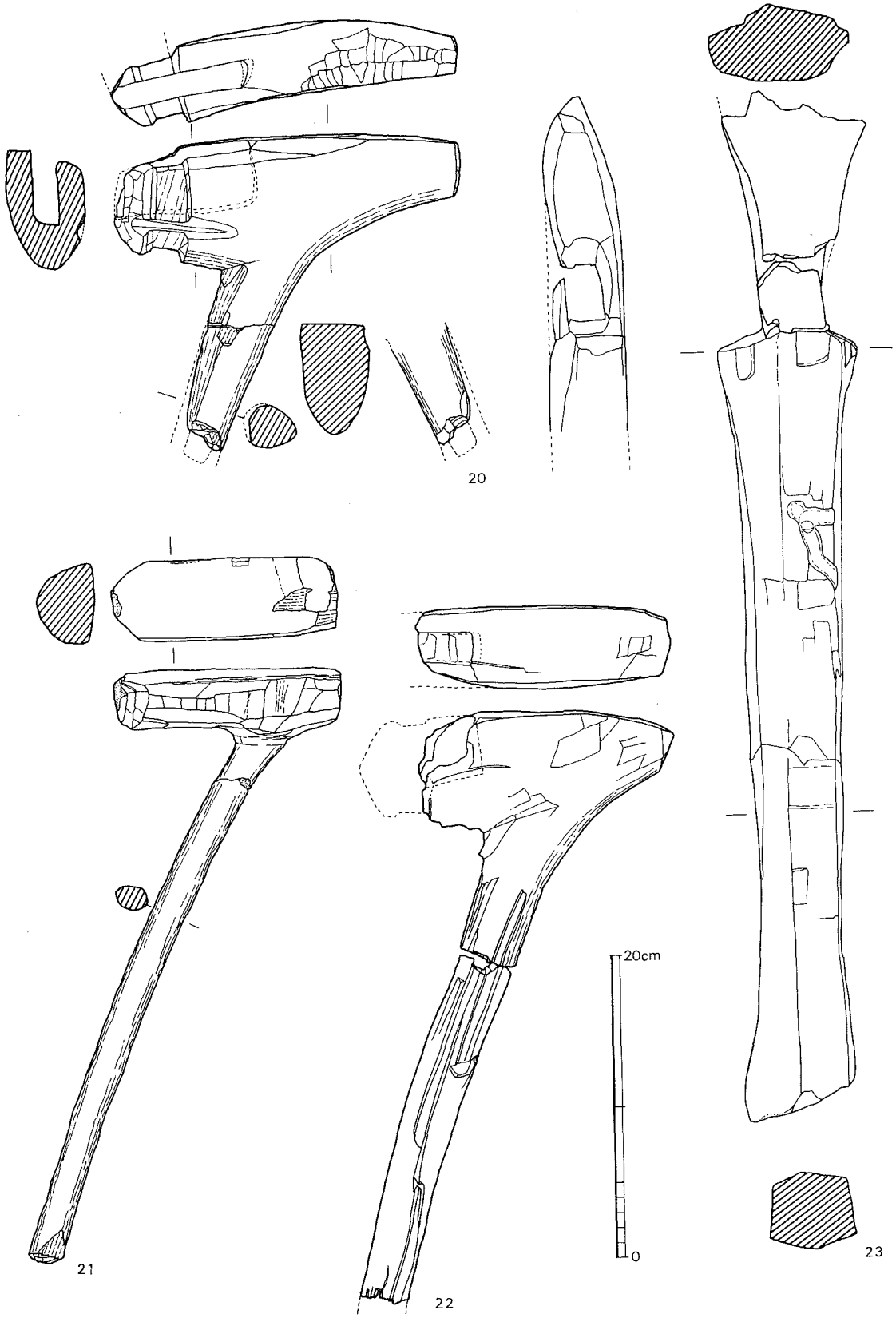


第68図　第470区の木器②

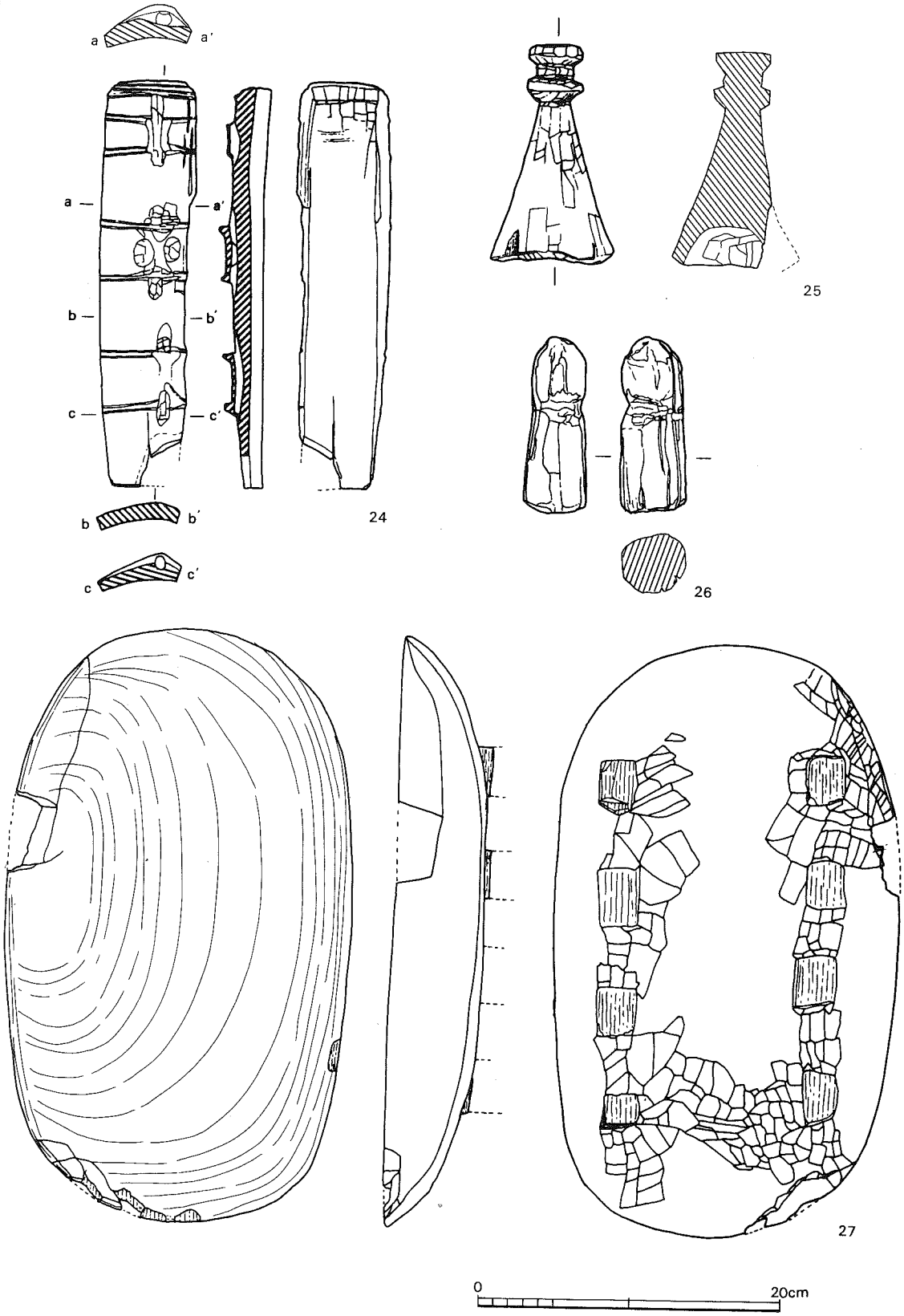


第69図　第470区の木器③

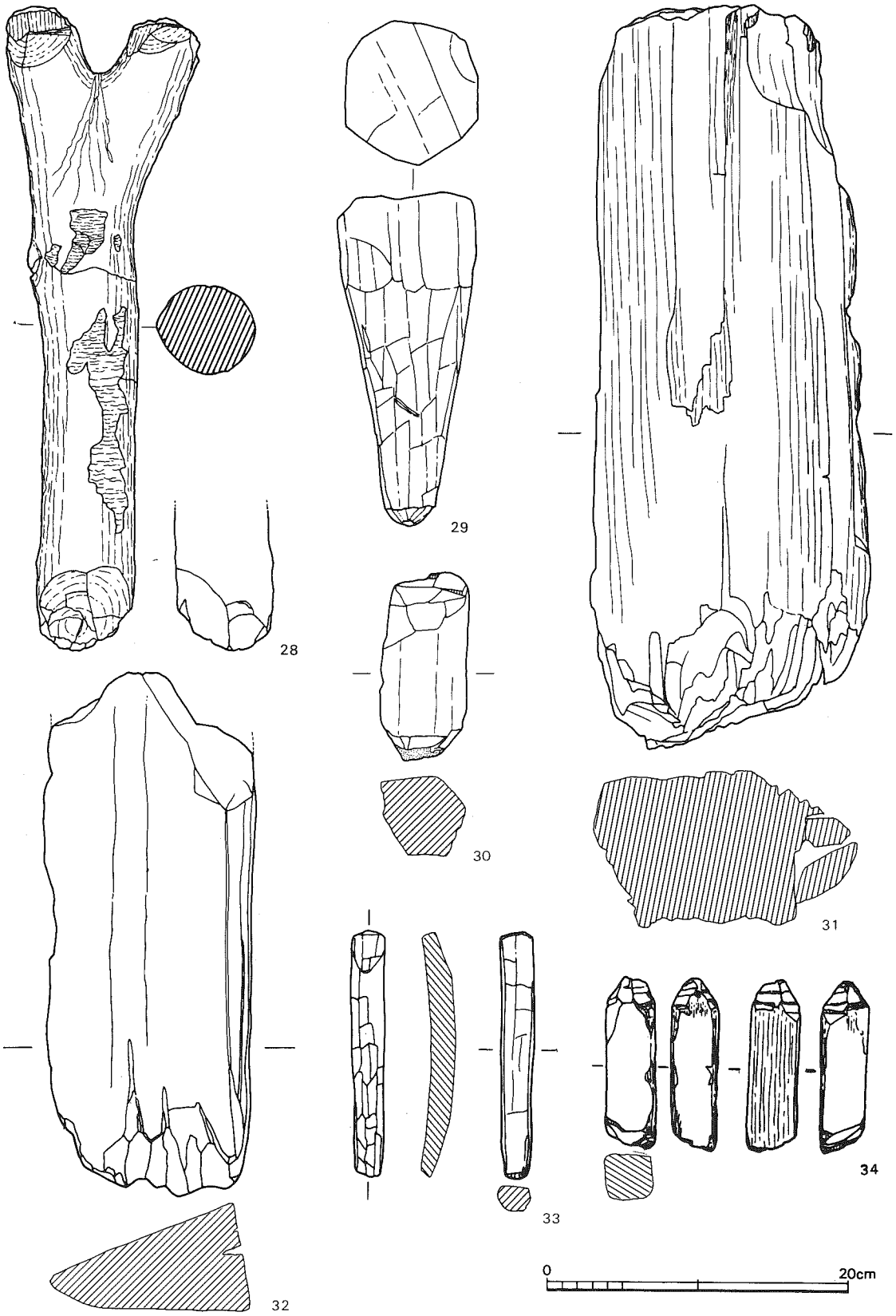
第70図　第470区の木器④



第71図　第470区の木器⑤



第72図　第470区の木器⑥



第73図　第470区の木器⑦

第430区の木器（第95図）

127は扁平な板を使用した糸巻き状木器，上下端が細められている。

第420区の木器（第96図）

128は広鍬未成品，柄壺はまだ方形の段階で，鍬身も肉厚の状態である。**129**は広鍬，柄壺突起は消耗している。**130**は狭鍬未成品，方形の柄壺は未だ穿孔されていない。上下が対照形とすれば96cm程度の長さである。**131**は広鍬の製作工程資料で，径50cmのカシ丸太を８等分にミカン割りしている。

第410区の木器（第98図）

132は手斧II型，台部後半部（図の右半）に緊縛した痕跡が残っており，装着孔の損傷を補う補修であろう。**133**は木栓状木器である。**134**は用途不明，図の上端は片寄って尖り，全体的に扁平であるが，両側にこまかい刻みが連続してつけられている。

第410・400区間畦畔部の木器（第99図）

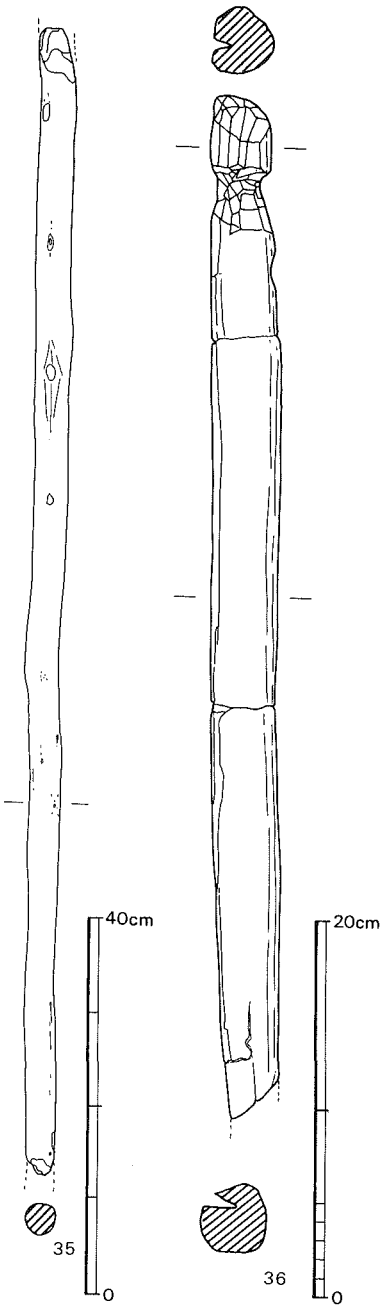
135は広鍬。**136**は小型の手斧木柄で，緊縛溝を特に作らず，尖端下部に「くびれ」を作るものでＩｂ型。削痕がよく残っている。**137**は半弓片で弓弼が残っている。

第400区の木器（第100図）

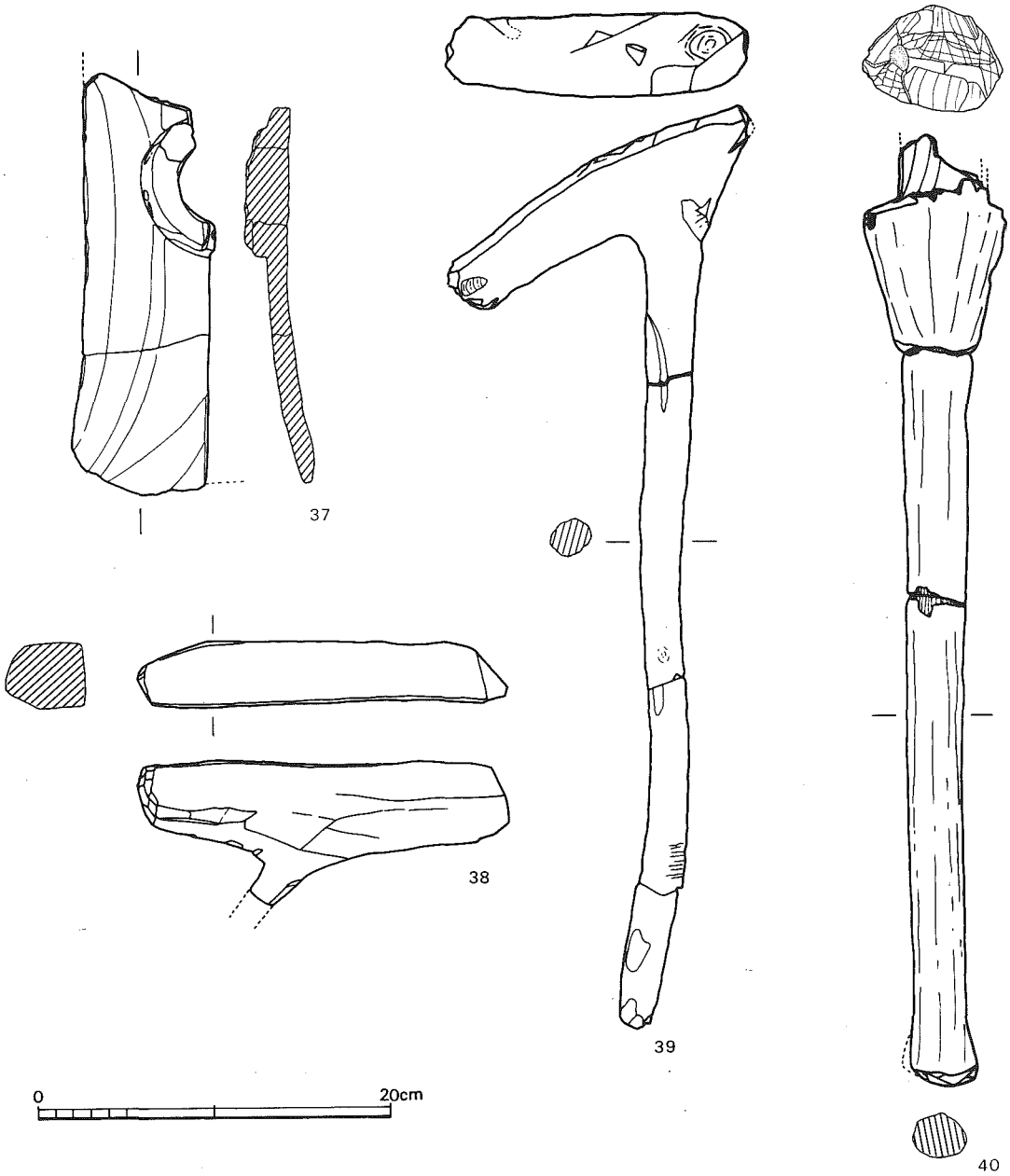
138は手斧III型の未成品。台部左側が削出されて扁平になり，反りがつけられている。図に見える台部面に装着孔が開けられる。

第380区の木器（第101図）

139は柄壺が剝落した広鍬，**140**は広鍬の未成品である。**141**は手斧II型の未成品であるが，台部上面がすでに削りだされ，反りがつけられている。

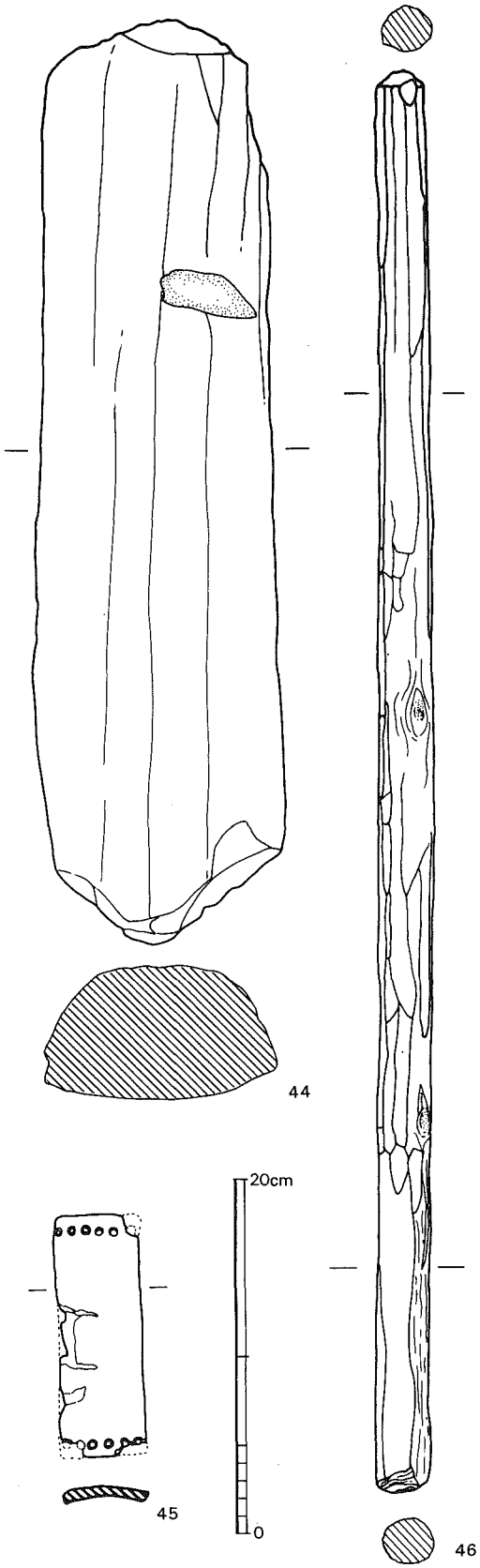


第74図　第470区の木器⑧

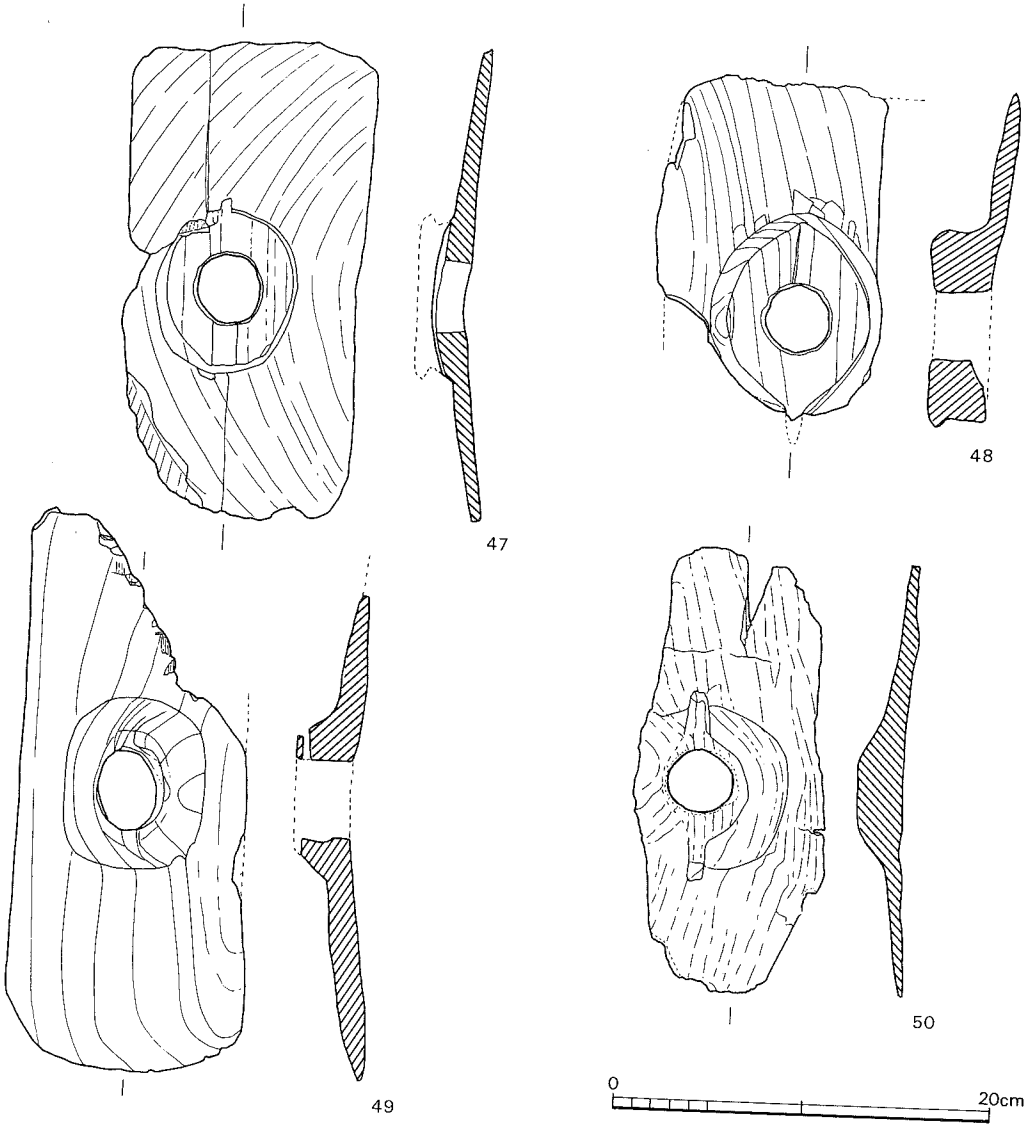


第75図　第470・460間畦畔部の木器①

第76図　第470・460間畦畔部の木器②



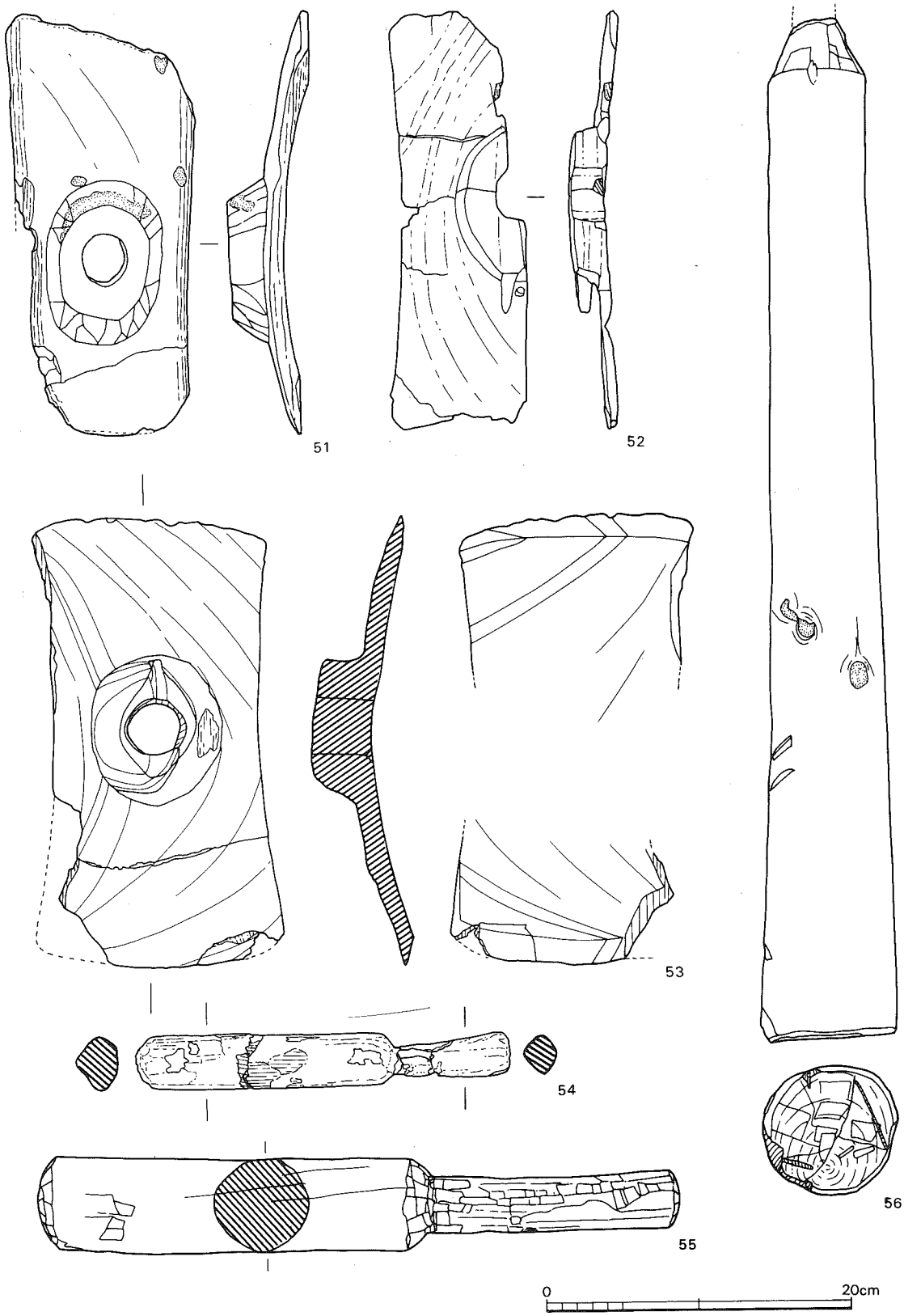
第77図　第470・460間畦畔部の木器③



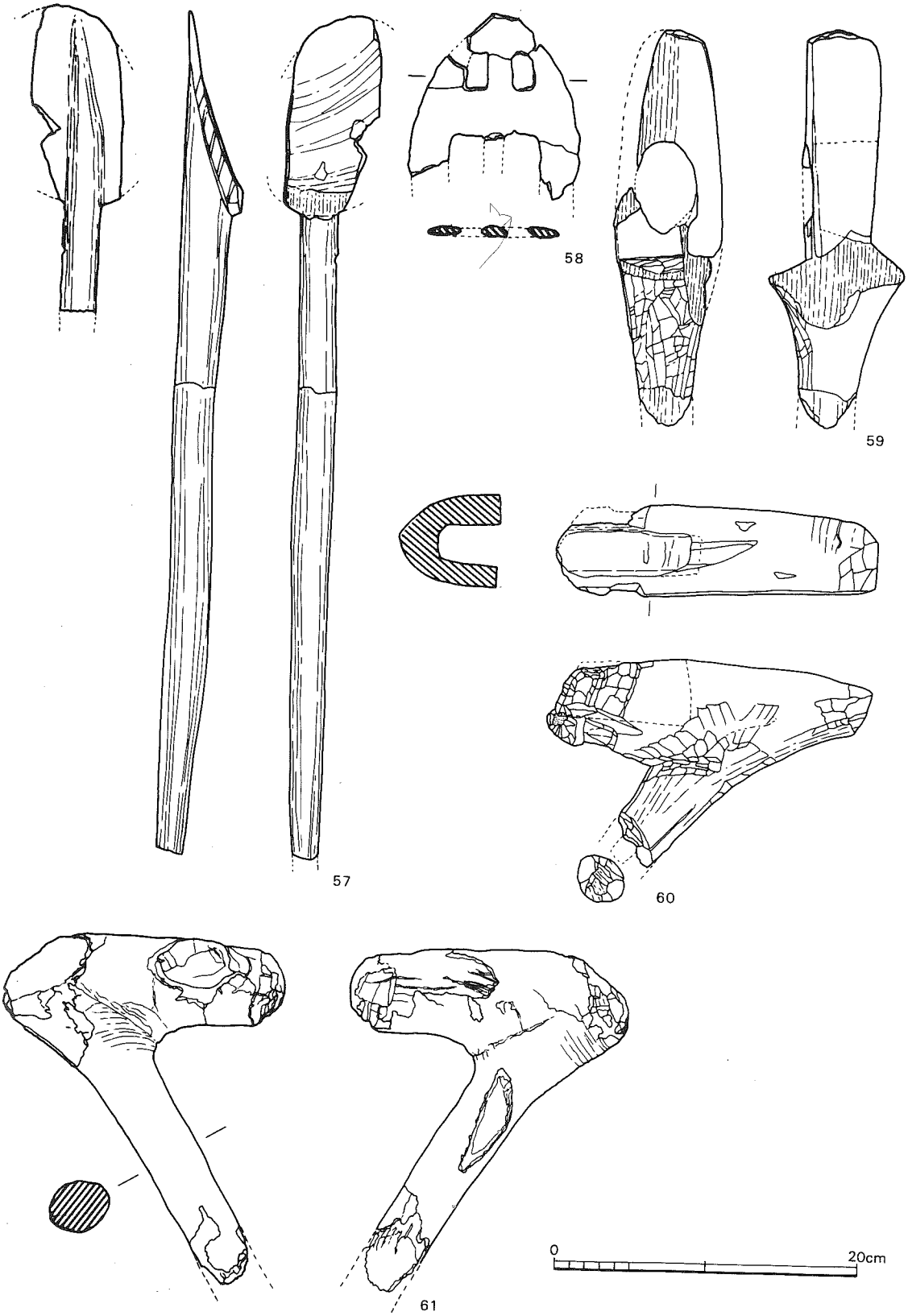
第78図　第460区の木器①

第370区の木器（第102～107図）

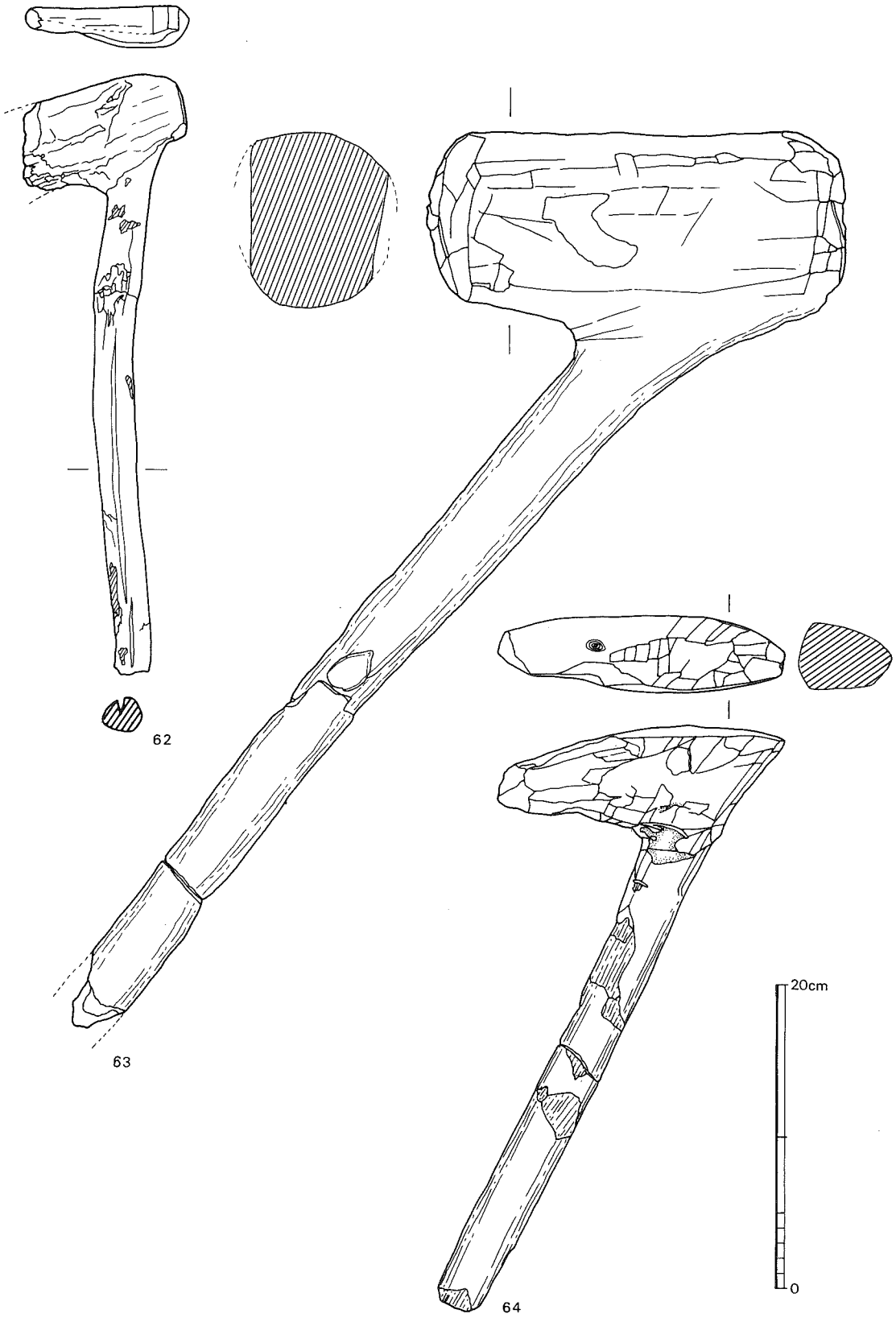
142は，径50cm程度のカシ丸太を８等分ミカン割りした，広鍬の製作工程資料である。**143**は狭鍬であるが，やや柄壺と反対面に反り，420区の資料とは反りが逆であり形式分類の必要がある。**144**は小型手斧と考えられるが，装着部の状況が欠損のためわからない。**145**は手斧Ⅲ型と考えられ，台部側面が削られ，上面も平坦になっている。**146**は小型の橇状木製品である。滑走体部の下面は擦痕が著しく，両端はわずかに反り上り，断面も両側が反っている。隆起部はゆるい山型になっており，３孔が穿たれている。形状と規模からいえば鬼虎川分類のＢｃ類にな



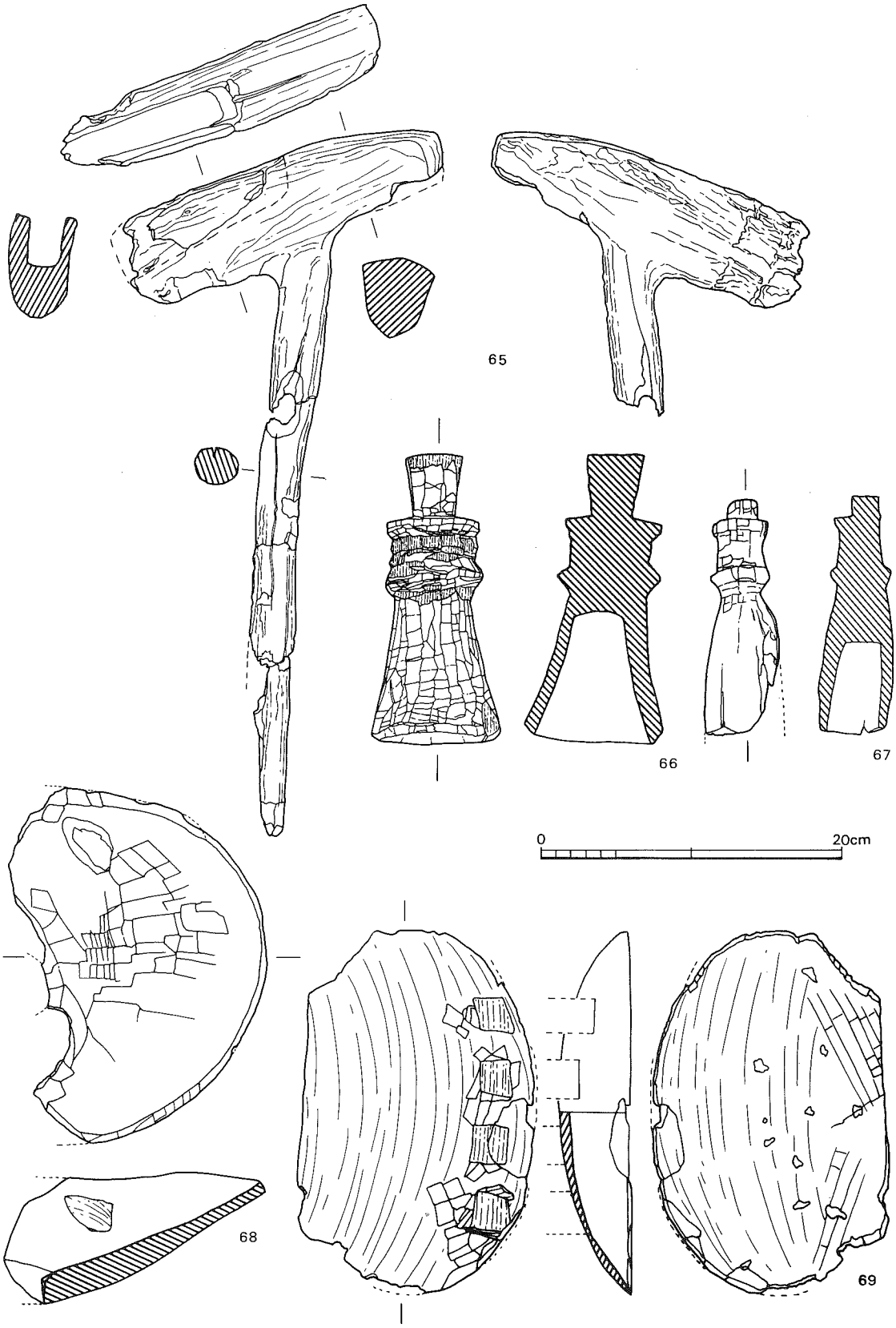
第79図　第460区の木器②



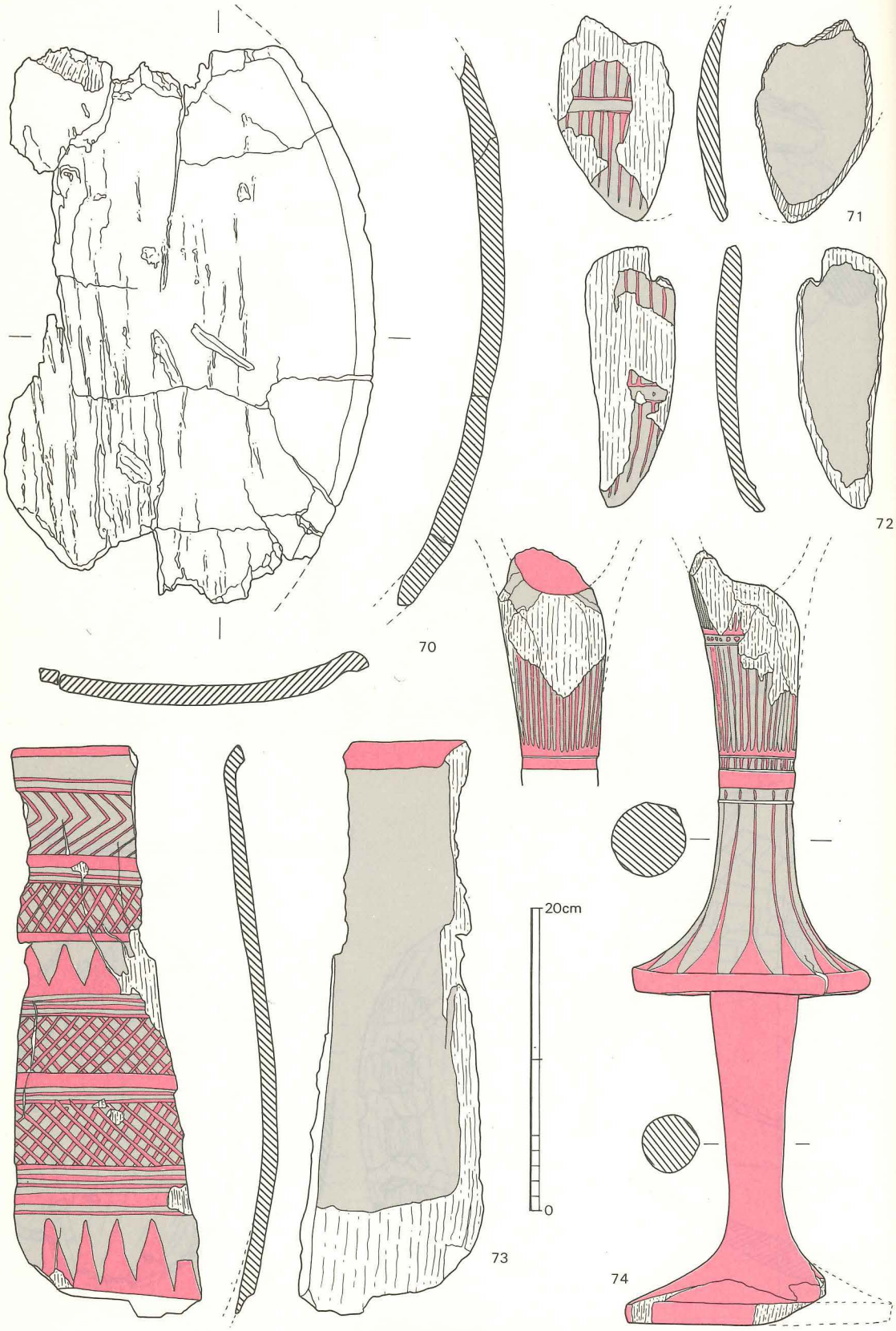
第80図　第460区の木器③



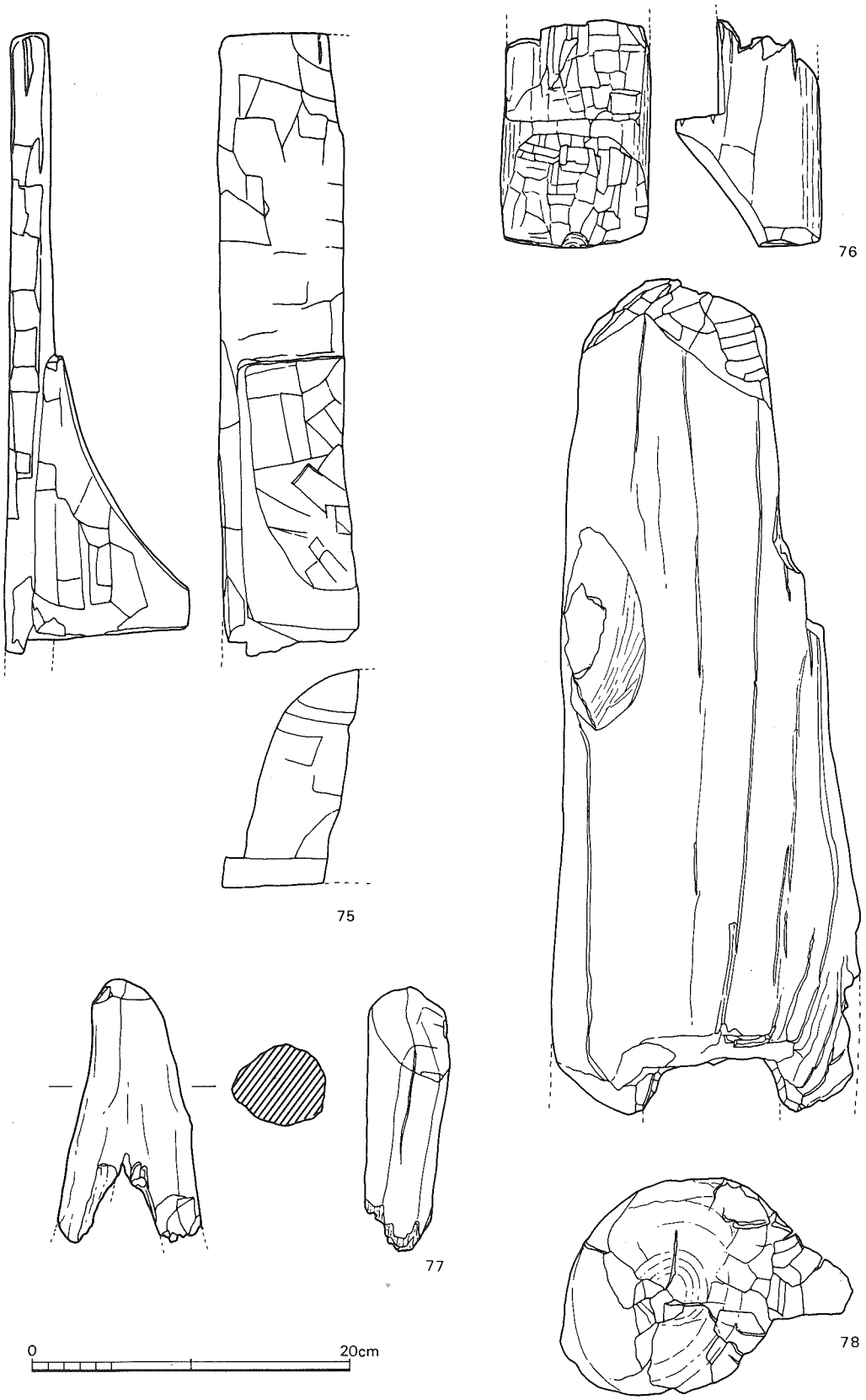
第81図　第460区の木器④



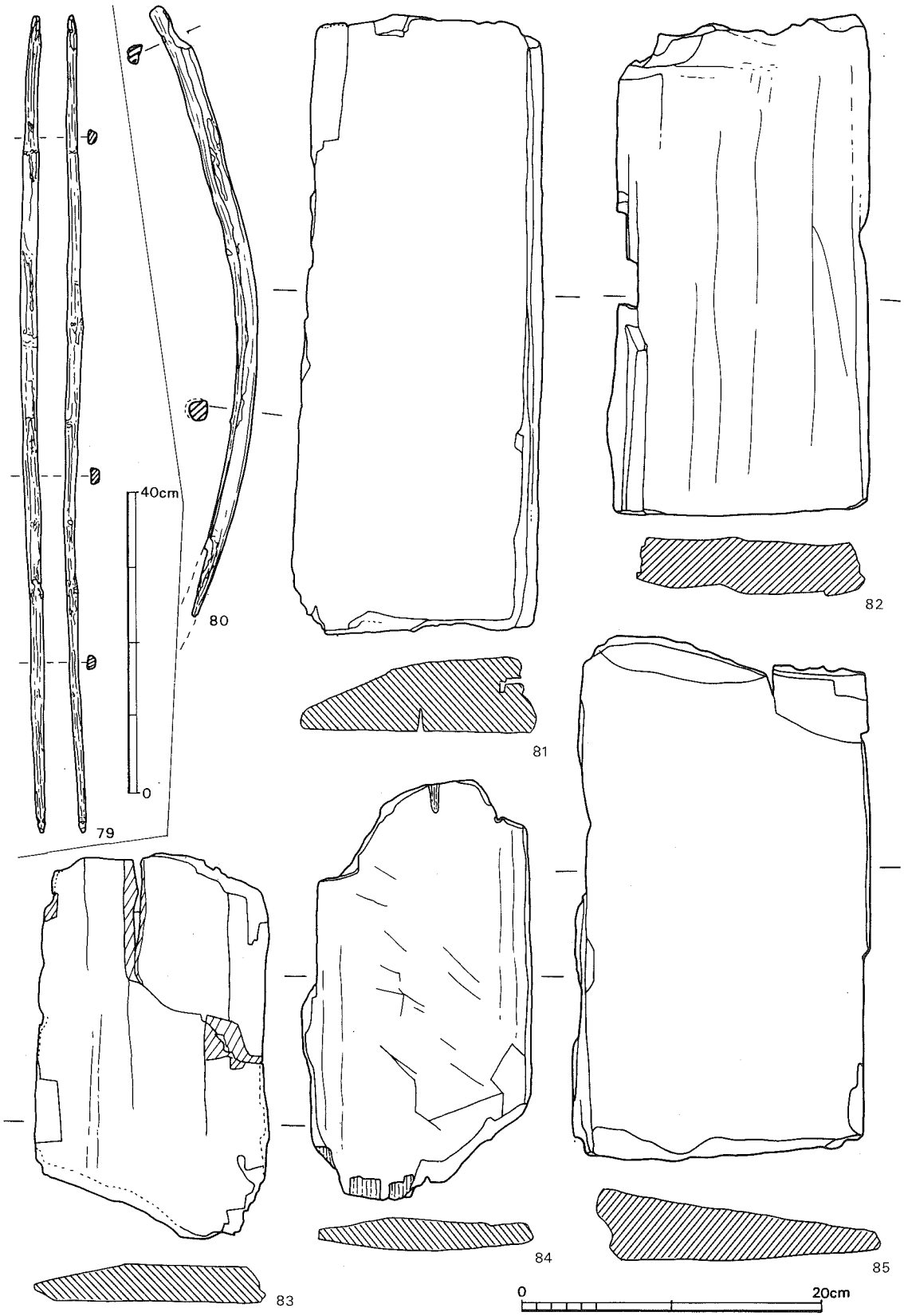
第82図　第460区の木器⑤



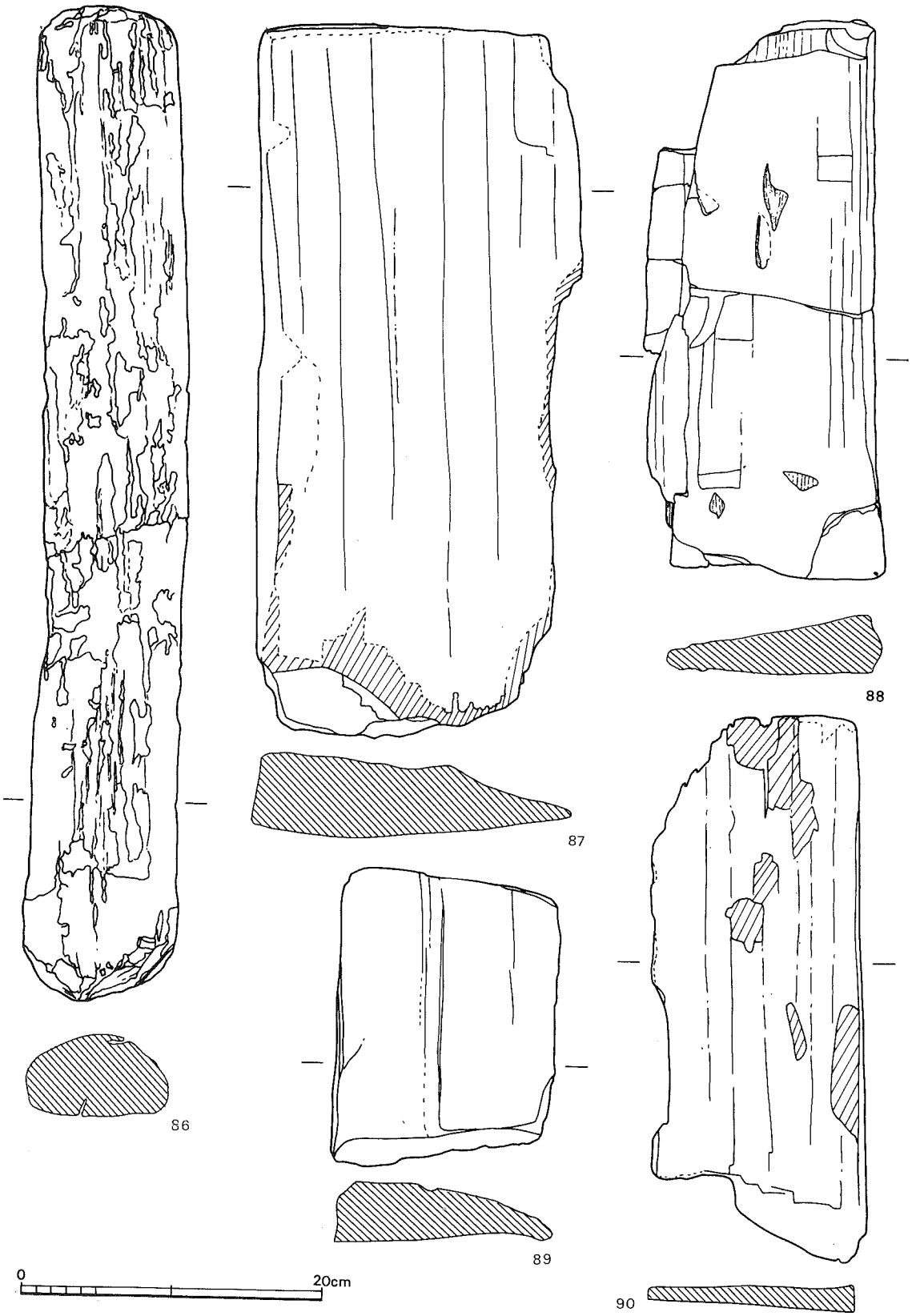
第83図　第460区の木器⑥



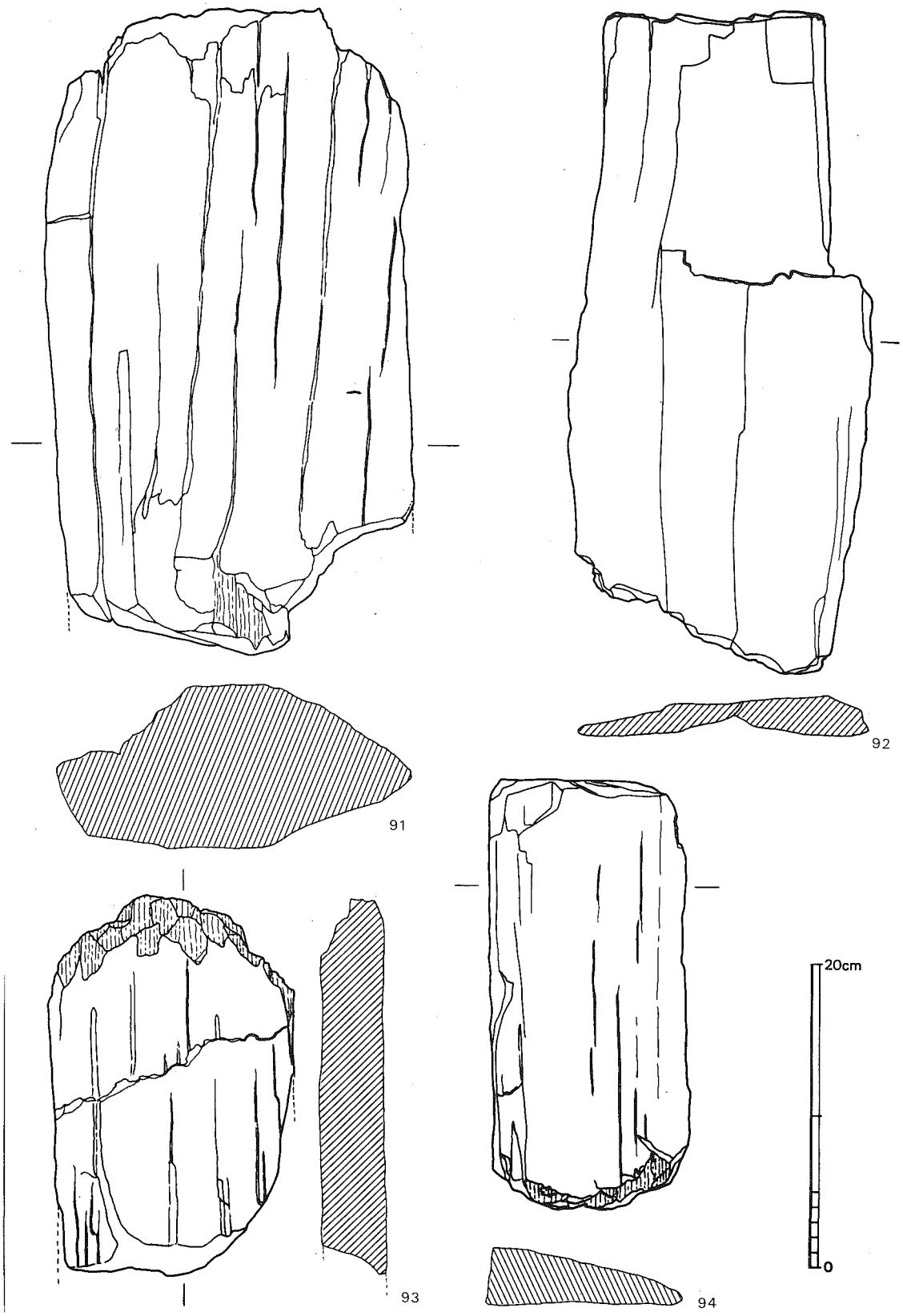
第84図　第460区の木器⑦



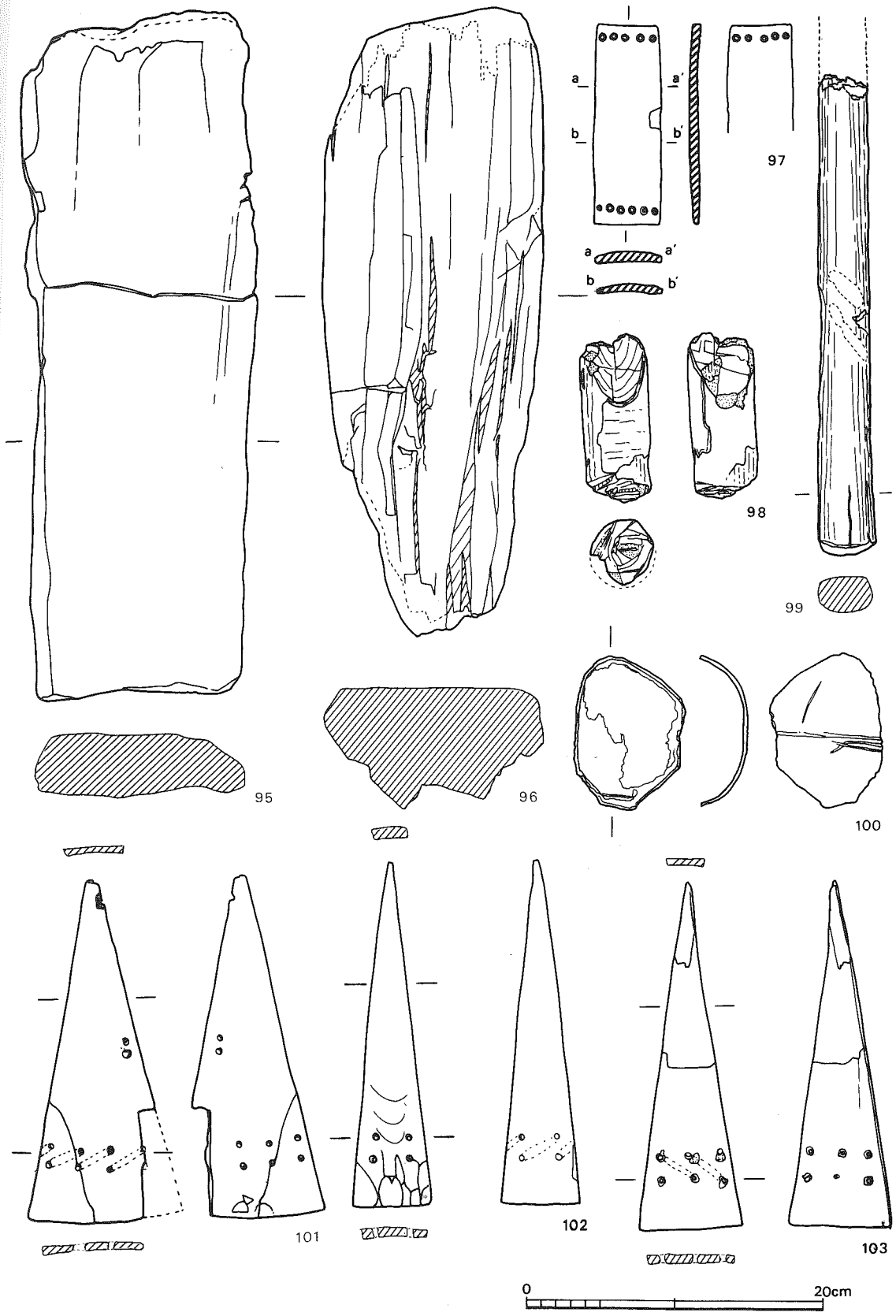
第85図　第460区の木器⑧



第86図　第460区の木器⑨

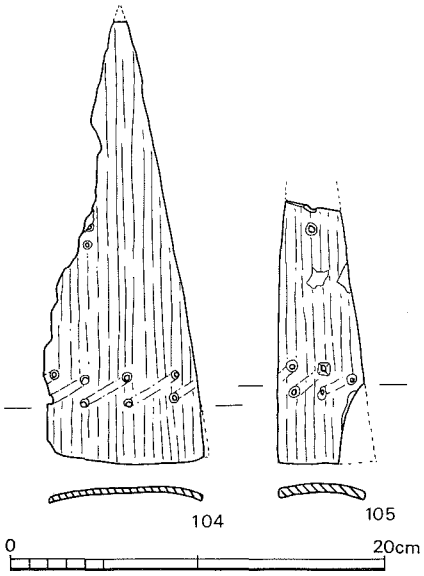


第87図　第460区の木器⑩



第88図　第460区の木器⑪

る。**147**は小型の手斧木柄で台部前半部業損傷しているが，装着溝の状況よりしてＩｂ型であろう。**149**は手斧Ⅲ型の未成品で，台部の左側面が削られ，反りがついている。**148・150**は「よき」木柄である。150は完成直前の資料であり，握りはまだ若干太目であり，削り痕もよく残っており，下端の処理も十分ではない。**151**は「よき」の完形品で形状・規模ともによく旧状を知り得る。**152・153**は，ともに建築材と考えられる。152は丸太の上端に柄穴を穿ったものであり，153は角柱状木材に組合せ用の溝を削りこんでいる。**154**は長方形の容器で肉厚に造られている。下面は，両端が舟底状に上っている。**155**～**157・159**は遺構材であり，各種の異る加工例を掲示した。**158**はやや扁平な厚板の端部を尖らせたもので建築材と考えられ，図の下端は十分に焼いて炭化させている。**162**は「よき」の木柄であるが石斧装着部を欠損している。装着部近くに斜に穿孔があるが，意図はわからない。**163**はヤス状の木器，イスノキが用いられ，図の上端は鋭く削られている。



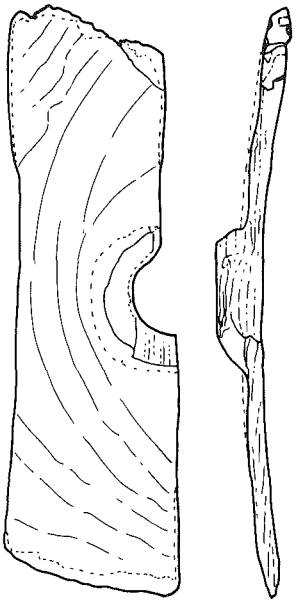
第89図　第460区の木器⑫

第360区の木器（第108～111図）

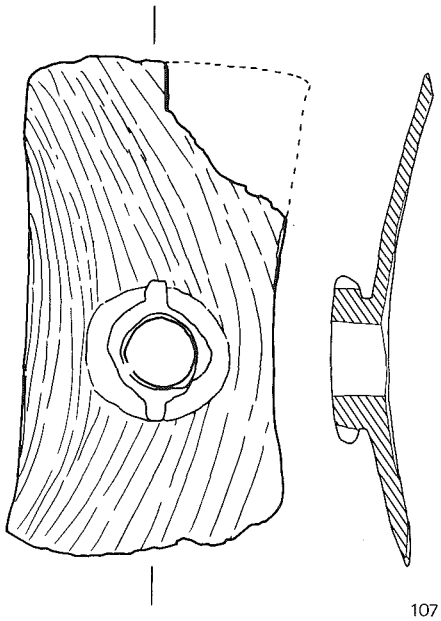
164～**166**は広鍬，164は半分欠損しており，166も柄壺部のみが残る。165はほぼ完形に近く，やや細めである。完工直前の資料らしく，削り痕がよく残った好資料である。**167**は鋤であり，長方形の穴が鋤身中央にある。**168**は長大な竪杵の完形品で，握りの部分は両手で保持するように作られている。**169**は，左側面に石器装着溝をもつ手斧Ⅲ型である。台尻にも溝を有するが，一種の補修目的であろう。**170**は小型の手斧木柄でＩｃ型である。**171**～**174**の４点は「よき」木柄であるが，ともに石斧装着部が損傷している。**175**は無脚の容器であるが精巧な加工がなされ，補修孔を有する。**176**は大型の容器で恭敬具に属する。下駄足状脚でなく，４箇所に突起を有する。**179・182・183**は尖端を有する棒状木器で，イスノキであろう，固木を用いている。**181**は鎌の柄らしいが，図の下端が欠損していて旧状は不明である。

第350区の木器（第112～115図）

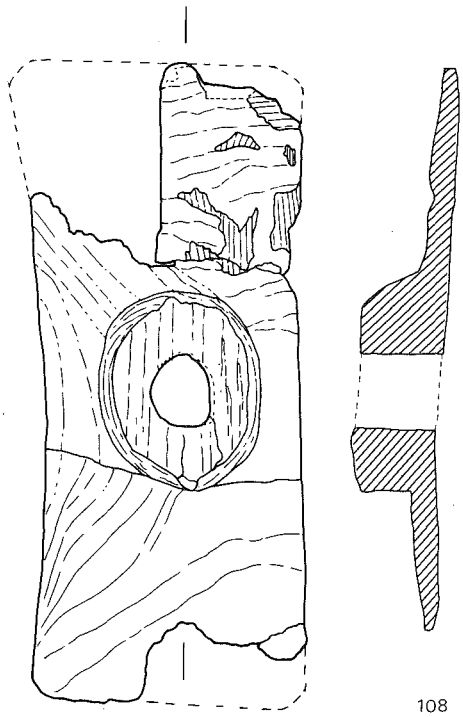
184～**186**は広鍬であるが若干欠損がある。**188**は竪杵であるが，曲った材が利用されている。**189**は手斧Ⅱ型で，緊縛溝を２箇所もっている。握柄下端に懸吊用の穴を有し，握柄上半部に穿孔がある。今次調査でこの種の穿孔は９例見られているが後項で触れる。**191**も手斧木柄Ⅱ型で



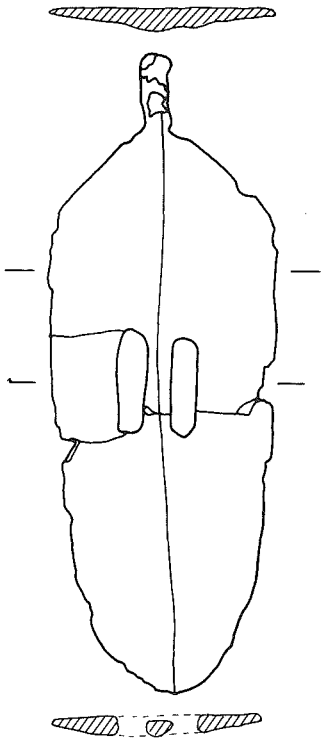
106



107

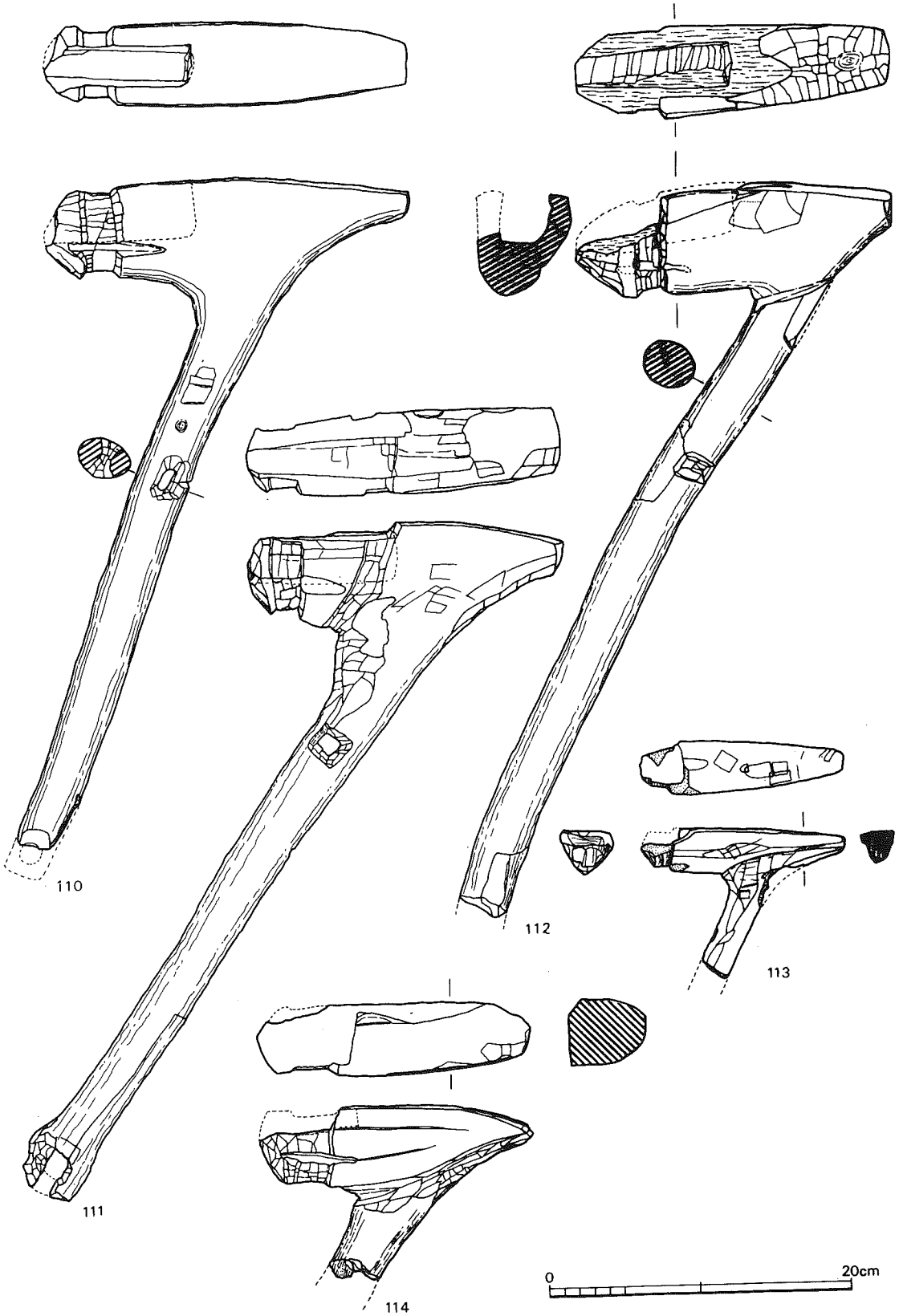


108

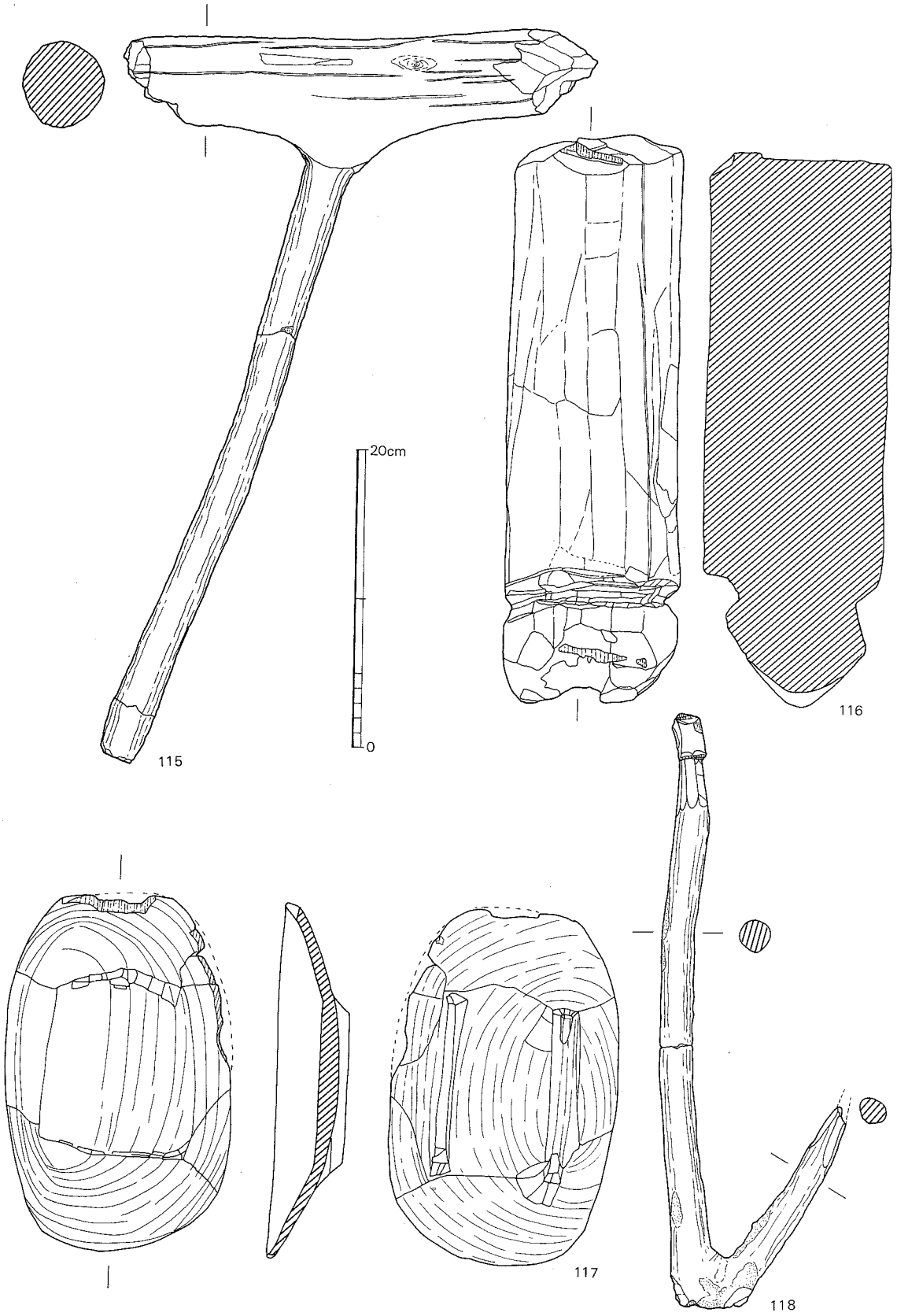


109

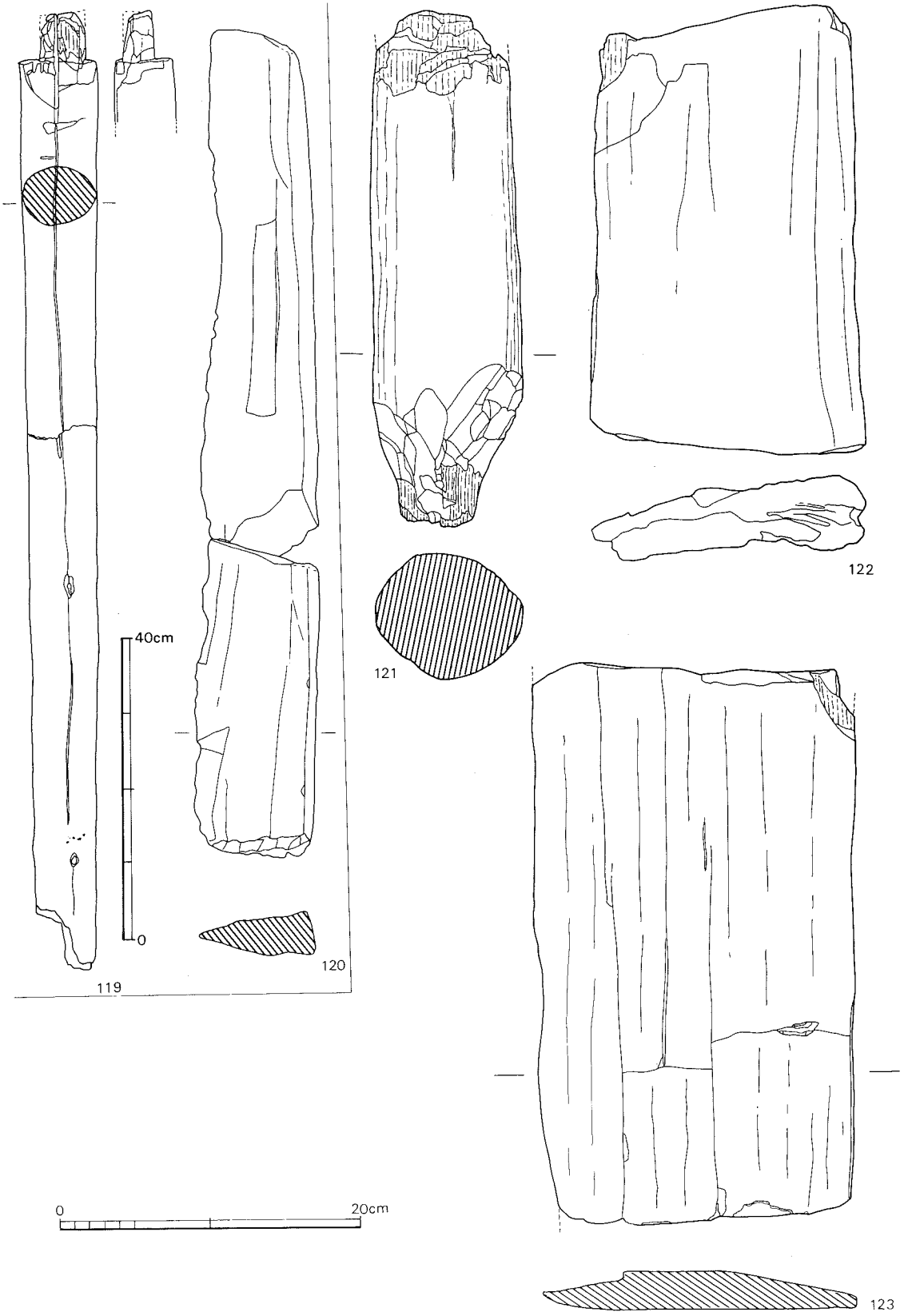
第90図　第450区の木器①



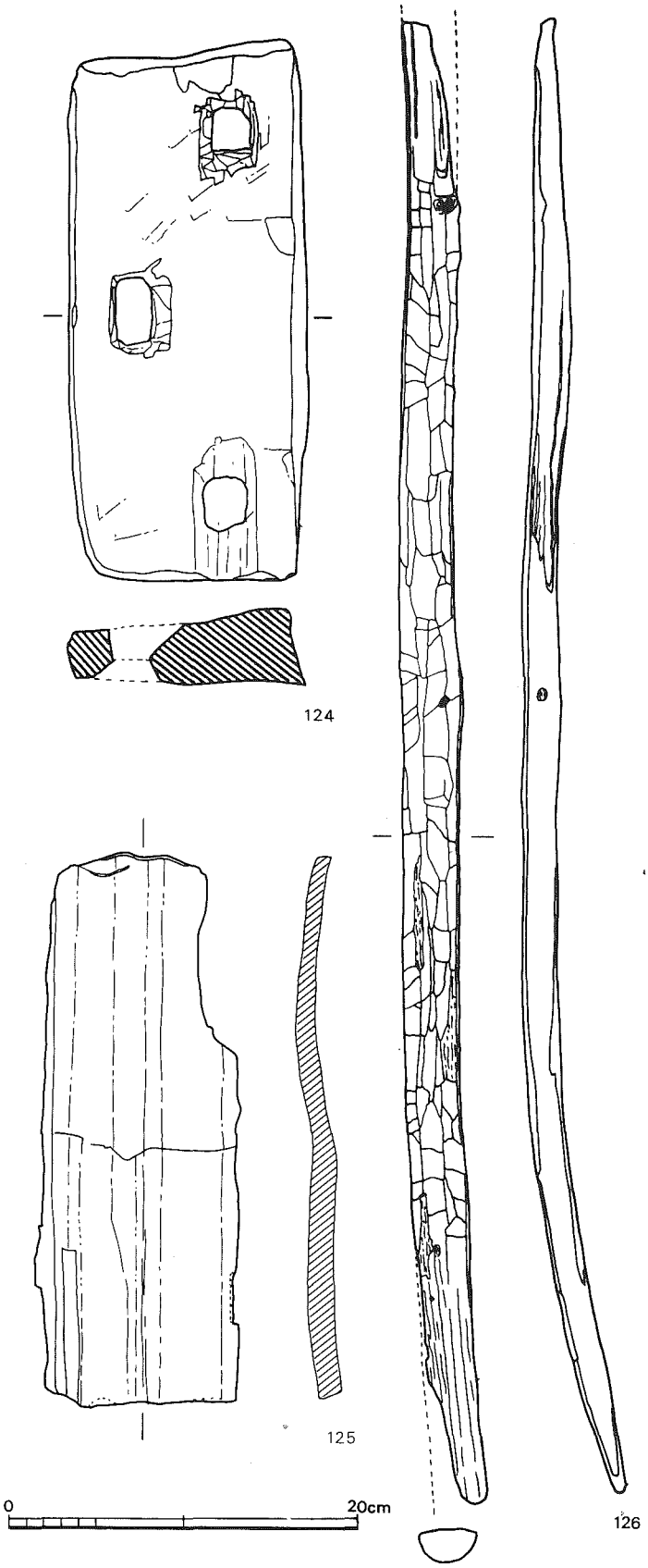
第91図　第450区の木器②



第92図　第450区の木器③

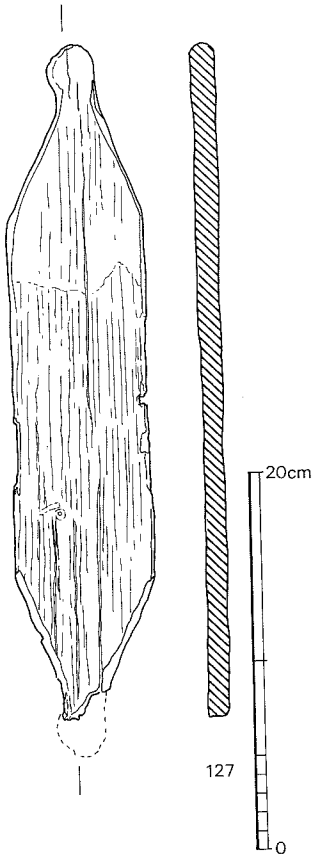


第93図　第450区の木器④



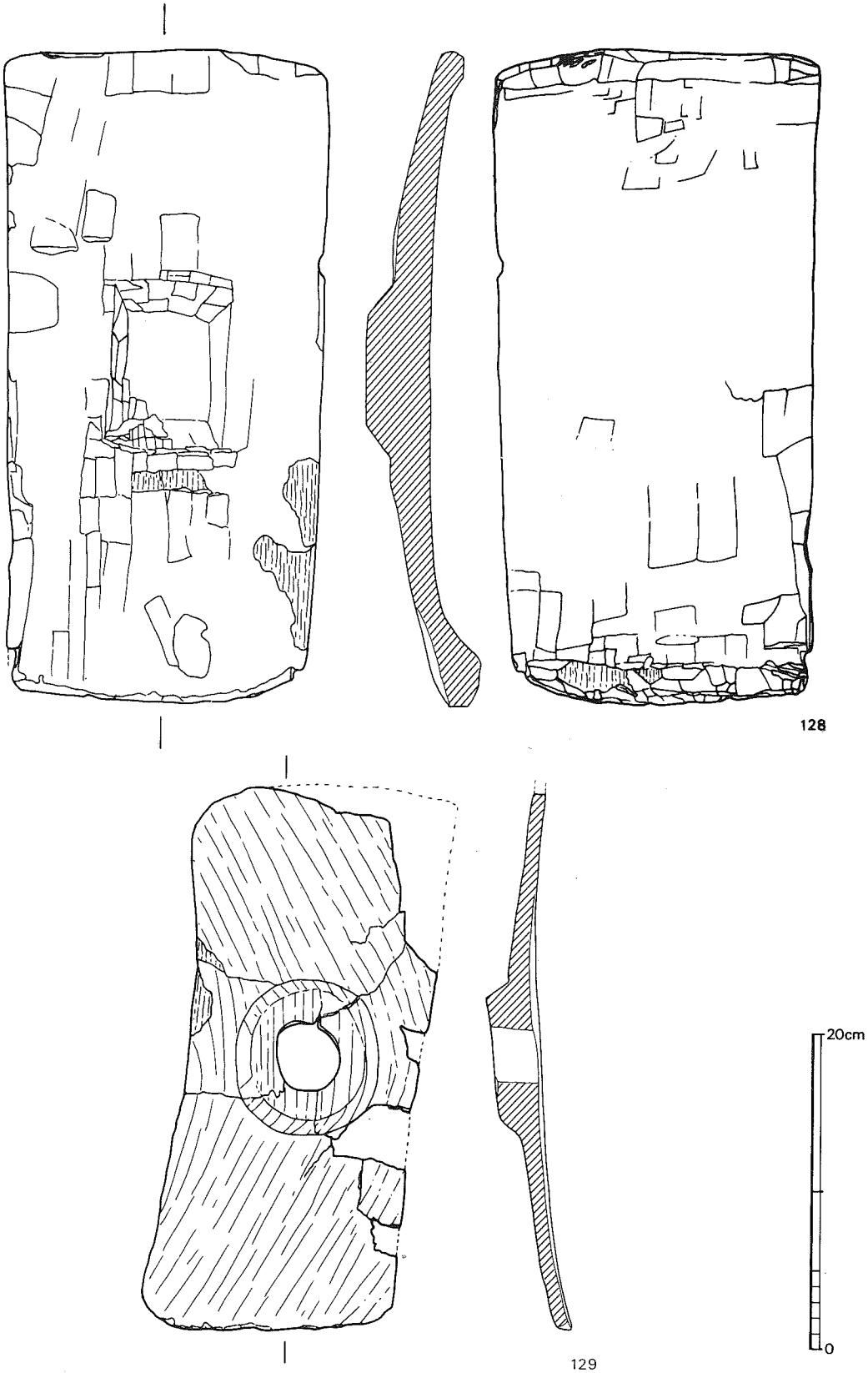
第94図　第450区の木器⑤

あるが装着溝が若干損傷している。**190**は，柄と掬取部口縁が直角になる竪杓子である。**192**は「よき」木柄の完形資料である。**194**は広鍬の柄と考えられる。**196**は円形浅鉢型の容器である。**197**は，下面が欠損した小型臼状の容器である。

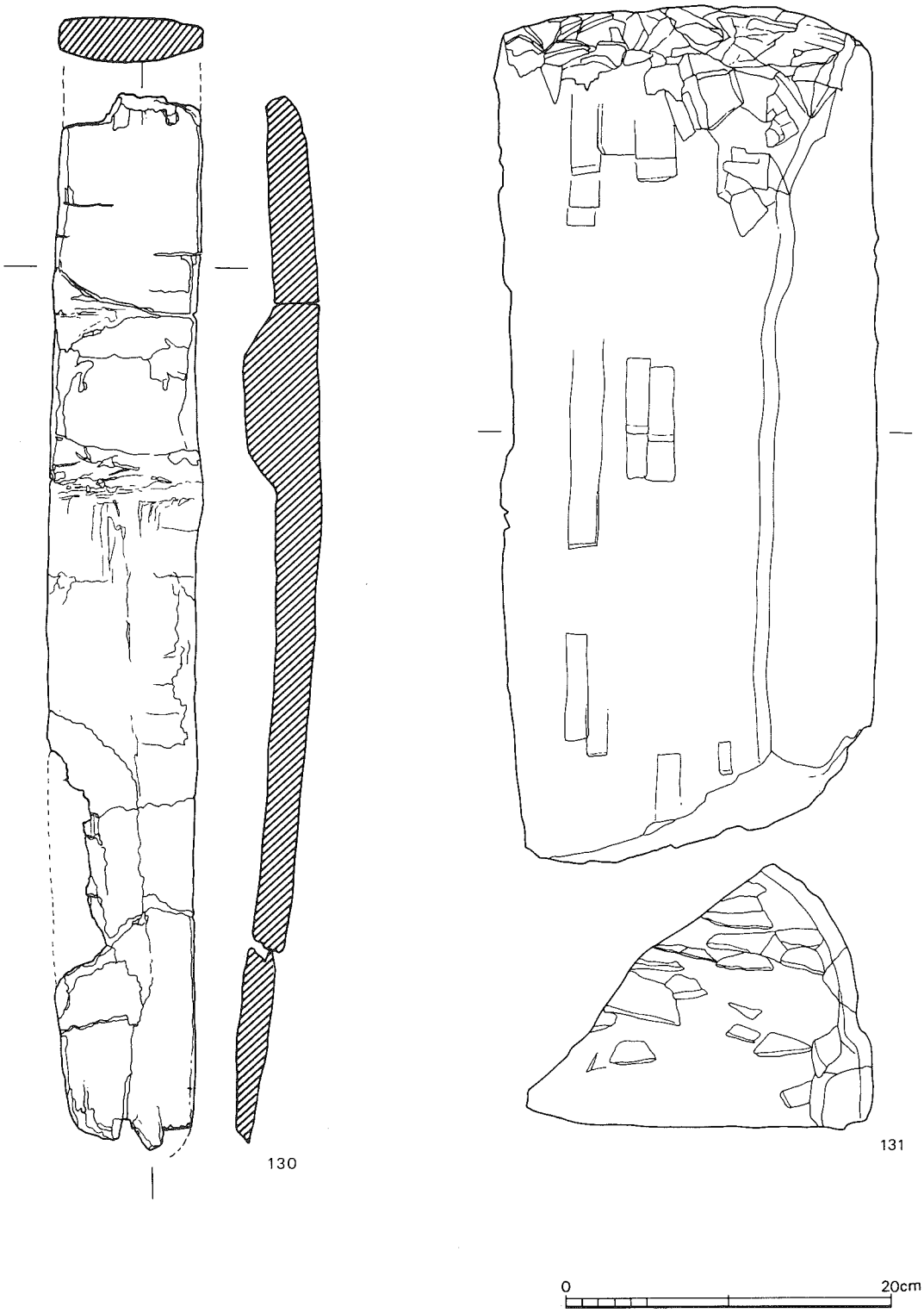


第95図　第430区の木器

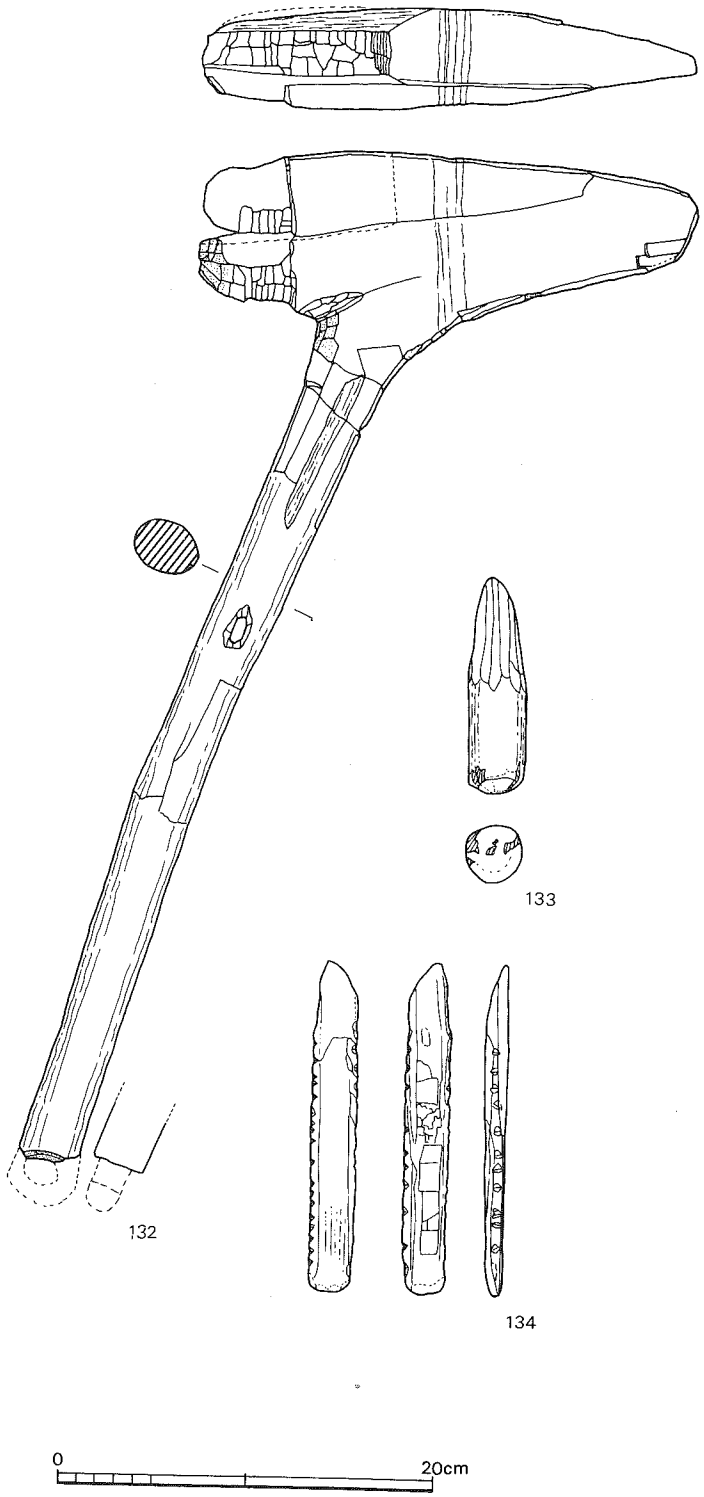
註１　『那珂久平遺跡』福岡市教育委員会　1987
註２　『鬼虎川の木質遺物』東大阪市文化財協会1987
註３　同２
註４　木下正史「古代脱穀具の系譜」『日本文化史学への提言』和歌森太郎編　弘文堂1975



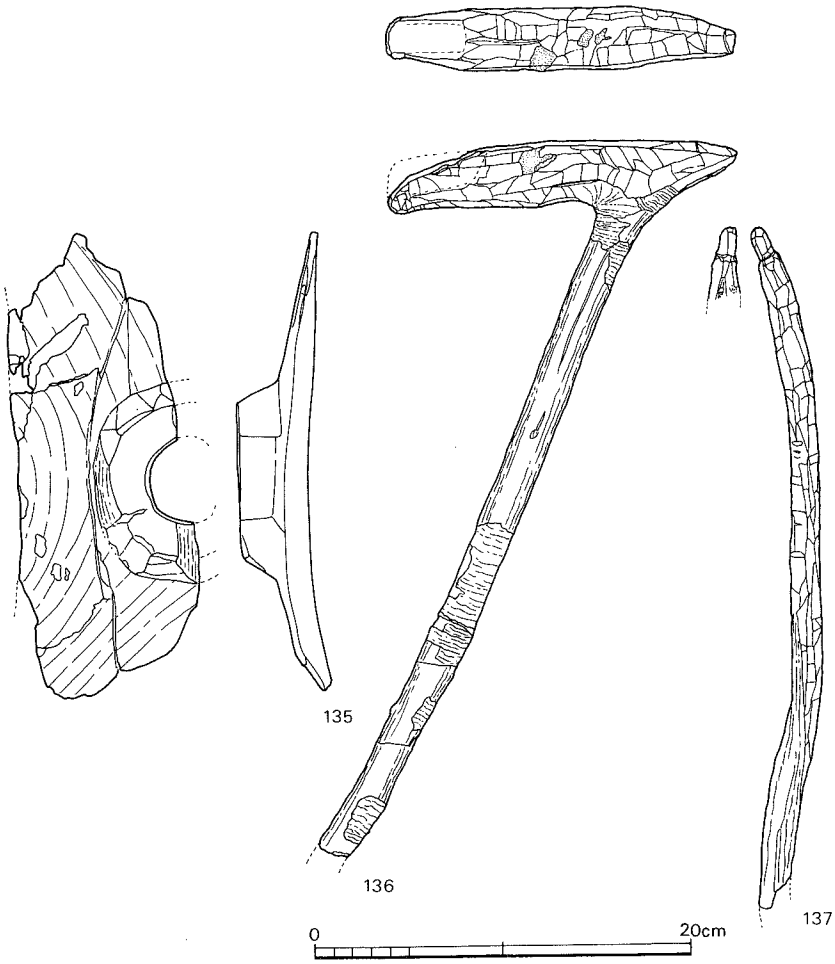
第96図　第420区の木器



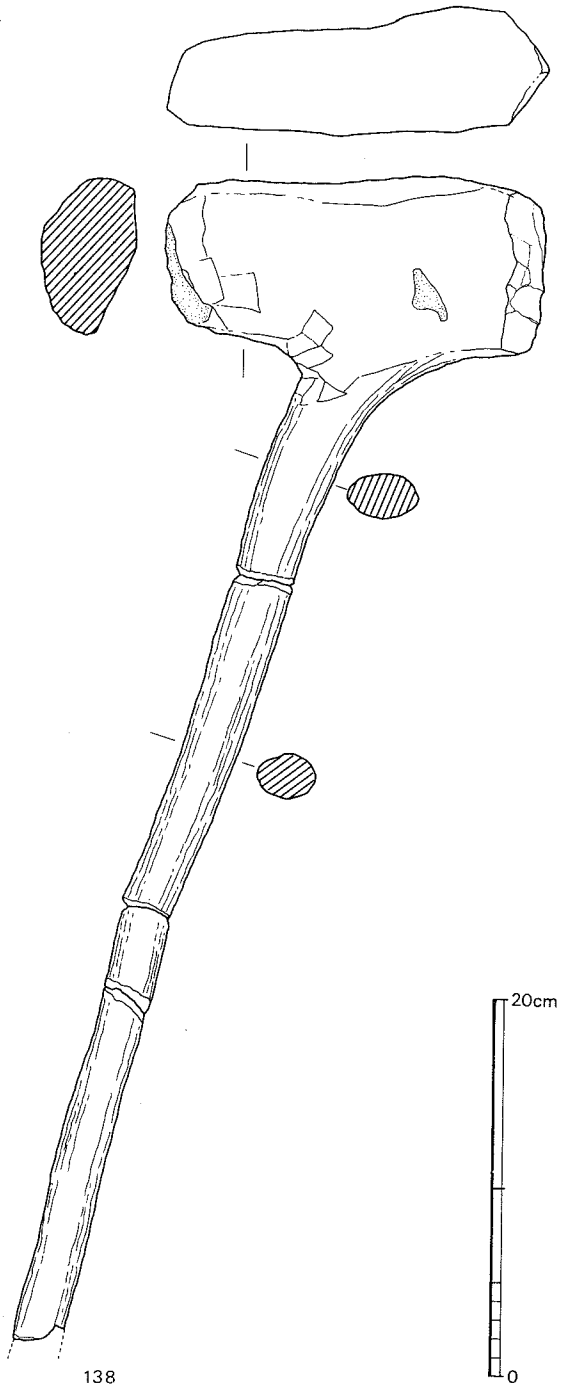
第97図　第420区の木器



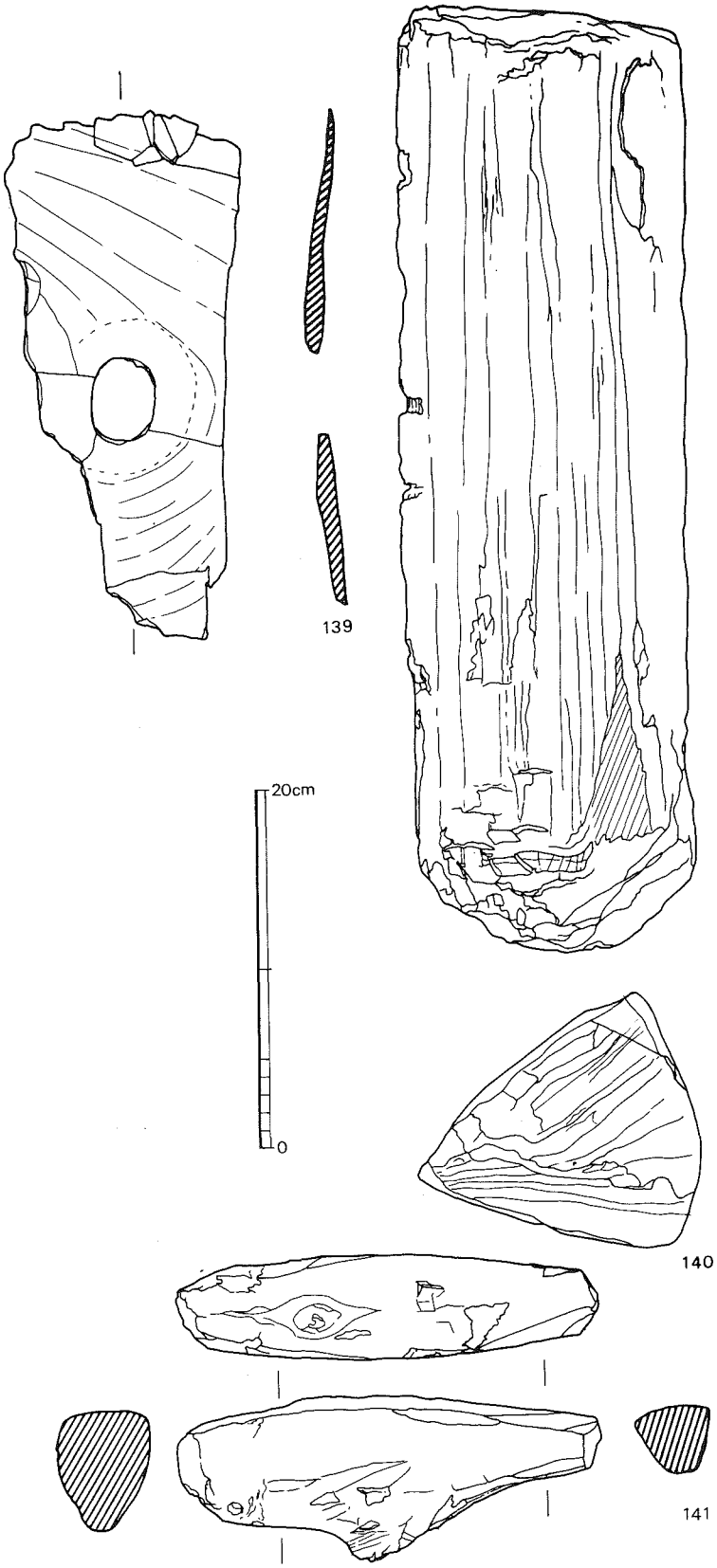
第98図　第410区の木器



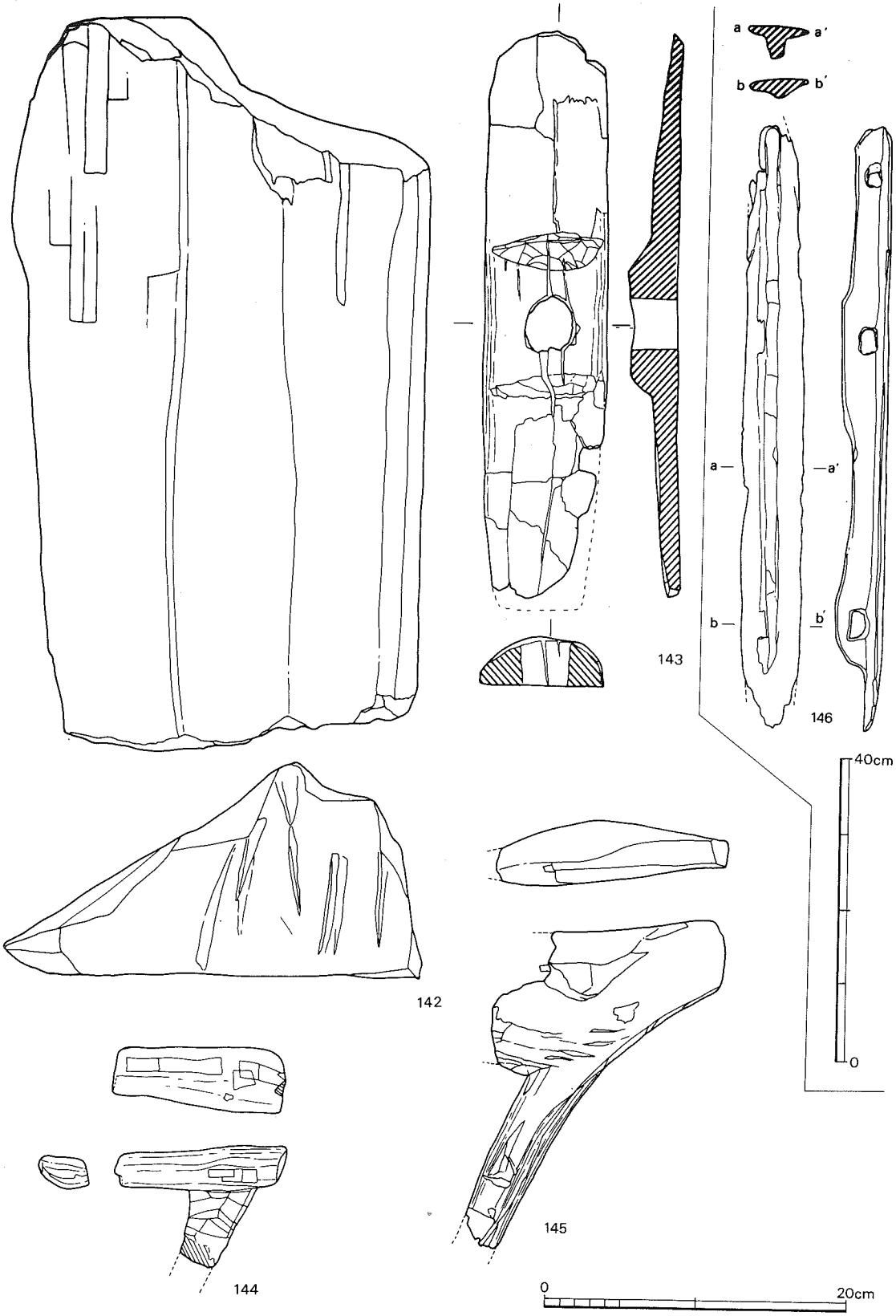
第99図　第400・410区間畦畔部の木器



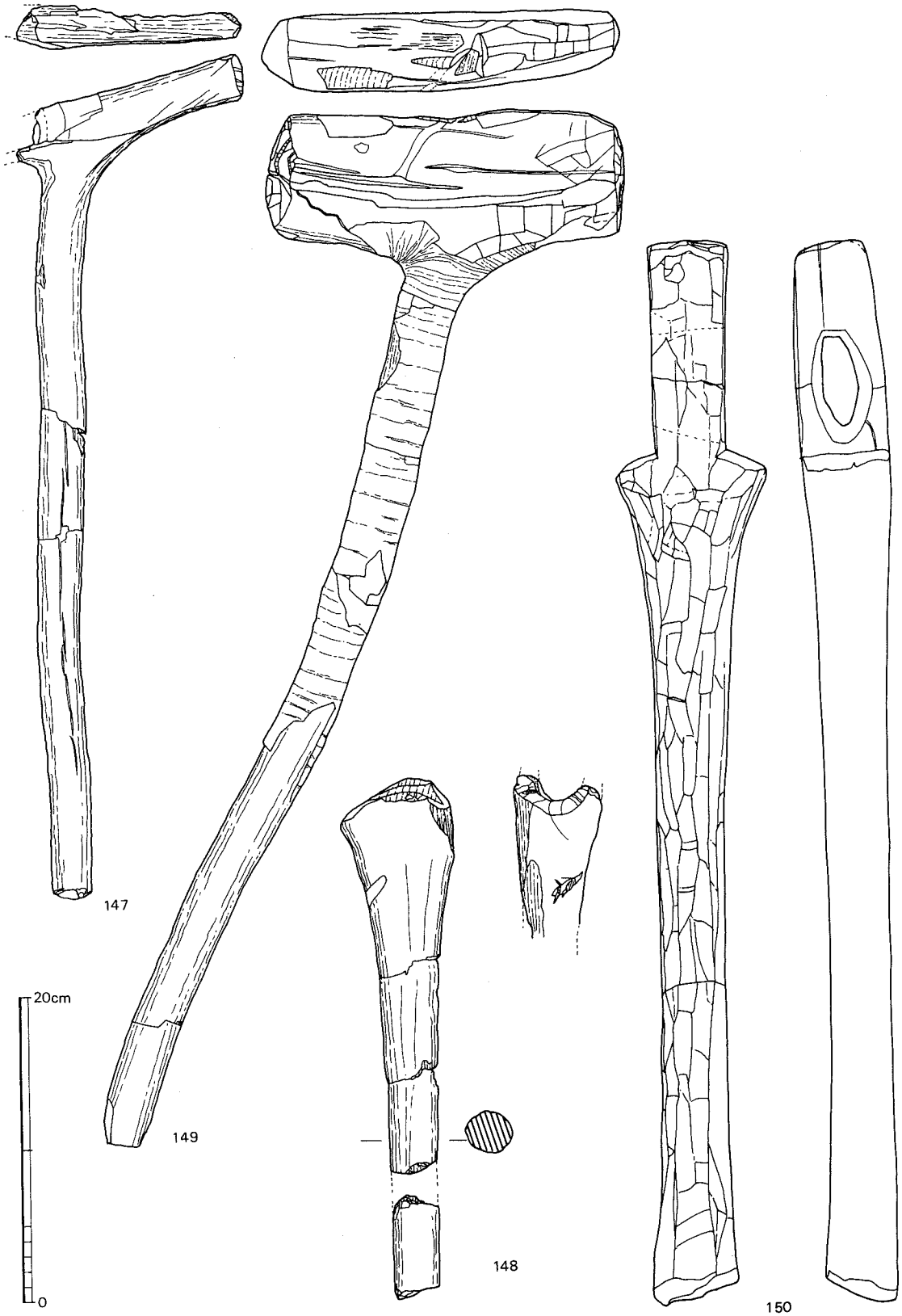
第100図　第400区の木器



第101図　第380区の木器

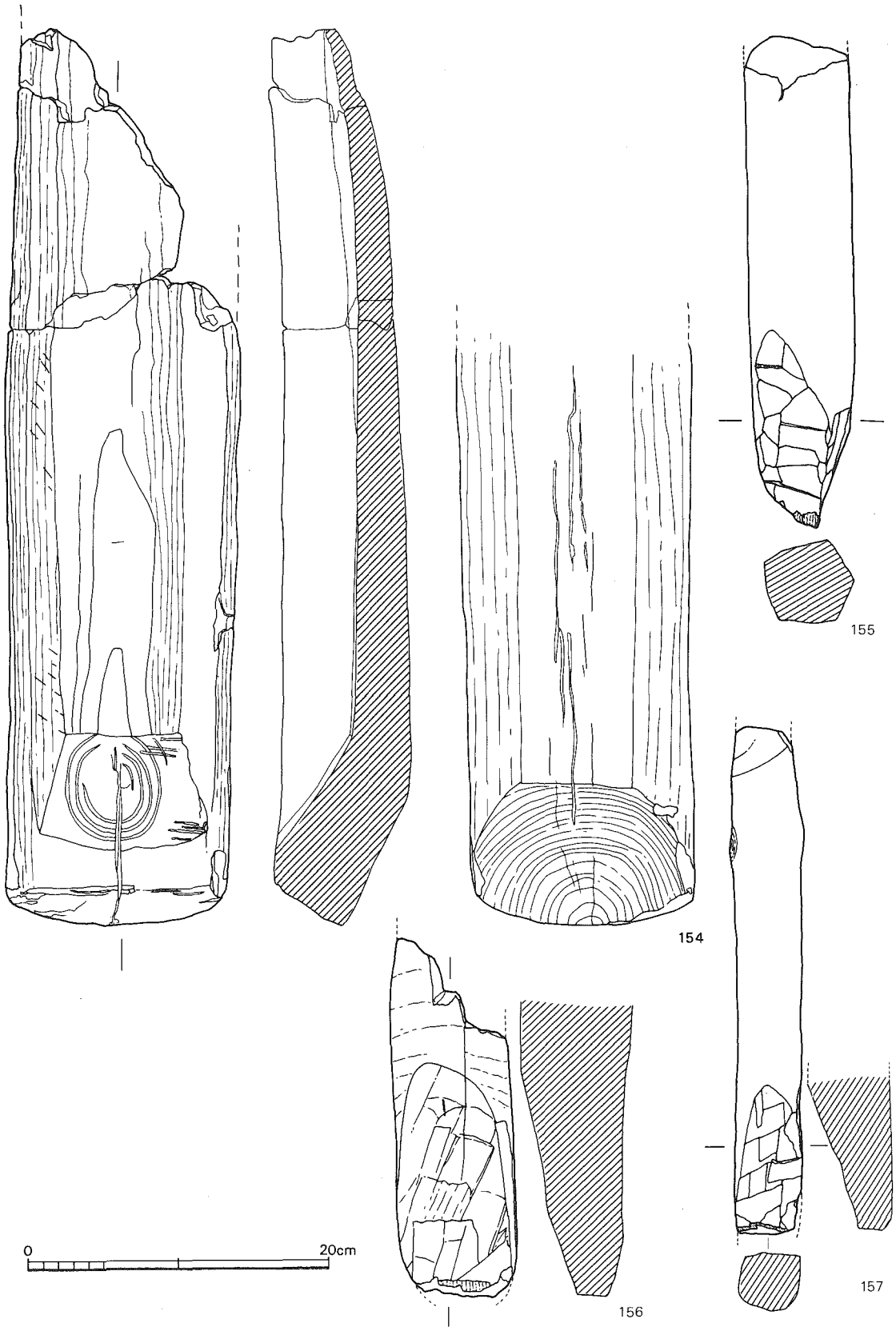


第102図　第370区の木器①



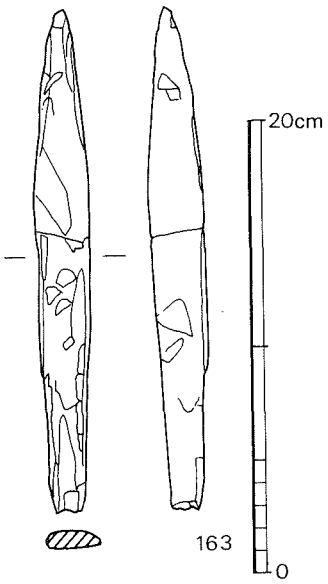
第103図　第370区の木器②

第104図　第370区の木器③

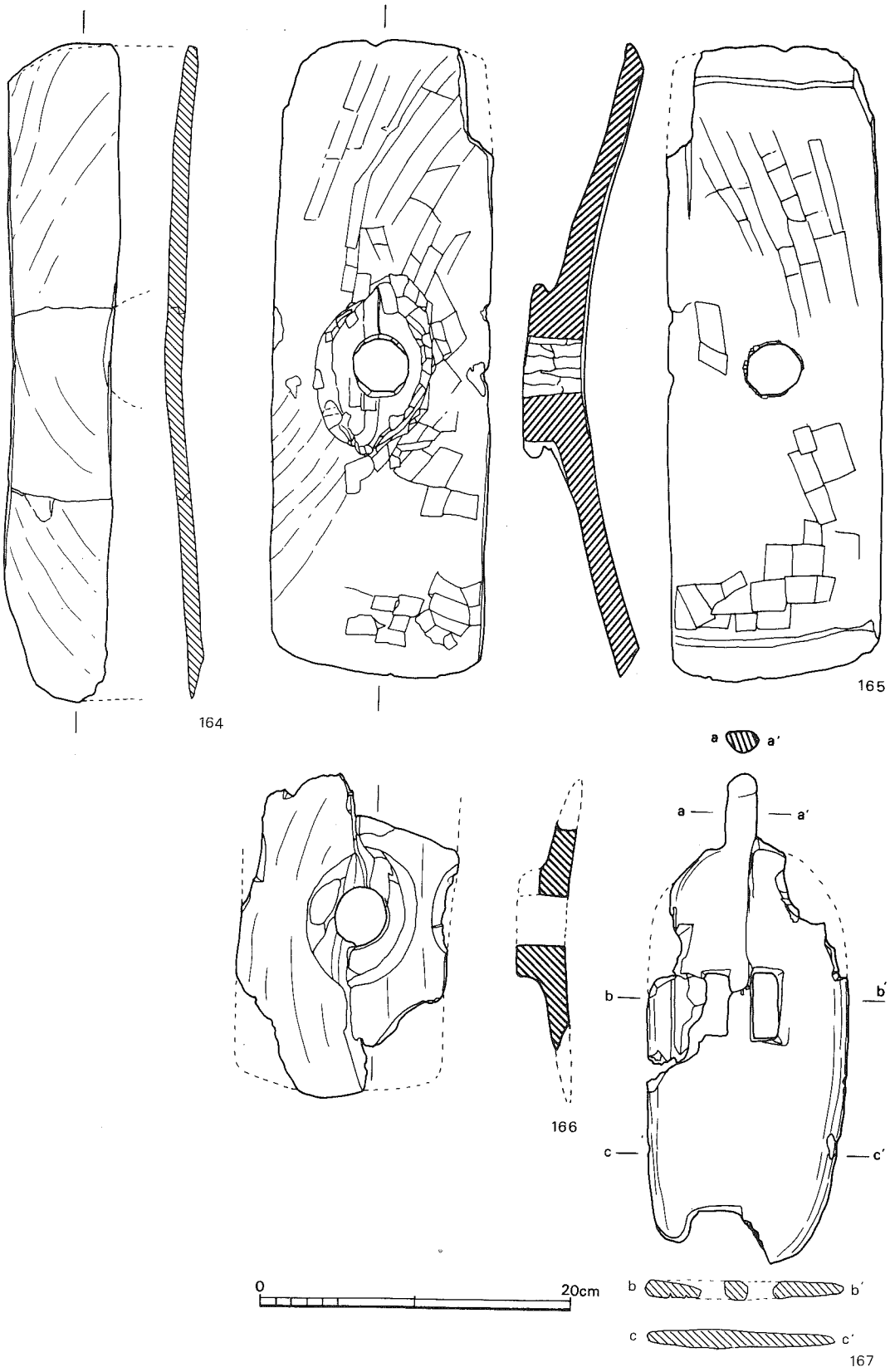


第105図　第370区の木器④

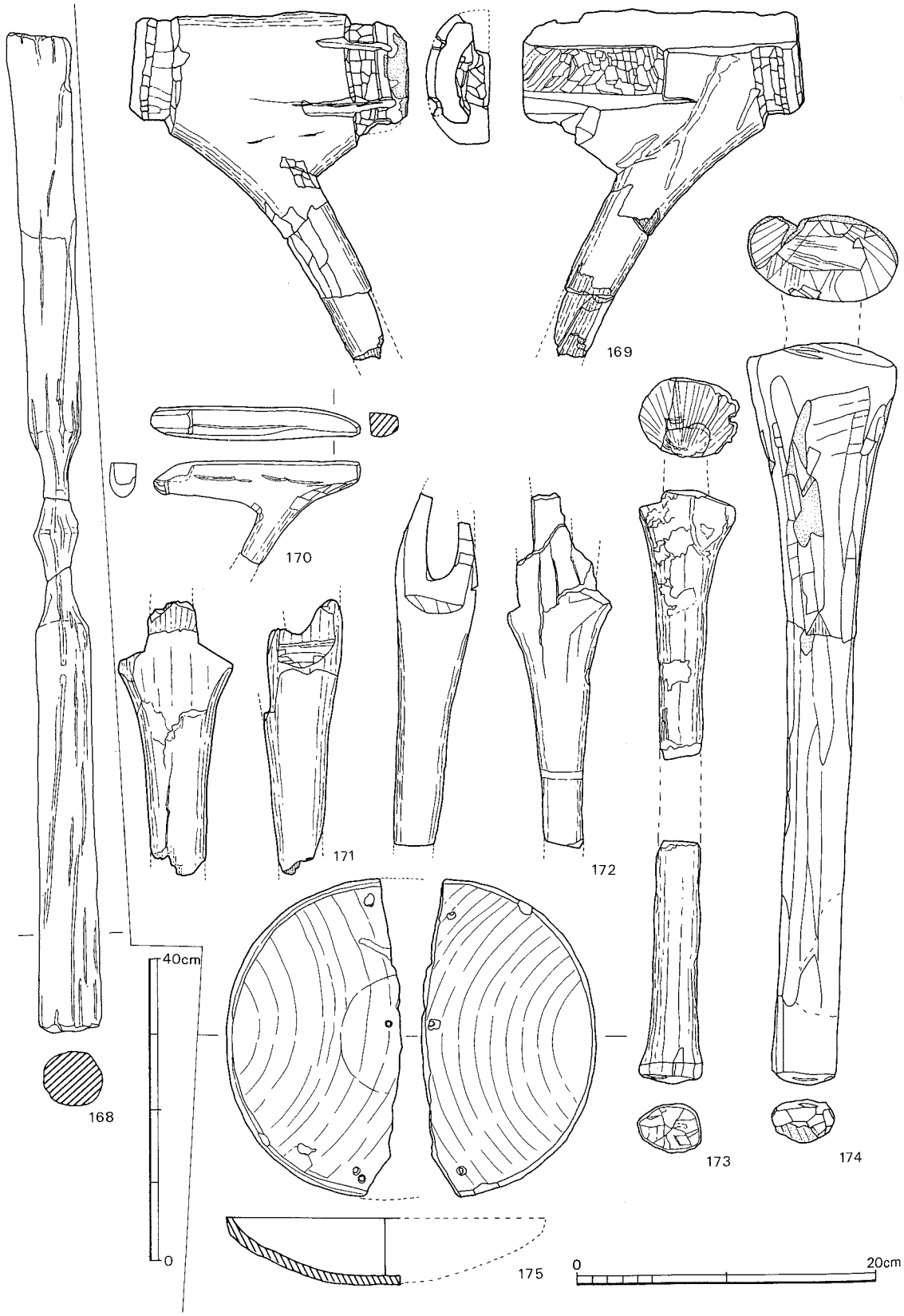
第106図　第370区の木器⑤



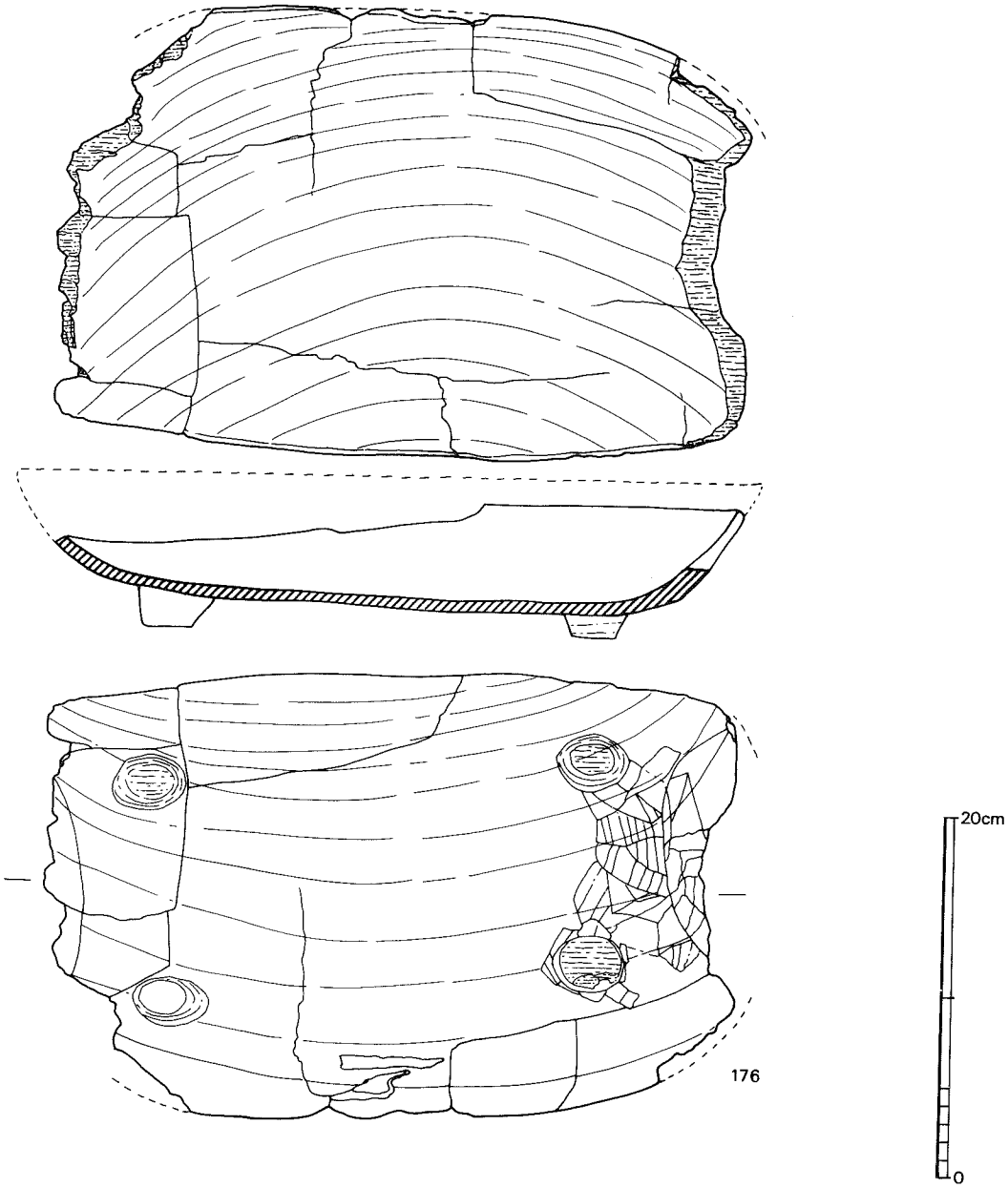
第107図　第370区の木器⑥



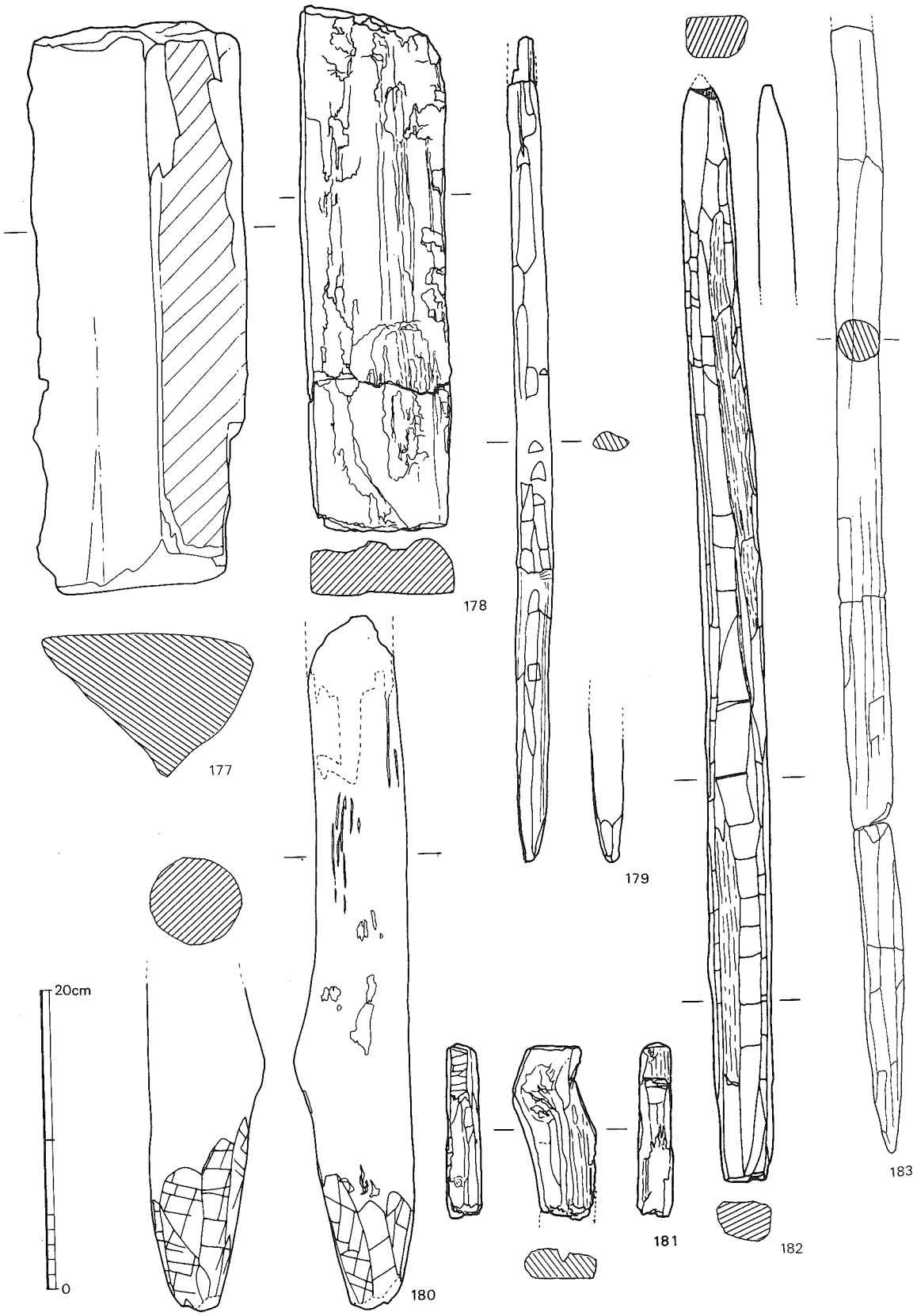
第108図　第360区の木器①



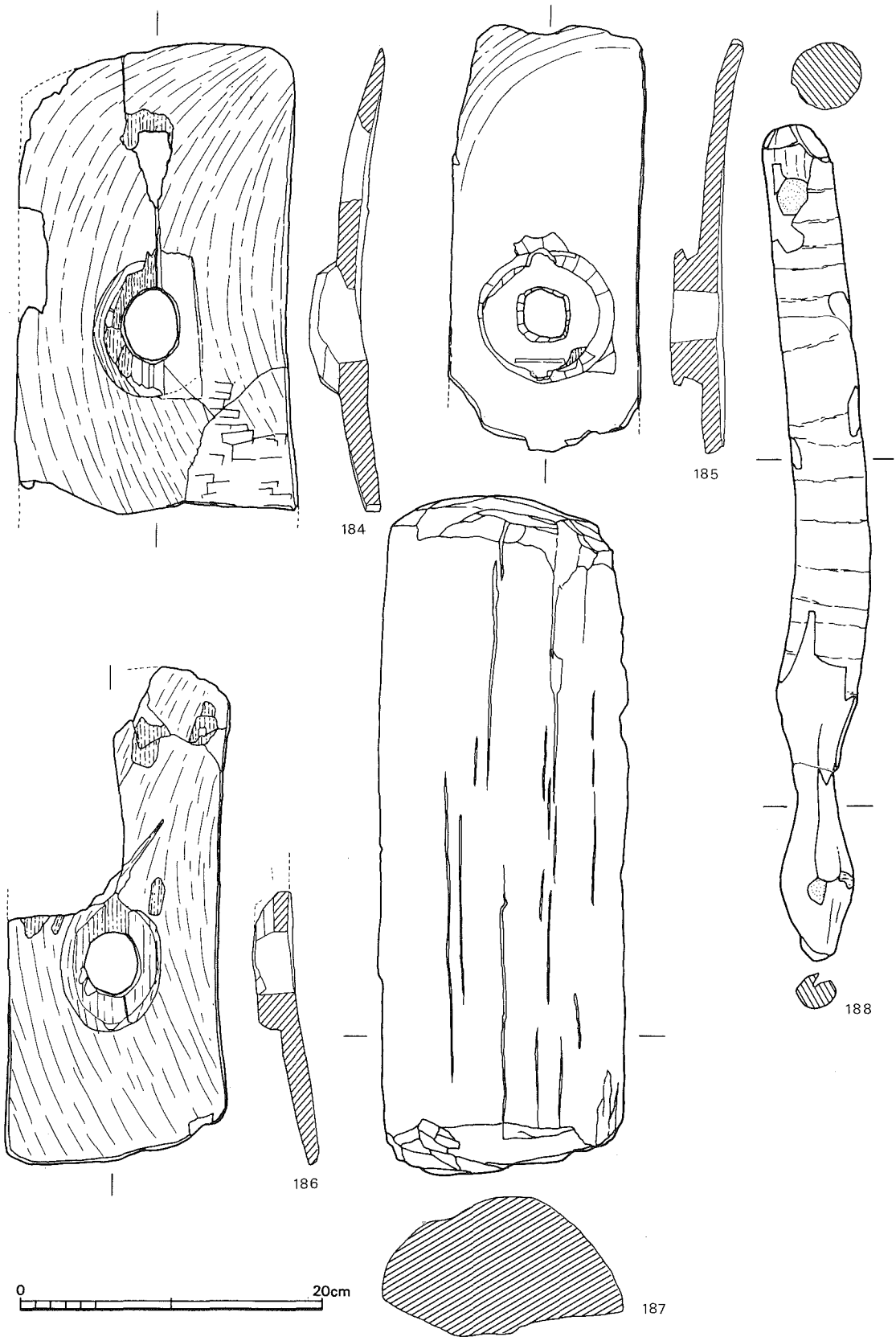
第109図　第360区の木器②



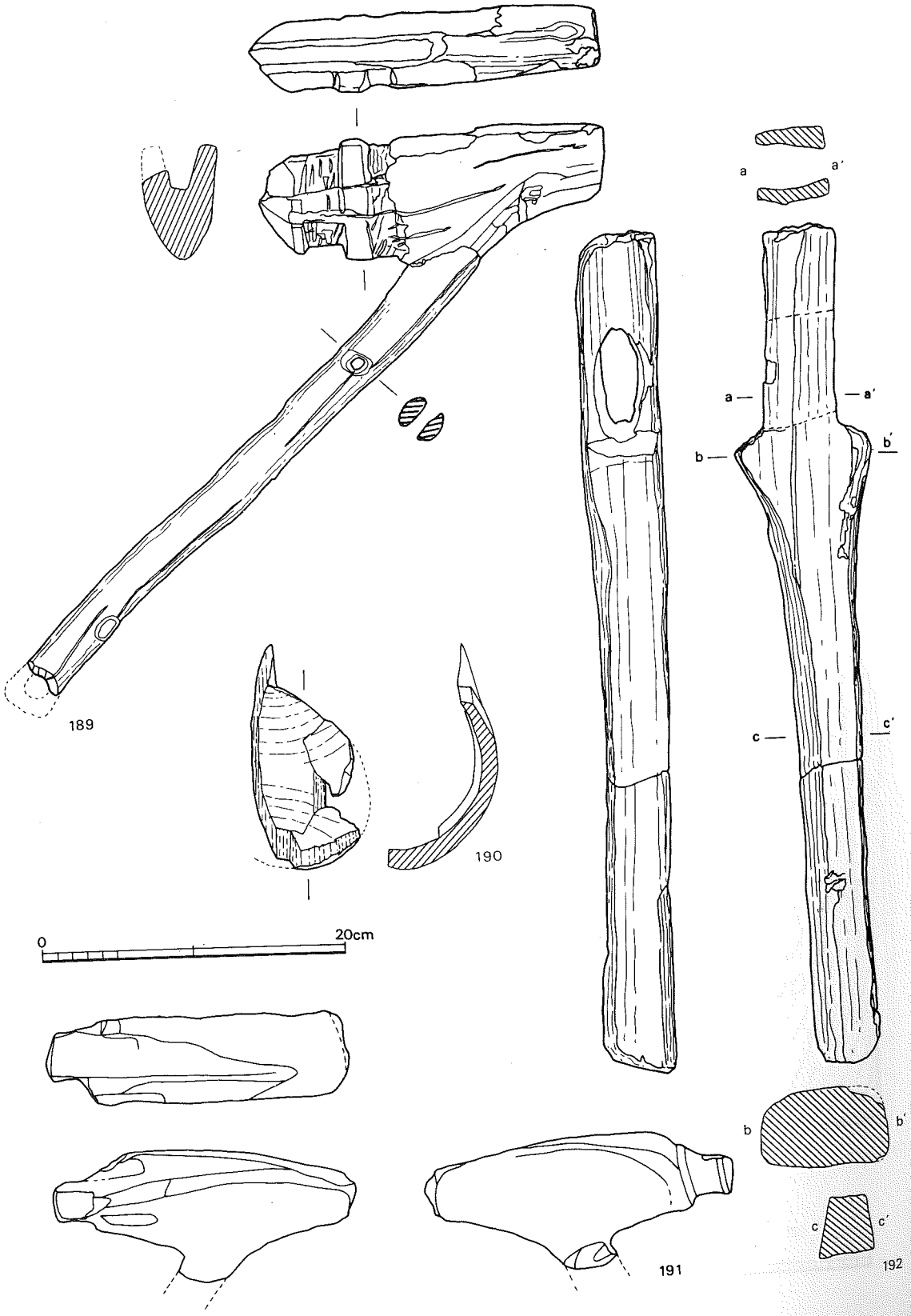
第110図　第360区の木器③



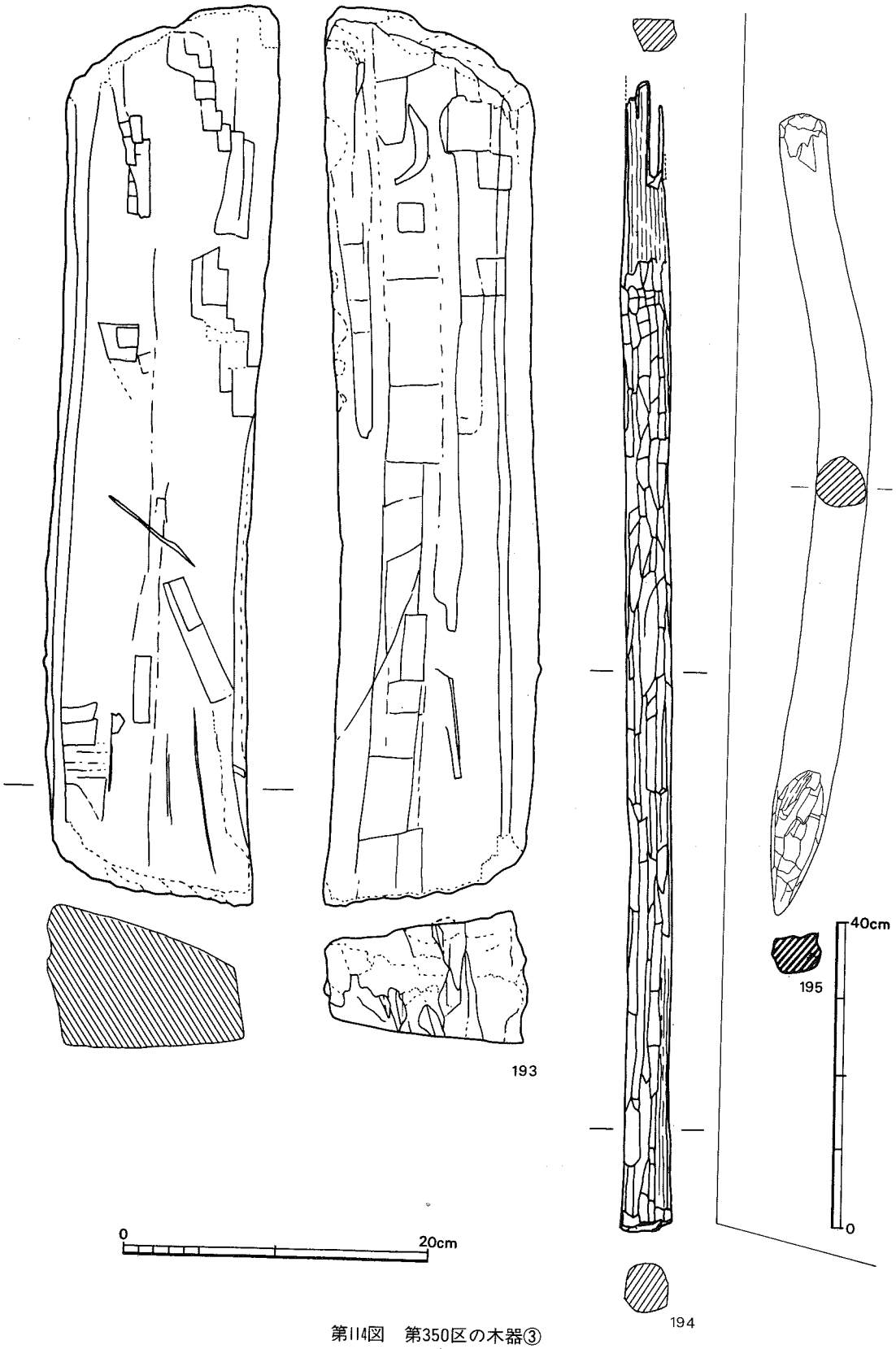
第111図　第360区の木器④



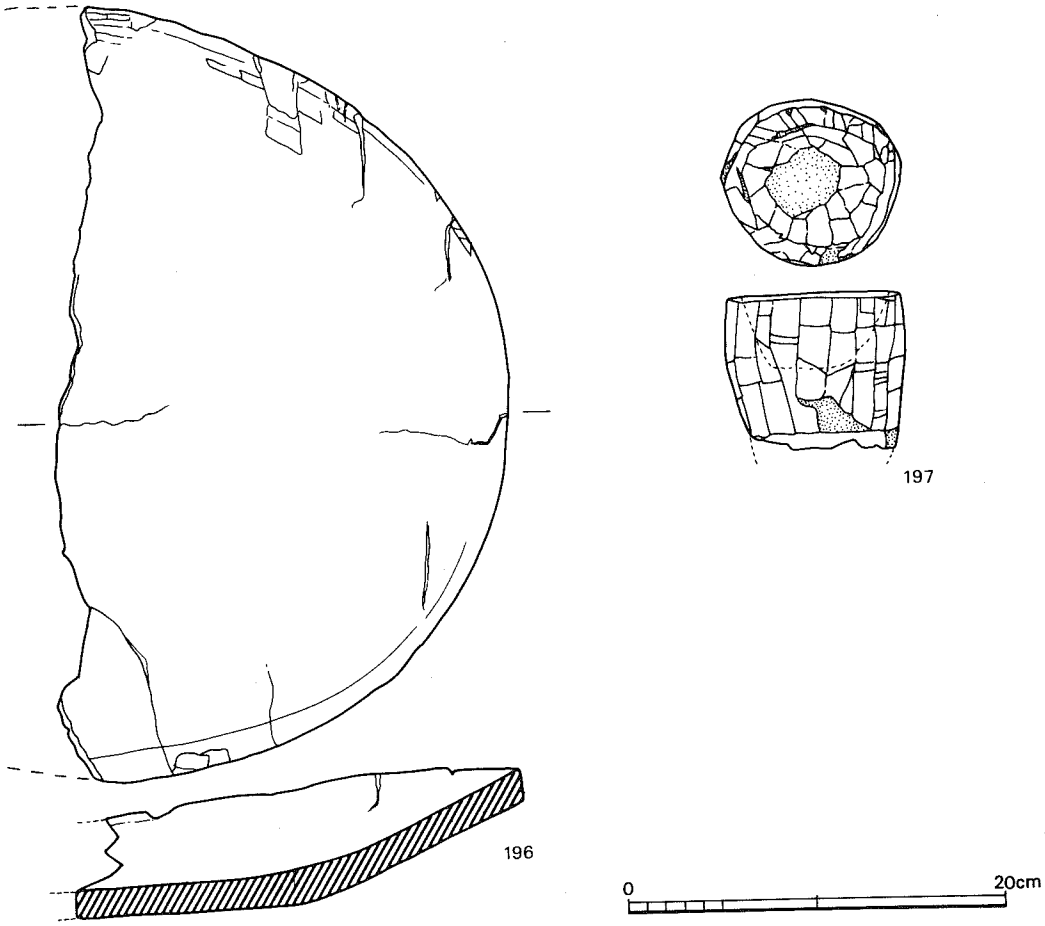
第112図　第350区の木器①



第113図　第350区の木器②



第114図　第350区の木器③



第115図　第350区の木器④

Ⅶ. 里田原遺跡におけるプラントオパール分析

宮崎大学教授藤原宏志氏に依頼したプラントオパール分析結果について，定量分析分析結果（表）と数値表および生産量グラフとコメントを頂いた。以下に掲載する。

里田原遺跡におけるプラントオパール分析結果について

宮崎大学　藤原宏志

分析結果に関するコメント

1．430N，440N地点では6層でイネが検出された。その量からみて当該地点で生産されたもの，あるいは同時代にごく近くで生産されたものと判断される。
2．460S地点の4層ではイネが検出されず，同層でイネが栽培されたとは考え難い。
3．510N，530N地点でイネが検出されるのは2層ないし3層までであり，下層でイネが栽培された形跡はない。
4．全体にプラントオパールの風化が認められるが，その原因は定かでない。

※各調査区採取資料の生産量グラフについては藤原氏の定量分析結果（表）にもとづき作成した。

表1　数値表 1

420N							
種別 / 層	イ　ネ (O. sati)	イネ籾 (rice g.)	キビ族 (Pand.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨ　シ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ科 (Andoro.)
1	1.074	0.376	0.000	0.000	0.000	0.000	0.227
2	0.519	0.182	0.000	0.000	0.000	0.085	0.438
3 a－1	0.409	0.143	0.000	0.000	0.000	0.000	0.518
3 a－2	0.583	0.204	0.000	0.000	0.000	0.095	0.984
3 b	0.952	0.333	0.000	0.000	2.244	0.155	0.803
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

表2　数値表 2

430N							
種別 / 層	イ　ネ (O. sati)	イネ籾 (rice g.)	キビ族 (Pand.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨ　シ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ科 (Andoro.)
1	1.399	0.490	0.000	0.000	0.000	0.076	0.393
2	1.229	0.431	0.000	0.000	0.000	0.100	0.777
3－1	0.732	0.256	0.000	0.000	1.726	0.478	0.618
3－2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.244	2.522
6	1.100	0.385	0.000	0.000	1.297	0.180	0.696

表3　数値表 3

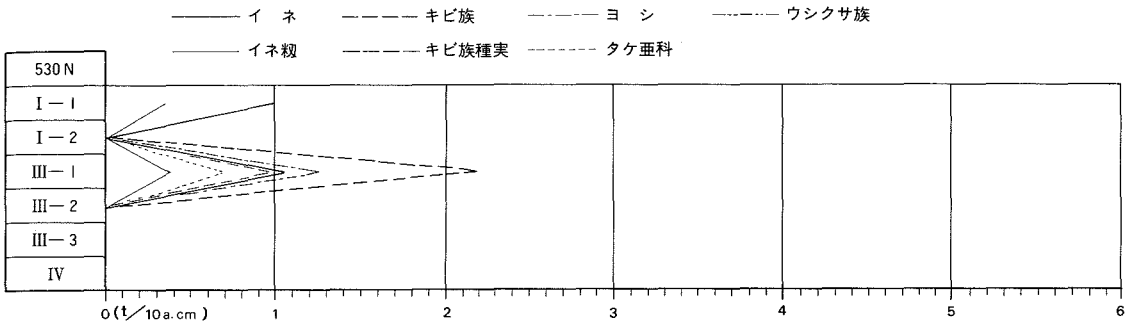
440N							
種別 / 層	イ　ネ (O. sati)	イネ籾 (rice g.)	キビ族 (Pand.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨ　シ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ科 (Andoro.)
1	0.806	0.282	0.000	0.000	0.000	0.066	0.000
2	1.699	0.595	0.000	0.000	0.000	0.139	0.358
3 a	0.530	0.186	0.000	0.000	1.248	0.086	0.447
3 b－1	1.354	0.474	5.620	2.552	3.192	0.553	0.571
3 b－2	3.576	1.253	0.000	0.000	0.000	0.146	1.508
6	1.784	0.625	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

表4　数値表 4

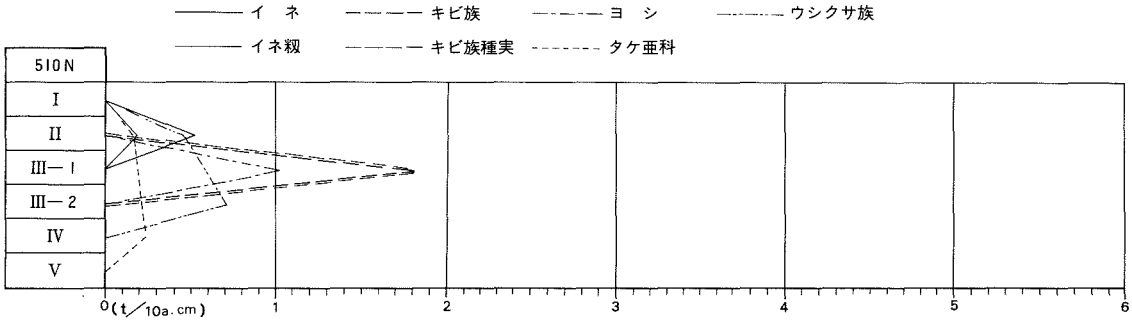
460S							
種別 / 層	イ　ネ (O. sati)	イネ籾 (rice g.)	キビ族 (Pand.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨ　シ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ科 (Andoro.)
3	1.629	0.571	4.505	2.046	0.000	0.000	0.000
4	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.087	0.224

表5　数値表 5

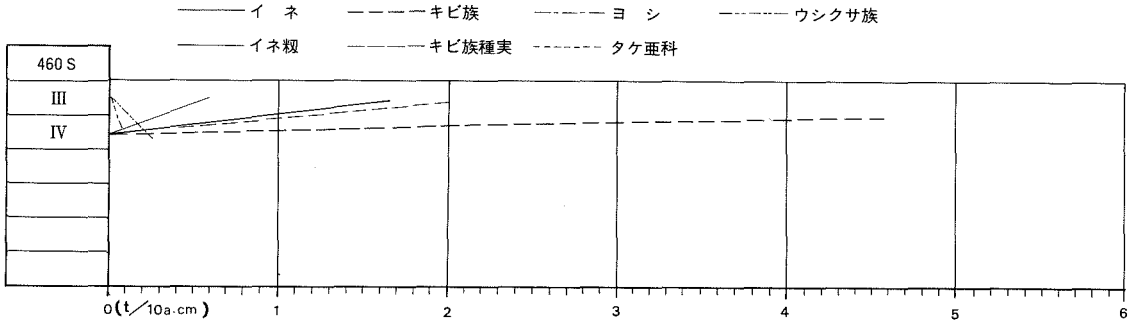
530N							
種別 / 層	イ　ネ (O. sati)	イネ籾 (rice g.)	キビ族 (Pand.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨ　シ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ科 (Andoro.)
1－1	0.987	0.346	0.000	0.000	0.000	0.000	0.277
1－2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.247
3－1	1.054	0.369	2.186	0.993	1.242	0.688	0.667
3－2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.085	0.441
3－3	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.060	0.463
4	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000



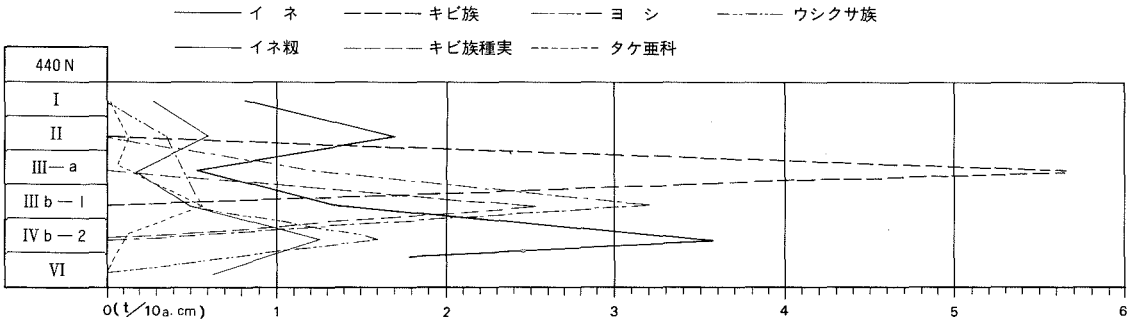
第116図　第530区北壁採取資料の生産量グラフ



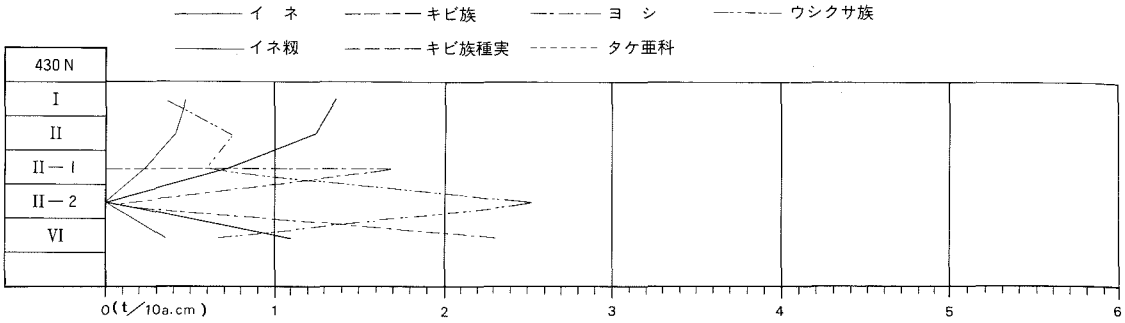
第117図　第510区北壁採取資料の生産量グラフ



第118図　第460区南壁採取資料の生産量グラフ



第119図　第440区北壁採取資料の生産量グラフ



第120図　第430区北壁採取資料の生産量グラフ

Ⅷ. まとめにかえて

里川の旧河道と遺構

340～670区間の330m区間の現里川について今次の発掘調査を実施したところ，弥生時代前期後半から同中期初頭にかけての旧里川の河道と関連する遺構が，調査区の多くで検出された。

里田原盆地の旧状については，長崎県文化課が昭和47年以降，ほぼ盆地全域を対象として実施した範囲確認調査（試験掘りと試錐調査）があり，西田正規・安田喜憲両による古環境の復原調査が行われている[註1]。この調査において予察されているごとく，里田原盆地の旧状は現今のごとく平坦な地形ではなく，沼沢状の低湿地や浅谷状の流路あるいは微高地が入り混る復雑なものであったらしく，今回の調査において里川の旧状についてそれらの点を一部確認する結果となった。全調査区を概観すると，旧里川は510区を東西の界にして，状況が異っている。以東の部分は地盤が比較的浅く浅谷状河谷の状態ではない。以西はかなり蛇行する小規模な浅谷状流路になっている。510区の西辺に南北におかれた巨木が，それ自体は自然木であるが，両側を太い丸杭で固定され一種の水制工（せき）遺構であることは明白である。つまり510区以東に湛水させ，溢水を以西に流下させる機能を持っている。「湛水」の目的が，水田への取水であるか蓄木か，あるいは両方にあるかは今のところ明確でない。周辺の状況を精細に調査した結果と関連させて再検討する必要がある。

一方，470～450区においては，旧里川の流路が北側に大きく蛇行した状況が確認されたが，このことは，前述の試掘・試錐調査のＭ９地点の状況と合致する[註2]。今次調査の460～470区における流路と遺構は，主として流路南岸のものであるが，旧里川の南岸に罠重な護岸遺構を構築したもので，半径20m以上にわたっている。この半円型護岸遺構の内側（南側）は，里田原盆地に南側から張り出す微高地末端に当っており，国道との間の狭隘な現水田部であり，建築材や梯子等も発見されているところからして，重要な空間である可能性がある。

註1　宮崎貴夫「ボーリング調査の結果について」安田喜憲「里田原遺跡の古環境復原調査」（第1報）『里田原遺跡』長崎県文化財調査報告書第32集　長崎県教育委員会1977
註2　註1に同じ

竪果加工施設遺構について

1．県内における従前の知見

里田原遺跡における従前の調査で，この種の遺構は30基検出されており，いずれも弥生中期の所産である。それぞれグループをなし，地点を異にして検出されており，いずれの群も河水に近い低凹地に構築されている。遺構各個の規模に若干の違いはあるが，大方の径は1m程度，深さは0.6〜0.8m程度の円形フラスコ状の形をしている。図示した第5次例は，ピットの口縁を板で縁取りし，板蓋をかぶせ，その浮遊防止のため礫を多数のせている例であるが，他例も類似の構造をしていたらしい。

弥生期の例としては，雲仙東南麓北有馬町今福遺跡[註1]（後期）で3基検出例がある。

一方，縄文時代例では，壱岐島郷浦町名切遺跡[註2]（中・晩期）で30基，五島列島南端福江島の福江市中島遺跡[註3]（晩期）で11基が検出されている。九州内の主なところで佐賀県坂ノ下遺跡（中期）例，熊本県曽畑貝塚[註4]（前期）で58基の検出例がある。

以上の例からして，この種の遺構は縄文前期にはすくなくとも使用が開始され，弥生時代に継承されていることは確実であるが，県内では古墳時代以後の検出例はない。

2．機能についての考え方

縄文例も弥生例も規模・形状・充塡物については大差がないが，坂ノ下例では，丘陵上に掘られたピットの壁面に粘土が貼りつけられているところから，純粋に「貯蔵」が考えられている。一方，前述の諸遺跡中，坂ノ下例を除いた例は，①低湿地に構築されている，②人頭大程度もしくはそれ以上の石が置かれている，③充塡された堅果類は水びたしの状態である，④水はピットに充満した後はオーバーフローする，などの共通点が指摘され，単なる「貯蔵」ではなく，「加工」つまり，流水にさらすことによる「タンニン」除去を目的とした遺構である可能性が強く考えられる。中島例はピットに充塡された堅果類と別に底部にペースト状の灰色の沈澱物がたまった状態が指摘されており，澱粉と考えられている[註5]。

3．堅果類の充塡作業について

これらの施設遺構中に充塡された堅果類について，外皮のひび割れした例の多いことが指摘され，なんらかの「事前加工」の施された可能性の指摘が一部なされ[註6]ている。堅果類を採集して実験観察した結果によれば，

①樹木からの落果段階でヒビ割れする例はまず生じない。

②長期間（２ケ月程度）の水漬けによっても，果皮のヒビ割れ損傷はほとんどない。

③長期間（２ケ月程度）の陽干しによっても，果皮のヒビ割れは少ない。

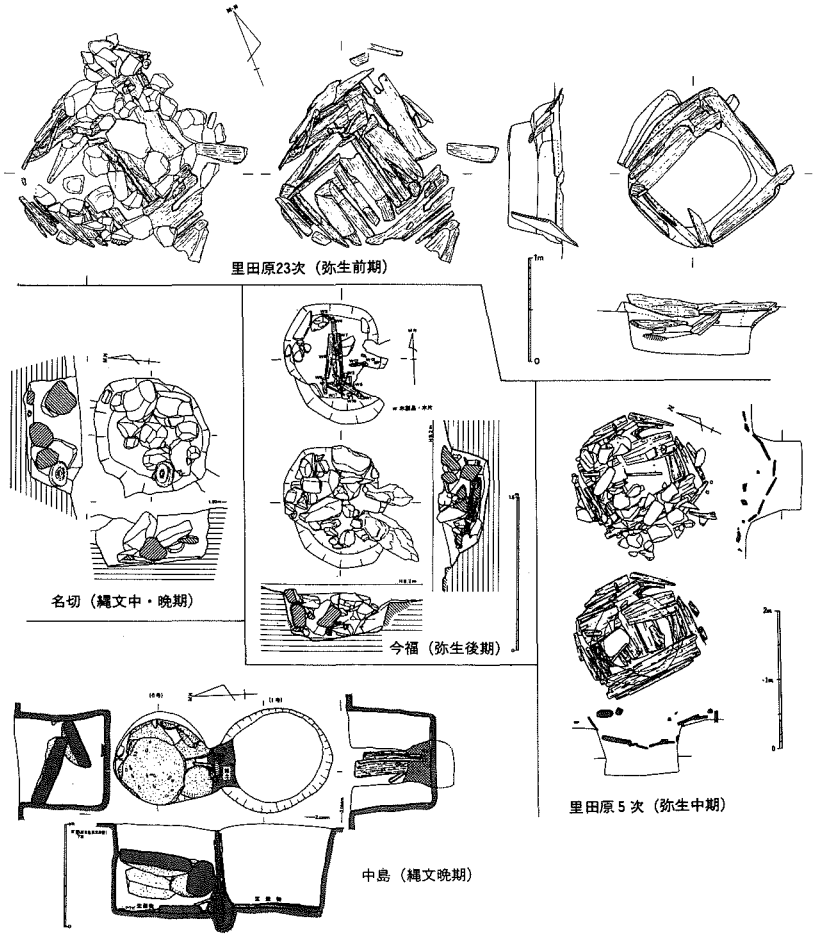
④落果直後に踏むとヒビ割れするが果皮は破砕しない。干燥後は縦横にひび割れ破砕する。

以上の結果が確認できるところからすれば，遺構内の堅果類の外皮のヒビ割れは，ピットへの充塡作業以前と考えるのが自然であると考えられる。ヒビ入れ作業は，堅果類の果肉を早期に流水に触れさせることを目的としたものと考えられるのであるが，充塡作業前の処理として，一定期間の干燥後に，「搗打」が行われた可能性が考えられる。「搗打」が竪杵のごときもので行われたものか，単に足で踏む程度の事前処理であったかについては不明であるが，「搗打」処理が行われたこと自体は可能性が強いといえよう。

註１　宮崎貴夫他『今福遺跡Ｉ』長崎県文化財調査報告書第68集　長崎県教育委員会1984

註２　安楽勉他『名切遺跡』

註３　正林護他『中島遺跡』福江市文化財調査報告書第３集　福江市教育委員会1987

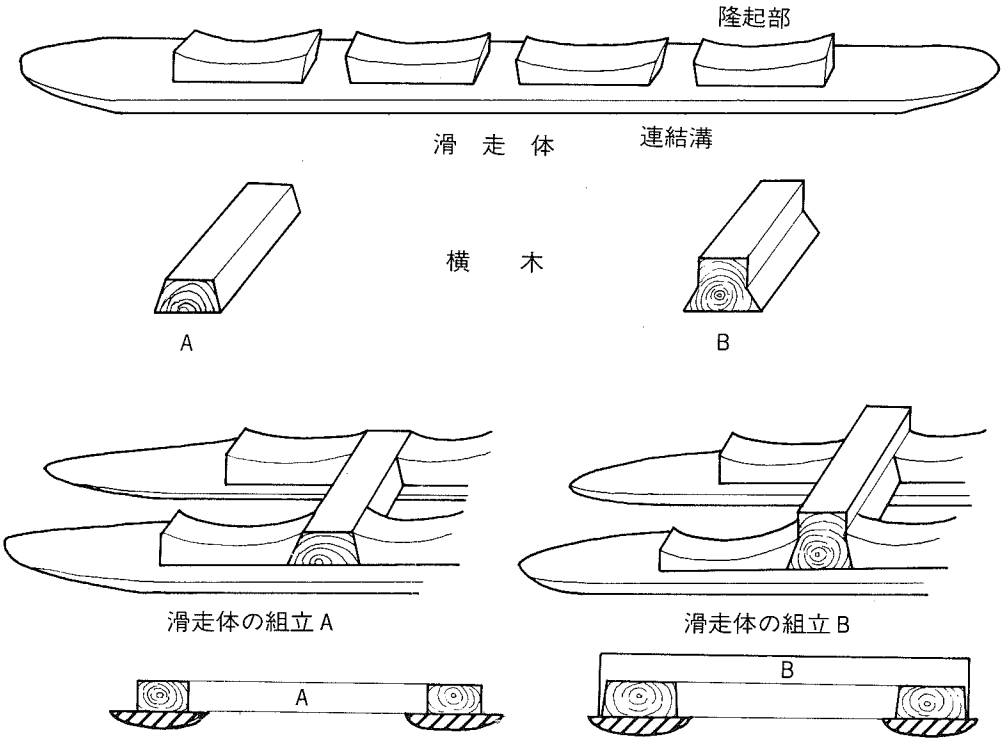


第121図　長崎県下における堅果加工施設

註4　『アサヒグラフ』341号　朝日新聞社1982
註5　3に同じ
註6　3に同じ

橇状木製品について

今次（23次）調査において弥生中期初頭に属する木製品のうち，「橇」状木製品が2点出土した。東大阪市鬼虎川遺跡[註1]出土の同種資料については昭和62年11月26日朝のＮＨＫニュースで報道され，1987年（昭62）同市文化財協会刊の報告書で細部を知ることができ，重要な示差を与えられた。同書には木製の「運搬具」として，橇の滑走体部分が，Ａ・Ｂ（ａ～ｄ）・Ｃ種の6類に分類して詳報された。里田原遺本報の資料は3点（内未成品1）である。**3**は未成品であり，横木装着部は底がひろがる断面形を有し，山形部は幅広で頑丈に作られ，滑走体の連結用横木は滑走体の側面からはめこむように作られており，全容1ｍを越す大型で，鬼虎川美類でいえば，全体規模ではＡ型，隆起部でいえばＢｄ型になる。**3**は細身の滑走体で，陸起部の身幅は挟く，滑走体連結は3ケ所に穿たれた方形の孔になっている。**2**は鬼虎川のＢｄ類と同



第122図　橇状木製品復原想定図

じ形状であるが規模からいえばA類に属する。3は未成品であるが，規模からいえばA類・陸起部上面が直線的である点からしてもA類に属するといえよう。なお，里田原遺跡で従前A類の一部が出土している[註2]。里田原では従前例を含めても4例にすぎず，畿内資料と単純に比較できないが，湿地ないし深田(ふけだ)における運搬作業具として注意を払っておく必要がある。

対馬の各地等で，現今用いられている「シラ」は陸上用で，滑走体部が厚く作られているが弥生例については，第126図の1のごとく幅広のものは湿地向きで浮力自体をもつと考えられるが2の例は滑走体の幅は狭く，湿地での使用には浮力が不足するやに感じられ，陸上用の草橇と考えることもできよう。

註1　芋本隆裕「2．運搬具」『鬼虎川の木質遺物』――第7次発掘調査報告書第4冊――15～20財団法人東大阪市文化財協会1987

註2　正林護「第10次調査の概要」『里田原遺跡』69～76長崎県教育委員会1975

手斧木柄と把把部の分類と穿孔例について

弥生時代の木製品を大きく分類する中で，工具として，蛤刃磨製石斧の木柄（よき）と片刃磨製石斧ないし抉入石斧を装着する木柄（ちょうな）のあることが知られ，里田原遺跡の木製品についても「よき」と「ちょうな」の柄（以下，よき・ちょうなと称する）があることを記したことがある。さらに，木材を削る工具としての「ちょうな」木柄に，①扁平片刃磨製斧の装着が考えられるⅠ型，②抉入片刃石斧の装着が考えられるⅡ型，③同種の石斧をよき使用者から見て台部左側に装着すると考えられるⅢ型の3種があることを指摘したことがある[註1]。このⅢ型については，「縦斧であって，横斧（ちょうな）とはいえない」とする批判があった[註2]。現状では，このⅢ型について里田原遺跡以外では知見例がない点も手伝っていると考えられるが，石斧が横につく「削り道具」としての使用例を紹介しておく必要があると考えられ，機能についても再論しておきたい。

一方，これらのちょうな木柄について，握把部に穿孔する例が知られてきたが[註3]，里田原遺跡に関する本報の中で9例が知られ，（第144・125図），鬼虎川遺跡でも同種の例[註4]が報じられており若干の考察を述べてみたい。

なお本稿の中で使用する「ちょうな」各部の名称については，第123図による。

1．ちょうなの分類

Ⅰ型

全体に小型で，台部長20cm未満，握把長40cm未満のものをⅠ類とした。従前の里田原遺跡では第123図Ⅰaのごとく，装着部が，刳りこみでなく，切落したのみで扁平片刃磨製斧の装着が

考えられるもののみであったが，第**123**図２～３のごとく，刳りこみ袋着部を有する例が出土したため，従前例をＩａ**型**とし，刳りこみ装着部を有するもので，緊縛溝を有せず単なる「かかり」を有するものをＩｂ**型**（第**123**図Ｉｂ），小型ながら明確な緊縛溝を有する例（第**123**図３）をＩｃとして分類した。

この類で，刳りこみ装着部を有するＩｂ・Ｉｃ型は，装着部の幅・深さとも２cm以下で，小型のノミ状片刃磨製石器装着用と考えられるが，ａ～ｃ型とも台部上面にのみ石器を緊縛固定すものであるが，第**123**図２～３例とも機能的にはII型を小型化したものであり，細部の「削り」に使用したものであろう。但し，側面に装着溝を有する例は現時点でこの型にはない。

II型

従前の分類と同じ型で，数量的に最も多くを占める「ちょうな」である。Ｉ型より全体に大型で台部上面へ装着部をもつものをこの類に含めているが，台部長は20cm以上で，装着部の規模も幅2.5cm以上，深さも2.1cm以上の規模に刳りこまれている。明確な緊縛溝を台部先端近くに有し，柱状片刃磨製ないし，抉入石斧の装着が考えられる。第**124**図２のごとく握把前面に更に一条の緊縛溝を作ったり，第**125**図８のごとく握把後方を緊縛した例もあるが，使用中における台部前半部の損傷を補ったものらしく，基本的には緊縛溝は台部先端近くに１箇所に削りこむものである。

III型

従前とも例数は少ないが，第**109**図169のごとく，原本の樹幹部半分を削りおとした台部左側面に装着部を刳りこんだ型式である。II型同様，台部先端近くに幅広の緊縛溝を有するが，第**109**図24のごとく台尻近く，石器緊縛とは無関係な位置に緊縛溝を有する例もある。この場合の緊縛溝は石器固定ではなく，ヒビ等の損傷補修，あるいは損傷予防用のものと考えられる。

３．ちょうなの機能

ちょうなは，木材の切削，ないし木製品の削り加工を目的としたことは疑いない。構造的には樹幹部を台部に，65°前後の角度でひろがる分枝を握把部にし，台部上面に断面方形の石器装着部（溝）を刳りこんでいる。III型では左側面に装着部を刳りこむ。装着部には台部全周をめぐる緊縛溝を削りこむ。台部上面（III型の場合は左側面）は平面であるが，「反り」がつけられている。

ちょうなは木材の面取りをする工具である。同様の機能を有するものに鉋，鉋がある。ちょうなは現今の鉄製を含めて両手で保持し，円運動によって木の面を削るから，削り面は魚鱗状の面ができる。鉋も両手で保持し，手前に引く運動をする工具であり，ちょうなより長目の削り面を残す。削り工具には現今の日本の鉋もあり，両手で保持して手前に引いて木の表面を削る。鉋は手前に引くが，ちょうなよりもはるかに大きな円運動をし，長い削り面を残す。鉋の正面（刃が出た面）は頭（左手をかける方）から尻（右手をかける方）まで完全な平面に見える（市販段階では確かに平面）が使用時には，刃の出る溝から頭の方にかけて僅かに角度をも

たせて削る，つまり僅かな反りをもたせる。このことを「鉋台を立てる」という。この僅かな反りは，削り運動をより円滑にし，長い削り面を一気に引くのに都合がよく，荒削の鉋ほどこの反りは強い。

弥生時代のちょうな，特に九州のちょうなは，握把部が台部の中央近くにつき，台尻が長く，このため台部全体が畿内各遺跡より長めに作られている。円運動の際バランスをとるためと考えられるが，台部が長いことは円運動にとって不都合である。この不都合を解消するために台部上面（III型にあっては左側面）に反りがつけられている。

ちょうなの台部装着部には，ノミ型ないし方柱状または抉入片刃石斧の装着が考えられ，この各種片刃石斧は現今のノミないし鉋の刃のごとく完全な片刃ではなく，刃部が片寄った両刃である。完全な片刃は木材の表面にくいこんでしまい，魚鱗状の削りおこしを不可能にするからである。片刃石製斧（完全な片刃に近い両刃）は，鉋の本刃（ほんば）と分刃（あわせば）の機能をあわせもったものと考えられる。

一方，里田原遺跡では，装着溝（ソケット）が台部左側面が反りをつけて削られているIII型がある。かつて，里田原遺出土のちょうなを，いわゆる片刃の石斧を装着して使用する「削り道具」との意味でI～III型に分類した[註5]。反芻してみると，I型は小型のもので，台部前半部を削おとしてノミ状の片刃斧を装着するもの，II型は台部上面に装着部（溝）を刳りこみ緊縛溝をめぐらすもの，III型は，現時点で本遺跡のみに見られている弥生時代の資料であるが，台部左側面に装着部を作り，緊縛溝を有するものである。このIII型はI・II型同様に，いわゆる片刃の石斧を装着して用いる「削り工具」として扱ったところである。

この分類に関しては，佐原真氏は内外の資料にてらして（手斧とよべるか）という疑問を提示された[註6]。里田原資料の分類は，数多くの木製品の中で，工具（柄）をとり出し，樹木の伐採ないし割截用具（よき）と切削具（ちょうな）に分け，切削具としてIII型もとらえたものである。III型をちょうなとして扱った理由は，①装着部（溝）の断面は方形に近く，方柱状ないし抉入石斧の装着に適しているが，蛤刃石斧の装着には適しないこと。②切削運動に必要な反りがII型の台部上面と同じく，III型の左側につけられていること，③切削工具＝ちょうな，伐採・割截具＝よきと考えた場合，III型は片刃斧を装着して木材の側面を削るのに適している，④伐採ないし割截工具としてのよき（佐原氏分類の縦斧）の木柄は別に出土例も多く，蛤刃石斧に装着痕の残った資料も出土している，⑤樹木伐採・割截をする場合，III型のごとく握把部と刃もの（石斧）が65°前後の角度を有する道具は適当でなく，握把と刃ものが直角をなすものが適しており，この機能を果す「よき」の柄は別途に出土している，以上の諸点にある。

（よきといえるか）については，縦斧・横斧の区別はともかく，前述の構造，機能面から考えて，III型は削りには適するが伐採と割截には不向きであるといえる。その点でIII型が片刃石器を装着するかぎり，ちょうなとする方が妥当であろう。余談ながら，長崎県諫早市六本町有喜（有喜貝塚がある）において古い知見例ながら舟大工が，曲柄に袋状片刃鉄斧を縦につけて船

材の側面を削るのを実見したことがある。巨材や曲面のある木材等の面削りは，横斧状態よりも縦斧の状態で使用することに係る一知見にすぎぬが，III型の使用を想起させるものがあり付記した。

4．ちょうな握把の穿孔について

本報の里田原遺跡23次発掘調査において，ちょうなおよび未成品が29点出土したが，そのうち，9点の握把に両側からの穿孔が認められた。同様の穿孔例は従前の出土例にも1点あるところから計10点のちょうな木柄の握把部に穿孔例をみたことになる。第124図の1～7・15～17，第125図8～11が里田原例である。

穿孔例は，里田原遺跡の分類でII型に限られ他類では類例がない。穿孔の部位は，台部に近い握把部の上半に限られ，握把下端の穿孔例(第124図1・2，第124図8・10)が懸吊用ないし懸吊用紐穴であることとは性格が異るものであろう。この握把部上辺の穿孔は長方形ないし長円形で，細かな，刃物での入念な切削が行われており，紐ずれ等の痕跡はない。この穿孔の意味について叉状部の破裂を防ぐため，台部前部との間に紐で結ぶための穿孔という実用の意味を考えるむきがあるが，穿孔の位置は切削作業時に最も力の加わる部分であり，穿孔部分から切損する原因になり易く，強度劣化という基本的な問題がある。してみるとこの穿孔の意図は実用的なものとは考え難いが，別の意味も考え難い。同様の穿孔は東大阪市鬼虎川遺跡例にも見られ，ひとり里田原における現象ではないらしい。但し，今回（23次）調査のみで出土したII型ちょうなの柄は13例，この中11例の完成品があり，さらにこの中の9例に穿孔があることは重要なことである。I・III型に従前の資料を含めても類例皆無であることと併せて類例の増加と教示を得ない。

註1　正林護「木器」『里田原遺跡略報II』38～49長崎県教育委員会1974。正林護「第10次調査の概要」『里田原遺跡』69～76長崎県教育委員会1975，正林護「里田原遺跡出土木器の復原的考察」『古代学研究』第79号22～28・1976

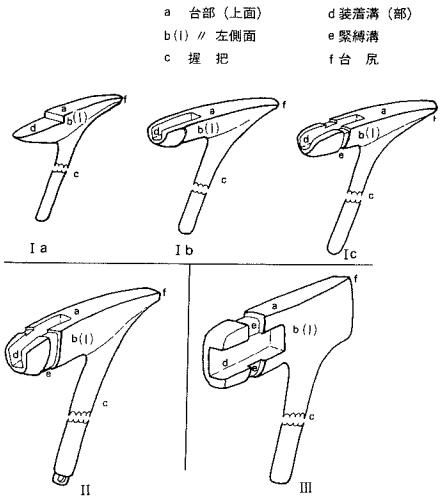
註2　佐原真「石斧論」――横斧から縦斧へ――」『考古論集――松崎寿和先生六十三歳論文集』45～86・1977　佐原真「石斧再論」『森貞次郎先生古稀記念古文化論集』161～182・1982

註3　正林護「第10次調査の概要（発掘調査）」『里田原遺跡』69～76長崎県教育委員会1975

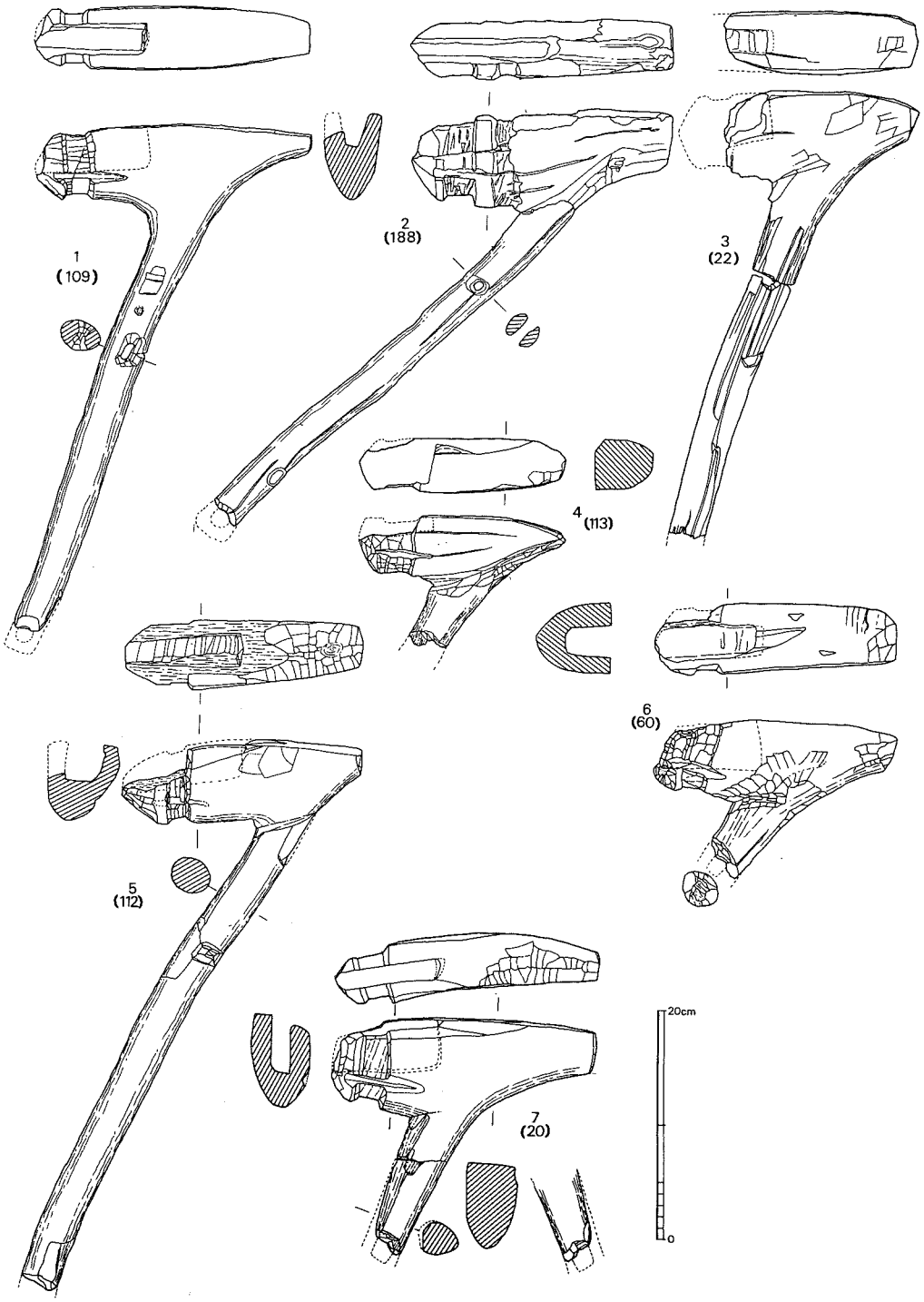
註4　芋本隆裕「3．工具」『鬼虎川の木質遺物』――第7次発掘調査報告書第4冊――20～24財団法人東大阪市文化財協会1987

註5　註1正林文献

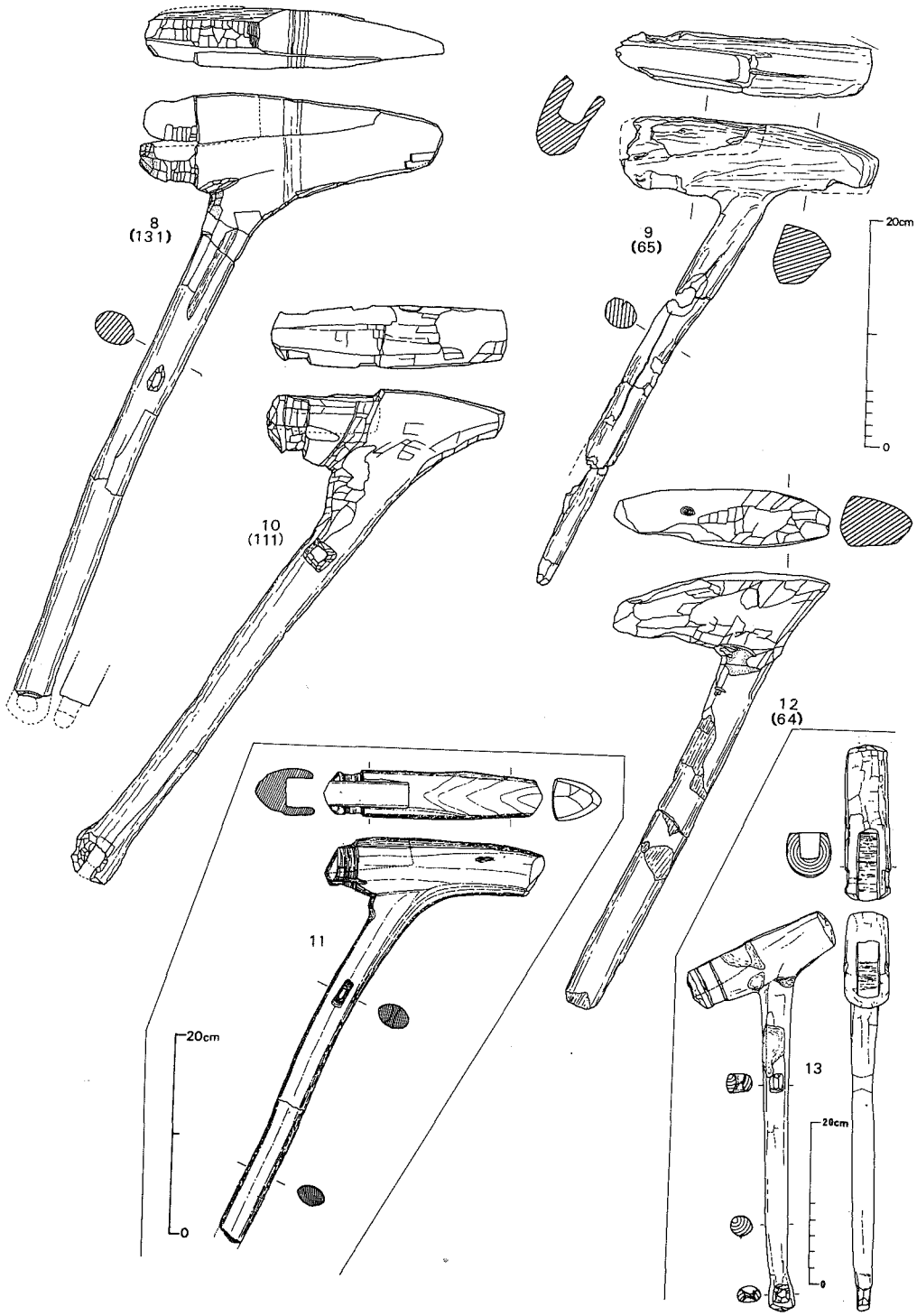
註6　註2佐原文献



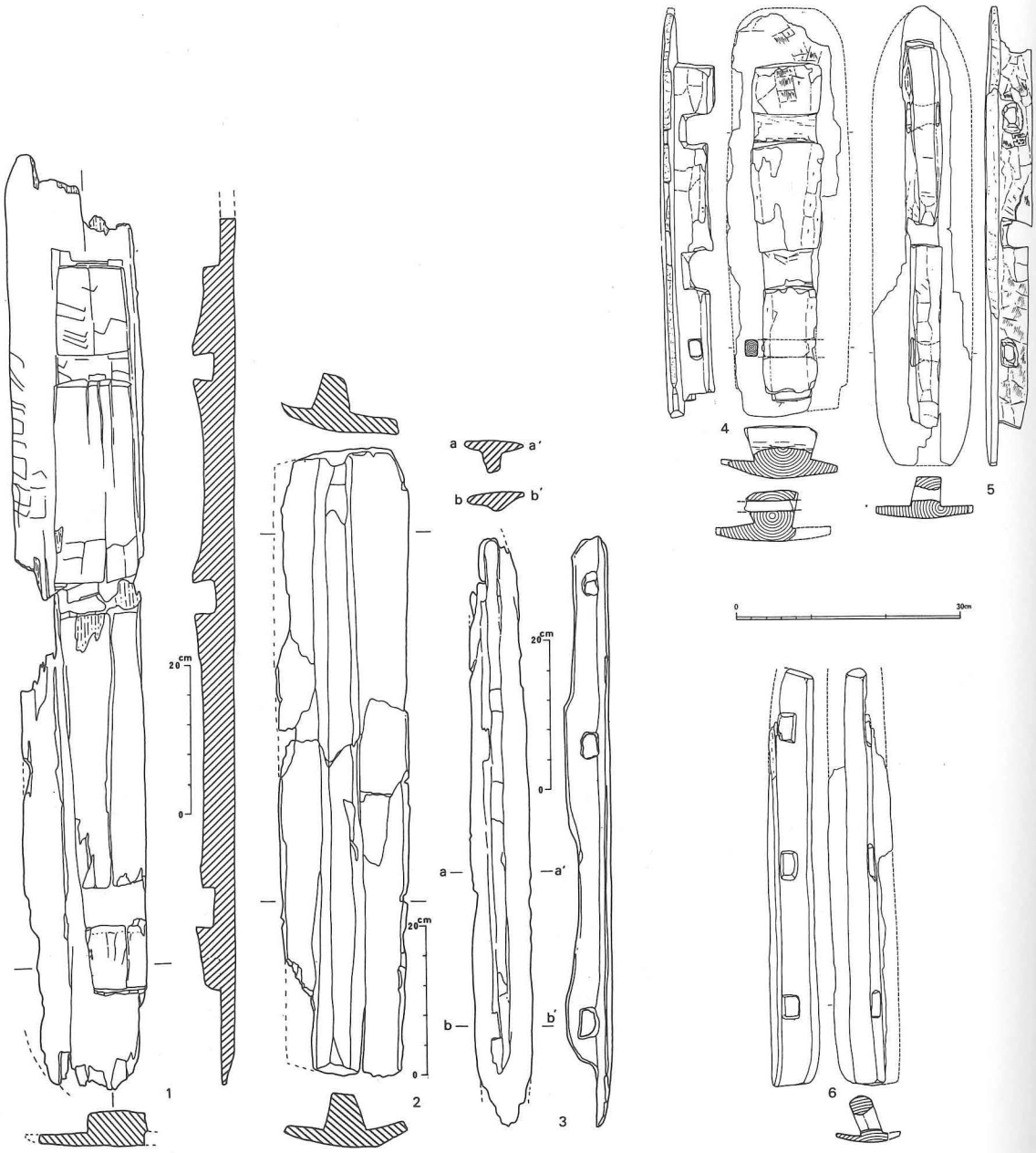
第123図　手斧木桶の型式各部名称図



第124図　手斧II型の穿孔例①



第125図　手斧II型の穿孔例②（11は里田原８次，13は鬼虎川）　※カッコ内数字は本文挿図番号



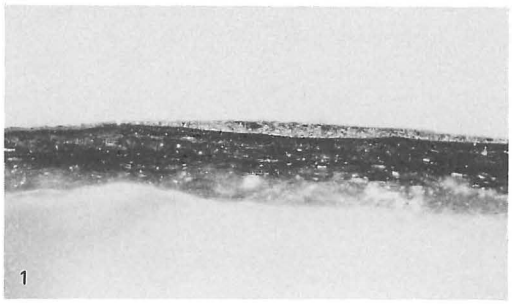
第126図　橇状木製品および未製品（1～3　里田原遺跡，4～6　鬼虎川遺跡）

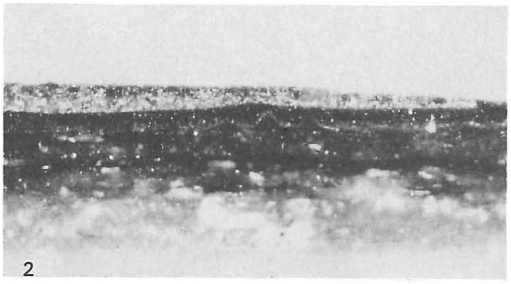
漆塗木器の漆膜の分析と顕微鏡観察

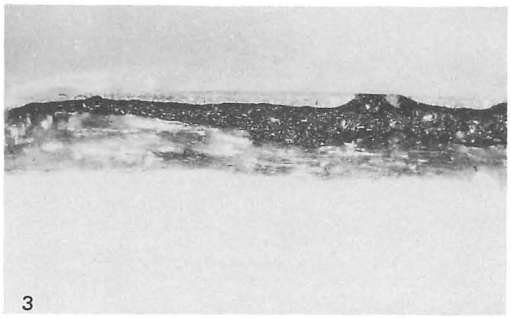
黒漆塗漆器（巻頭カラー図版，第83図，71～73，図版40）の彩文に用いた赤漆の顔料は螢光X線分析法で分析したところ，4点ともにベンガラ（酸化第二鉄＝Fe_2O_3）であることが判明した。

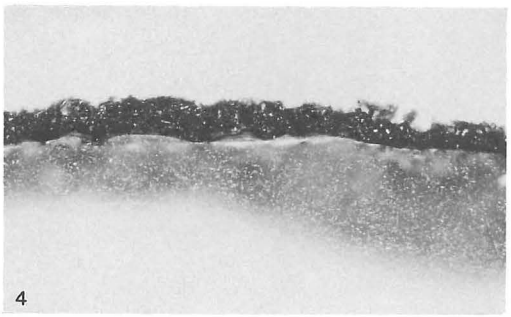
また，これらの漆膜の断面を顕微鏡で観察したところ，鉢型木器の黒漆は木胎に2層の黒漆を塗り重ねているらしいことが判明した。黒漆は2層をあわせた厚さが50ミクロンである。

台付柾状木器の黒漆は1層のみで，その厚さは約70ミクロンあり，赤漆の厚さは約20ミクロンである。









漆膜断面顕微鏡写真

1．鉢型木器黒漆上に赤漆（100倍）　2．同左（200倍）

3．台付柾状木器黒漆上に赤漆（100倍）　4．同左黒漆のみ（100倍）

漆塗木器の樹種同定　鉢型木器はイヌガヤ，台付柾状木器はセンダンである。

図　　版

▲里田原遺跡と支石墓（南から）　▼調査区全景（西から）

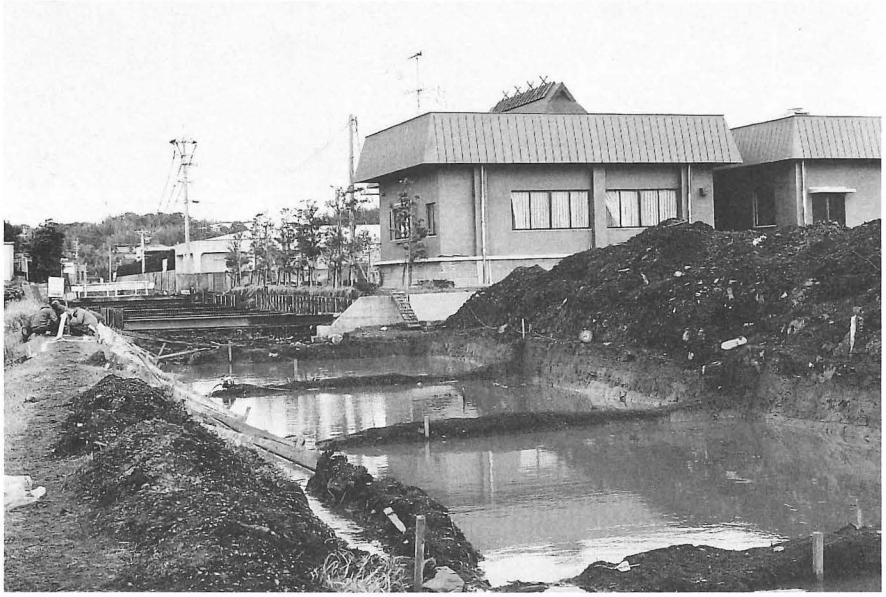
図版2　遺　跡

▲調査区全景

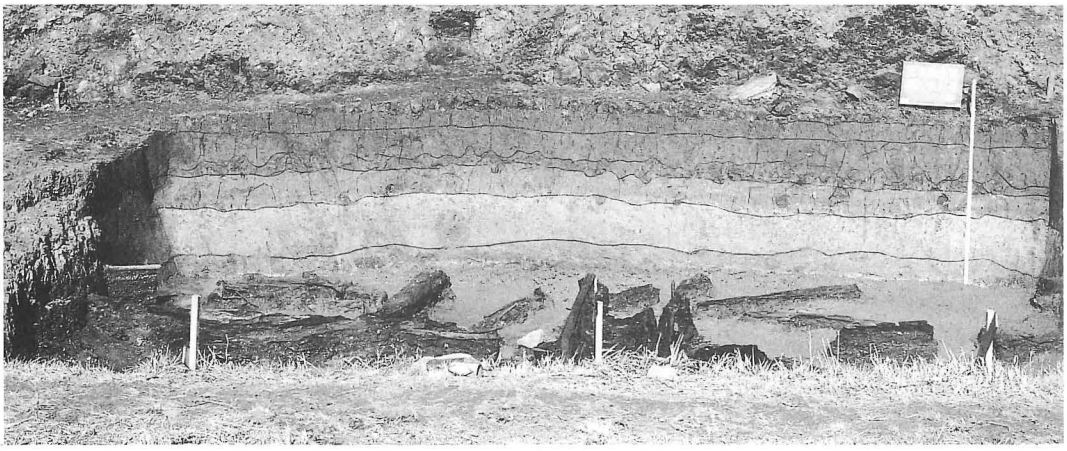
▼調査状況

図版3　遺跡と土層

▶里田原遺跡と里川（東から）



▶降雨後の里川



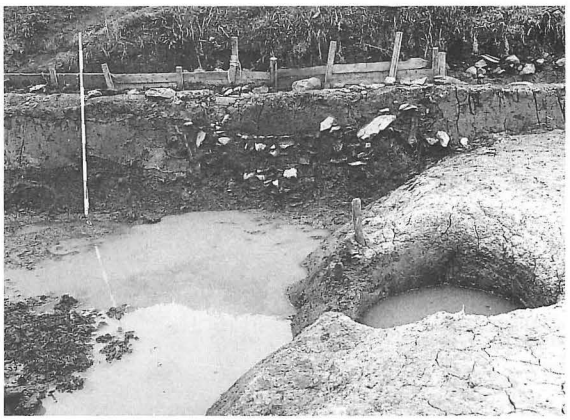
第400区の土層（北壁）▼

図版4　旧里川の状況

▲第580区の状況（沼沢状況）北から

▲第560区の状況，護岸材が北東→南西に走る（北から）

▲第450区の旧陸地形と河岸の堅果加工施設（南から）



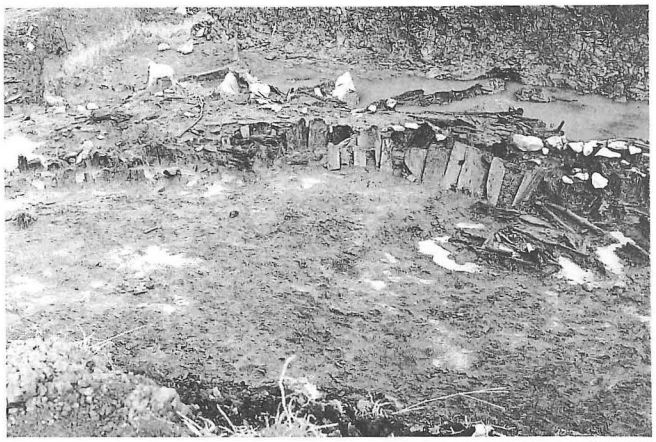
▲第450区南東隅における旧里川の河道と堅果加工施設（北から）

▲第380区における旧里川の状況（北から）

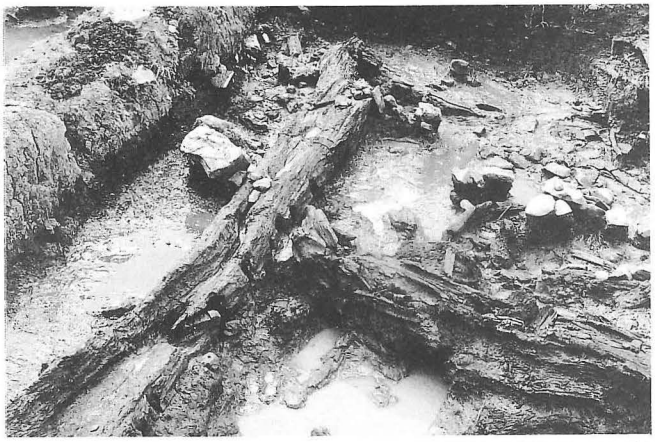
▲第360区における旧里川の河道（北から）

図版5　旧里川の状況と遺構

▶第450〜460区における旧里川と護岸遺構および堅果加工施設（西から）



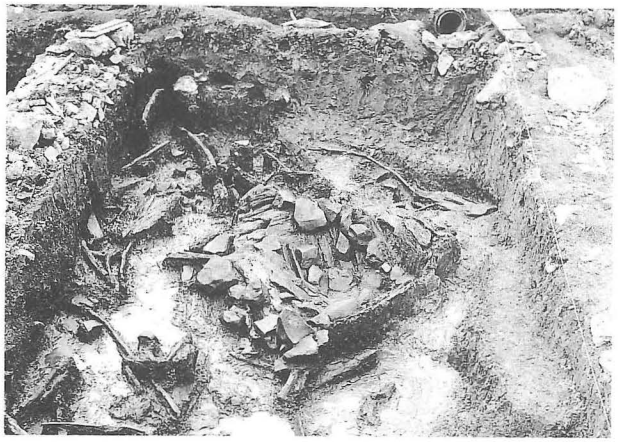
▶第460区の護岸矢板列（南から）



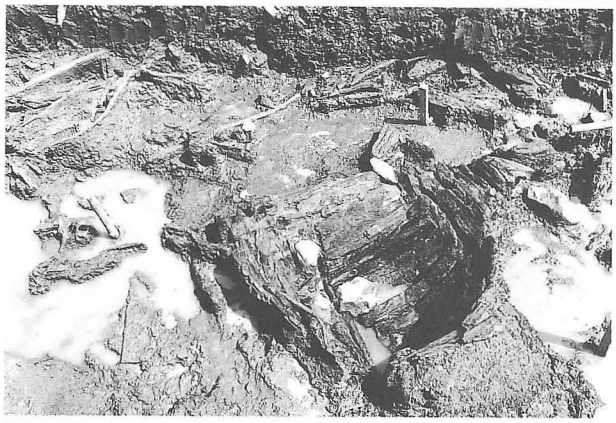
▶第460区における巨木護岸（北から）

▶第450区における旧里川河岸と堅果加工施設

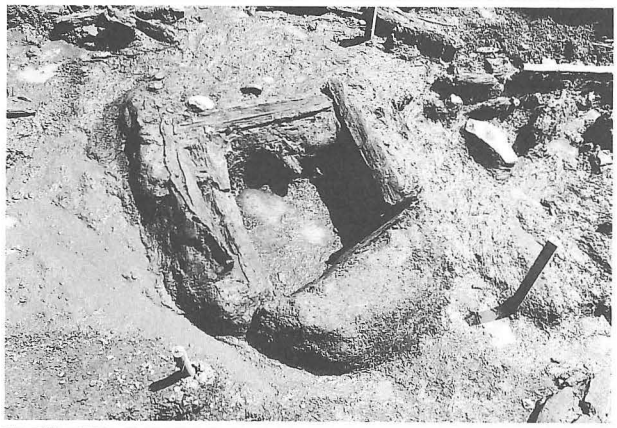
図版6　遺構（堅果加工施設）



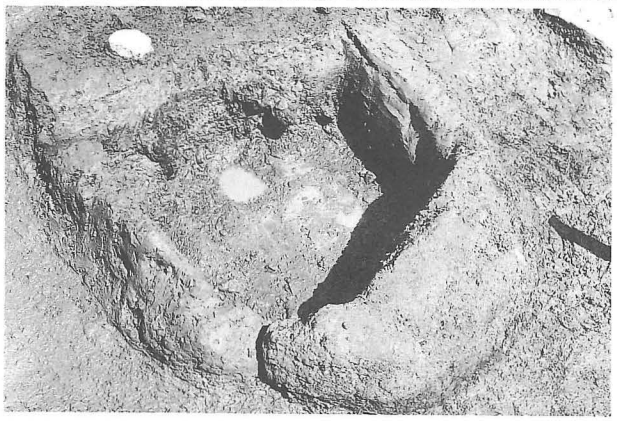
▶第580区における堅果加工施設検出状況



▶板材浮遊防止の礫群除去後の状況

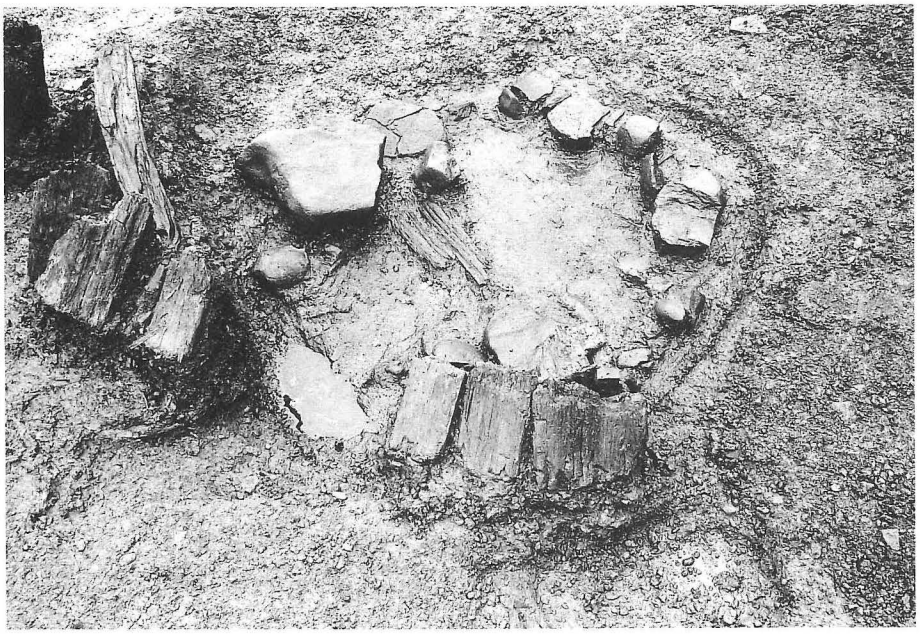


▶板蓋除去後の状況（土壙口縁の方形板木組）



▶土壙縁の粘土張りの状況

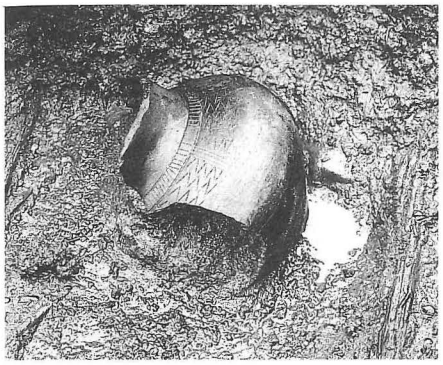
図版7　遺構（堅果加工施設）



▲第420区の堅果加工施設

▲同上，充塡された太堅果類

図版8　遺物出土状況



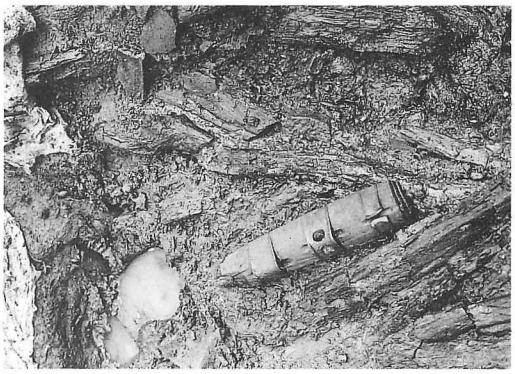
壺型土器

広鍬未成品他

広鍬他

槽　他

手付木柄未成品他

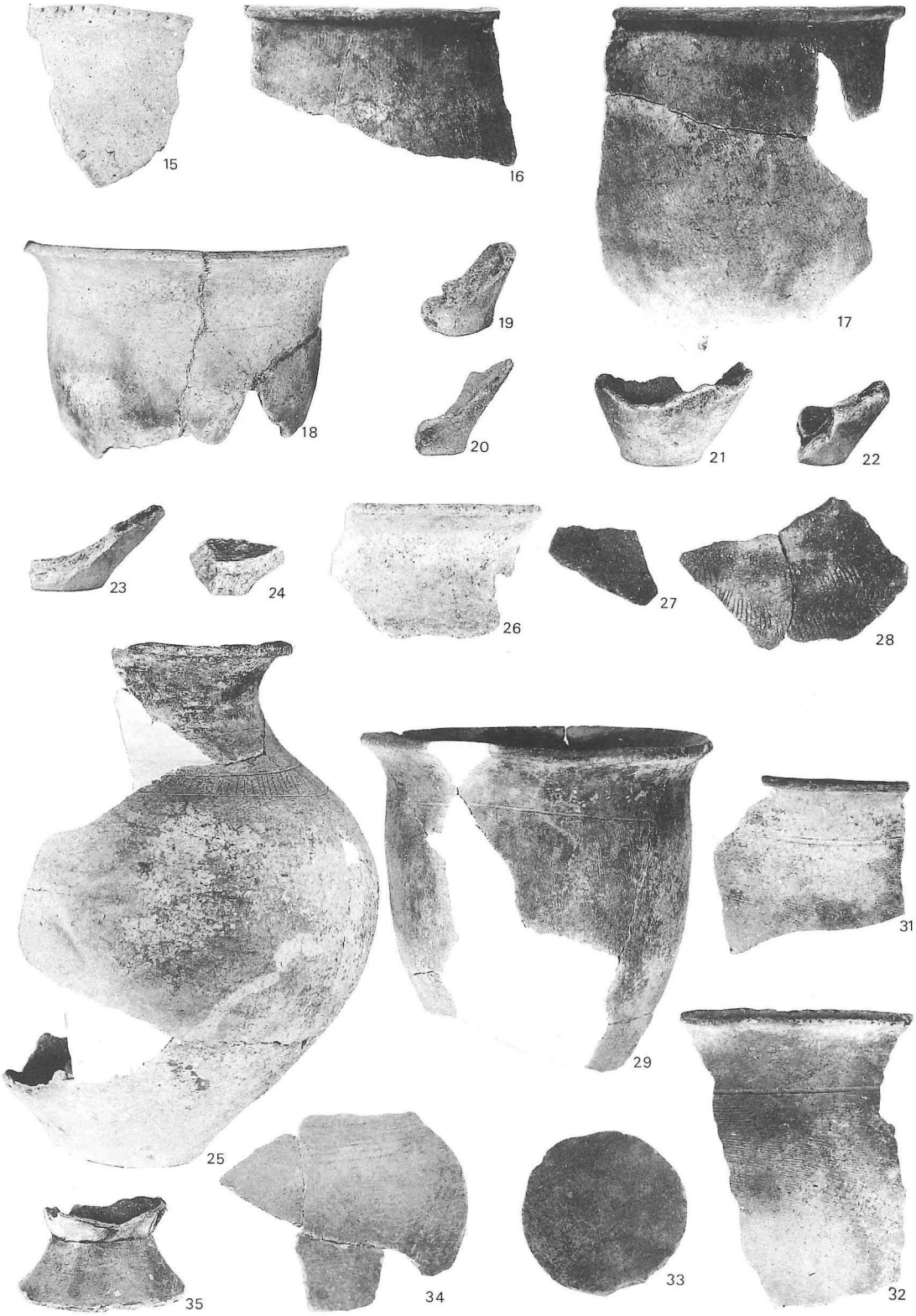


異形木器他

橇型木器他

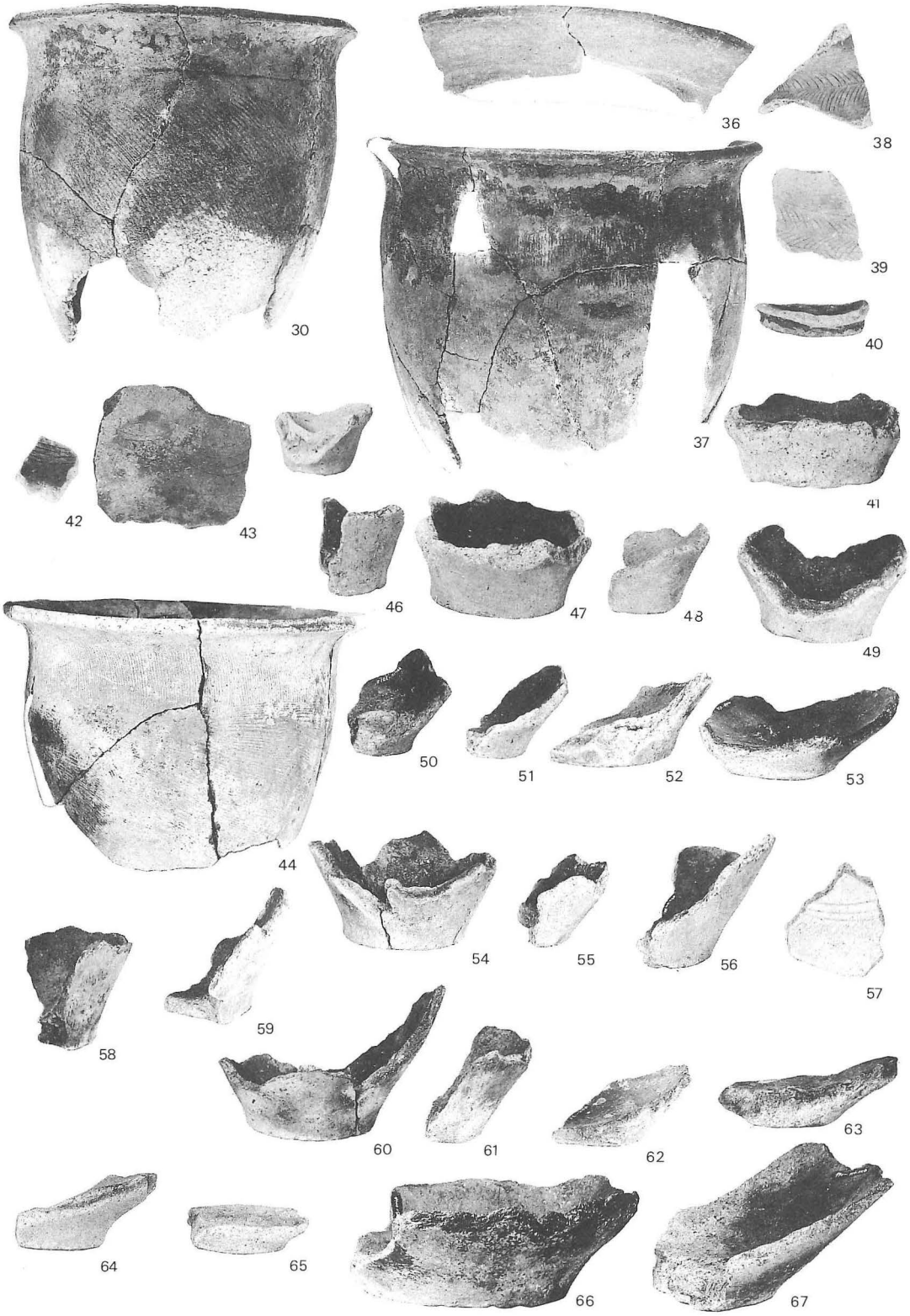
よ　き　他

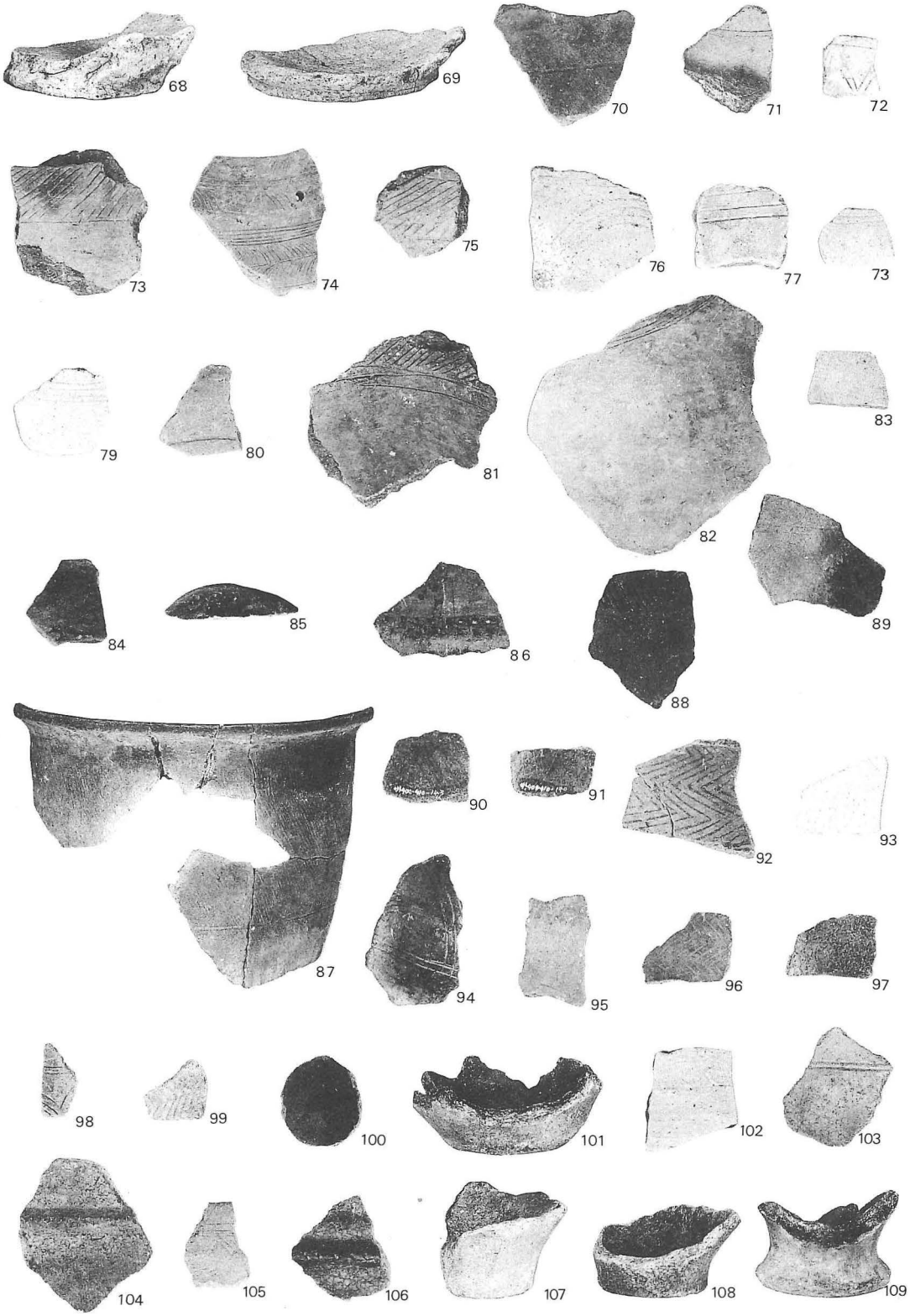
図版9　土　器　第580区(1～3)　第530区(4～6)　第470区(7～14)　縮尺1/4



図版10　土　器　第470区(15～24)・第460区(25～32)・第450区(33・34)・第430区(35)　縮尺1/4

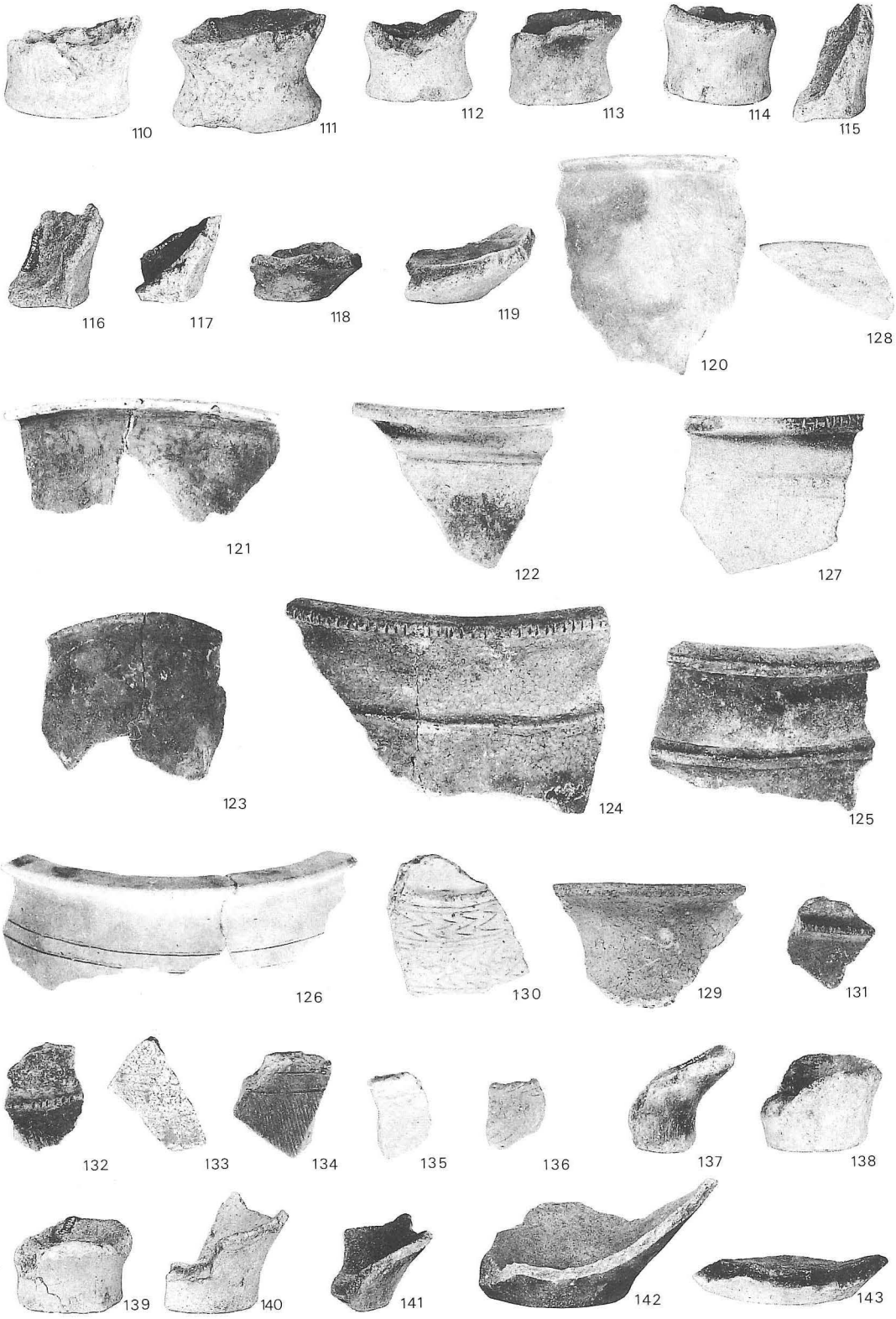
図版11 土器 第460区(30)・第420区(36〜43)・第410区(44〜67) 縮尺1/4



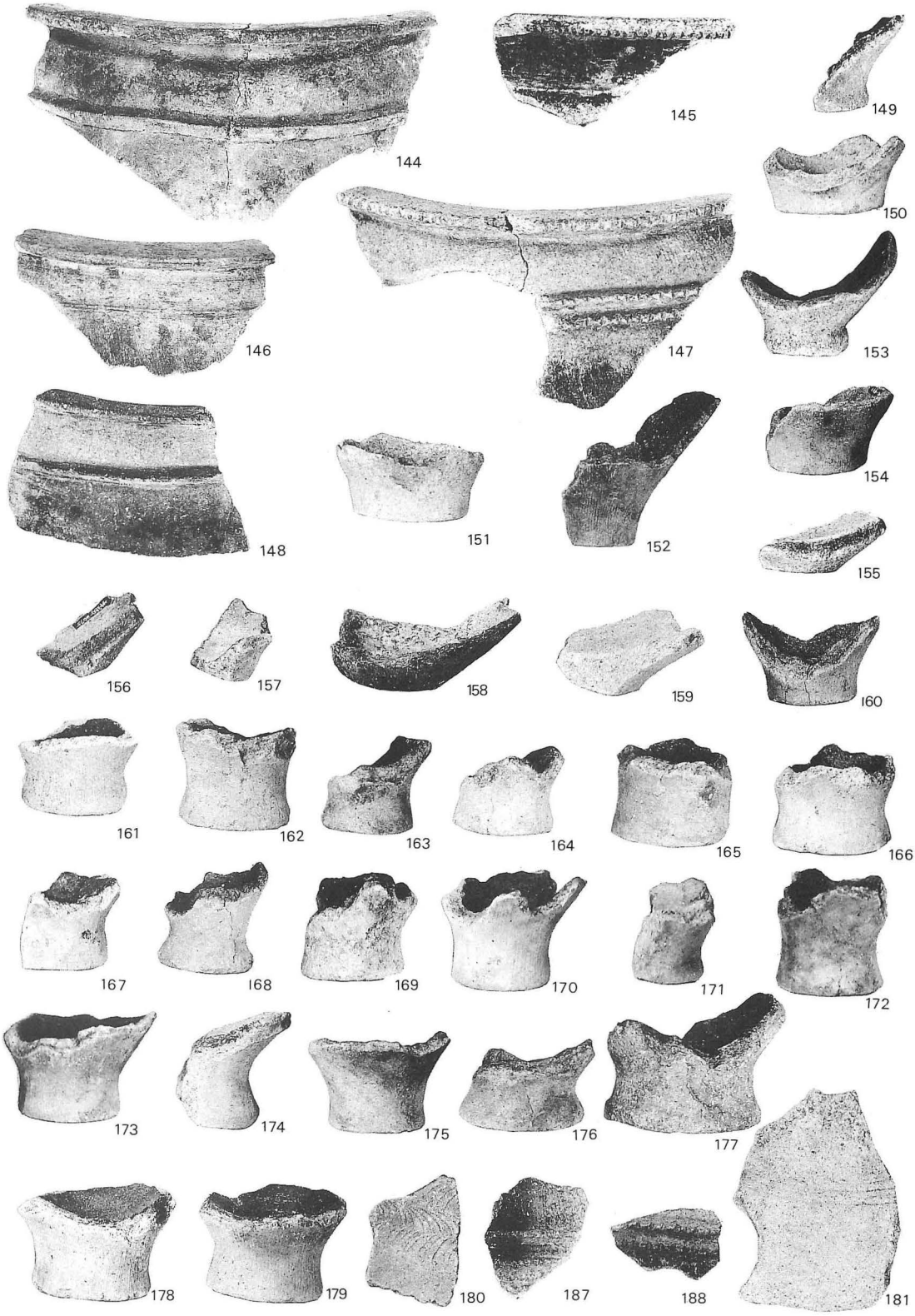


図版12　土　器　第4-0区(68～83)・第40区(85～101)・第39区(102～105)・第38区(106～109)　縮尺1/4

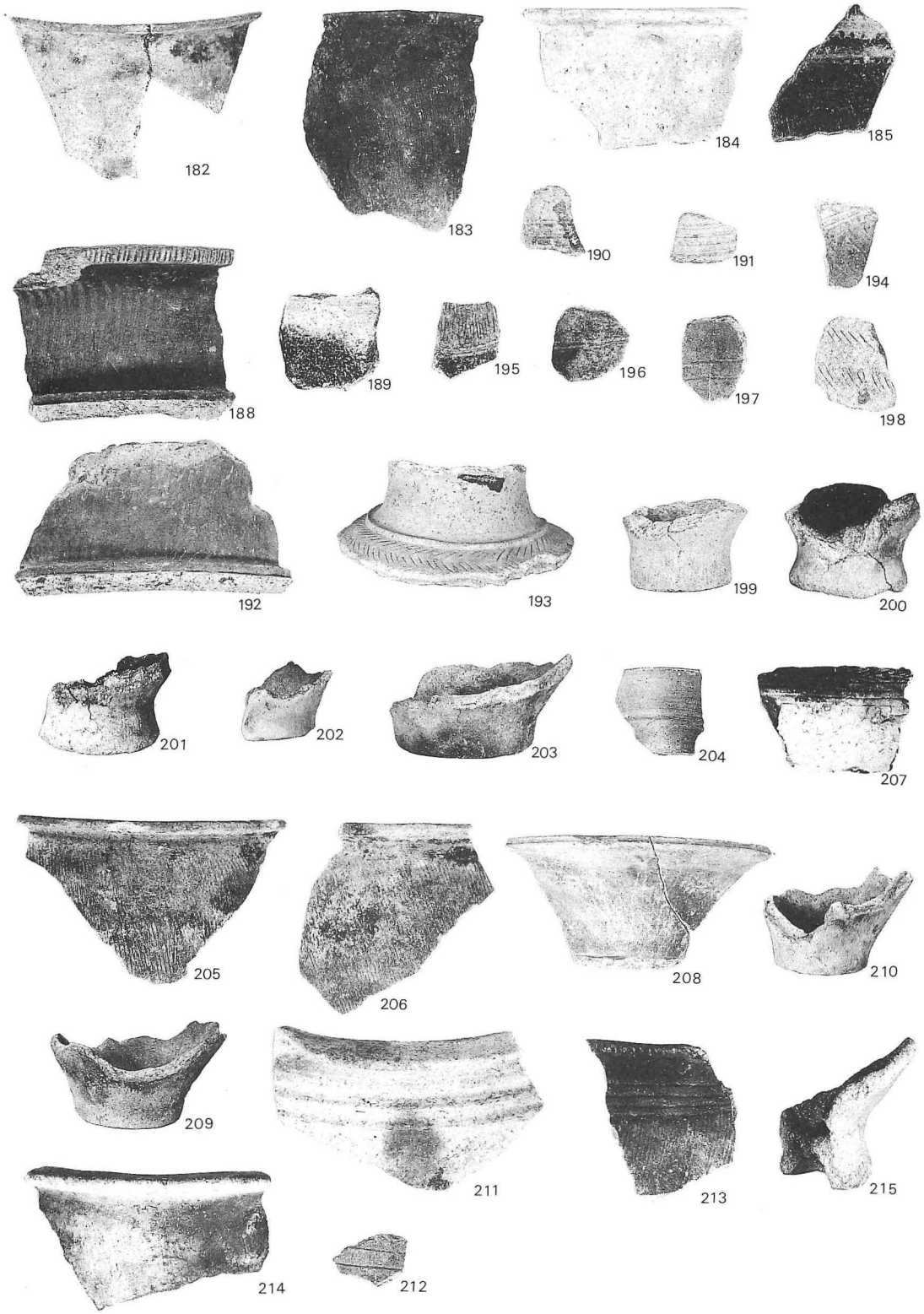
図版13 土器 第380区(110～119)・第370区(120～143) 縮尺1/4

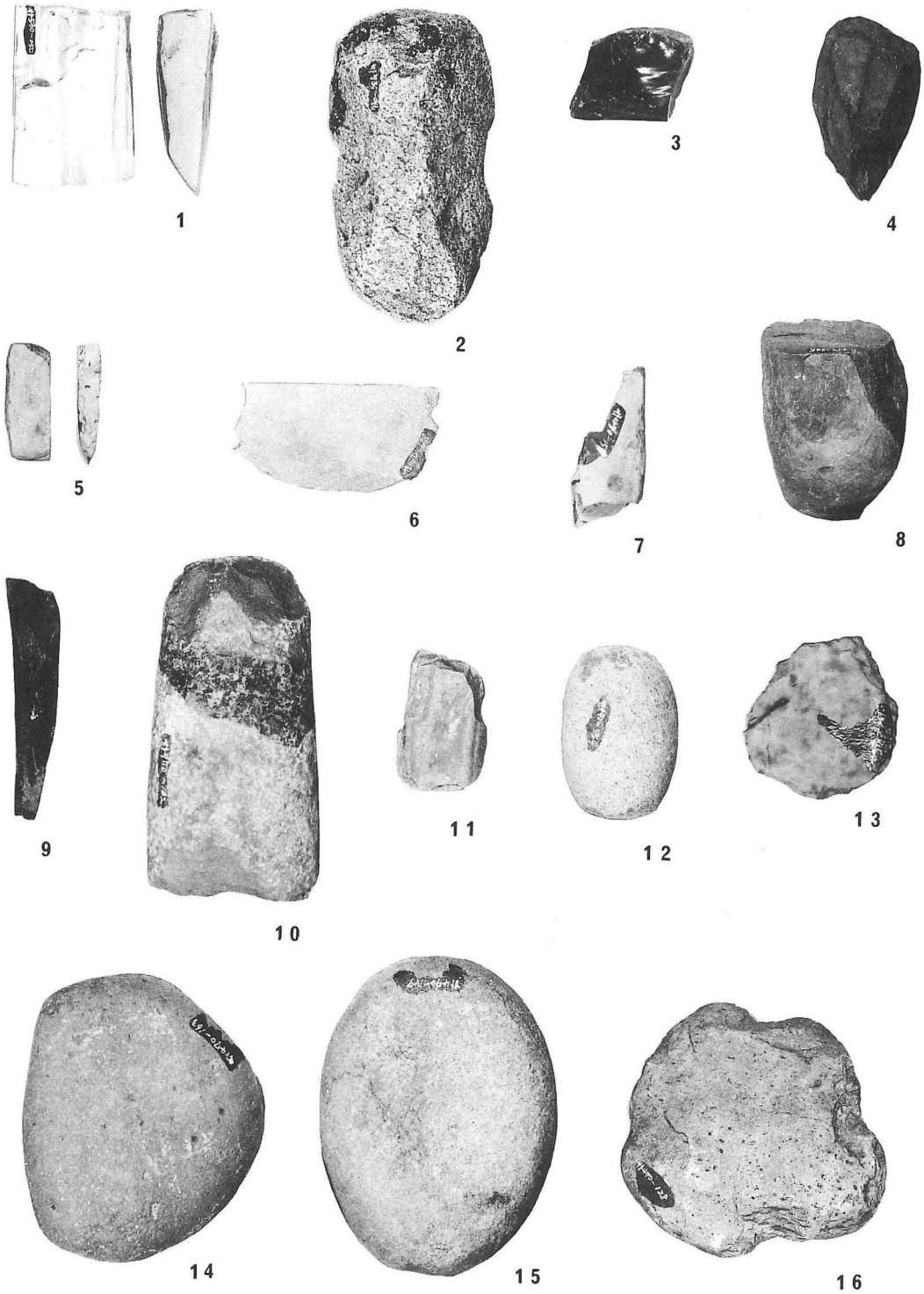


図版14　土　器　第360区（144～181・187・188）縮尺1/4



図版15 土器 第360区(182～191)・第350区(192～204)・第330区(205～210)・第320区(211～215) 縮尺1/4

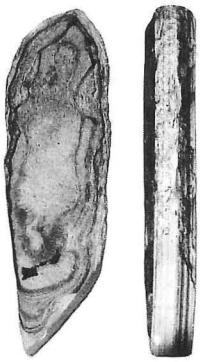




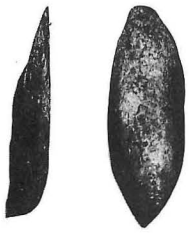
図版16　石　器

第530区(1・2)・第510区(3・4)・第470区(5〜16)　縮尺1/3　(3・4)1/2

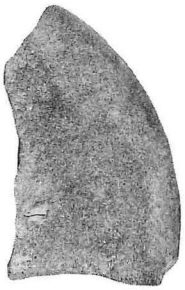
図版17　石　器　第460区(17～23)・第450区(24～28)　縮尺1/3


17

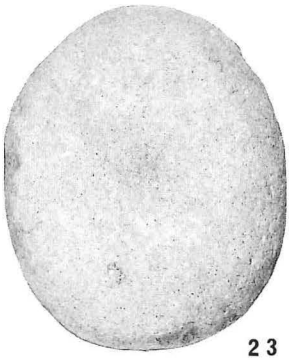
18

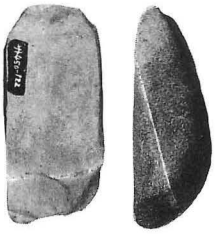

19

20


21

22


23


24

25

26

28

27

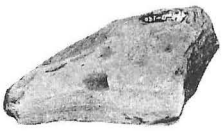
図版18　石　器

第430区(29・30)・第420区(31～37)　縮尺1/3(29～31)1/2

29

30

31



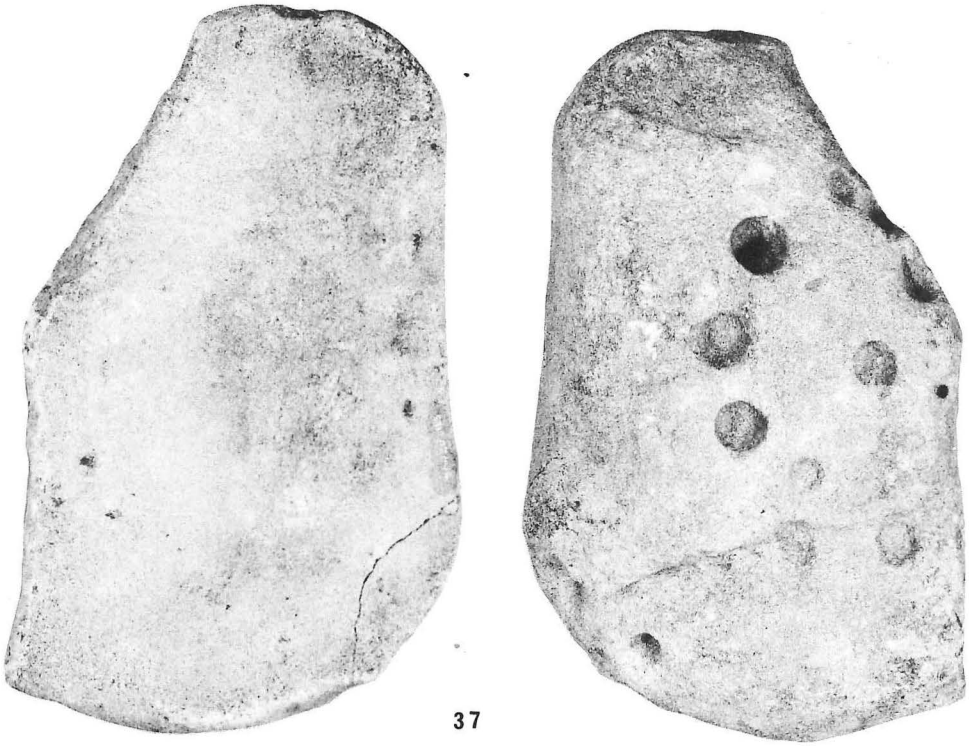
32

33

34

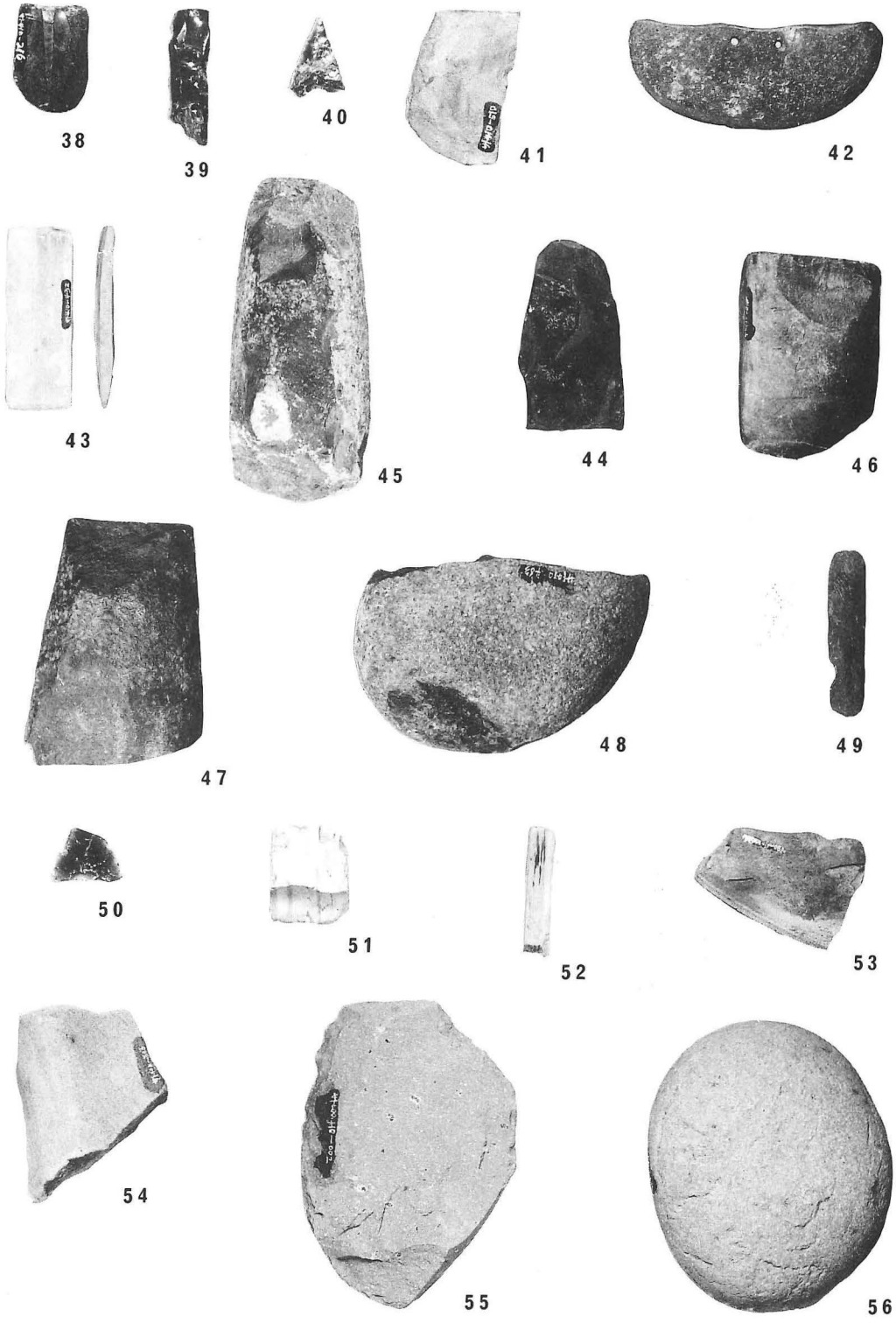
36

35



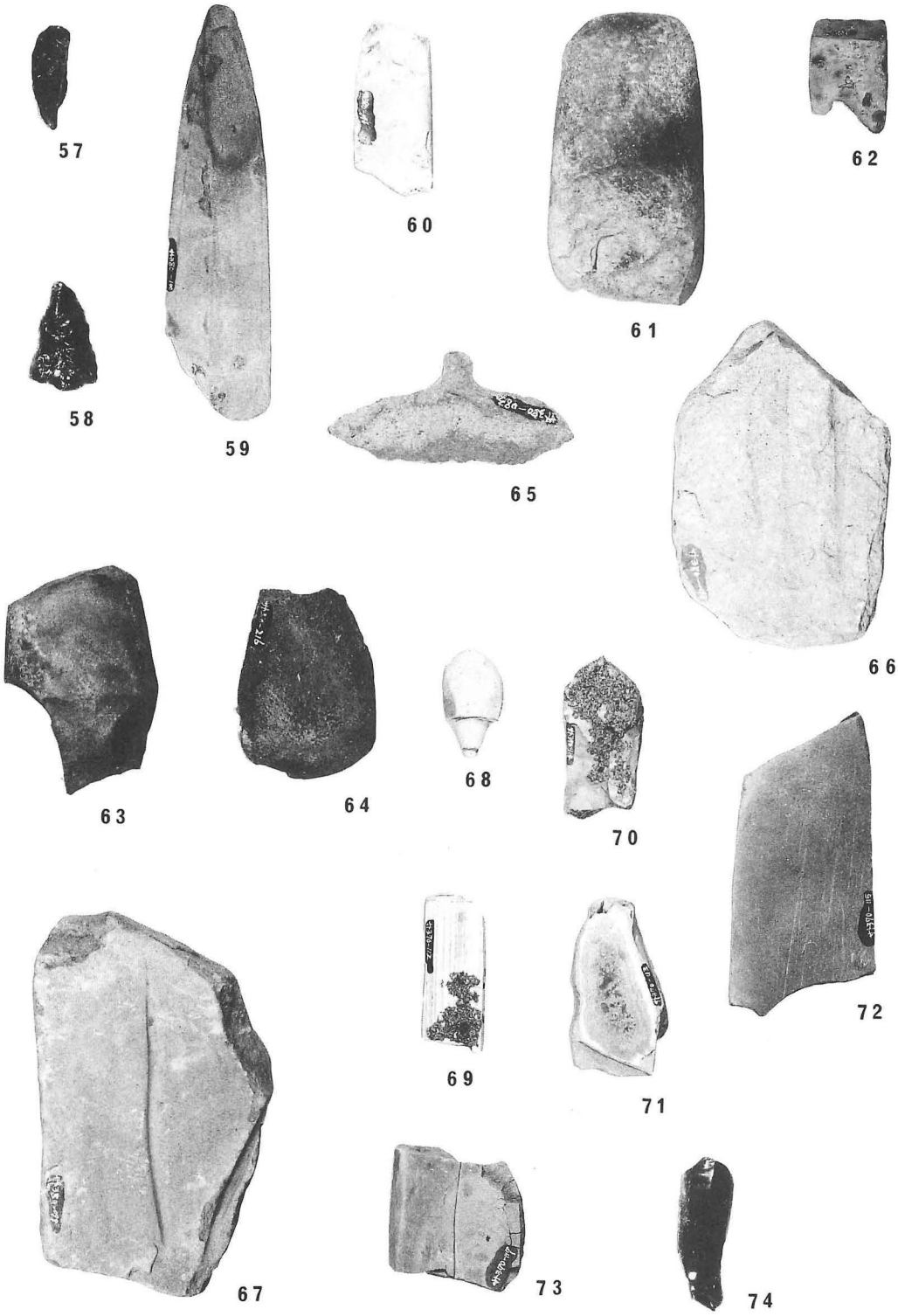
37

図版19　石　器　第4－0区(38～49)・第400区(50～56)　縮尺1/3(38～40・50)1/2



図版20　石　器

第390区(57・58)・第380区(59～67)・第370区(68～74)　縮尺1/3(57・58・74)1/2



図版21　石　器　第360区（75～86）縮尺1/3

75

76

77

78

79

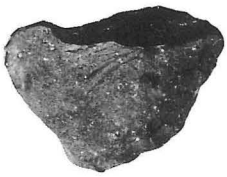
80

81

82

83

84


85

86

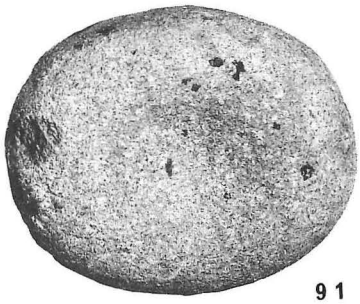
図版22　石　器　第360区(87～93)・第350区(94～102)　縮尺1/3(92・93・95)1/2

87

88

89

90


91

92

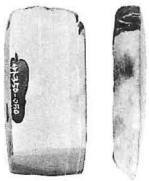
93

94

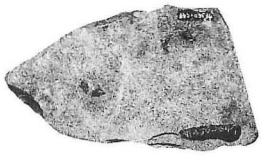
95

96

97


98

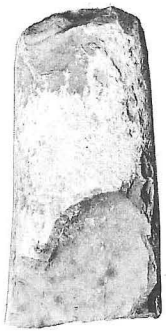
99


100

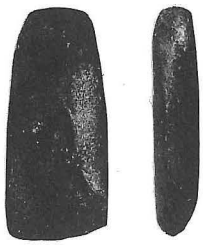
101

102

図版23　石　器　第330区(103～109)・第320区(110～112)　縮尺1/3

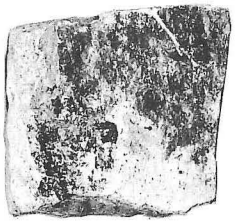


103



104

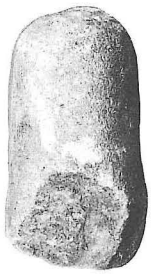
105



106

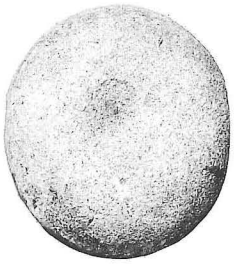
107

108



109

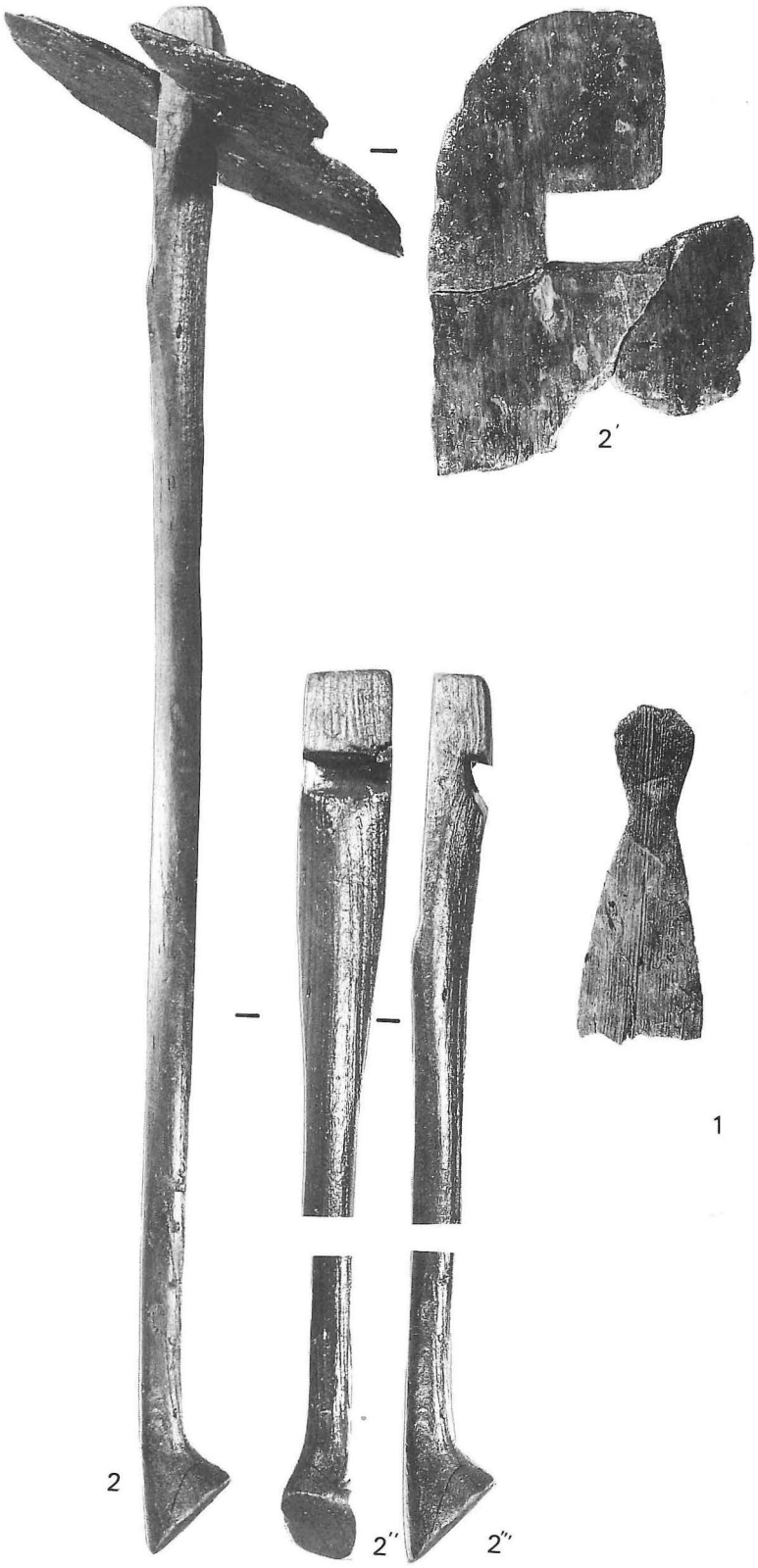
110



111

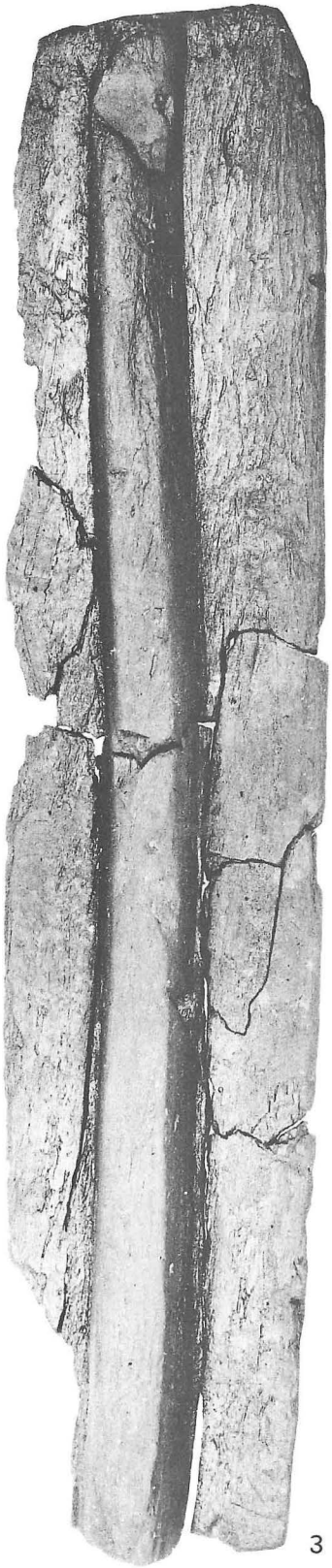
112

図版24　第580区の木製品①



1　糸巻？，2　広鍬

図版25　第580区出土の木製品　②



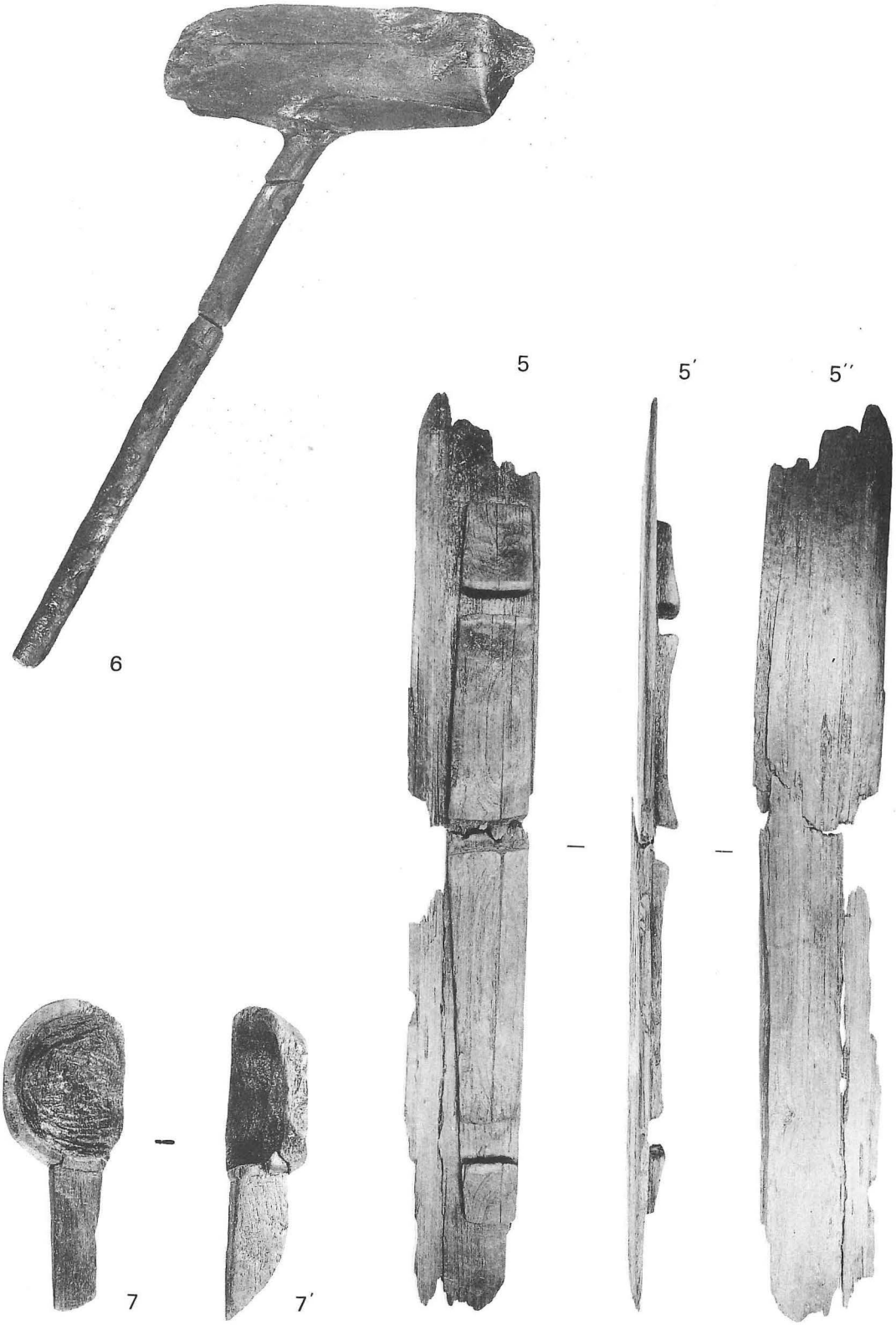
3

3′

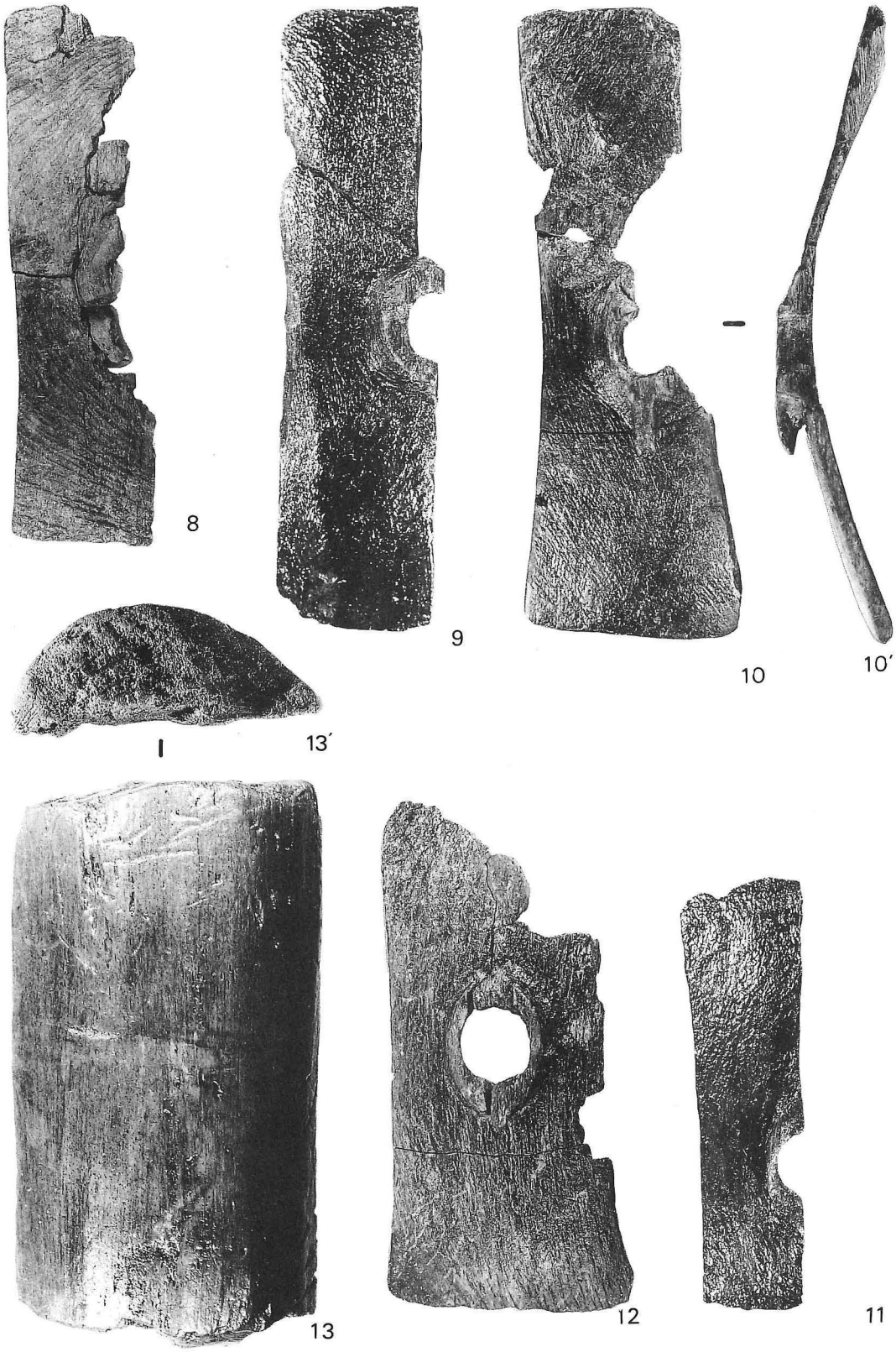
4

3　橇未成品（1/4），4　長板（1/4）

図版26　第530区出土の木製品

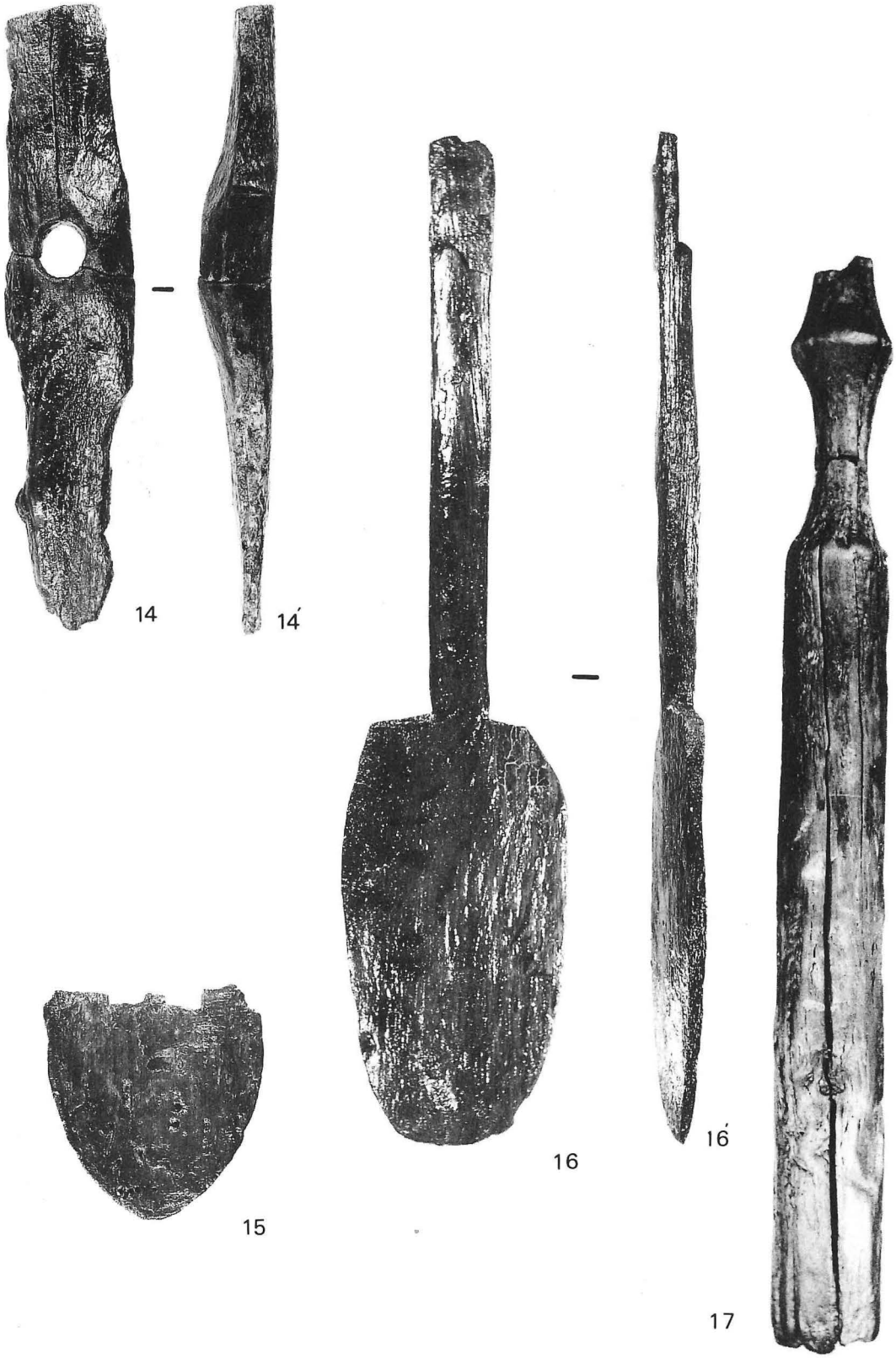


5　橇（1/8），6　手斧未成品（1/4），7　杓子（1/4）

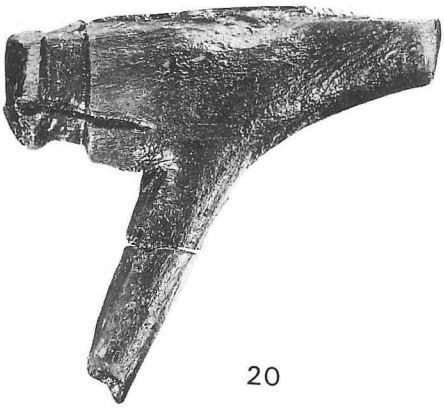


8～11　広鍬（1/4），13　半丸割截材（1/4）

図版28　第470区出土の木製品　②

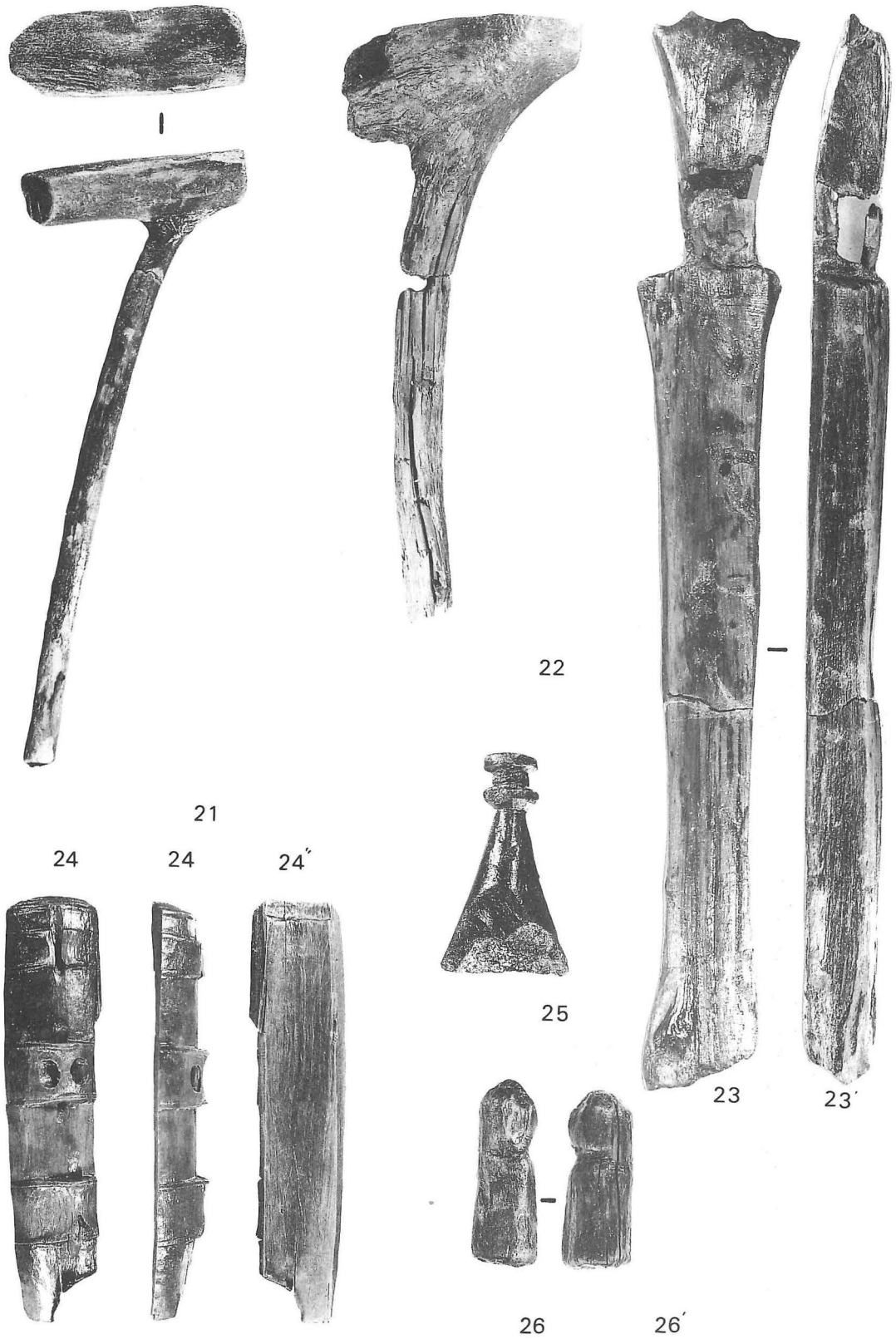


14　狭鍬（1/4），15～16　鋤（1/4），17　竪杵（1/4）

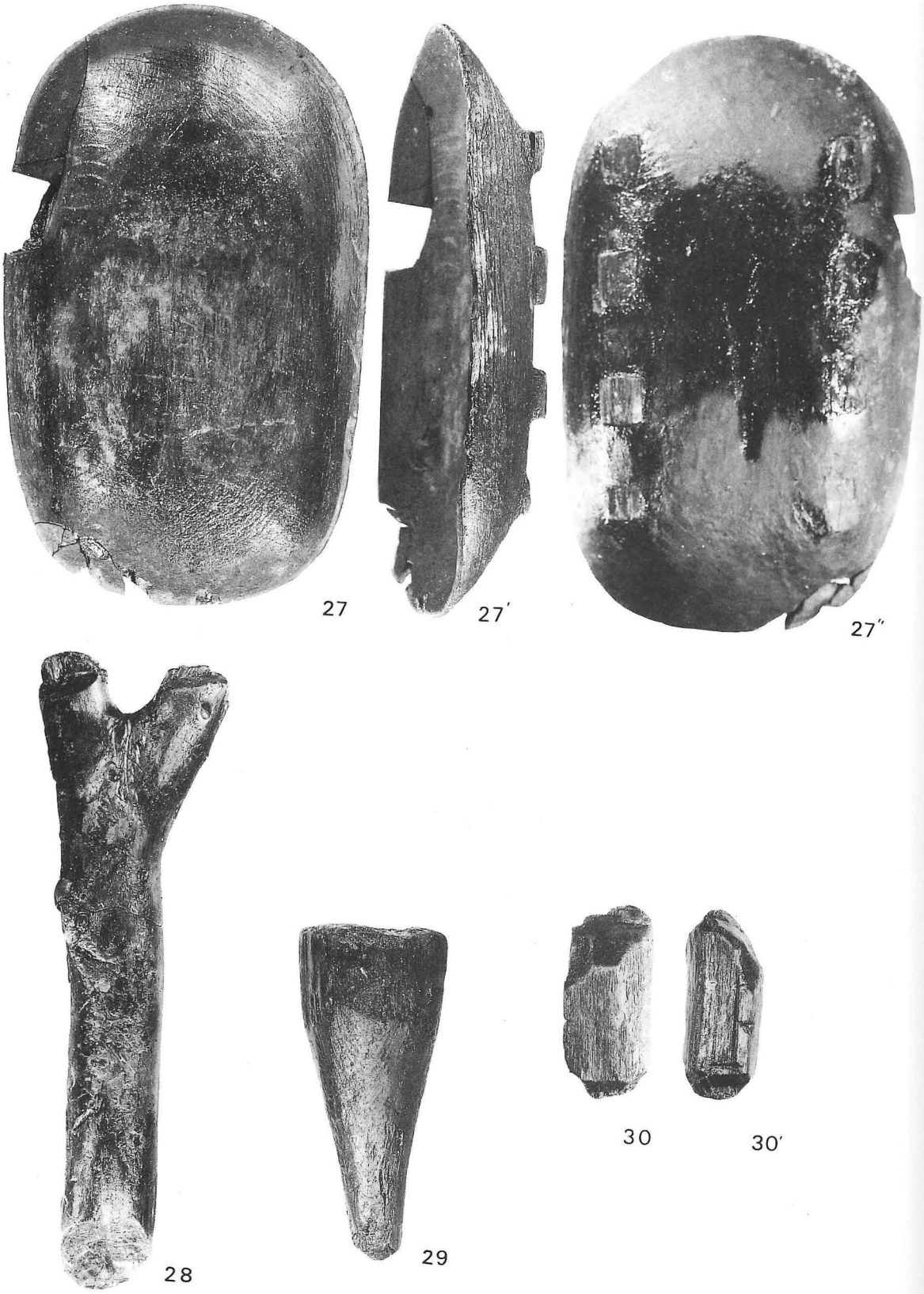


18～19　広鍬未成品（1/4），20　手斧柄（1/4）

図版30　第470区出土の木製品　④

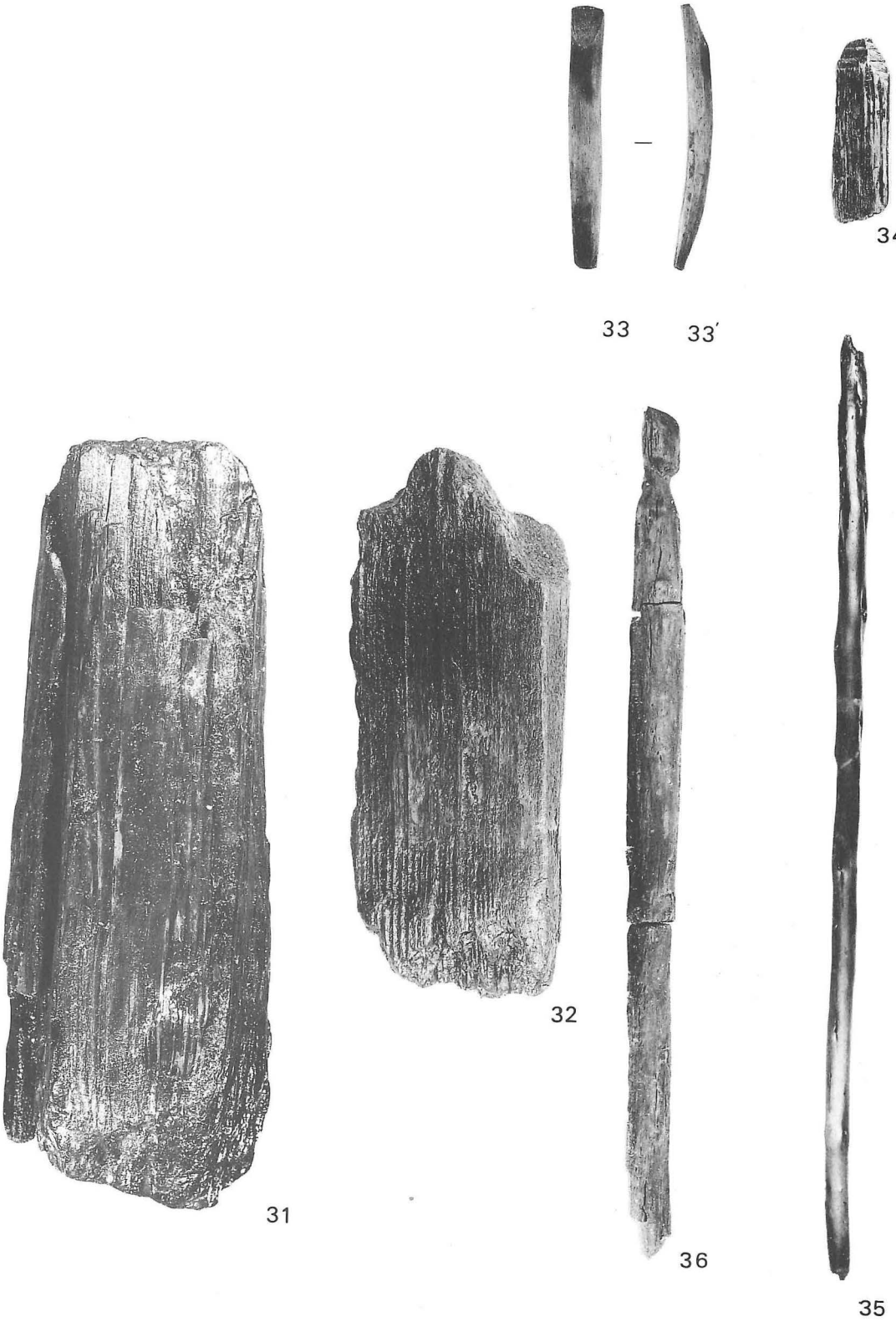


21　手斧柄未成品（1/4），22　手斧柄（1/4），23　よき柄（1/4），24～26　異形木製品（1/4）



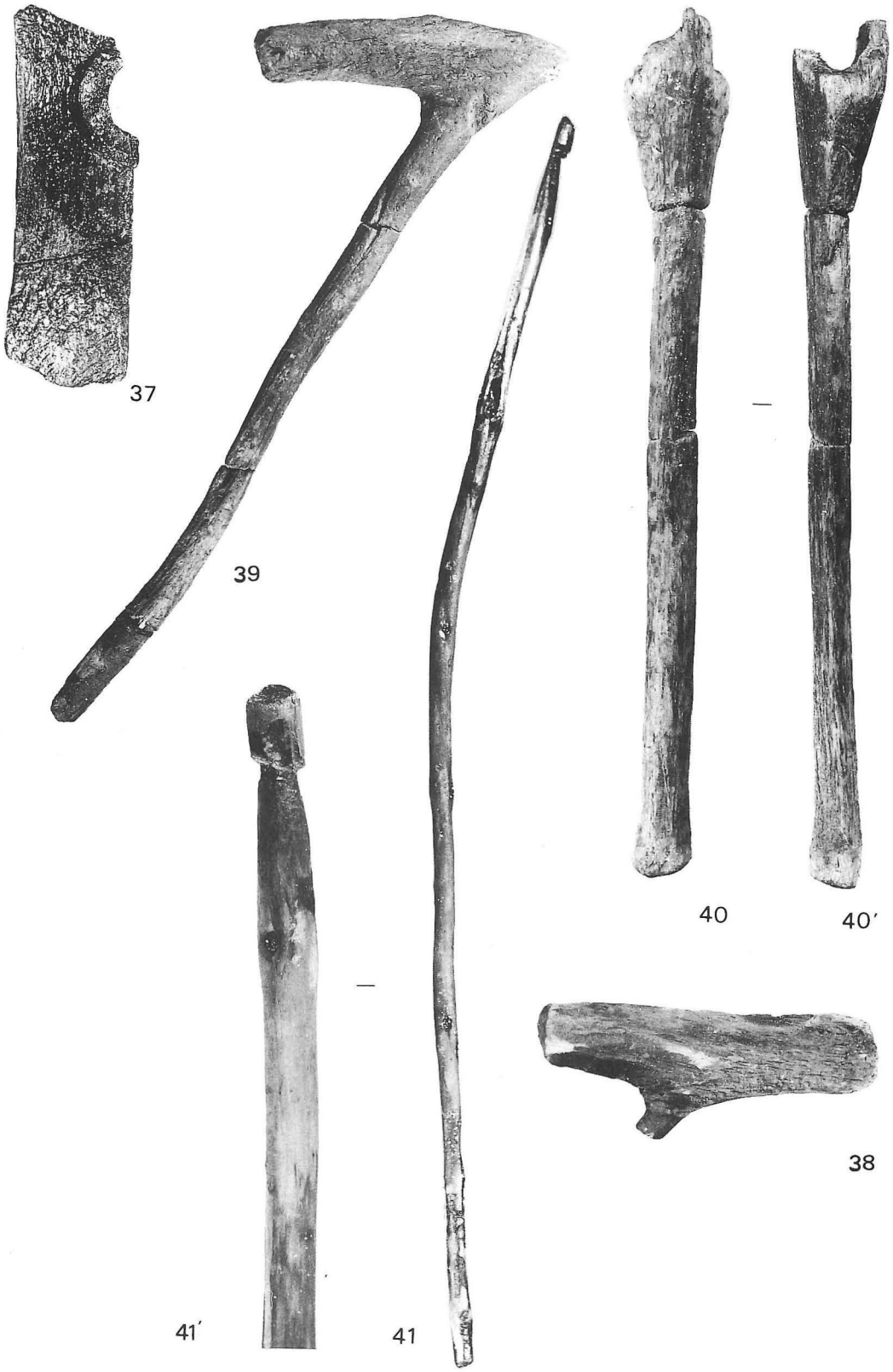
27　高脚容器（1/4），28～30　用途不明木製品（1/4）

図版32　第470区出土の木製品　⑥

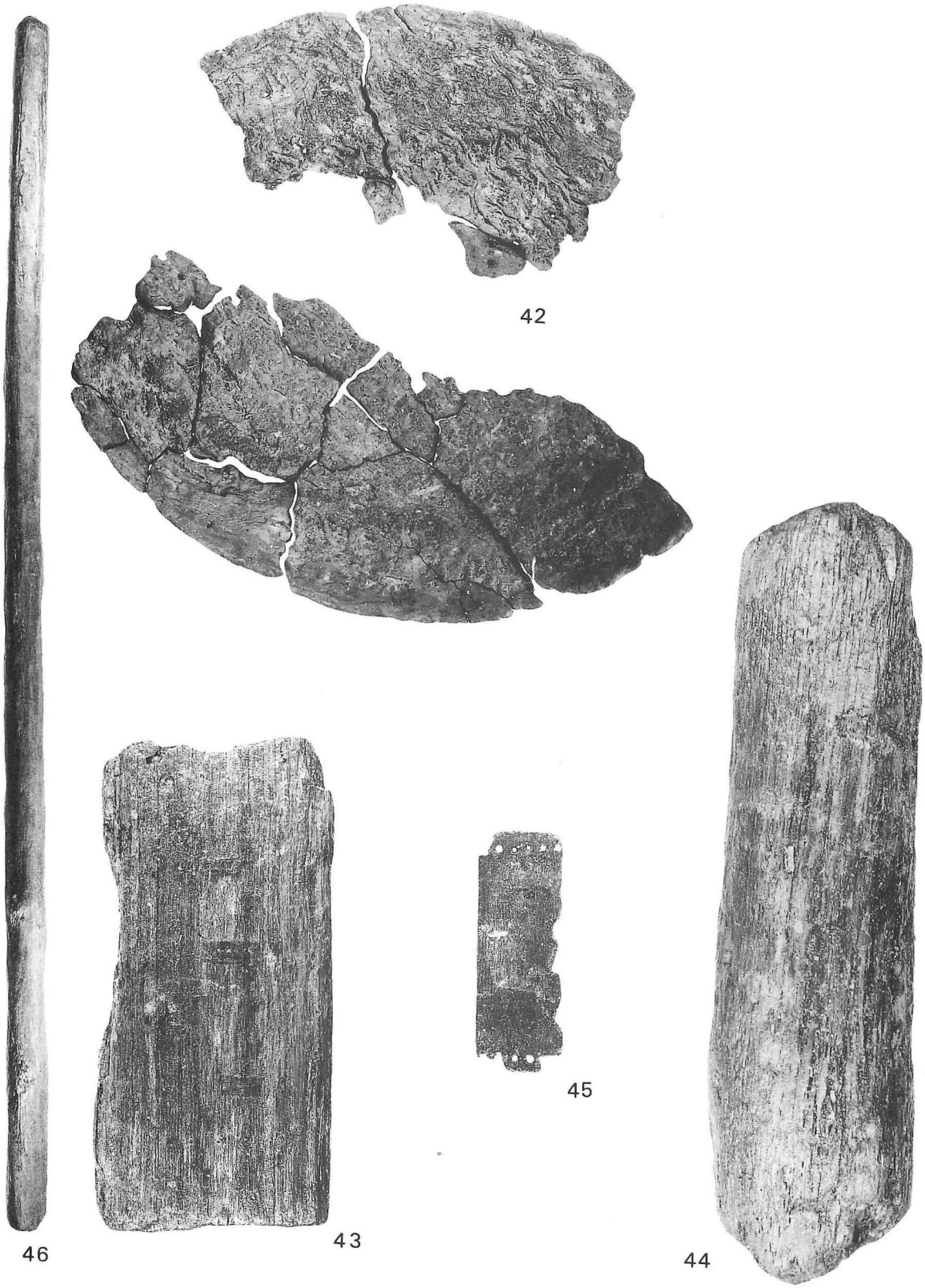


31～32　護岸材（1/4），33～34　用途不明木製品（1/4），36　おおこ？（1/4），35　弓（1/4）

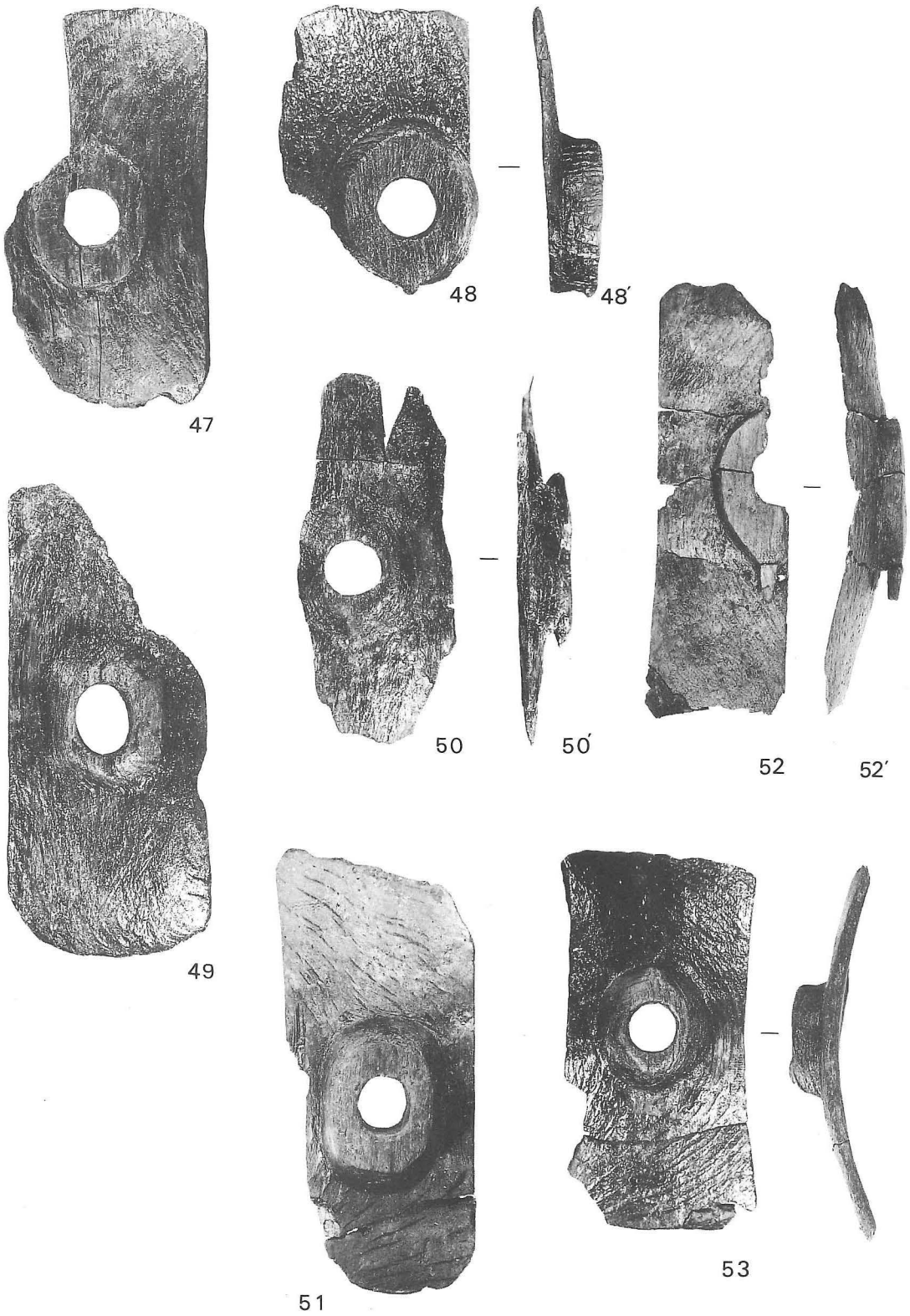
図版33　第470〜460区間畦畔部出土の木製品　①



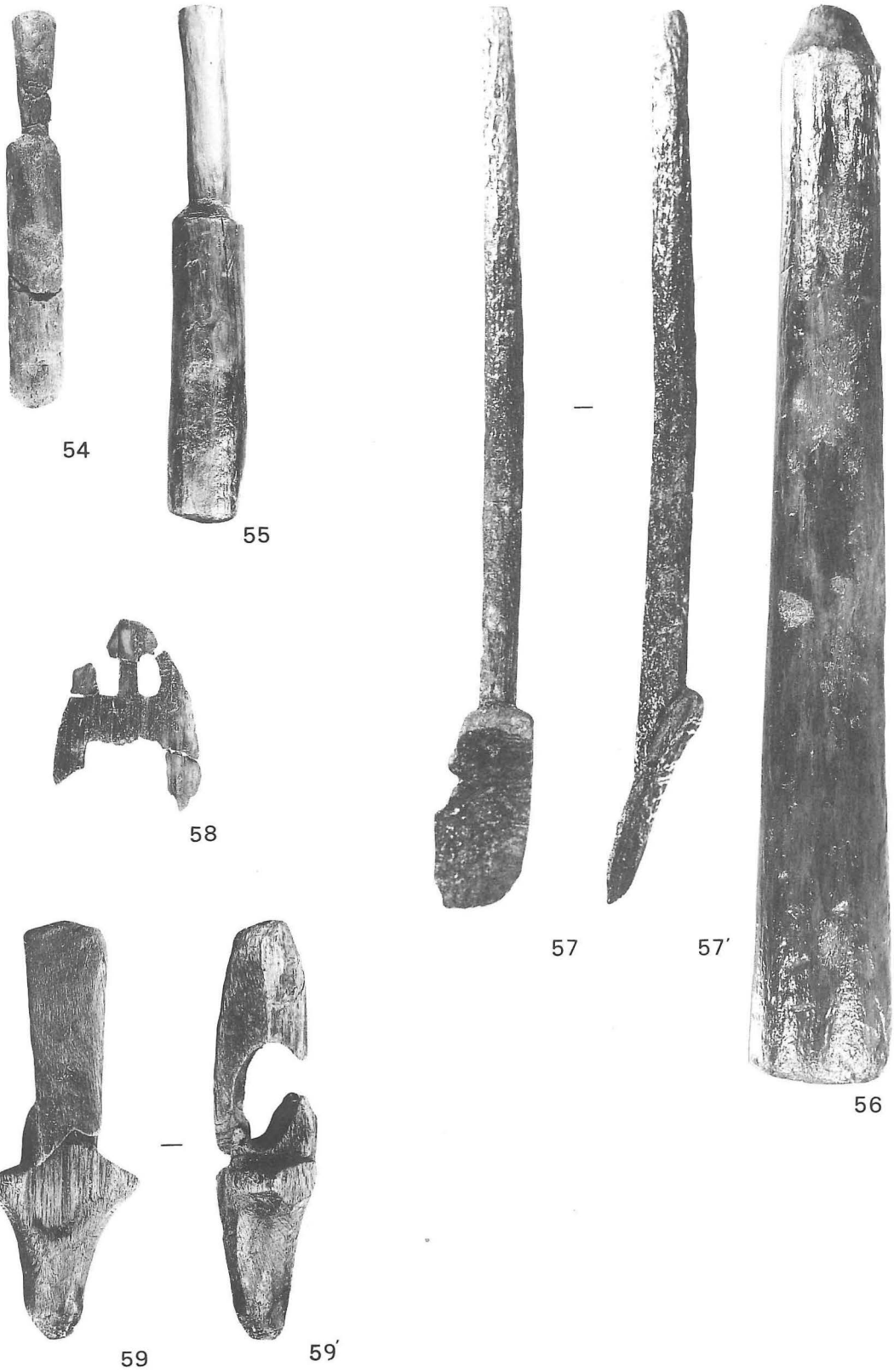
37　広鍬（1/4），38〜39　手斧柄未成品（1/4），40　よき柄（1/4），41　弓（1/4）



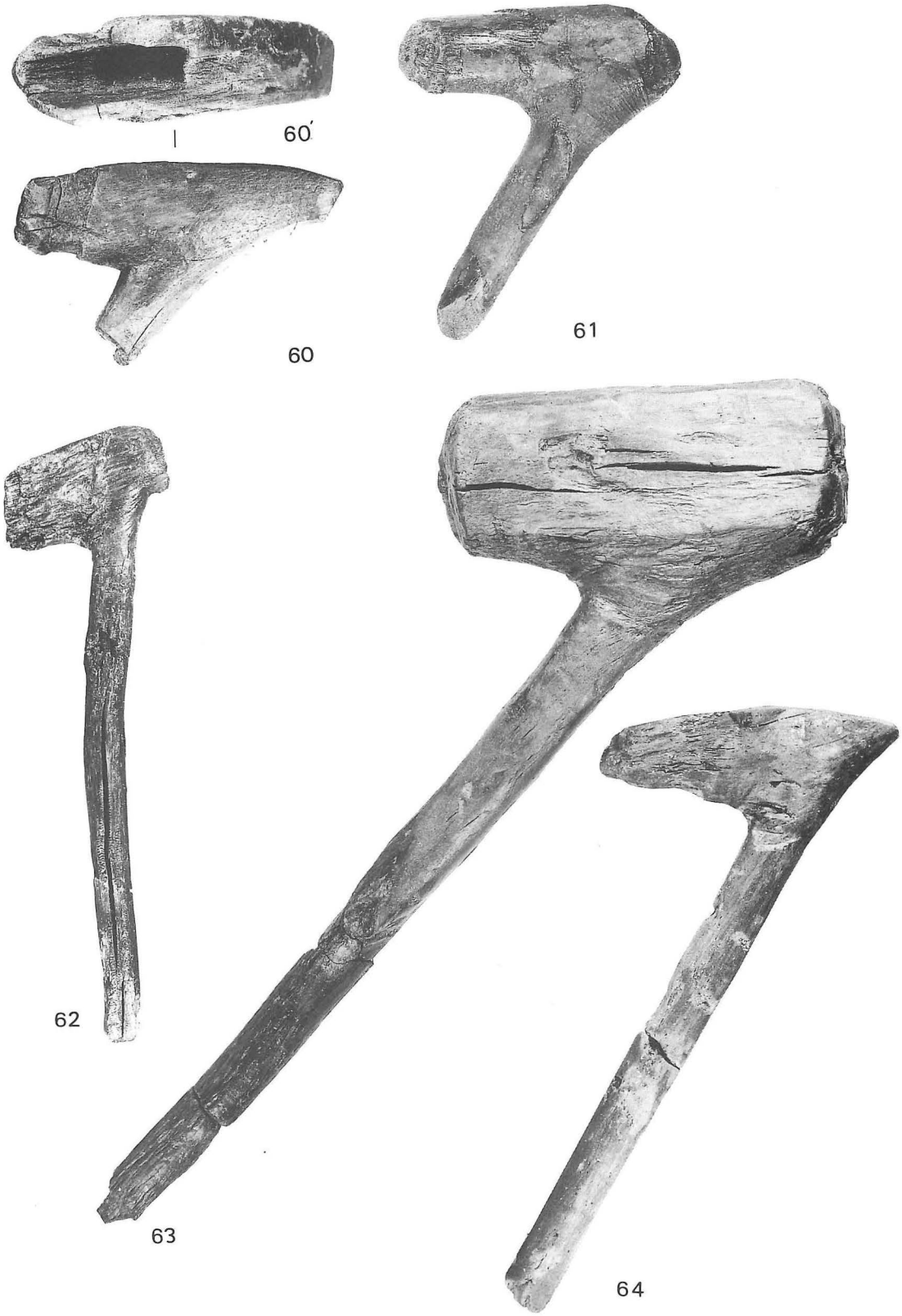
42　高台付鉢（1/4），43　矢板（1/4），44　半割丸太（1/4），45　用途不明木製品（1/4），46　鍬柄？（1/4）



47～53　広鍬（1/4）



54～55 横槌（1/4），56 竪杵（1/4），57～58 鋤（1/4），59 よき柄（1/4）



60　手斧柄（1/4），61～64　手斧柄未成品（1/4）

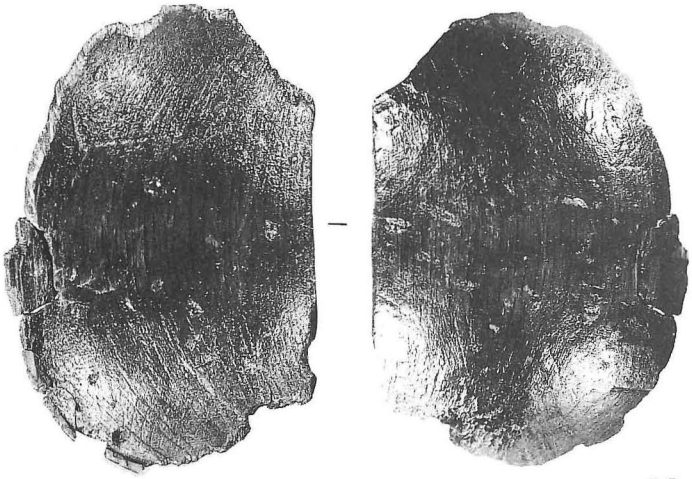
図版38　第460区出土の木器　④

65

67

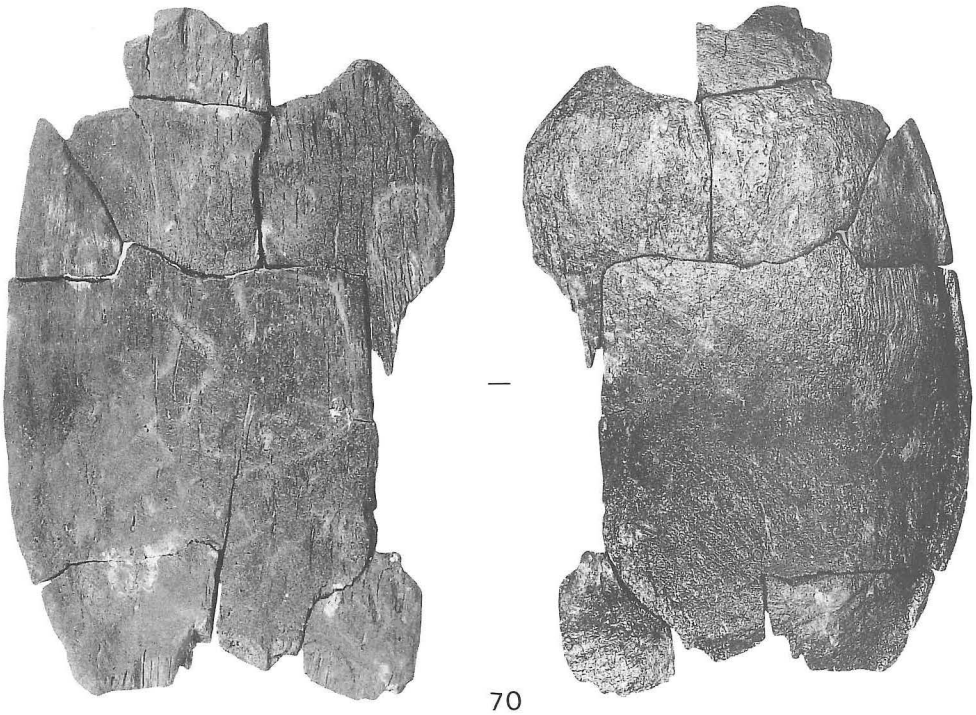
66

68



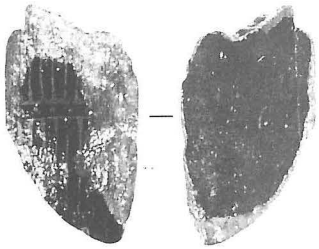
69

65　手斧柄（1/4），65～66　用途不明木製品（1/4），68　鉢（1/4），69　高脚容器（1/4）



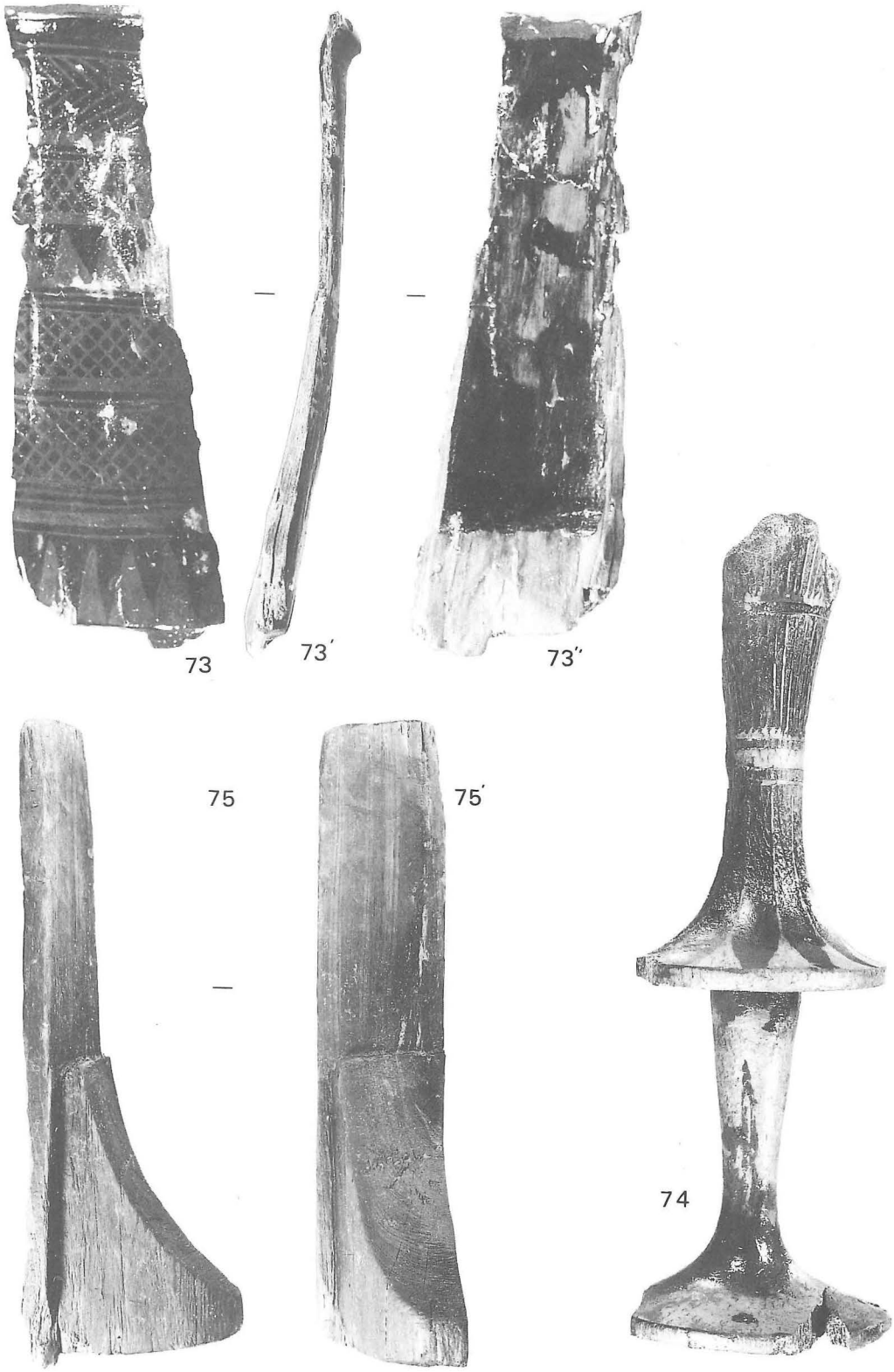
70

72　72′

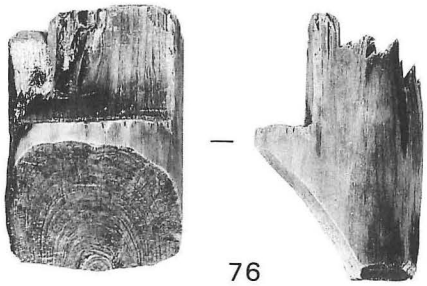


71　71′

70　鉢（1/4），71～72　うるし塗容器片（1/4）

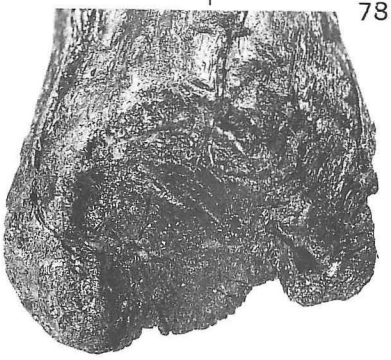


うるし塗容器片（½，74　うるし塗高脚容器？½），75　梯子状木製品（¼）



76

77

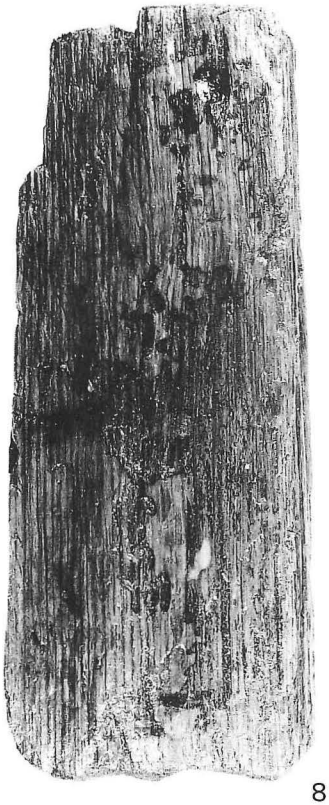


78

80

79

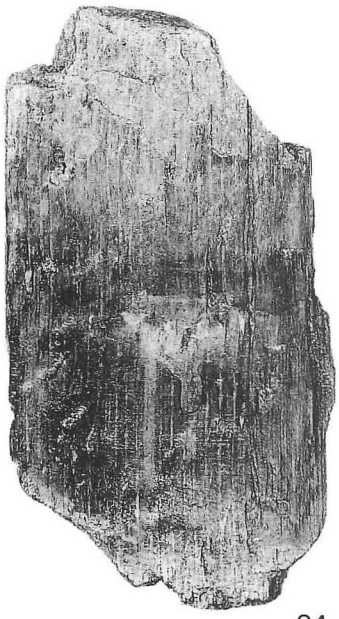
76　梯子片（1/4），77～78　建築材（1/4），79～80　弓（79＝1/8，80＝1/4）



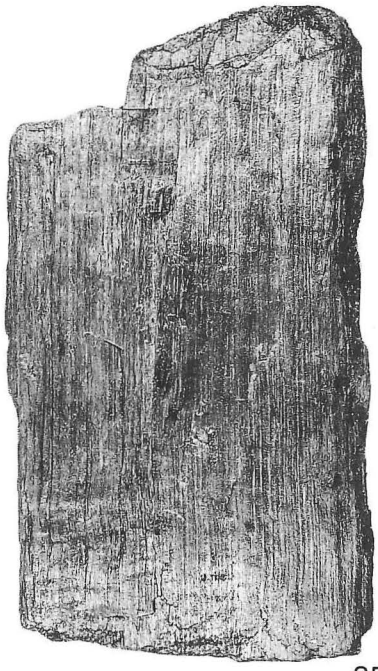
81

82

83

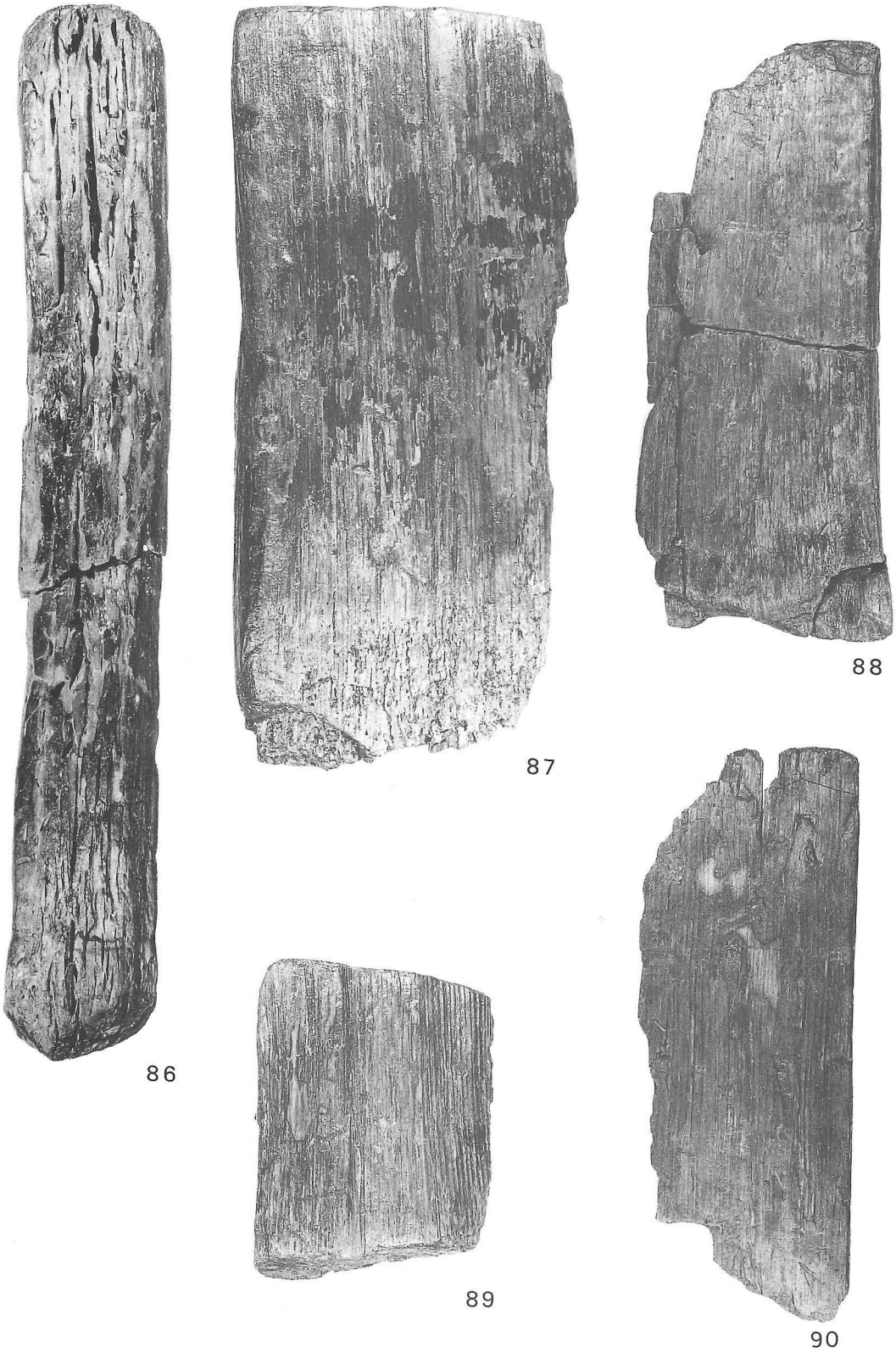


84

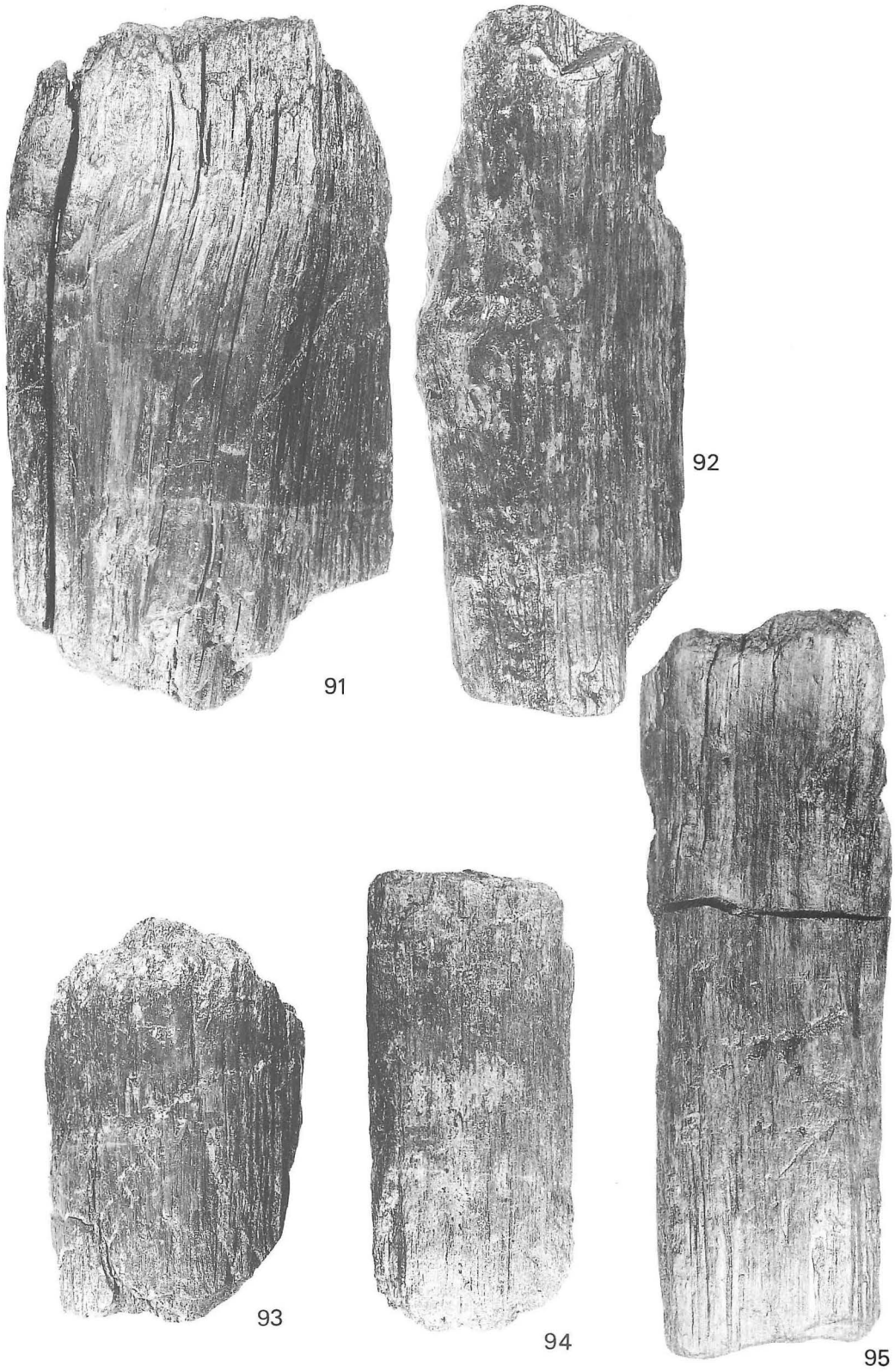


85

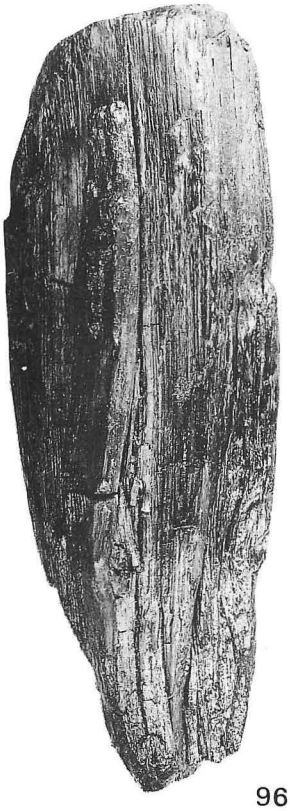
81～85　護岸矢板（1/4）

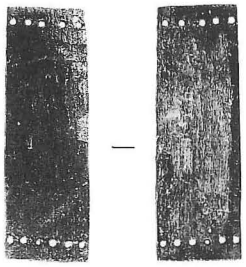


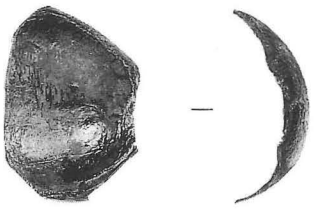
86　半截丸大（1/4），87～89　護岸矢板（1/4）

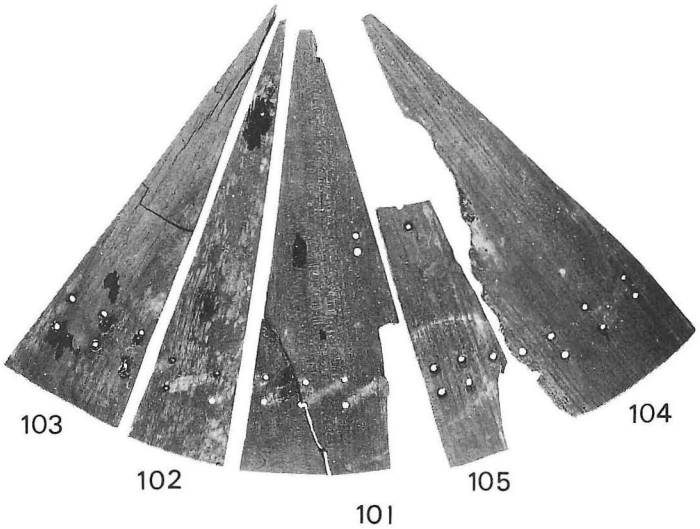


91　護岸（1/4），92～95　護岸矢板（1/4）



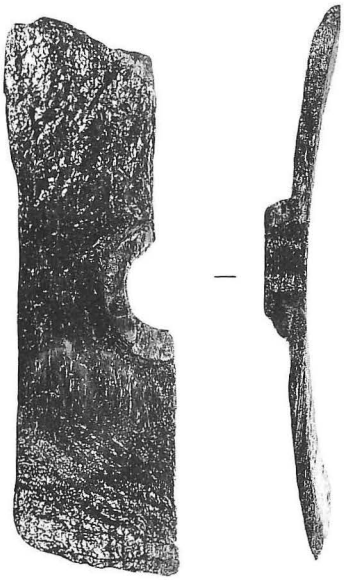




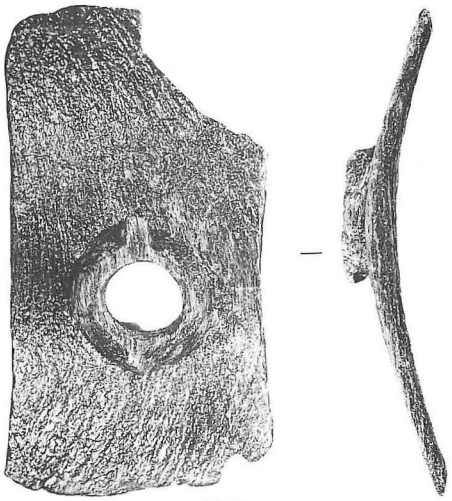


96　護岸杭（1/4），97～99・101～105　用途不明木器（1/4），100　容器（1/4）

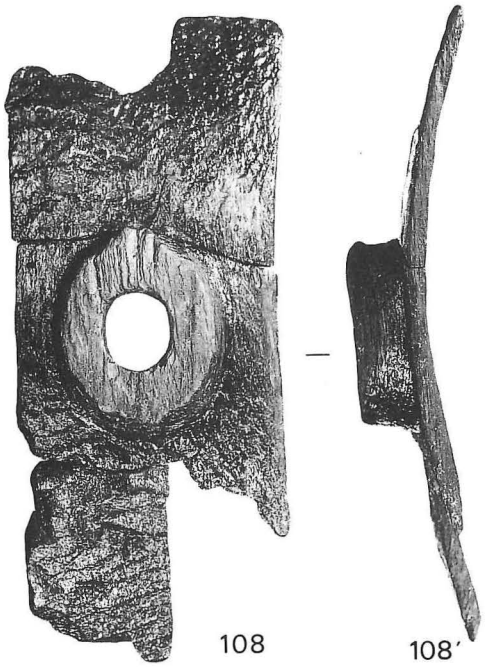
図版46　第450区出土の木器　①



106　106′



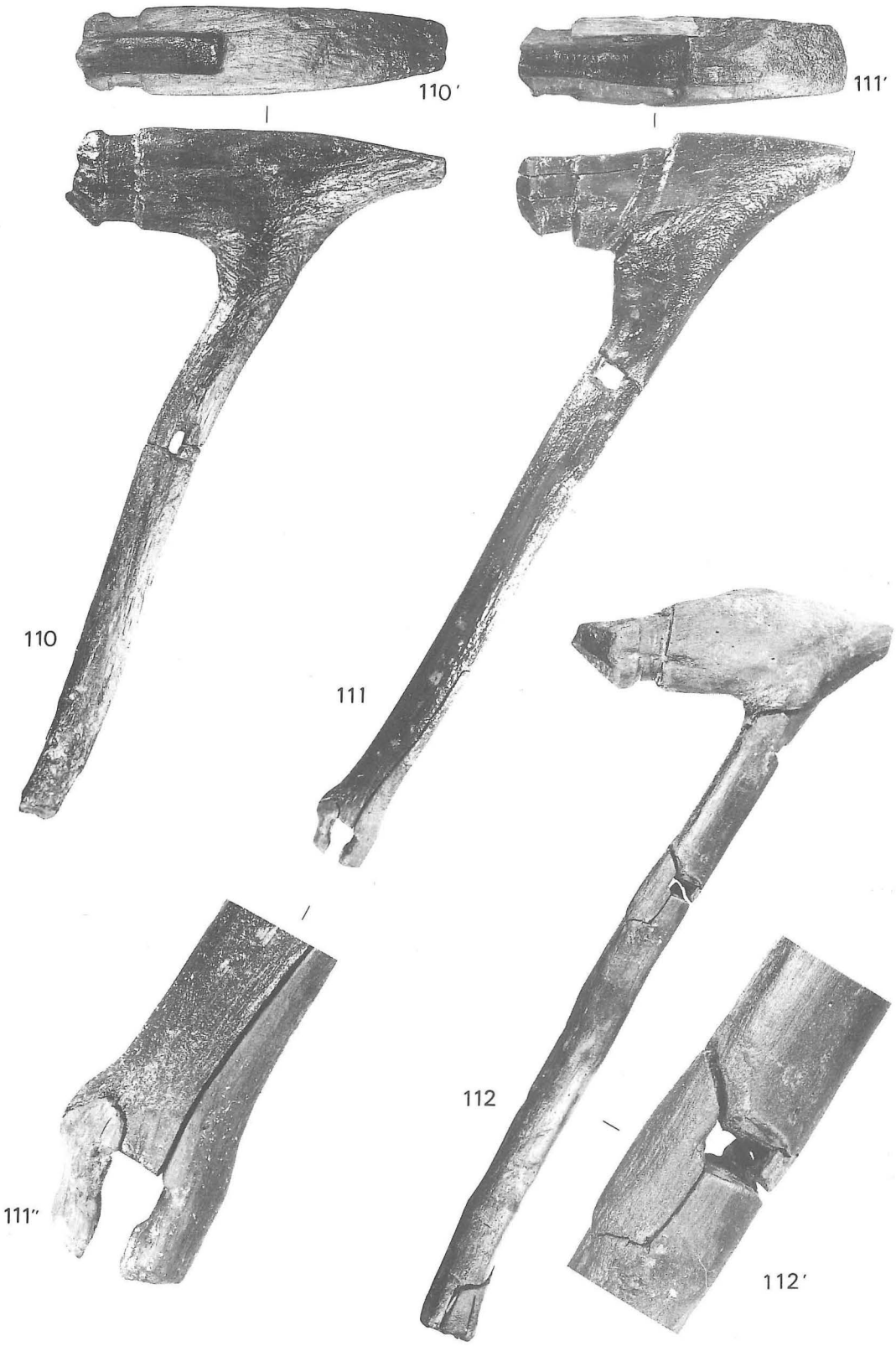
107　107′



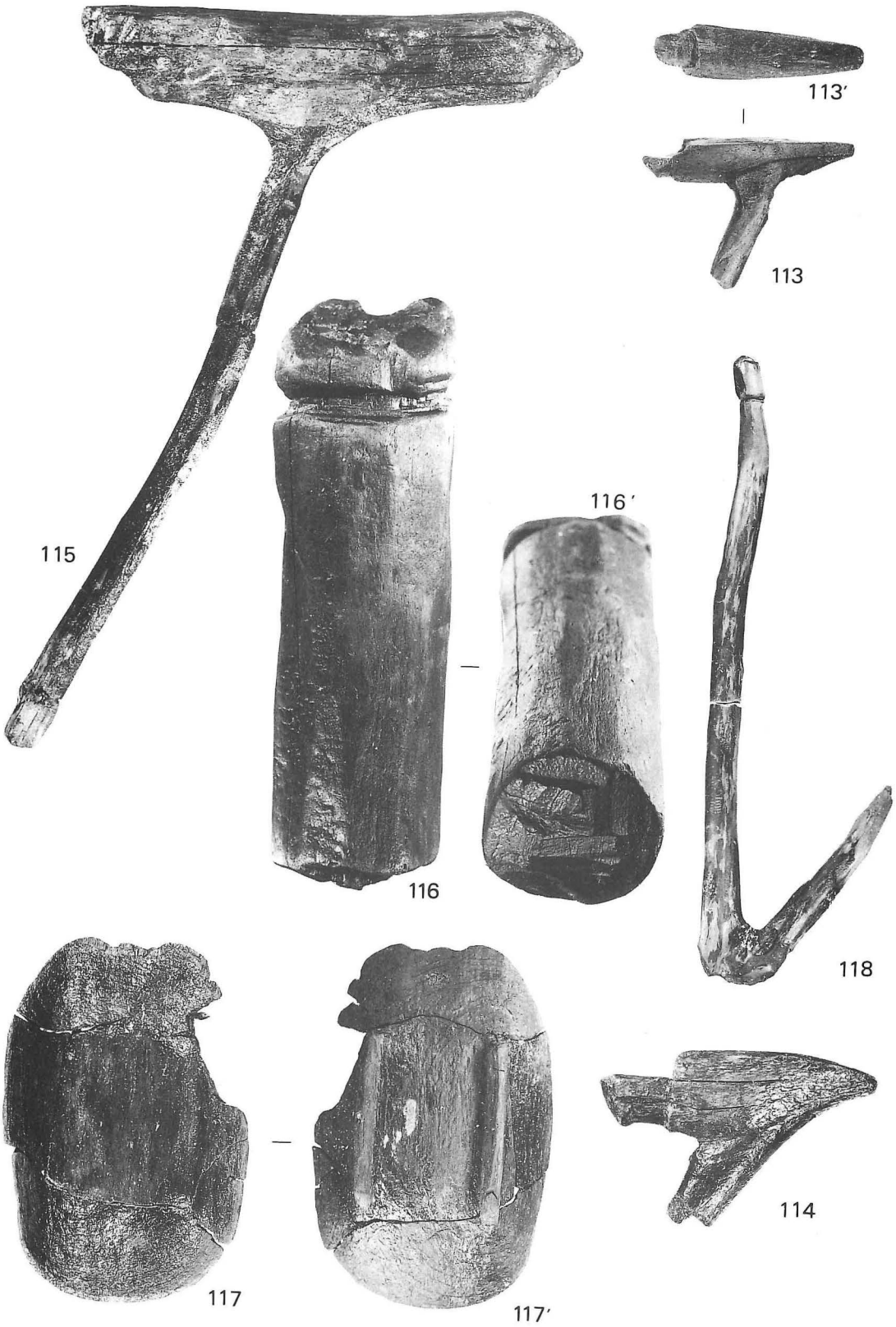
108　108′

109

106～108　広鍬（1/4），109　鋤（1/4）

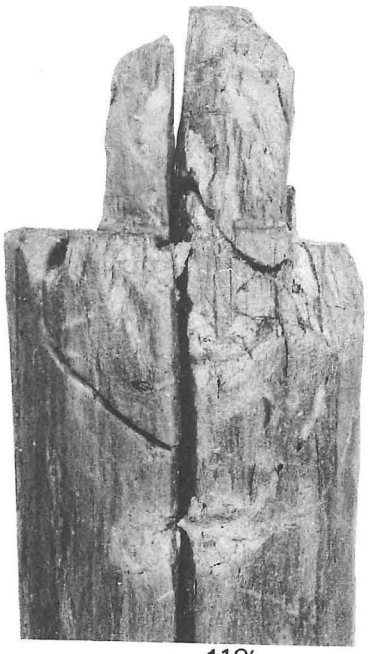


110〜112　手斧柄（1/4）



113・114 手斧柄（1/4），115 手斧柄未成品（1/4），116 男根形木製品（1/4）
117 低脚容器（1/4），118 鉤状木器（1/4）

119

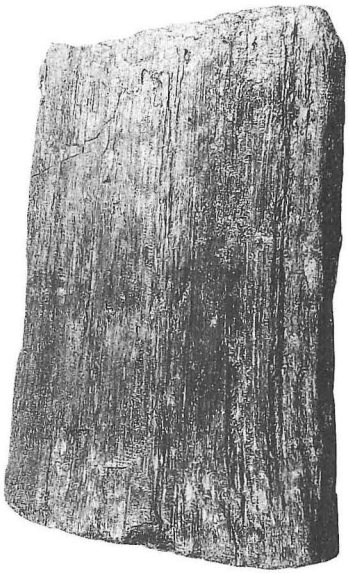


119′

119″

120

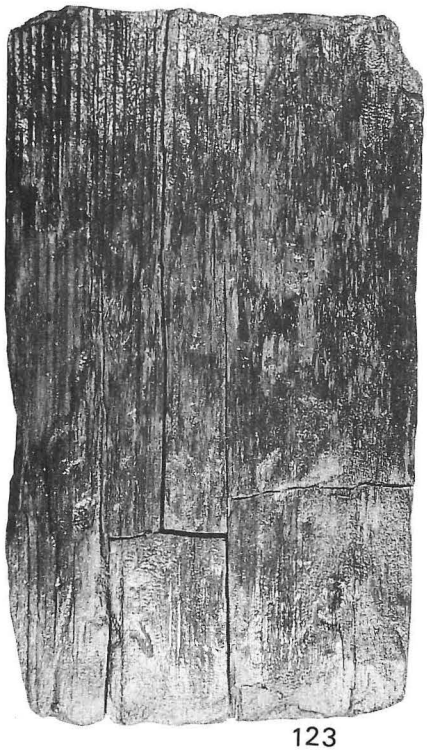
121



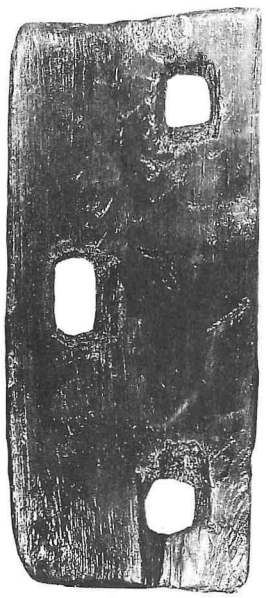
122

119　建築材（1/8），120　長板（1/8），121　護岸丸杭（1/4），122　護岸矢板（1/4）

図版50　第450区出土の木器　⑤



123



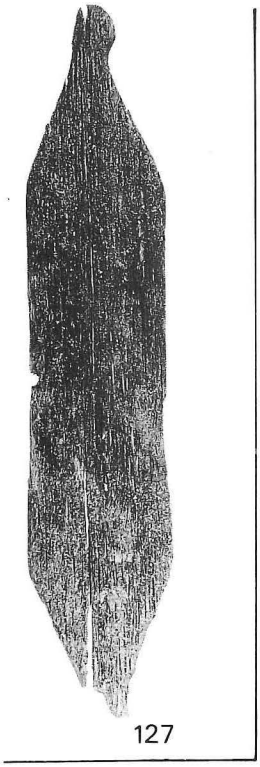
124

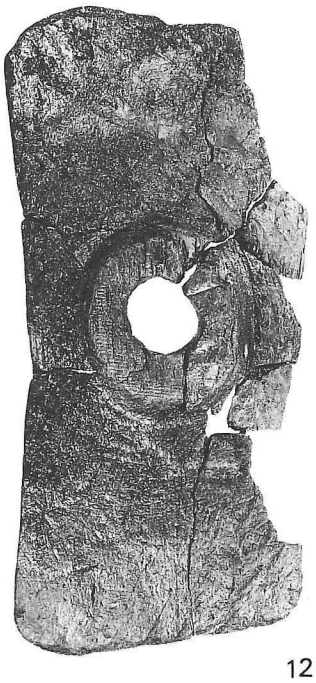
125

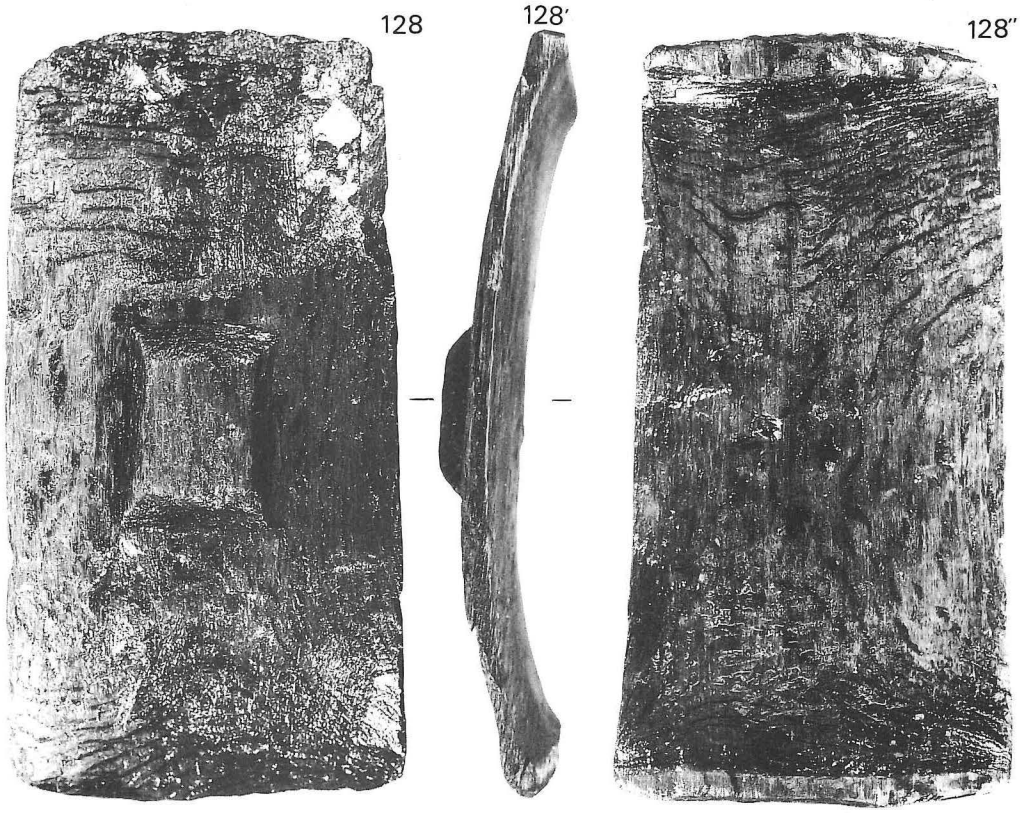
126

126′

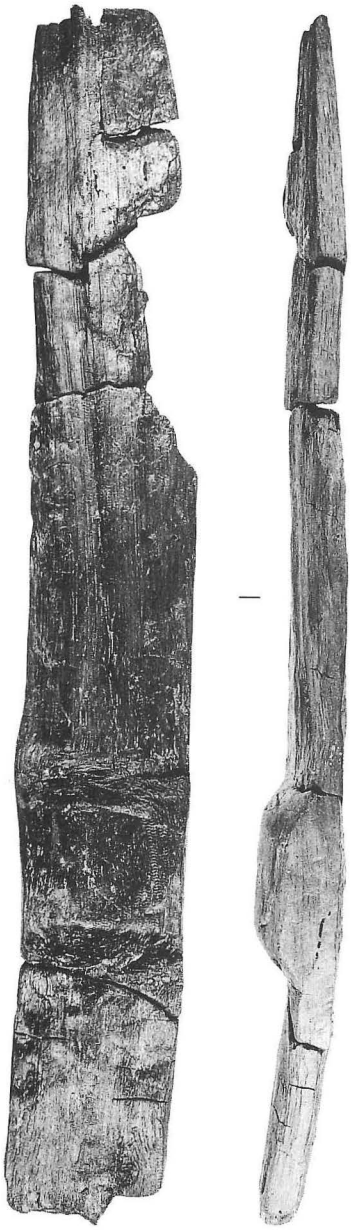
123・125　護岸矢板（1/4），124　田下駄（1/4），126　突きおお（1/4）







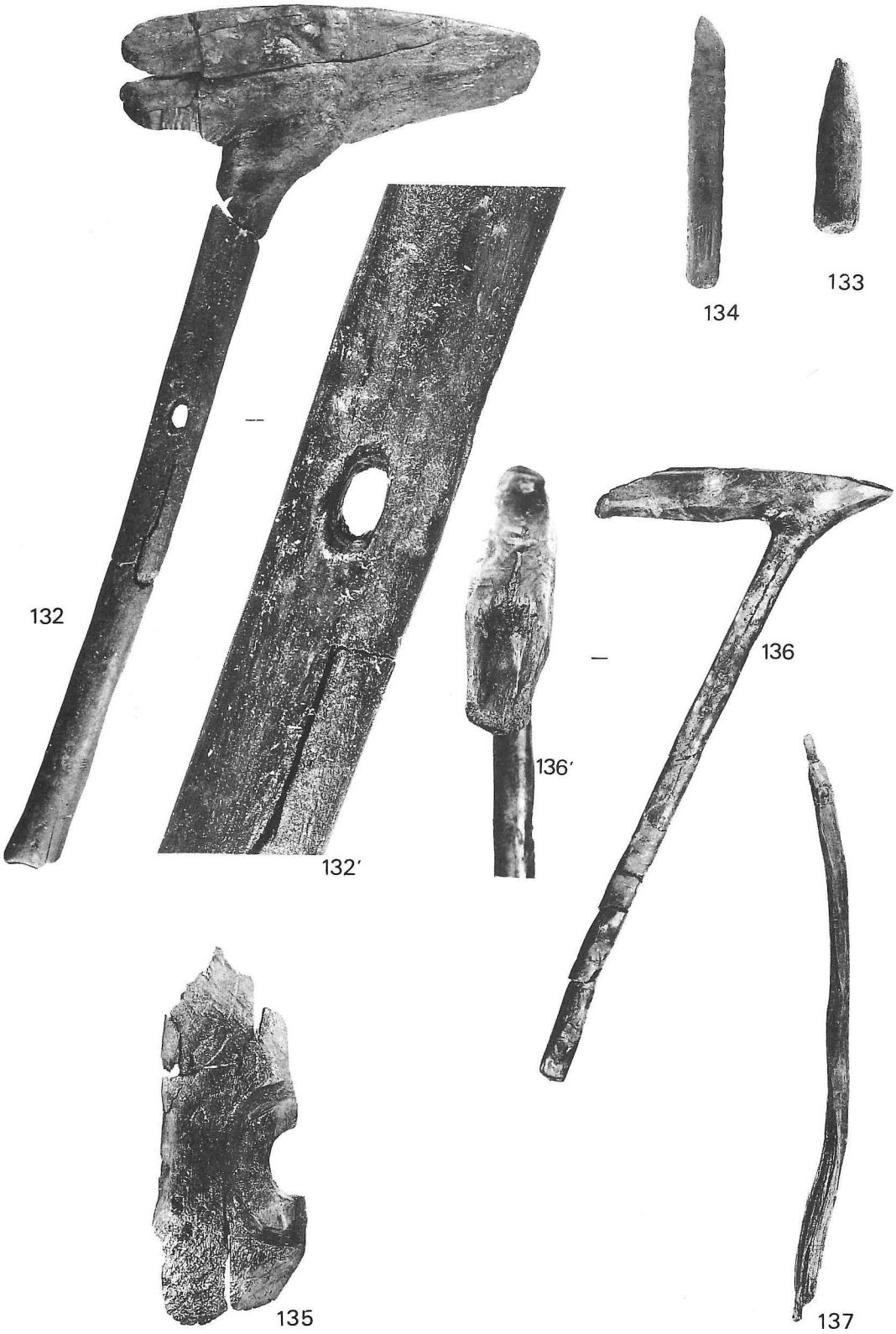
127　用途不明木製品（1/4），128　広鍬未成品（1/4），129　広鍬（1/4）



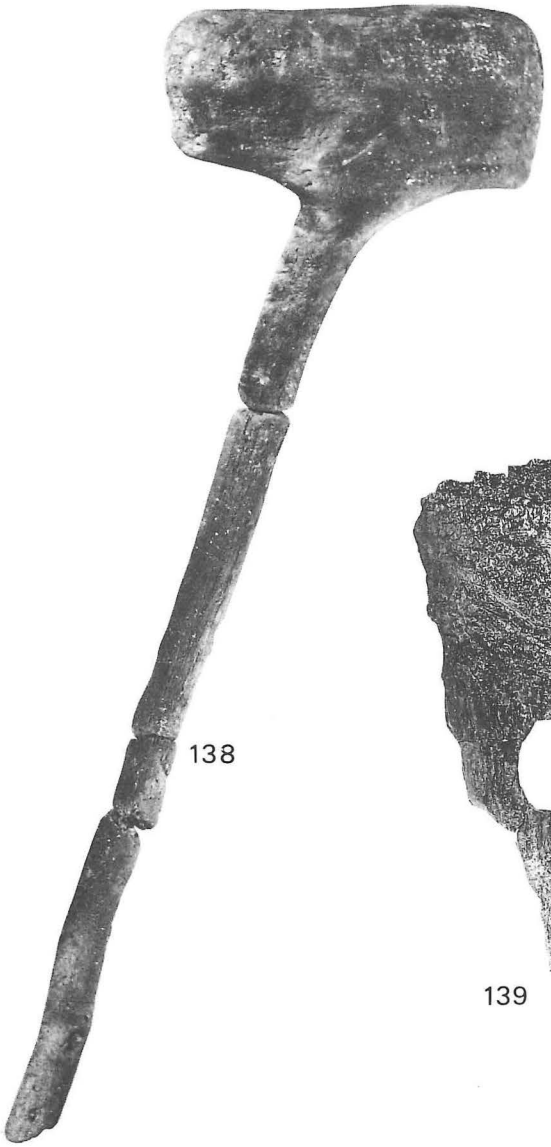
130　130′

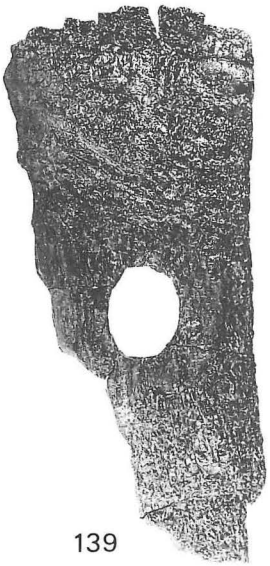
131

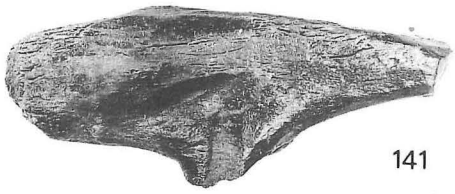
130　狭鍬未成品（1/4），131　広鍬未成品（1/4）



132・136　手斧柄（1/4），133・134　用途不明木製品（1/4），135　広鍬（1/4），137　弓（1/4）

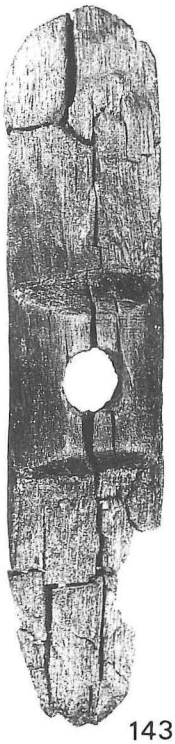




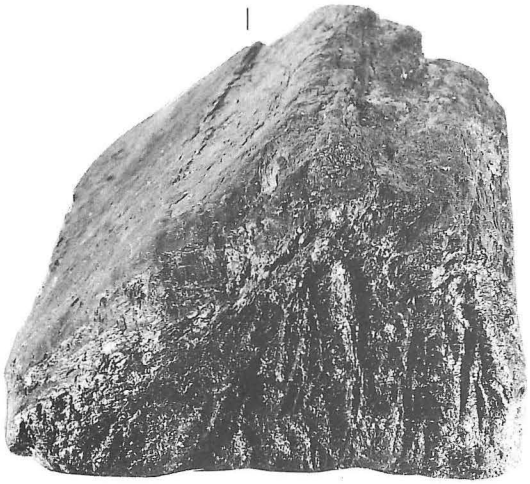


138・141　手斧未成品（1/4），139　広鍬（1/4），140　広鍬未成品（1/4）

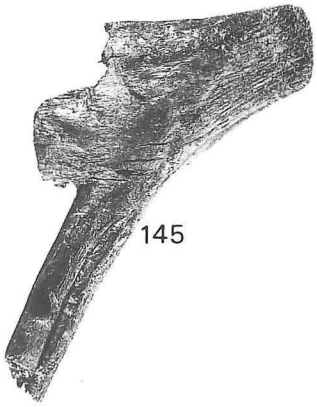
142



143



142′



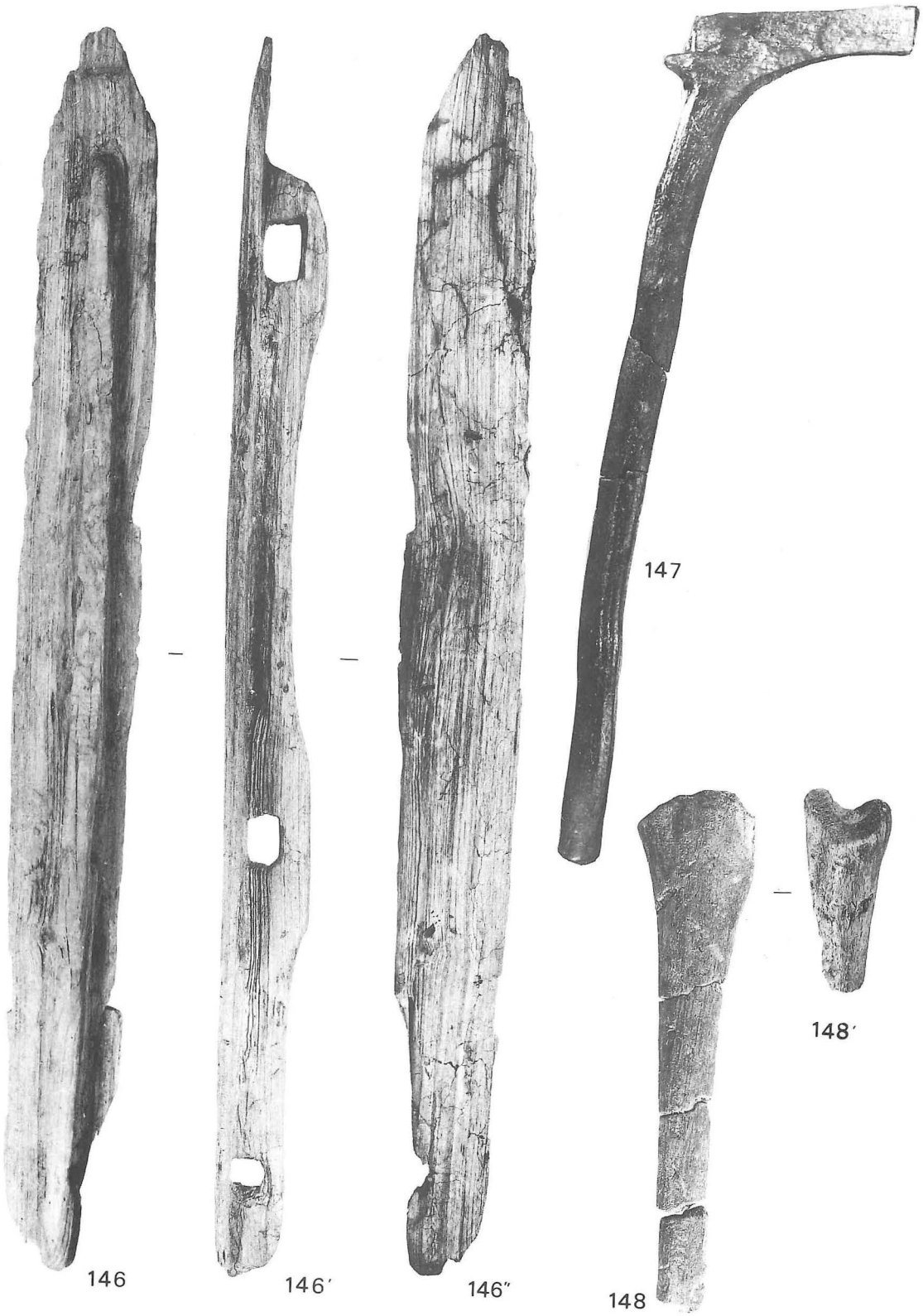
145

144′

144

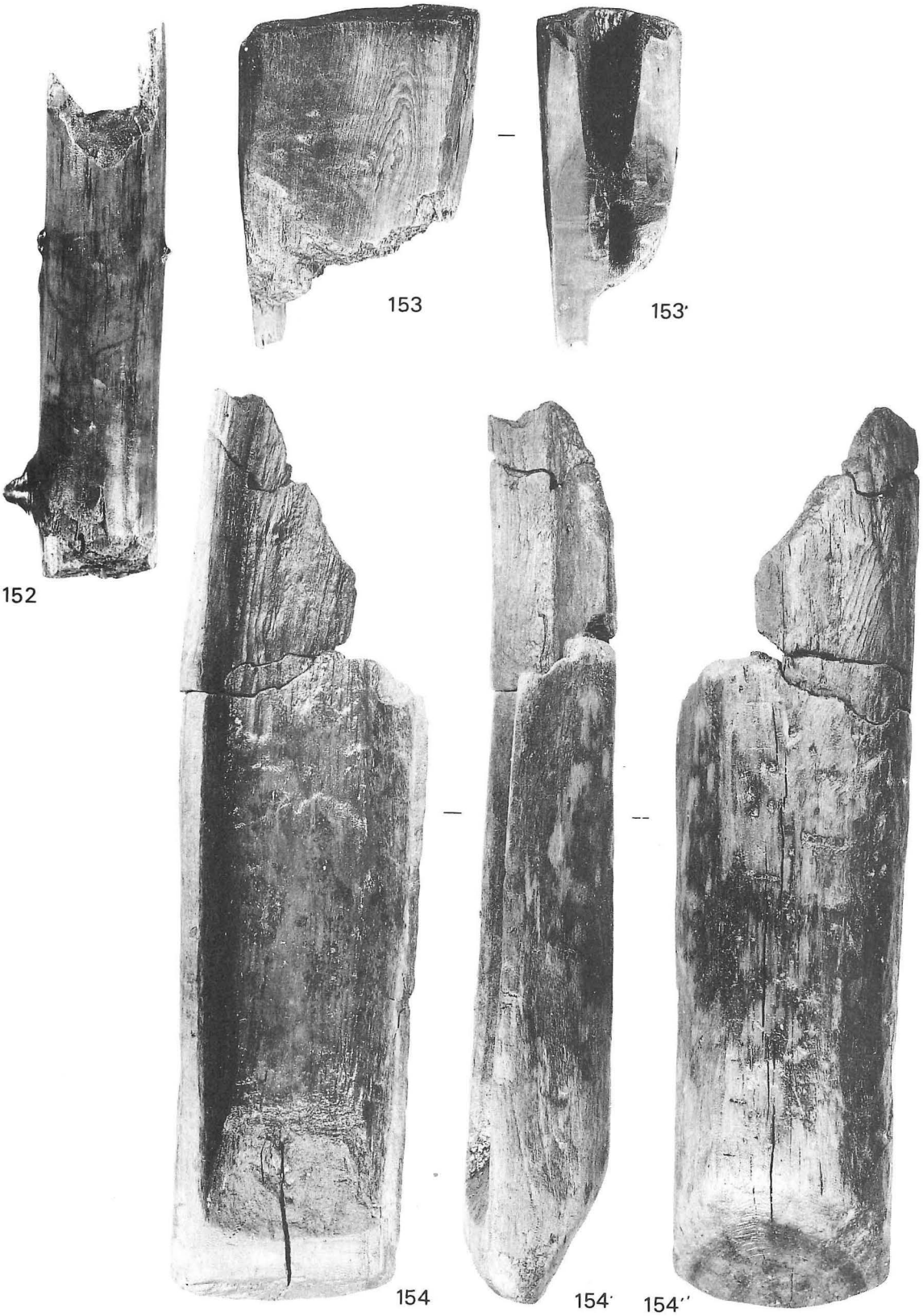
142　広鍬未成品（1/4），143　狭鍬（1/4），144・145　手斧柄未成品（1/4）

図版56　第370区出土の木器　②

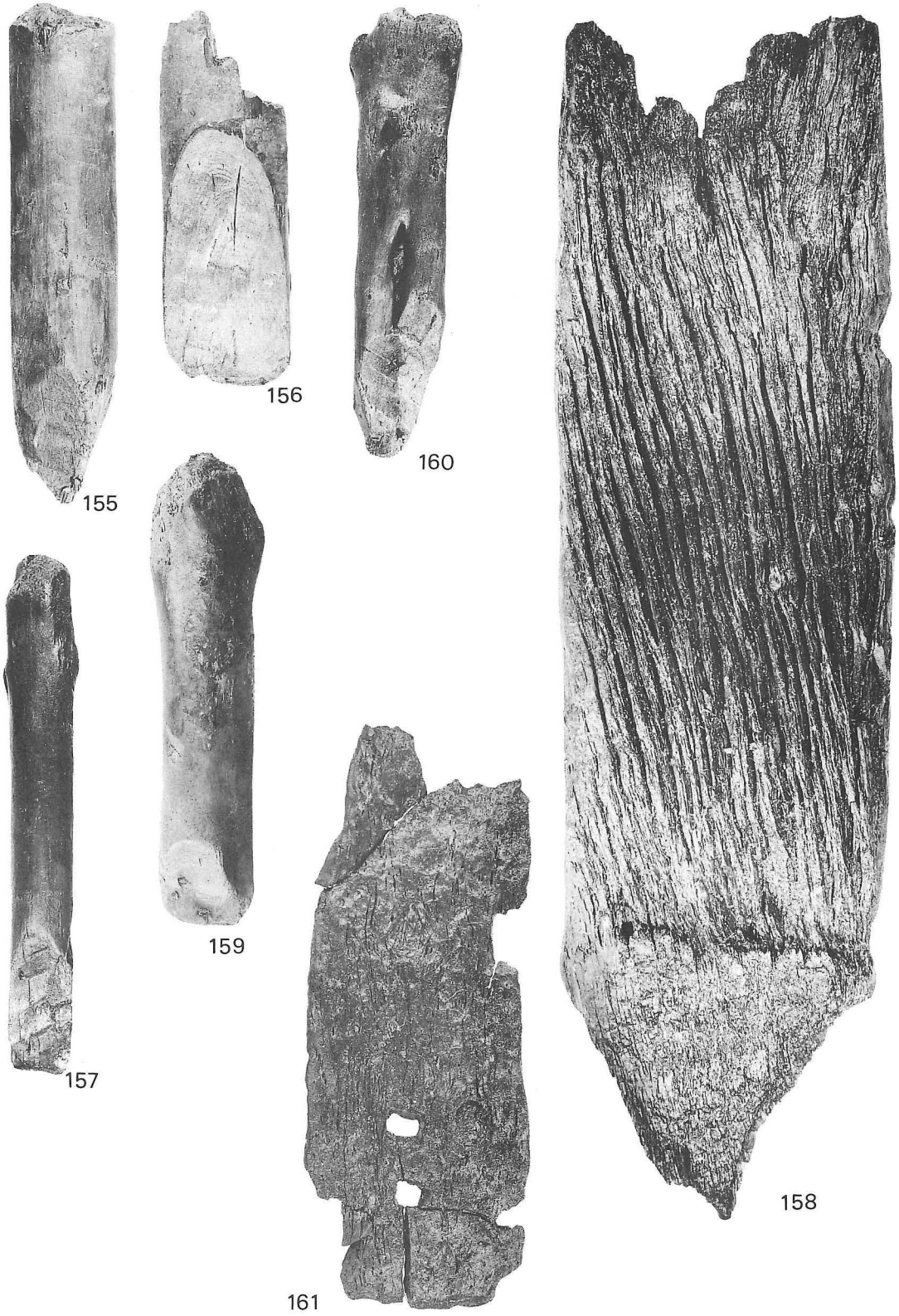


146　櫂（1/4），147　手斧柄（1/4），148　よき柄

149　手斧未成品（1/4），150～151　よき柄（1/4）

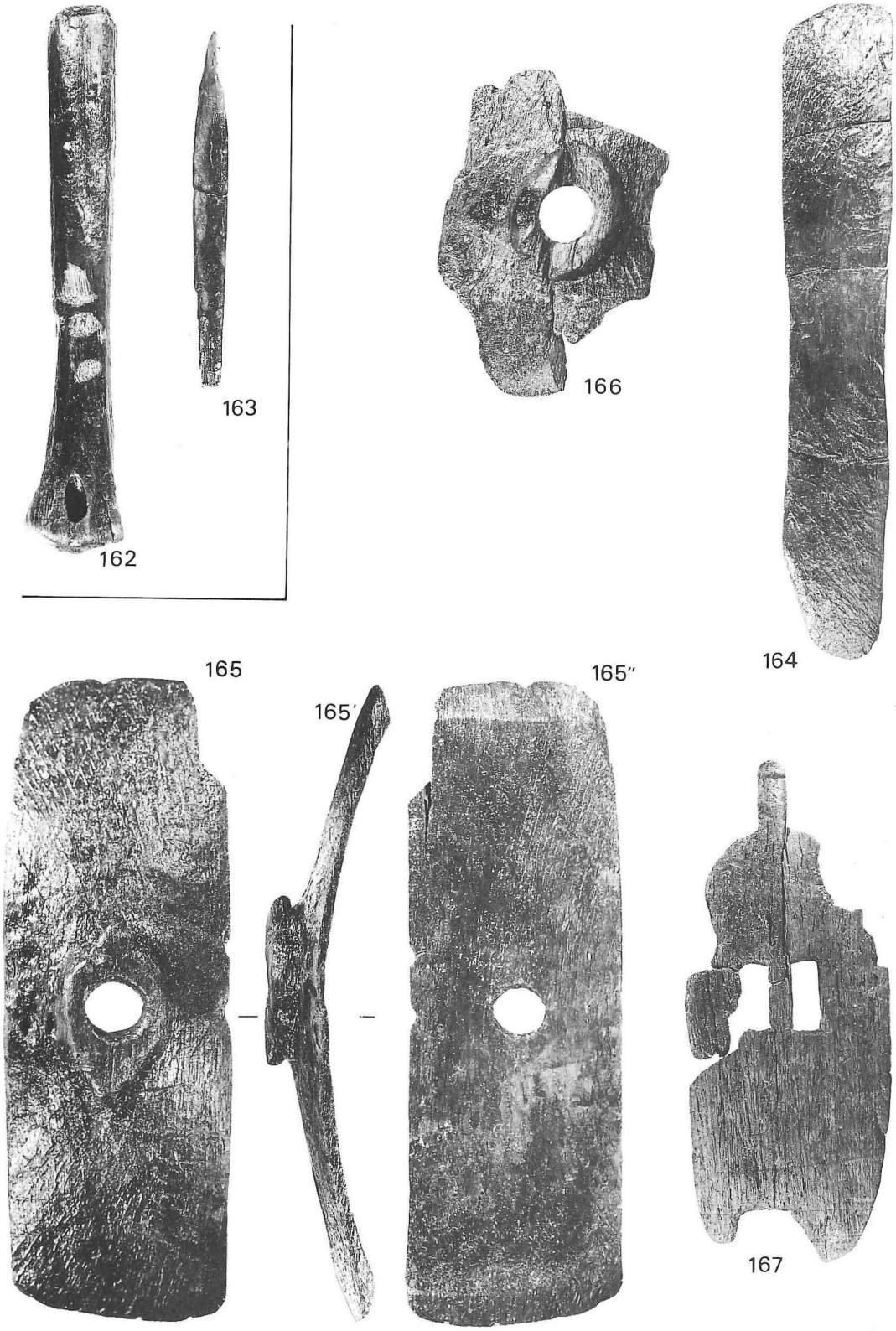


152・153　建築材（1/4），154　長方形容器（1/4）

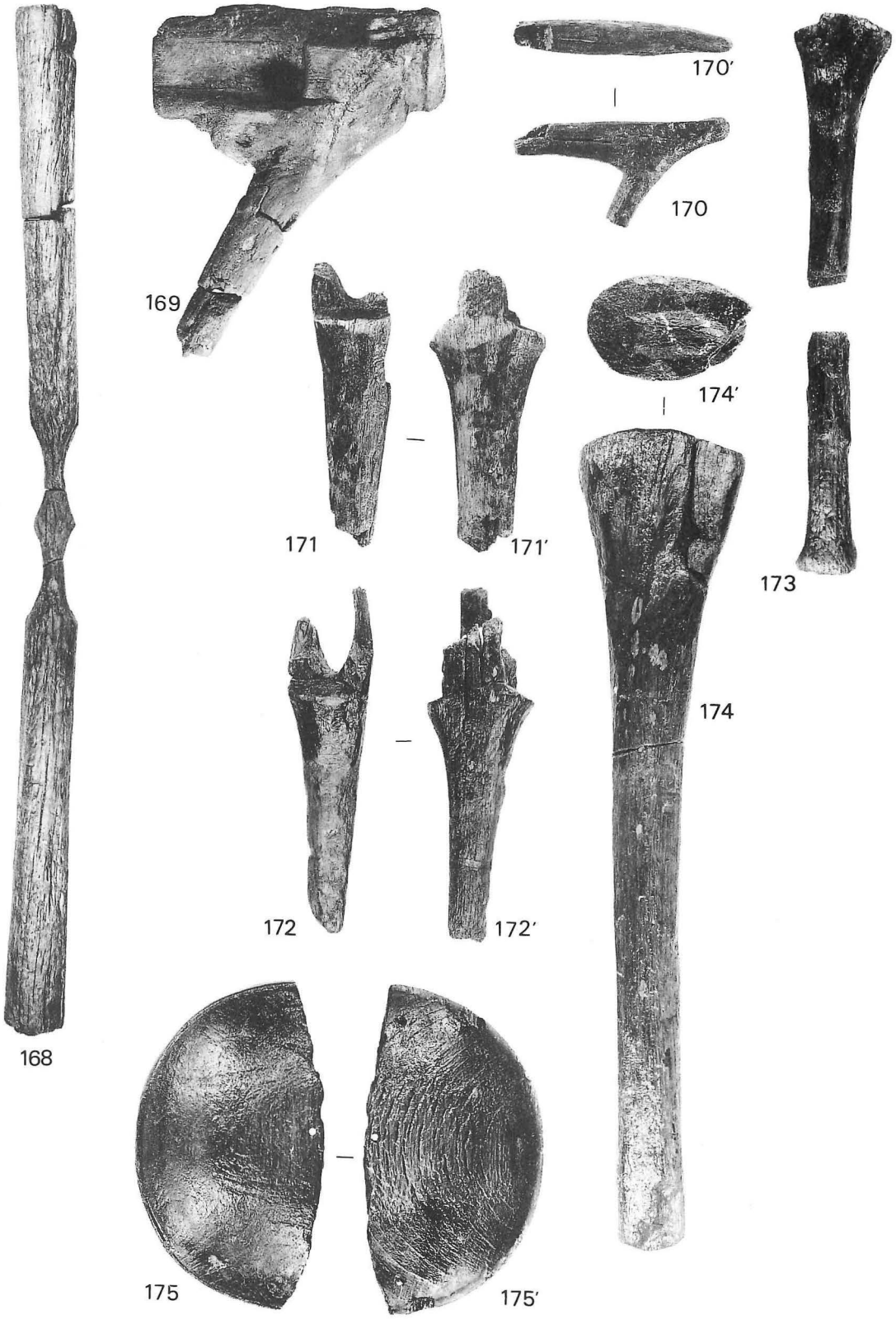


155・157・159・160 杭（1/4），158 建築材（1/4），161 用途不明木製品（1/4）

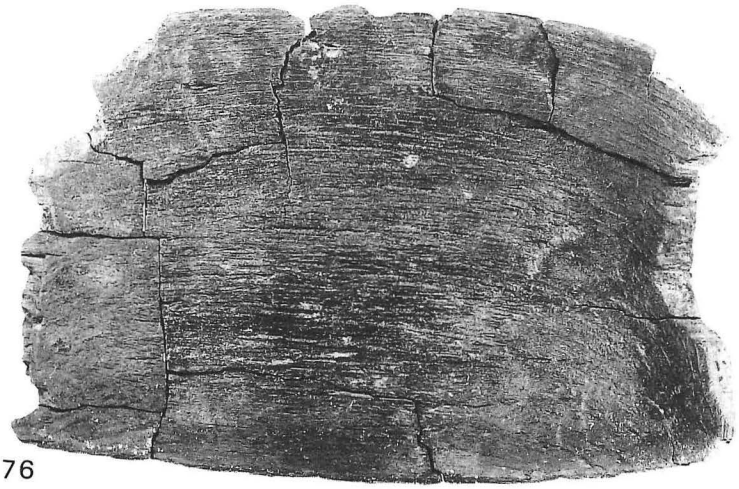
図版60　第370・360区出土の木器　①



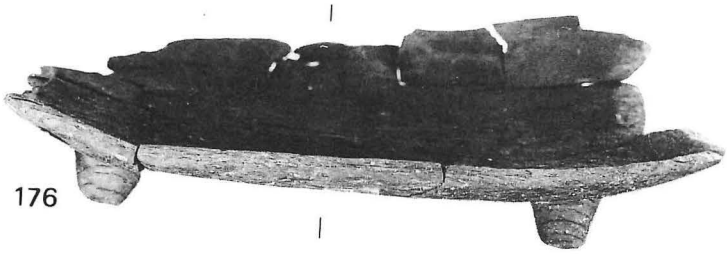
162　よき柄（1/4），163　刺突器（1/4），164～166　広鍬（1/4），167　鋤（1/4）



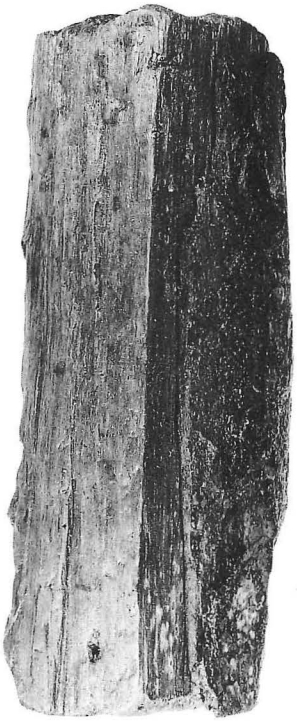
168 竪杵（1/8），169～170 手斧柄（1/4），171～174 よき柄（1/4），175 無脚容器（1/4）



176



176



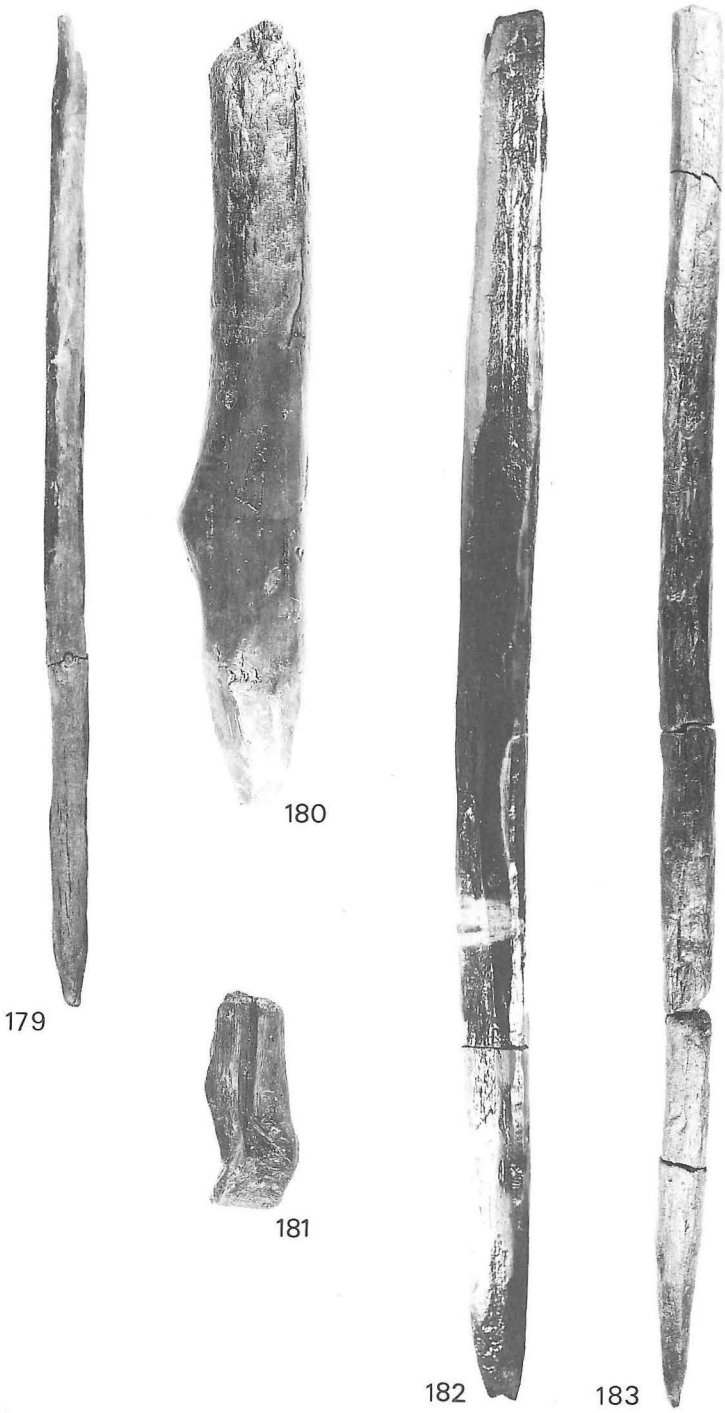
177

176″

178

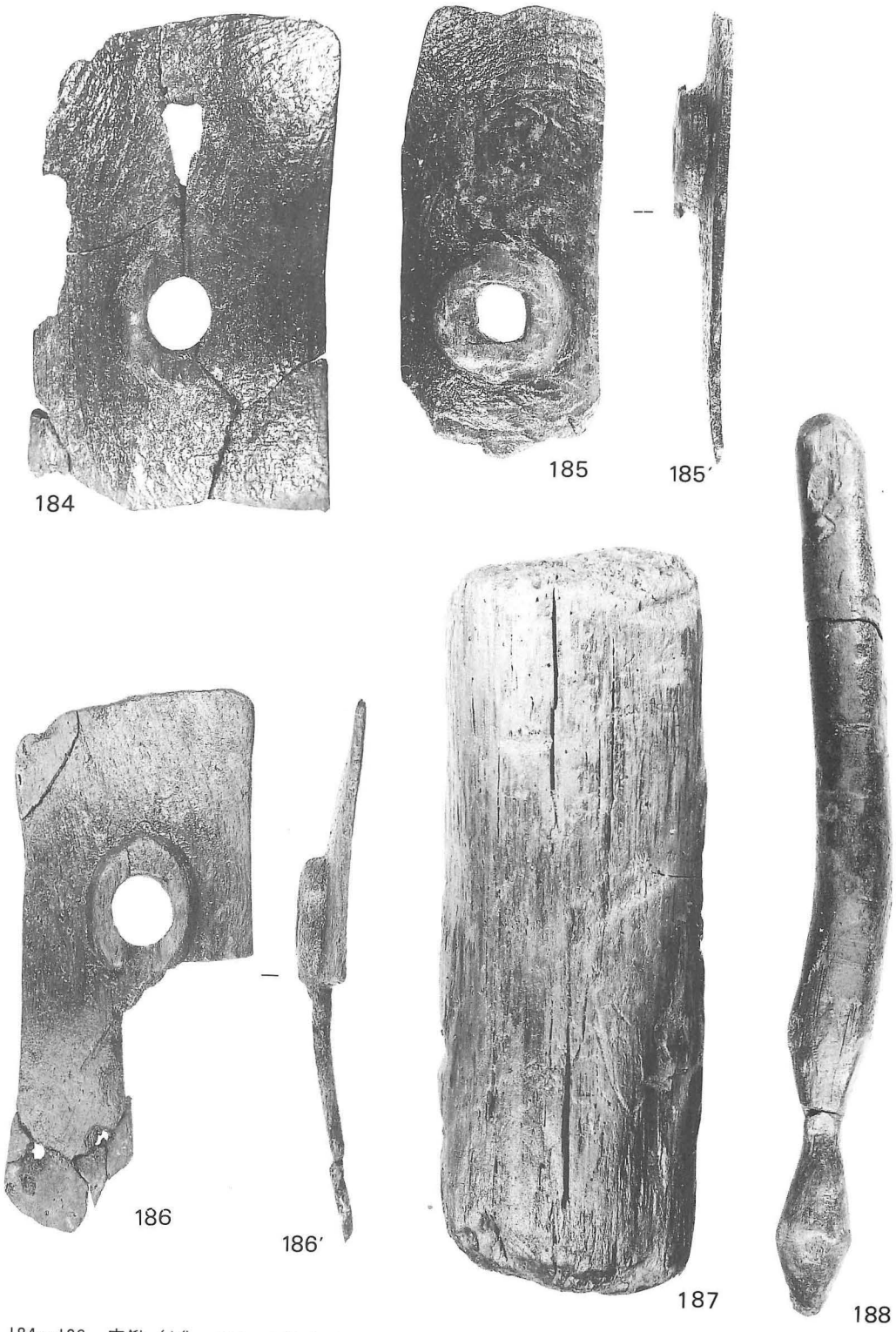
176　四脚容器（1/4），177　広鍬未成品（1/4），178　長板材（1/4）

図版63　第360区出土の木器　②

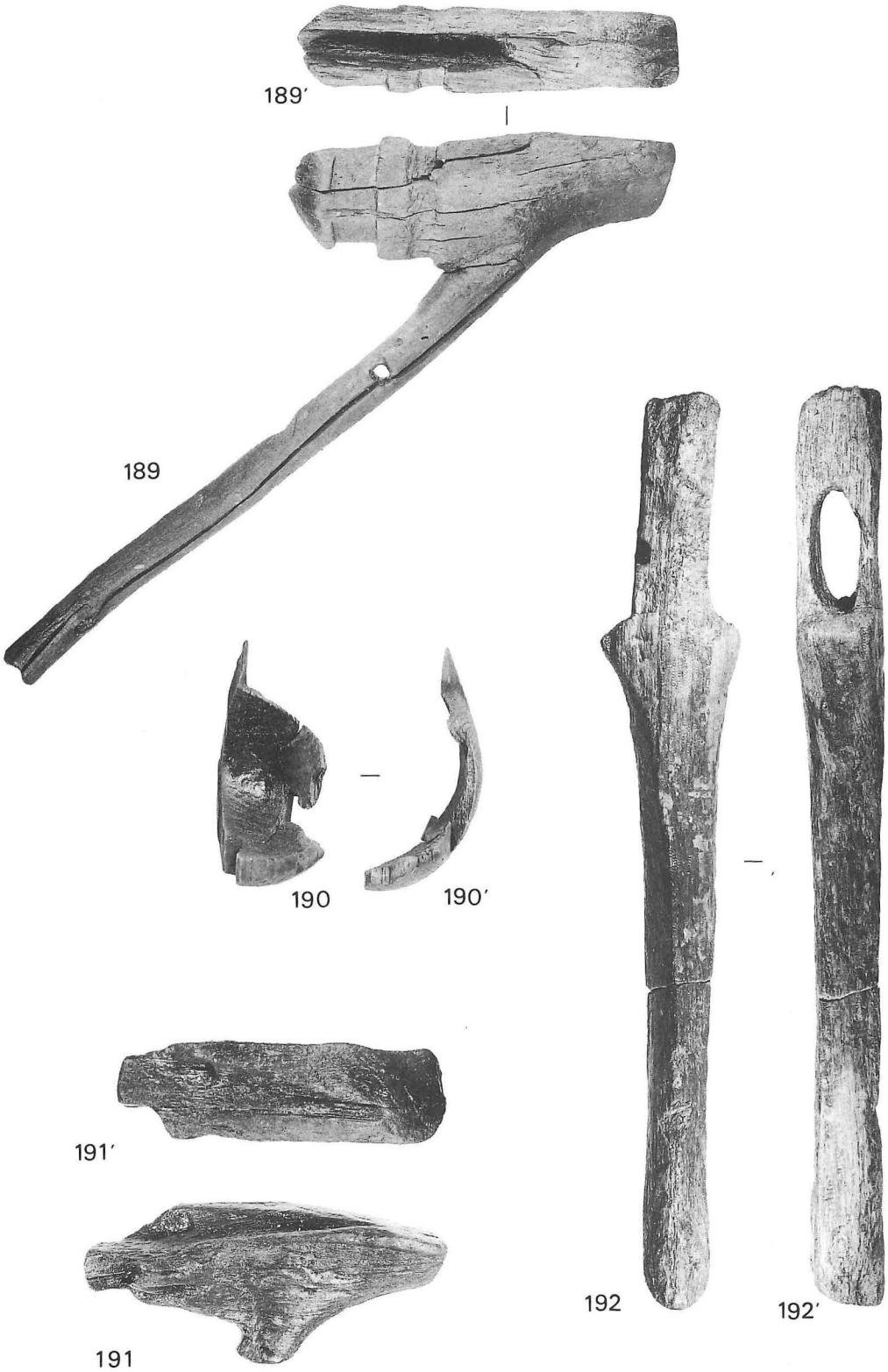


179　突おおこ片？（1/4），180　杭（1/4），181　用途不明木器（1/4）

図版64　第350区出土の木器　①



184～186　広鍬（1/4），187　広鍬未成品？（1/4），188　竪杵（1/4）

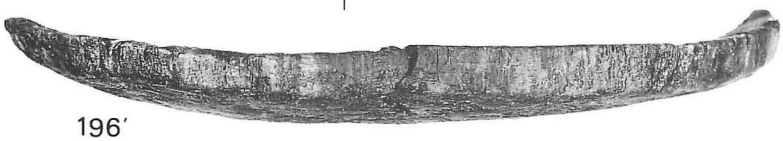


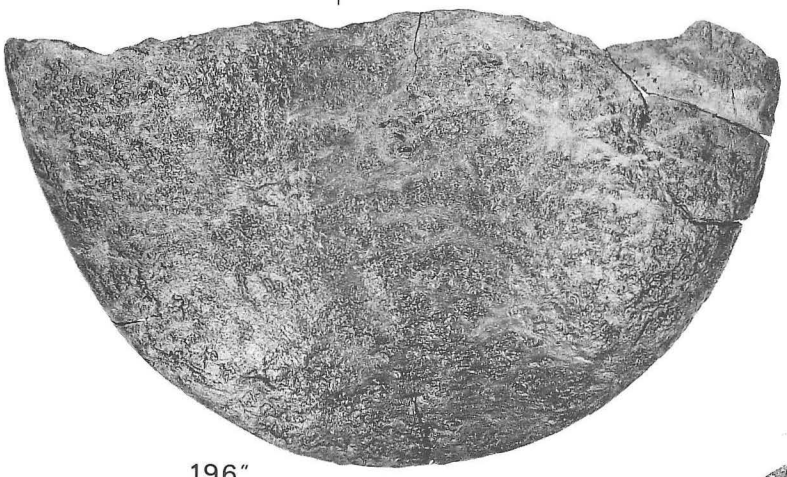
189, 191 手斧柄（1/4），191 杓子，192 よき柄

図版66　第350区出土の木製品　③

193　長板材（1/4），194　鍬柄？（1/4），195　丸杭（1/8）

196


196′


196″

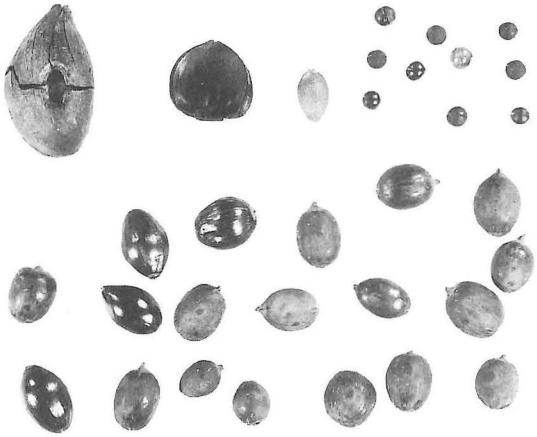
197′

197

196　無脚容器（1/4），197　臼型小型容器（1/4）

図版68　里田原遺跡出土の編物類

図版69　里田原遺跡出土自然遺物



編　集　後　記

里田原遺跡に関する調査は，昭和47年の第１次以来，本書にある里川改収工事関係の調査において第23次を数える。長崎県文化課発足が昭和46年であるから，同課と里田原遺跡の調査はほぼ並行して歩いたことになる。里田原遺跡については，いわゆる緊急発掘調査のほかに，遺跡範囲確認の調査，史跡指定の問題，木製品の保存処理と遺物の収蔵展示施設の問題等が山積していたが，遺跡範囲はほぼ確認され，一部分については史跡の指定と公有化が実現し，町立里田原歴史民俗資料館も昭和57年には開催した。

だがしかし，遺跡全体については諸種の開発による遺跡の「虫喰い」化の傾向は熄まず，増大する出土資料（特に木製品）の収蔵と活用には今一歩の感がぬぐい難いものがある。埋蔵文化財全体に関して希求されるこれらの諸問題は，きわめて一般的に広く希求されることではあるが，長崎県の弥生時代を代表する遺跡の一つとして，本遺跡に関する諸問題は今後に残ることの多きを思わずにはいられない。

長崎県文化課発足以降，若き俊秀によって長崎県の遺跡保存と調査は大きく前進してきた。歴史は人によって作られる，人は歴史によって作られる。今後一層の前進を願ってやまない。

私事を記して誠に恐縮であるが，本書刊行と時を同じくして18年の長きにわたった文化課の仕事を最後に停年退職の予定である。今にして為し得なかったことの多きを思う次第であるが，若き俊秀の多きに一沫の不安もない。公務と研究になお一層の前進を続けられよ。そして，若干の感傷を含めて操り言をのべた愚老を許されよ。（正林）

里　田　原

田平町文化財調査報告書 第３集

昭和63年３月31日

発行　田平町教育委員会
長崎県北松浦郡田平町山内免

印刷　昭和堂印刷

※朱色部は遺構残存部（杭，矢板等）

350区

よき木柄

カット痕

360区

槽

広鍬

（灰青色粘板岩の基盤）

380区

矢板列

鍬未製品

石斧

石剣

炭層

礎のある建築材

広鍬未製品

ソリ状木製品

叩き石

エミネント

田平町立里田原歴史民俗資料館

長崎マツダ

本屋

消防署

九州農政局

青木石油

長崎ヤンマー倉庫

松田産業倉庫

佐世保ダイハツ工場

0

100m

付図１　350～380区遺構配置及び遺物出土状況

※朱色部は遺構残存部（杭，矢板等）

390区

400区

手斧Ⅲ未製品

410区

どんぐり

420区

矢板

叩き石

火鎖臼状石製品？

石皿

田平町立里田原歴史民俗資料館

エミネント

長崎マツダ

本屋

消防署

九州農政局

青木石油

長崎ヤマハ倉庫

松田産業倉庫

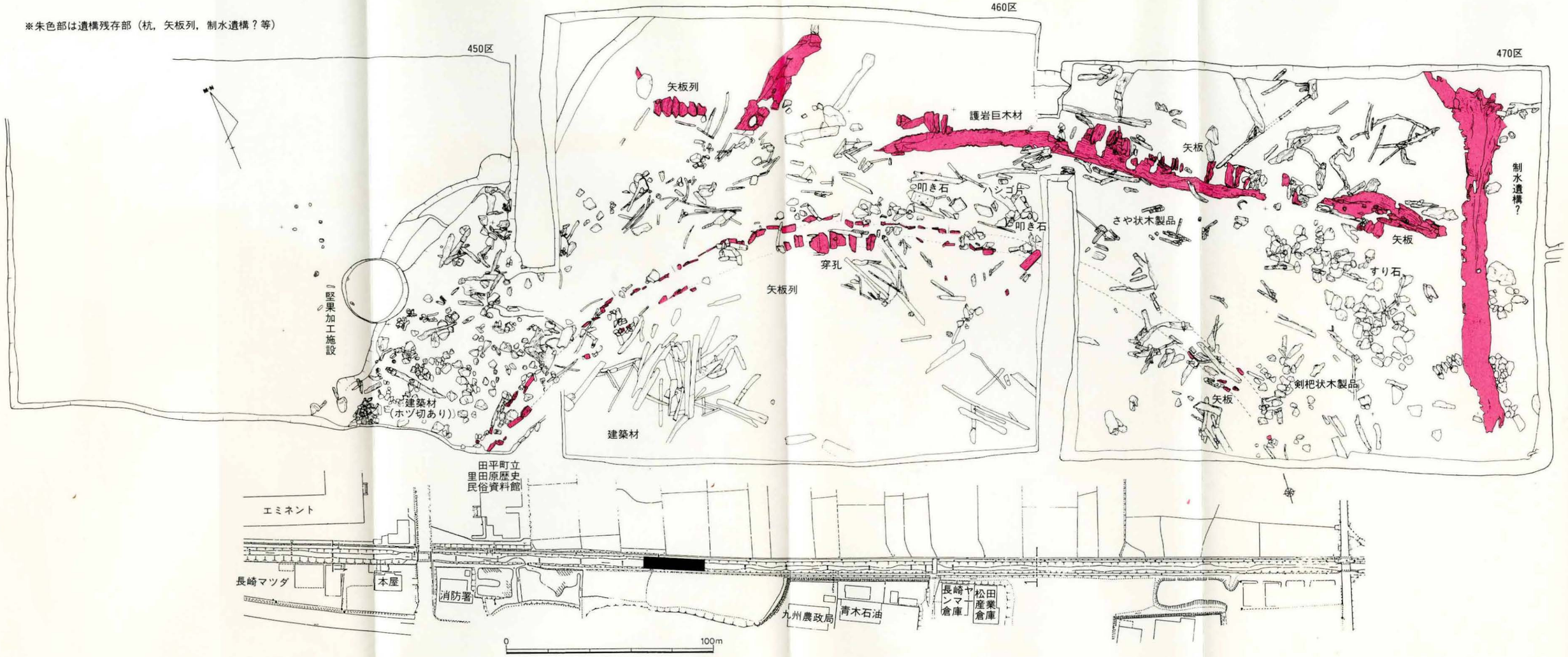
佐世保タイハツ工場

0

100m

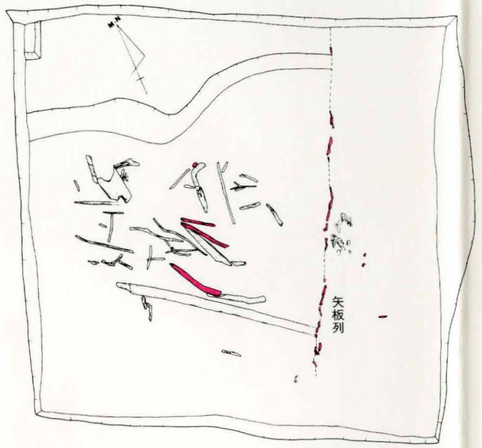
付図２　390～420区遺構配置及び遺物出土状況

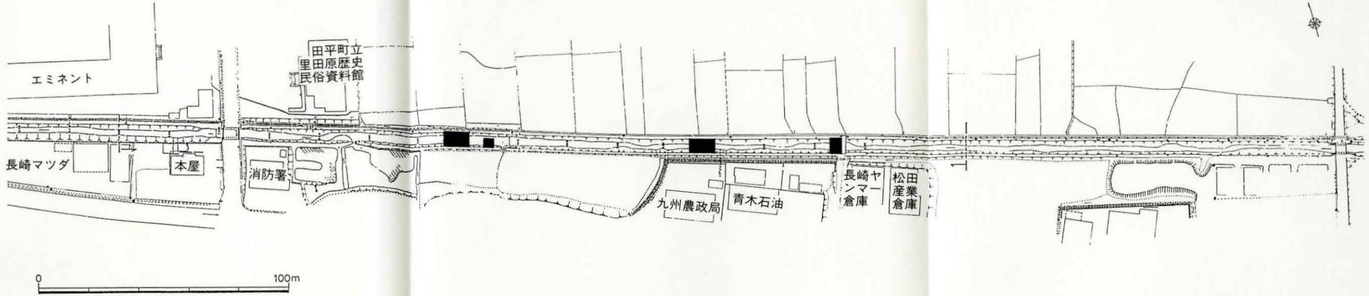
※朱色部は遺構残存部（杭，矢板列，制水遺構？等）

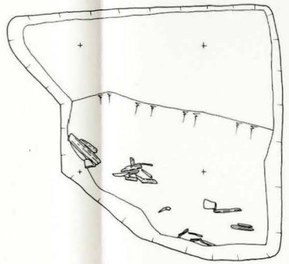


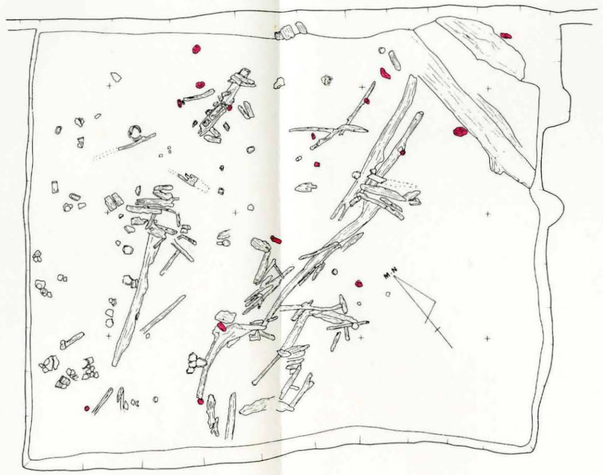
付図3　450～470区遺構配置及び遺物出土状況

※朱色部は遺構残存部（杭，矢板等）









付図4　430・440・530・580区遺構配置及び遺物出土状況